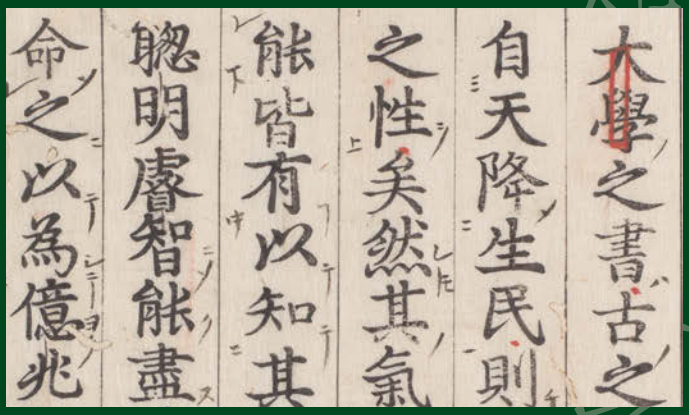
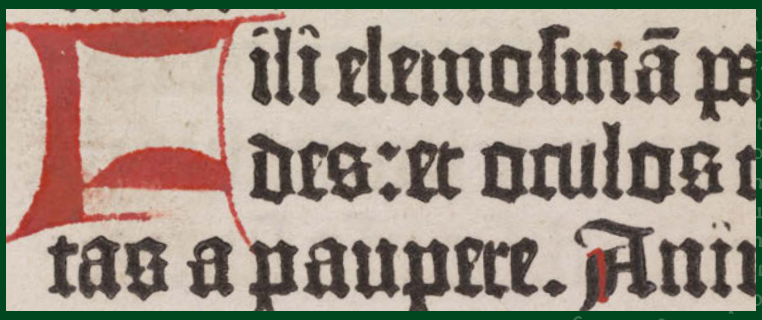
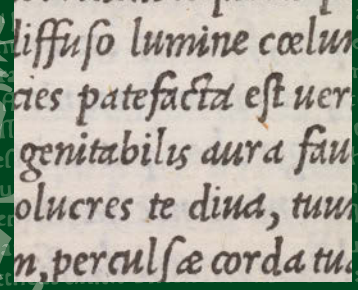
第27回
慶應義塾図書館
貴重書展示会



活字文化の真髄

—日本の古活字版と西洋初期印刷本—





慶應義塾図書館

第27回慶應義塾図書館貴重書展示会

活字文化の真髄

―日本の古活字版と西洋初期印刷本―

会期：2015年10月7日（水）～10月13日（火）
会場：丸善・丸の内本店 4 階ギャラリー

主催：慶應義塾図書館　協賛：丸善株式会社
協力：ミズノプリンティングミュージアム

講演会：4階ギャラリー内特設会場

10月10日（土）

14：00－ 慶應義塾大学文学部准教授　安形麻理

「活版印刷術の黎明―グーテンベルクとその周辺」

15：00－ 法政大学文学部教授　小秋元段

「鎌倉幕府の歴史書『吾妻鑑』の刊行と徳川家康・秀忠」

10月11日（日）

14：00－ 早稲田大学教育・総合科学学術院教授　雪嶋宏一

「ヴェネツィアからパリへ―活字で見るルネサンス文化の広がり」

15：00－ 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授　髙橋智

「活字印刷の重宝―古活字版漢籍について」

ギャラリートーク

10月12日（月・祝）

14：00－ 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授　髙橋智（和漢書）

15：00－ 慶應義塾大学文学部准教授　徳永聡子（洋書）

ごあいさつ

慶應義塾図書館貴重書展示会では、義塾図書館の所蔵する内外の稀覯本や古典籍などの貴重書を広く一般の方々にご覧いただいてまいりました。1985年の初回以来、27回目となる本年は「活字文化の真髄」と銘打って、東洋･西洋に花開いた活字の数々に焦点をあてます。2015年は西洋印刷史にとって欠くことのできない人物であるアルド・マヌーツィオの没後500年にあたります。マヌーツィオはマインツで42行聖書を印刷したグーテンベルクの次世代として、1490年代から没する1515年まで、ヴェネツィアで活躍した出版人です。彼が考案したイタリック体の文字や文庫本サイズの書物は現代の我々の生活にも息づいています。本展示会では、書物を通して東西の活字文化を辿ります。

写本の時代、手間暇をかけて作られた書物は数も少ない上に高価だったため、貴族や修道院、寺院等の宗教関係者などごく一部の限られた人々のものでした。その状況は印刷術の発明によって大きく変貌を遂げます。流通する書物の増加は、人々の持つ情報量を増加させ、文化の著しい発展に寄与したのです。ただ、その受容は東洋と西洋とでは異なる途を歩みました。東洋では近代に至るまで印刷といえば木版印刷が主流でした。ただ、日本においては近世初期に活字印刷の行われた一時期がありました。この時期の書物は「古活字版」として明治期以降の近代活字印刷と区別され、非常に貴重な存在と位置づけられています。一方西洋では、ドイツに生まれた活字印刷がイタリアやフランス、イギリスなど、広くヨーロッパ全体へ伝播していきました。これら東洋・西洋の印刷術が生み出した書物を通して、権力者に献上する書物に使われた威厳のある書体や、書物そのものの美を追求するために使われた流麗な書体などの様々な活字の姿をお楽しみください。

なお今回は、これまでの展示会と若干趣向を変えて、いくつかの「もの」も出品しました。板の両面に字が彫られた江戸時代の版木や朝鮮李朝期の木活字、グーテンベルク時代の印刷機レプリカもミズノプリンティングミュージアム様のご協力により間近にご覧いただけます。これらの「もの」が印刷物としての書物の成立に不可欠であったことをご確認いただけることでしょう。

本展示の企画・監修は、本塾大学附属研究所斯道文庫の髙橋智教授、文学部の松田隆美教授、徳永聡子准教授にお引き受けいただいています。限られた展示スペースの中で東洋・西洋の印刷史をわかりやすく語るため、各先生方とも展示資料の選定に心を砕かれました。吟味に吟味を重ねて選ばれた展示資料の数々を通し、小さな活字が描き出す大きな活字文化のストーリーをご堪能いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の展示会にご協力をいただいた丸善株式会社をはじめ、関係の皆様に深く感謝申し上げます。

2015年10月

慶應義塾図書館長

赤 木　完 爾

目　　次

ごあいさつ…… 慶應義塾図書館長　赤木　完爾

展示にあたって…… 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授　髙橋　智

全体解説：東西活字文化の共演…… 慶應義塾大学文学部教授　松田　隆美

展示解説

和漢書

第1部　木版印刷と活字印刷―版木とその印刷物、活字の見本― …… 5

第2部　古活字版の誕生―中世博士家の学問と朝鮮版の影響― …… 8

第3部　戦国時代と古活字版―竹中重門・尾張徳川家・藤原惺窩― …… 12

第4部　活字を作った人々と活字版―皇室・武家・寺院・有志家― …… 17

第5部　古活字版の版種―古活字版の終焉― …… 37

第6部　平仮名・片仮名の古活字版―美しさを求めて― …… 41

参考文献…… 47

第6部に寄せて：古活字版黎明期の知識人のネットワークと出版 …… 48

洋書

第1部　活版活字の誕生 …… 53

第2部　活字文化の普及 …… 61

第3部　継承と発展 …… 86

略語一覧および参考文献…… 117

出品リスト…… 123

展示にあたって

「活字中毒」「活字離れ」という言葉を聞かなくなって久しい。この言葉は本好きという意味から転じているから、「活字」が「本」の意味で使われているのである。今、「活字」はパソコン上のフォントという観念と結びついている。

そもそも「活字」は活きた字という意味であって、生き物のように動くのである。字が動くとは一文字一文字が個体として自立しているということである。活字はゴツゴツとした一個の物体なのであった。その一つ一つを田に稲を植えるように並べていくから「植字」と言ったのである。原稿に沿って個体の文字を並べる植字工は、何万とある活字を自由に操る魔法使いのような職人中の職人であった。そしてこの職人技は、西洋と東洋でそれぞれの発展を遂げてきた。その伝来がいずれも東の日本を終局点としていることは大変興味深いことと言わねばならない。

こうした視点から、洋の東西、それぞれの活字による出版文化を概観する機会を得たいと思うのは、ただに「活字中毒」の人だけではないであろう。近年まで出版の主流であった活字印刷の源流を辿り、何のために、どんな意義をもって、書物の歴史のなかに活字が活きてきたのか、というテーマの一端を垣間見てみるのがこの展示の目的である。

文化や技術は発展するものであるけれども、後々の技術が初期のものには到底及ばないということもある。実は技術の真髄が初期の時代にこそあるのが、活字印刷術と言えるかもしれない。

西洋の初期印刷本や日本の古活字版というものに焦点を当ててみると、あらためて和洋を問わずダイナミックな文化が存在したことを教えてくれるであろう。

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授
髙 橋　　智

全体解説
―東西活字文化の共演―

書物を印刷する手法には大きく分けて2つある。ひとつは、版画の要領で、ページを構成する文字、挿絵、装飾模様、罫線などの全ての要素を1枚の木板（まれに銅板）に彫って刷るやり方で、明治以前の日本の古典籍はこの手法が主流である。かなと漢字をあわせると使用する文字の種類が非常に多く、また、文字を続けて書くくずし文字を用いる江戸時代の版本では、この木版印刷が合理的な選択であった。ヨーロッパにも、15世紀から本格的に発展した版画技術を活用して、この手法で制作された「木版本」（blockbook）と称される書物が存在する。木版印刷の長所は、本文と挿絵を区別することなく彫るため、自由で複雑なレイアウトの絵入り本を印刷できることにあるが、しかしその一方で、1冊毎に新たに全ページ分の版木を彫らねばならず、効率が悪いことも事実である。実際西洋では、木版本は15世紀後半から16世紀初めにかけてごく短期間制作されただけで長続きしなかった。

もうひとつの手法は、1文字毎に独立したひとつの活字を作り、それらを並べて、書物の判型に応じて1ページあるいは複数ページ単位で組んで版をつくるやり方で、これが活版印刷である。活字は、東洋では、金属製とともに鋳物製や木製のものもあるが、西洋では鉛から鋳造された金属活字がほとんどであった。その長所は、言うまでもなく、書物毎に一から新たな版木を彫る必要はなく、ストックしてある活字を組むことで版が作れ、印刷が終わったらまたバラして再利用できる点にある。

慶應義塾図書館も所蔵している『百万塔陀羅尼』（770）は世界最古の印刷物とされる。しかしこれは活字を用いた印刷ではない。活字を用いた印刷の最古の例は11世紀の中国北宋のもので、活版印刷は13世紀には高麗にも伝わっていた。朝鮮から日本に伝わってくるのは、文禄・慶長の役（1592・1597）の頃で、その後寛永年間（1624–44）までの数十年間にわたって、朝鮮活字を手本として制作された優雅で美しい活字による、いわゆる「古活字版」の文化が花開いた。それは、経典のように1文字ずつ独立した漢字で組まれた版に限らず、仮名文字のもの、日本語固有の仮名混じりのくずし文字のものまで、実に多様である。

西洋では、ドイツ、マインツの金細工師ヨハン・グーテンベルクが1455年頃までに活版印刷を発明すると、その技術は遍歴職人によって、ライン川流域のドイツ語圏都市からフランス、イタリアへと伝わり、15世紀のうちにヨーロッパ中に広まっていった。ラテン語にせよギリシア語にせよ、アルファベットを用いる西洋の言語では、本文に用いられる文字の種類は限られる。言語によっては様々なアクセント記号のついた文字が使用されており、慣習上2つのアルファベットを続けて書く「連字」も存在するし、小文字と大文字の2種類が必要なので、最終的には最低でも100種類程度の活字を鋳造することにはなるが、それでも日本語に比べるとはるかに少ない。そうした言語では、本文は活字で組み、挿絵は版木や銅版に彫って、一緒に印刷する手法が主流となった。15世紀後半から16世紀にかけて、パリやヴェネツィアに代表されるヨーロッパの主要都市では多くの出版者が活躍して、活字の改

良と革新に力を注いだのである。その活版印刷術は、イエズス会の宣教活動を通じて日本にももたらされ、天正19年（1591）に島原半島の加津佐でローマ字活字による印刷がなされたのを皮切りに、長崎や京都でも西洋式の活版印刷がなされる。この「キリシタン版」の誕生で、東西の活字文化は日本で出会うことになったと言えるだろう。

「活字文化の真髄－日本の古活字版と西洋初期印刷本－」展では、15世紀後半から17世紀前半にかけてヨーロッパと日本で刊行された、今日に至る出版文化史のなかでも最高水準の活字本を展示し、初期の活版印刷における活字の変化と多様性に光を当てている。東西でほぼ同じ時期に活字文化がひとつの黄金時代をむかえたことは興味深い事実だが、それが直接の影響関係の結果であるとは考えにくい。遠い過去において何らかの接触があったとしても、それぞれの文化圏が独自に活版印刷を完成させ、文字そのものの、そして印刷されたページの美しさを意識的に追求し、「もの」としての書物の質を高めていったと言えるだろう。

慶應義塾大学文学部教授
松 田　隆 美

和漢書

凡　例

・漢字表記は原則として新字体とした。
・資料の書誌的事項については原則として以下の順に記した。
　書名、巻数、著編者等、刊行者、刊行年、書型、冊数　請求記号
・書名は本文巻頭の内題によることを原則としたが、内題が無い場合は序題・跋題・外題・扉題・尾題・見返し・奥書・目録等から適当とするものを採った。
・内部に一切適切な書名が無い場合は［　］に入れて、通称もしくは仮称を記した。
・巻数はアラビア数字に置き換えて記し、使用する欠の文字は、国書「欠」、漢籍「闕」で統一した。
・連続しない複数の在巻・欠巻巻数の記入、区切りかたは「・」を使った。全体の巻数が不明または在巻が非常に少ない場合は記入しなかった。
・著編者等は資料に見える人名を優先し、適宜『国書総目録』等を参照した。中国人の著編者の前には、王朝名を附与した。
・著編者名は本名でとる事を原則とした。先秦の書物には著者名を省略した。日本人の場合は号でとることを優先した。
・刊行年は、巻首・封面・序跋・刊記などにより記し、西暦を（　）で補記した。
・刊行年の表記は、常用漢字に直し、「元年」は「1年」、干支は調査して数字で記した。明示が無い場合は推定年代を記した。日本以外の年号の前には王朝名を記した。
・装丁は袋綴以外の場合のみ記した。
・縦横寸法をミリ単位まで記した。
・末尾に解説者のイニシャル（T：髙橋智、K：小秋元段）を（　）に入れて記した。

第1部　木版印刷と活字印刷

—版木とその印刷物、活字の見本—

中国で印刷技術が生まれたのが唐時代（618–907）の頃と言われ、日本では遠く奈良・平安時代にも遡る。しかし、それは遣唐使として日本から渡航帰国した学僧の将来目録などのわずかな資料によってその事実を知ることができるのみであった。

天平宝字8年（764）、恵美押勝の乱が平定され、称徳天皇が国家鎮護を祈念して、770年に完成した『百万塔陀羅尼』がわずかに遺るこの時代の印刷品である。20世紀になって敦煌で発見された『金剛般若波羅蜜経』（大英博物館蔵）は唐の咸通9年（868）の刊記を有し、年号の定かな最古の印刷品として知られる。日本では、寛治2年（1088）の刊記を有する『成唯識論』（正倉院蔵）が同じように定かな最古の印刷品とされている。

そして、印刷、この歴史と技術を考える時に、東洋でその原点となるのは、木片に字を刻んで紙をかぶせる木版印刷術なのである。そもそも、古代中国で石や金属に字を刻んで文字を遺そうとしていた時に、複本の作製を求めてその拓本をとる技術が生まれ、紙の発明とともに進化したのが、印刷の始まりであったとも考えられている。そしてその原板がいつか、木片を材料とし、木版と呼ばれる版木が流通していったのである。版木に墨を塗り、そこに紙をのせて「ばれん」でこすり、紙に写った文字や絵が複数部誕生することになる。これが木版印刷術と呼ばれるもので、最古の印刷品もこの技術に依っていたであろうと推測される。

ところで、その木版印刷術と平行して行われてきたもう一つの印刷技術が、活字による印刷術、即ち活版印刷術と言われるものである。版木は大きさも長さもまちまちだが、仮に1頁1枚の版木で刷ると、100頁で100枚（両面用いても50枚）の版木が必要になる。何遍でも刷り増すことができる半面、その厖大な版木の蓄積には大変な場所と保管能力が求められる。そこで発明されたのが、版木ではなく、個々の文字を保管しその文字を組み合わせて1頁を作る方法であった。中国北宋の慶暦年間（1041–1048）頃に畢昇という人が粘土を固めて文字を彫り、それを火で焼いて堅くしたもの（泥活字）を並べて頁を作り、印刷したと文献に記されている。しかし、その時代の活字も印刷品も遺ってはいない。

活字の「活」は移動できる、まさに生きているという意味で、1個1個の文字が何遍も組み版ごとに動くということである。これは版木に較べると保存場所も効率的で、版木をおこすたびごとに刻字をするという手間が省けるという利点があった。中国ではその後、明時代の15世紀から16世紀にかけて、盛んにこの活字印刷を行い、活字の材料も、木・金属・泥などさまざまであった。

勿論、活字印刷が発明されても、版木による木版印刷（活字印刷と区別して整版と呼ばれる）は途切れることはなかった。活字印刷の難点は、1頁組み上げて印刷を終えると、その版は分解してしまうことである。次第に、活字印刷は便利な印刷方法というよりは、贅沢な一種の嗜好品のようなものとして発展した。日本では、中世期、整版印刷は行われたが、活字印刷の技法は16世紀末、西洋・朝鮮からの伝来を俟たねばならなかった。

（T）

木版印刷の版木とその印刷品、そして木活字

1. 董文敏公画禅随筆4巻　明董其昌撰　清汪汝禄編　小田海僊校
　天保11年（1840）刊（須原屋茂兵衛等）
　版木：［133X@126@1～12］35枚　21.6×74.8cm、匡郭20.3×13.2cm
　印本：［184@62@3］3冊　茶表紙　25×16cm
2. 木活字：［133X@118@1］大きさ：約1cm四方　厚さ約5mm

（1. 版木全体）

（1. 封面部分）

（1. 印本）

この版木は中国明時代の董其昌が書の筆法と作品を述べた論文である。清代に汪汝禄がまとめ編纂したものが輸入され、京都の画家小田海僊が句読を付けて出版した。江戸の版元は須原屋茂兵衛など当時の有力書店。書画家にとっての好資料。版木が揃って遺っている例は珍しい。厚さは約2cm。表裏に各2丁分を刻する。材質は桜と思われる。この印本も初刷りである。これを見ると、版木が欠けるのも初印時から存在するようである。

一方、掲出の木活字は朝鮮李朝期の末に使用されたものであると伝えられる。1文字1文字の高さが一定しないから、並べて組み上がった時に、凸凹が生じ墨色にムラが生じる道理がよくわかる。

（T）

（2. 活字全体）

（2. 活字拡大）

第2部　古活字版の誕生

―中世博士家の学問と朝鮮版の影響―

日本に朝鮮から活字印刷術が伝わったのは、文禄・慶長の役（1592・1597）頃であった。中世期は、仏教の各宗派が経典を印刷したり、とりわけ学力を増していた禅宗の学僧の勉学に寄与する漢文典籍が京都・鎌倉の五山を中心とする大寺院で印刷されたりしていたが、それらはどれも木版印刷によるもので、活字印刷ではなかった。そこに朝鮮から活字の技術が伝わって来たのを機にして、1つの気運が勃興したのである。

そもそも日本が受容した漢文典籍（仏典を内典、儒学や歴史文学は外典と言う）はおおまかに3種類に分けられる。中国から輸入した印刷本（唐本）、輸入した唐本を覆刻して使用したもの（旧刊本）、輸入した唐本を校訂して写し取ったりするもの（古写本）である。学僧であっても学ぶべきであったのが儒教の経典（『四書五経』の類）であったが、それは写本が圧倒的に多かった。その経典を握っていたのが博士家と言われる貴族階級で、室町時代には清原家が絶大な力を持ち、そのテキストである古写本は秘して公開するものではなかった。中世も終わり近くなると、学僧や武家の抬頭が目覚ましくなり、博士家の威力も次第に衰落していく。伝家の秘本が世に現れざるを得ない時代となっていった。とはいえ家の権威は守らねばならない。そこに遭遇した活字印刷術は、時の文芸学術界に寄与する有志の動向と相まって、権威を保とうとする博士家の学問を優雅な形で世に遺すことを可能にしたのである。ここに博士家は中世の学問とともに華々しい最後の花道をかざることとなった。こうした意味合いをもって誕生したこの時期の活字印刷品を近世中期以降の活字版と区別して「古活字版」と呼ぶ。古活字版は、斬新な技術と博士家の由緒あるテキストに基づいていることとをあわせ貴重な価値を持つ。印刷部数も少なかったし、慶長・元和・寛永という数十年間の短期間のみに行われた営為であったことも、その価値を高める要因となっている。まさに、活字印刷の極み、真髄はここにあると言える。

古活字版は、活字の字体が優雅で美しいことが大きな特徴である。その源流は、朝鮮活字を模倣したことにある。時代と様式を総合しても、朝鮮活字の影響が大きかったことは否めない。朝鮮では、印刷文化の進展とともに、活字印刷の技術が高度に発展した。中国の技術を学んでそれを越えた、まさに出藍の誉れであった。高麗王朝（936–1391）の後期には金属を素材とした活字を発明、印刷していたことが知られている。高麗活字と言われるものである。その後、朝鮮時代（1392–1910）になると1403年の癸未字と言われるものから始まって、数十回にも亘って活字製造が行われ、木・鉄・銅・陶などの材料で鋳字、印刷が繰り返されてきた歴史がある。

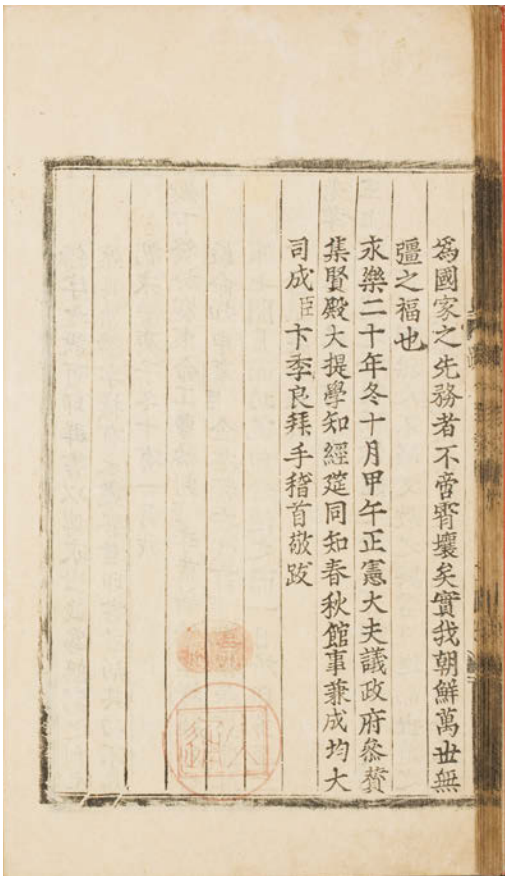
日本の古活字版に影響を与えた朝鮮活字は、16世紀末までに作られた活字が相当する。すなわち、朝鮮世宗2年（1420）の庚子字やその18年（1436）の丙辰字と言われる活字がそれに相当すると言われる。それらは中国の宋・元・明時代の由緒ある漢字の字体に基づいているから、美しく、権威ある字体となっている。古活字版が活字印刷の真髄であるとする所以はここにもある。

（T）

朝鮮活字

3. 史記130巻　漢司馬遷撰　劉宋裴駰集解　唐司馬貞索隠　唐張守節正義
　　朝鮮前期刊　銅活字　明永楽20年（1422）鋳字跋

23.0×19.0cm 34冊
［110X@557@34］



（3. 卞季良の鋳字跋　下に大通の印記）

（3. 秦本紀首）

前漢の司馬遷（BC145頃–BC86頃）が著した中国古代の歴史書。本書に注釈を加えたものに、劉宋・裴駰の『史記集解』、唐・司馬貞『史記索隠』、唐張守節『史記正義』の三種が現存し、本書はその三種を一書に纏めた三注合刻本。その三注本の最古のものが南宋・紹熙―慶元年間（12世紀末）の黄善夫・劉元起による刊本である（国立歴史民族博物館蔵・国宝）。その後、元代には至元25年（1288）彭寅翁刊本が出たが（義塾図書館所蔵57X@52@28）、以後16世紀まで大陸では特記する出版は伝えられていない。そして、その間を埋めるものが、朝鮮による銅活字即ち明永楽20年（1422）庚子字と呼ばれるもので印刷された本版なのである。朝鮮古活字の鋳造では癸未字につぐ二番目に古いもの。釈大通旧蔵。

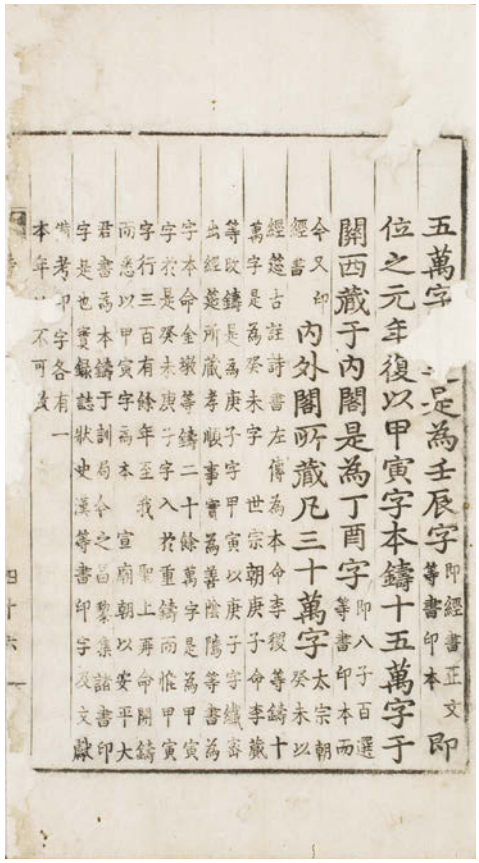
丹表紙、四周双辺有界11行21字、匡郭内22.7×14.8cm。朱墨訓点書き入れ、1420年卞季良の鋳字跋あり。

（T）

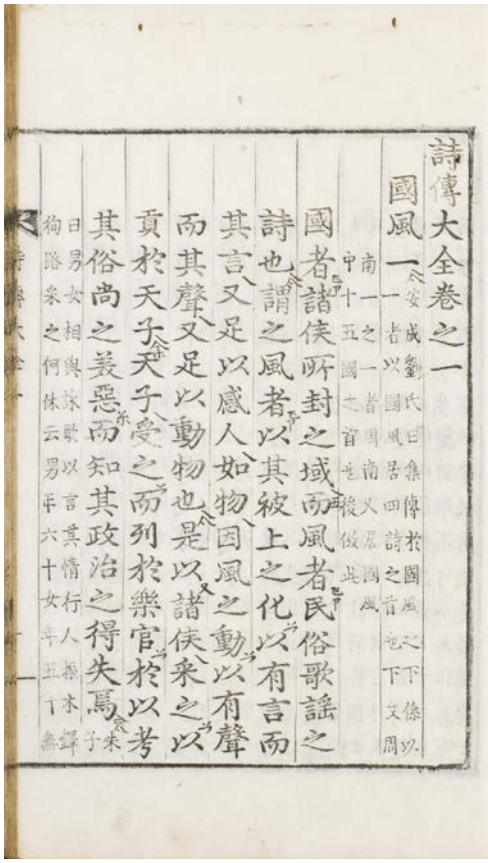
朝鮮活字

4. 詩伝大全20巻首1巻　明胡広等奉勅撰　朝鮮正祖1年（1777）刊　銅活字

34.2×21.4cm 10冊
［175@205@10］


五萬字是為壬辰字即經書正文等書印本即位之元年復以甲寅字本鑄十五萬字于關西藏于內閣是為丁酉字即八子百選等書印本而今又印經書內外閣所藏凡三十萬字太宗朝癸未以經筵古註詩書左傳為本命李稷等鑄十萬字是為癸未字世宗朝庚子命李蔵等改鑄是為庚子字甲寅以庚子字鑄密出經筵所藏孝順事實為善陰陽等書為字於是癸未庚子字入於重鑄而惟甲寅字行三百有餘年至我聖上再命開鑄而悉以甲寅字為本宣廟朝以安平大君書為本鑄于訓局令之昌黎集諸書印字是也實錄誌狀史漢等書印字及文獻備考印字各有一本年一不可考

（4. 鋳字跋）


詩傳大全卷之一
國風一安成劉氏曰集傳於國風之下係以一者以國風居四詩之首也下文周南一之一者周南又居國風中十五國之首也後倣此
國者諸侯所封之域而風者民俗歌謠之詩也謂之風者以其被上之化以有言而其言又足以感人如物因風之動以有聲而其聲又足以動物也是以諸侯來之以貢於天子天子受之而列於樂官於以考其俗尚之美惡而知其政治之得失焉子來日男女相與歌以言其情行人振木鐸徇路采之何休云男年六十女年五十無

（4. 巻1首）

儒教を重んじ、特に中国明時代と交流深かった朝鮮の学界では明の学者の解説書が尊ばれ、明の胡広等の編纂にかかる『詩経』の解釈全書である本書は権威ある一書であった。1777年の丁酉字と言われる活字による印刷。この活字は1434年の甲寅字に基づいていると刊行跋がある。正祖の即位した年に15万字を鋳造したと記す。後述の下村生蔵刊本の字体によく似通っている。これをもって甲寅字を察するならば、日本の古活字版が朝鮮活字の影響を強く承けていることをうかがうことができる。

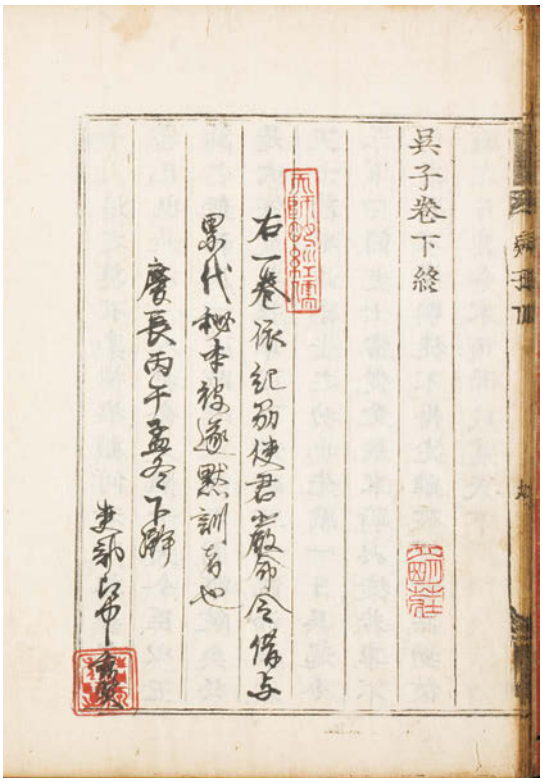
朝鮮伝来の茶色表紙、四周双辺有界10行18字、匡郭内24.8×17cm、墨の朝鮮読方の書き入れ。

鋳字跋：国朝屢鋳銅字而世宗朝甲寅所鋳集其大成歳久寖刓矣。英宗朝壬辰我殿下在春邸以甲寅字為本使芸閣鋳十五万字□□是為壬辰字。即位之元年復以甲寅字本鋳十五万字于関西蔵于内閣是為丁酉字。内外閣所蔵三十万字。　（T）

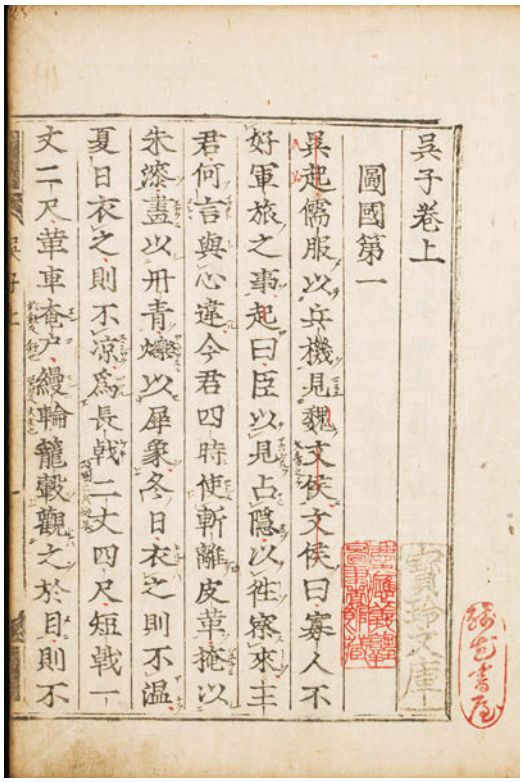
博士家

5. 呉子2巻　慶長11年（1606）刊　清原秀賢手跋　伏見版

28.4×20.5cm 1冊
［110X@338@1］



（5. 巻2末）



（5. 巻1首）

本版は後に述べる徳川家康の伏見版である。兵法書『七書』（武経七書）のひとつ。戦国時代には兵術書が必須とされたが、慶長11年に三要（閑室元佶）が出版し、本書に見える博士家清原秀賢（1575–1614）が訓読を与えたと言う。「天師明経儒」の印記が見える。博士家が権威を示し、その学問が武家階層に伝わっていく、時代の流れをよくあらわしている。秀賢は『慶長日件録』という日記で有名。古活字版と関わりが深く、後陽成天皇・後水尾天皇の侍読。舟橋と号し、秀賢の代から舟橋家と名乗る。戸川浜雄旧蔵

丹表紙、四周双辺有界8行17字、匡郭内21.5×16.5cm、粗黒口双花魚尾、朱墨訓点書き入れ。

奥書「右一巻依紀州使君厳命令借与累代秘本被遂黙訓者也　慶長丙午（11）孟冬下澣　吏部郎中秀賢（清原秀賢の印）」

（T）

第3部　戦国時代と古活字版

—竹中重門・尾張徳川家・藤原惺窩—

古活字版が勢いを馳せた時代は、慶長・元和時代（1596–1624）であるが、慶長は20年、元和は10年、まさに元和偃武（元和1年・1615）を迎えるまっただ中にあった。そしてこの頃は、前の項目で述べたように、戦国時代の末期、武士が博士家や学僧から積極的に漢学を学ぼうとしていた時代である。そこに、立派な活字で威風堂々と仕立てられた書物・古活字版が登場し、注文することができたのであるから、当時の武士たちの経済力・学欲・権威などを見事に満たしてくれたと言えるであろう。買い集めるだけではない。それらを読むにあたっては、訓読が必要である。その訓読こそ、博士家の得意とするところ、その読みを博士家より伝授され、それが古活字版のなかにきれいに書き入れられているのであるから、見るにも、読むにも、権威を保つにも、それは理想的な書物なのであった。刀も大切であるが、書物も同等に必需品となったのが、この戦国末期、武家と古活字版の関係であったと言えよう。

先年、大河ドラマに登場した竹中半兵衛重治（1544–1579）は、黒田官兵衛（1546–1604）とともに軍師として豊臣秀吉（1537–1598）に仕えた戦国武士であった。子の竹中重門（1573–1631）もまた、官兵衛の子長政（1568–1623）とともに戦国の一時代を画した武将であった。重門は秀吉の伝記である『豊鑑』の作者でもあり、文武両道であったが、古活字版の旧蔵書が幾つも現存することや、その書き入れによって読書の軌跡も伺えることは、戦国武将のもう1つの姿を伝える貴重な資料となっている。

徳川家康（1543–1616）は晩年、蒐書につとめ、朝鮮本・古活字版、そして、鎌倉時代以来の古学・金沢文庫の所蔵本など多数の貴重文献を集めた。文禄・慶長の役以来、将来された貴重な朝鮮活字版は家康の好学心を高め、後述の出版事業に結ばれていく。家康の没後、蔵書は御三家に分配されるが、特に尾張の徳川義直（1601–1650）は若くしてこの頃の古活字版を多数買い集めていた。元和2年（1616）家康から分与されたもの、更に自ら蒐集したものなどがあり、後に「御本」の印記で知られる尾張藩の蔵書全体のなかでも貴重な部分を占める。威厳のある古活字版は当時の武家の趣向をよくあらわしている。

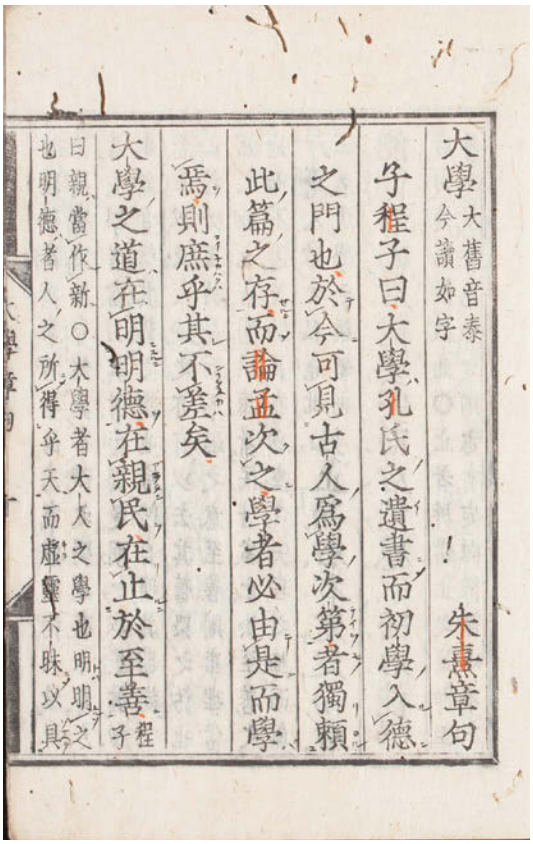
家康のもとに多くの学僧や儒家が集ったことも、この当時、武家の力がどれほど学問に及んでいたかを知る証左となる。林羅山（1583–1657）が家康に登用されて新たな漢学の時代を作ったが、その羅山を推薦したのは藤原惺窩（1561–1619）であった。公家の出から相国寺の学僧となり、数多の門弟を世に送った儒学の祖師は、それまでの古い儒学から朱子学を中心とする新しい時代を築いていくが、この戦国時代から江戸時代にいたる時期、古活字版とも大いに関わっていたようである。後に古活字版の出版に関わる角倉素庵（1571–1632）もその弟子であった。貴族文化の花道を見届けて、新たな大衆文化の道を切り開いた人と言えよう。こうした人々の姿から、戦国時代と古活字版の関わりの意義を見いだすことができるのである。

（T）

竹中重門

6. 大学1巻　宋朱熹章句　慶長年間刊　1冊

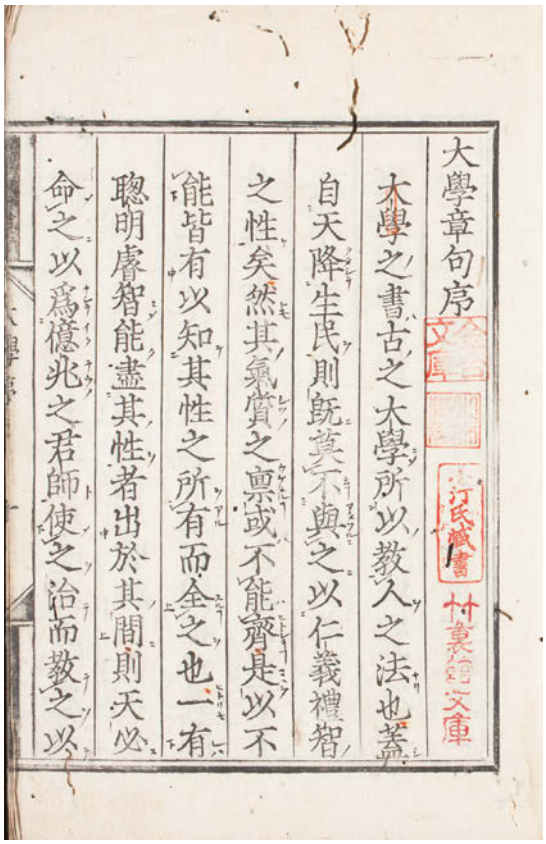
28.5×20.0cm 1冊
［110X@680@1］


大學 大舊音泰 今讀如字

子程子曰大學孔氏之遺書而初學入德之門也於今可見古人爲學次第者獨賴此篇之存而論孟次之學者必由是而學焉則庶乎其不差矣

大學之道在明明德在親民在止於至善 程子曰親當作新○大學者大人之學也明明之也明德者人之所得乎天而虛靈不昧以具

朱熹章句


大學章句序

大學之書古之大學所以教人之法也蓋自天降生民則既莫不與之以仁義禮智之性矣然其氣質之稟或不能齊是以不能皆有以知其性之所有而全之也一有聰明睿智能盡其性者出於其間則天必命之以爲億兆之君師使之治而教之以

（6. 巻頭）　（6. 序首）

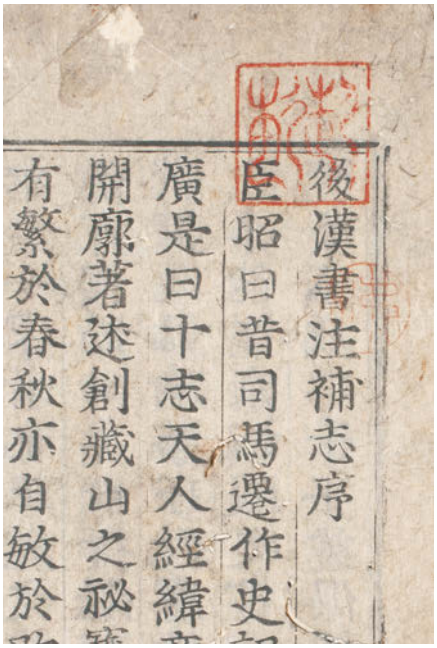
江戸時代、『四書集注』として、朱子学（宋・朱熹の学問）による解釈の『論語』『孟子』『大学』『中庸』が漢学の必須科目として流行したが、江戸時代のテキストの先駆をなしたのが古活字版『四書』で、中世博士家が最も力を注いだ書物。その秘伝の博士家のテキストを公にしたのが古活字版で、内容的な価値はすこぶる高い。その刊行に関わった篤志家の主な人が、後述の今関正運と下村生蔵。本版は慶長14年（1609）頃刊行と思しき今関刊本。末尾の「正雲刊」は後人の偽造。竹中重門の所持本（竹裏館文庫）。訓点の書き入れが当時の真摯な読書を思わせる。後に小汀利得（1889–1972）の小汀文庫に入った。

茶表紙、四周双辺有界7行17字、匡郭内21×15.2cm、粗黒口双黒魚尾、訓点書き入れ。（T）

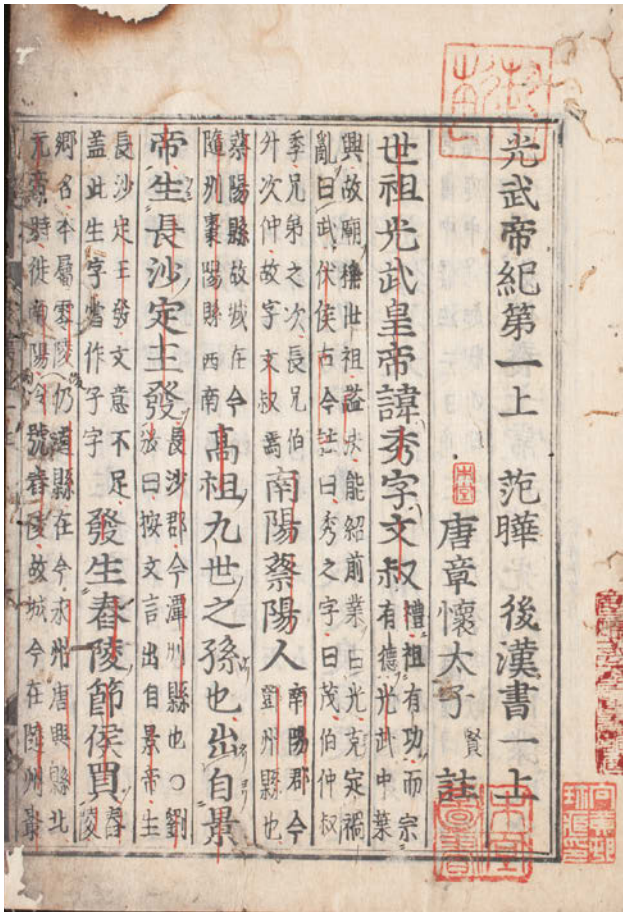
尾張徳川家

7. 後漢書90巻志30巻　劉宋范曄撰　唐李賢注　（志）晋司馬彪撰　梁劉昭注
元和寛永年間刊　尾張藩旧蔵

27.4×20.5cm 50冊
［111X@1@50］



（7. 序首の印記（御本・払））



（7. 巻1首）

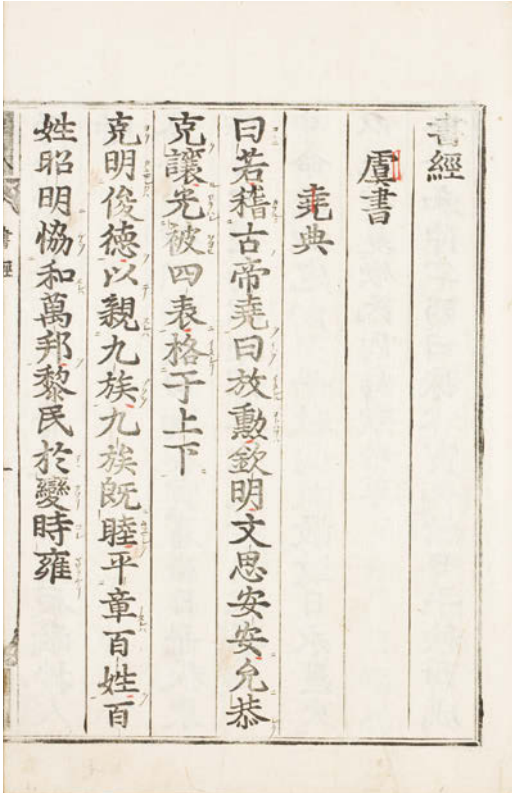
『史記』が慶長年間、早々と数種類の版種を出したのに対し、『漢書』『後漢書』はそれにやや遅れ、元和寛永時代にそれぞれ1版だけ世に出た。しかし、江戸時代初期、訓点本が流布する時には、『史記』『漢書』ともに新たなテキストが用いられたのに対し、『後漢書』はこの古活字版が底本として用いられ、江戸時代を通じて『後漢書』講読の基礎となった。さらに古活字版の底本は中国元時代大徳9年（1305）刊本で、その価値は高い。尾張公の蒐書活動は尾張藩の特色となったが、本書にも押す「御本」はそのしるしである。現在も尾張藩収蔵の貴重な古活字版は名古屋市蓬左文庫に保管されている。本書は尾張藩が払った後に犬養毅が収蔵した。

後補茶表紙、四周双辺有界9行17字、匡郭内22.2×16.8cm、粗黒口双黒魚尾　朱墨訓点書き入れ、寛永2年（1625）の識語、寛保4年（1744・名古屋藩儒木下蘭皐）の識語がある。　（T）

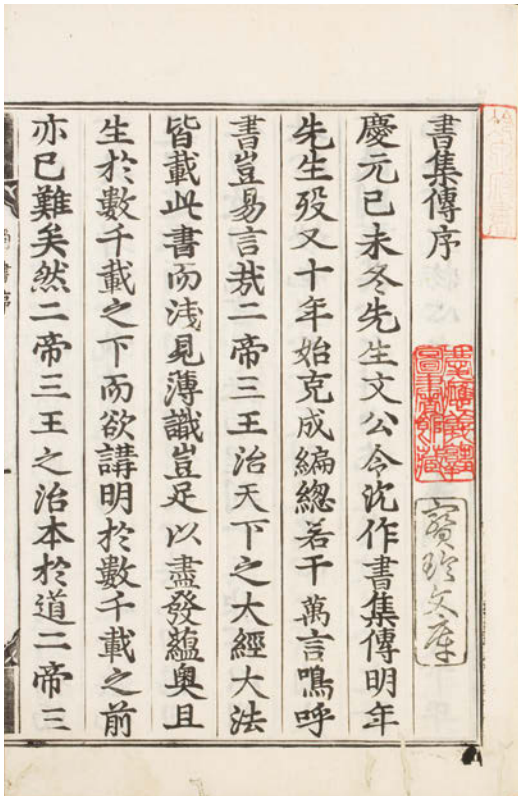
藤原惺窩

8. 書経　不分巻　慶長年間刊　藤原惺窩旧蔵

27.5×19.7cm 2冊
［110X@345@2］


書經
虞書
堯典
曰若稽古帝堯曰放勲欽明文思安安允恭
克讓光被四表格于上下
克明俊德以親九族九族既睦平章百姓百
姓昭明協和萬邦黎民於變時雍

（8. 巻頭）


書集傳序
慶元己未冬先生文公令沈作書集傳明年
先生歿又十年始克成編總若干萬言嗚呼
書豈易言哉二帝三王治天下之大經大法
皆載此書而淺見薄識豈足以盡發蘊奥且
生於數千載之下而欲講明於數千載之前
亦已難矣然二帝三王之治本於道二帝三

（8. 序首）

『書経』は『尚書』とも称し、中国古代の史実を記した『五経』のひとつ。『易経』や『春秋』とともによく読まれた経典で、より古いテキストである『古文尚書』が古く日本に古写本で伝わり、古活字版もこうしたテキストに依って、漢の孔安国の注釈本と伝えられる『古文尚書』が何度も活版の版を重ねている。しかし、宋時代の新しい儒学は宋学といって新しい解釈学が日本にも大きな影響を与えた。藤原惺窩はその宋時代の新しいテキストを積極的に輸入して広めた。本書は、惺窩が刊行に関わったとも考えられる『書経』の宋時代の新しいテキストの古活字版である。伝本は極めて少ない。後述の下村生蔵の出版による活字と同類である。ここに、古活字版が中世（漢学）と近世（宋学）の橋渡しをする大きな意義を見て取れる。「冷泉府書」「北肉」の印が惺窩だと言われる。

後補藍色表紙、四周双辺有界7行17字、匡郭内21.5×16.5cm、粗黒口双花魚尾、朱墨書き入れ。（T）

第4部　活字を作った人々と活字版

―皇室・武家・寺院・有志家―

天正19年（1591）肥前の国加津佐でローマ字活字による印刷が初めて行われ、『サントスの御作業の内抜書』が出版されて、いわゆるキリシタン版が登場し、ここに日本に於ける活字印刷が始まりを告げたのであるが、これとは別に朝鮮から渡来した活字印刷術は、皇室・幕府・公家・武家・寺院・私人（医師や商人）と幅広い層に歓迎され、勢い藝林の活況を呼んだ。

古活字版事業の先駆をなしたのは無論朝廷にあり、後陽成天皇（在位1586–1611）は早く、文禄2年（1593）『古文孝経』を活字印刷したが、それは現存しない。続いて慶長2年（1597）『錦繍段』、同4年（1599）『四書（大学・中庸・論語・孟子）』『古文孝経』などを立派な木活字で印刷した。これを「慶長勅版」と呼ぶ。文字は大きく本文のみの、注釈がない正文本で、権威を象徴するかのようである。次の後水尾天皇（1611–1629）は、先帝の偉業を継いで、元和7年（1621）に銅活字を用いて『皇朝類苑』15冊を印刷した。百科全書の出版はさすがに皇室の事業と言える。

武家の抬頭は徳川家康に代表される。家康は前述の蒐書事業から出版事業に志を拡大、慶長4年（1599）から11年（1606）まで京洛伏見で活字出版を行った。関ヶ原合戦の頃、既に文化事業に力を注いでいた家康は足利学校の庠主（校長）三要（閑室元佶、1548–1612）に圓光寺と10万個の活字を与えた。ここで慶長4年の『孔子家語』から11年の『七書』の出版を遂げた。これを「伏見版」と呼ぶ。さらに家康は慶長12年（1607）駿府に退隠後、新たに銅活字を鋳造させ、中国で亡んだ天子の為政書『群書治要』、仏典の総目『大蔵一覧集』を出版した。これを「駿河版」という。ここに監督したのは林羅山（1583–1657）と金地院崇伝（以心崇伝、1569–1633）。また、先年大河ドラマに登場した上杉家臣直江兼続（1560–1619）が京都要法寺で慶長12年に『文選』を活字印刷した。武家・公家の活躍と京洛の寺院による古活字出版活動とは互いに密接な交流があった。

寺院では、要法寺（『法華経伝記』など）、本国寺（『仏祖歴代通載』など）、本能寺（『法華経伝記』など）、北野経王堂において大蔵経の刊刻を立願した伊勢常明寺の宗存、宝珠院（『教誡新学比丘行護律儀』など）、心蓮院（仁和寺の塔頭、『倭玉篇』）など多く知られている。そして、要法寺版に出てくる「正運」、宝珠院版に見える「下村生蔵」などの出版人の活躍がこうした寺院と関係するのかもしれない。京洛以外でも、比叡山（東塔月蔵坊『法華玄義科文』など叡山版と呼ばれる）、高野山（『秘密曼荼羅十住心論』など）、やや降って寛永時代、天海（1536–1643）が発願した『天海版一切経』などがある。そして次第に寺院の出版事業が書肆坊間の営利事業に席を譲っていくこととなった。

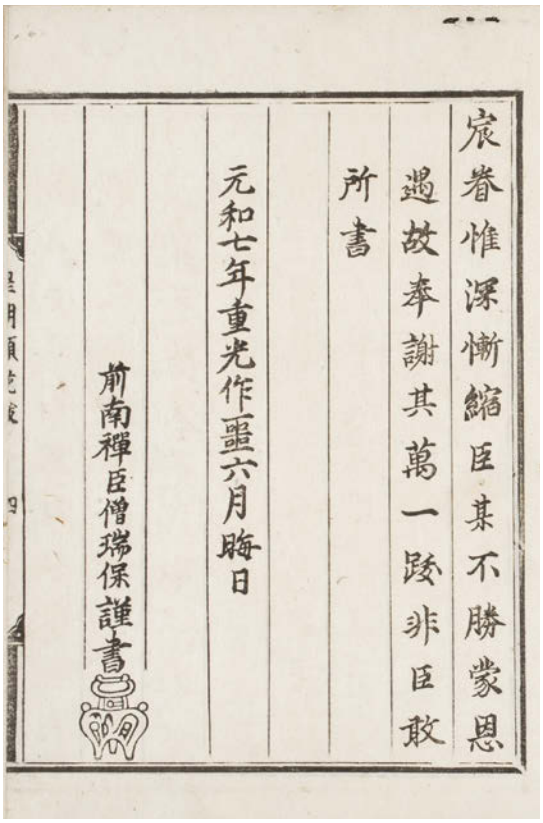
また、那波活所（1595–1648）のように学者がよく校訂を完遂し良質の印刷を行った『白氏文集』は、那波本として一定の価値を獲得している。角倉素庵（1571–1632）のような篤志家の業績も古活字版の真髄と言える特色を持っている。そして、駿河版や宗存版といった活字の現物が今も伝わっていることには驚きを禁じ得ない。

（T）

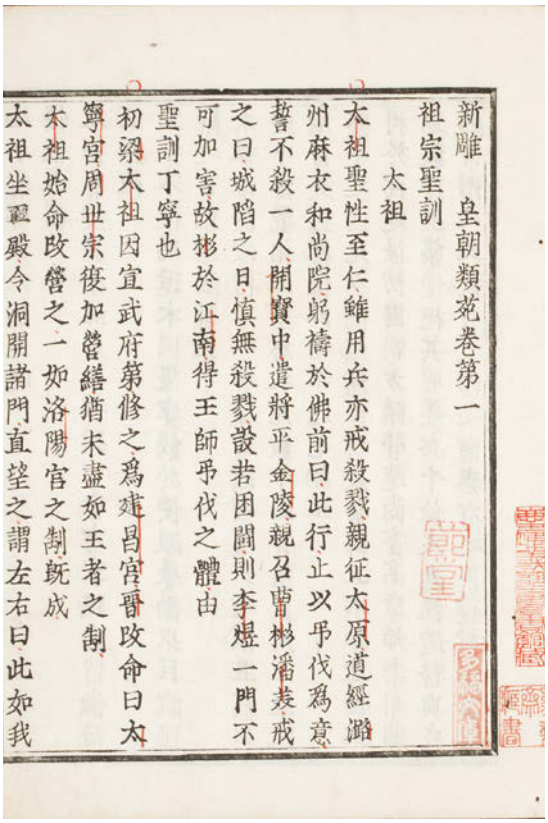
後水尾天皇

9．新雕皇朝類苑78巻序目1巻　宋江少虞撰　元和7年（1621）刊　銅活字

28.0×21.1cm 15冊
［110X@40@15］


宸眷惟深慚縮臣某不勝蒙恩
遇故奉謝其萬一跋非臣敢
所書
元和七年重光作噩六月晦日
前南禪臣僧瑞保謹書

（9．跋）


新雕　皇朝類苑卷第一
祖宗聖訓
太祖
太祖聖性至仁雖用兵亦戒殺戮親征太原道經澠
州麻衣和尚院躬禱於佛前曰此行止以弔伐為意
誓不殺一人開寶中遣將平金陵親召曹彬潘美戒
之曰城陷之日慎無殺戮設若困鬬則李煜一門不
可加害故彬於江南得王師弔伐之體由
聖訓丁寧也
初翊太祖因宣武府第修之為建昌宮晉改命曰太
寧宮周世宗復加營繕猶未盡如王者之制
太祖始命改營之一如洛陽宮之制既成
太祖坐殿令洞開諸門直望之謂左右曰此如我

（9．巻1首）

宋の江少虞が編纂した類書と呼ばれる百科事典。総計28門に分かち、「祖宗聖訓」「君臣知遇」に始まり、「忠孝節義」や「風俗雑誌」「神異幽怪」など多方面に亘る治世に資すべき事跡を網羅する。中国には不全の鈔本を幾つか存するのみで、完全な刊本は本版のみで、しかも「宋紹興23年（1153）麻沙書房印行」という底本の刊記を遺す、由緒正しい伝本となっている。後陽成天皇の「慶長勅版」（『四書』『古文孝経』など）を承けて、後水尾天皇が元和7年（1621）銅活字を以て本書を校訂出版せしめたのである（「元和勅版」）。刊行の由来は末尾の南禅寺僧瑞保の跋文（元和7年）に記される。この銅活字は慶長11年（1606）に家康が圓光寺の元佶に命じて作らせ奉献したものとも言われる。沢田一斎旧蔵（「奚疑斎蔵書」印記）

淡香色の鳥の子紙表紙、四周双辺無界13行20字、匡郭内22.3×16.7cm、粗黒口双黒魚尾、朱の書き入れ。

（T）

家康の伏見版

10. 司馬法3巻　慶長11年（1606）刊　伏見版

28.2×20.7cm 1冊
［110X@38@1］

司馬法卷上
仁本第一
古者以仁爲本以義治之之謂正正不獲意
則權權出於戰不出於中人是故殺人安人
殺之可也攻其國愛其民攻之可也以戰止
戰雖戰可也故仁見親義見悅智見恃勇見
方信見信內得愛焉所以守也外得威焉所
以戰也戰道不違時不歷民病所以愛吾民

（10. 首）

（10. 表紙）

家康が伏見で出版させた『七書』の古活字版。次の『孫子』、前述の『呉子』、『尉繚子』『六韜』『三略』『唐太宗李衛公問対』を併せて出版したもの。慶長4年の『孔子家語』から始まって11年掉尾を飾る兵書の集大成であったと言えよう。

『七書』は同種の活字を用いて2度出版されている。

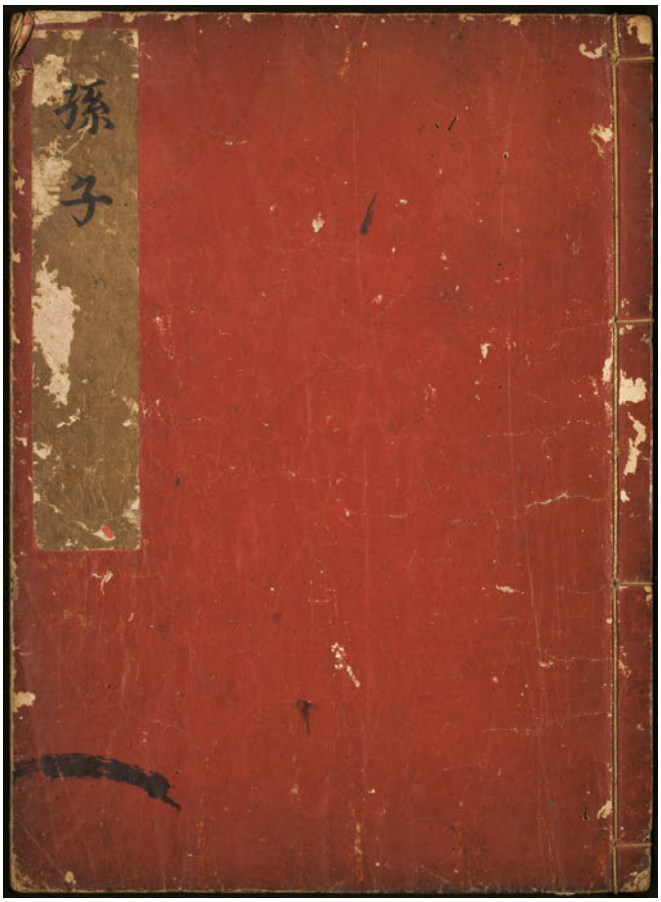
丹表紙、四周双辺有界8行17字、匡郭内21.4×15.5cm、粗黒口双花魚尾、朱墨訓点書き入れ。

（T）

家康の伏見版

11．孫子3巻　慶長11年（1606）刊　伏見版

28.4×20.5cm 1冊
［110X@337@1］



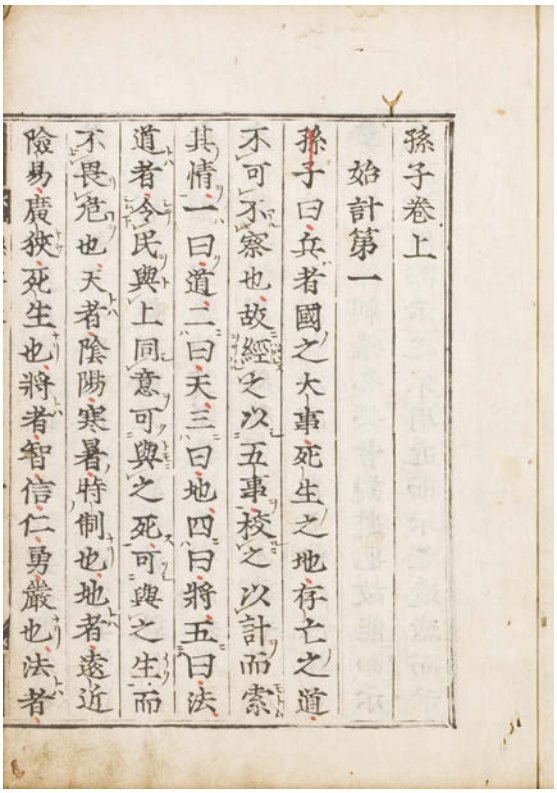
（11．表紙）

前記と同様、『七書』のひとつ。こうした丹表紙はこの時代を象徴するもの。これも清原家の訓点が写されている。古活字版は字が大きく読みやすい。そこに権威ある訓点が書き入れられてひとつの完結したテキストとして生きてくる。古活字版は、江戸時代の訓点出版全盛を迎える前の、中世の名残を持つ最後の訓点本であったと言えよう。「天師明経儒」（清原秀賢）印、「残花書屋」（戸川浜雄）旧蔵。

版式等は同前。

奥書「右孫子者以当家秘本命筆者令加点者也
慶長十一年良月上澣　吏部郎中　清原（花押）（清原秀賢の印）」

（T）

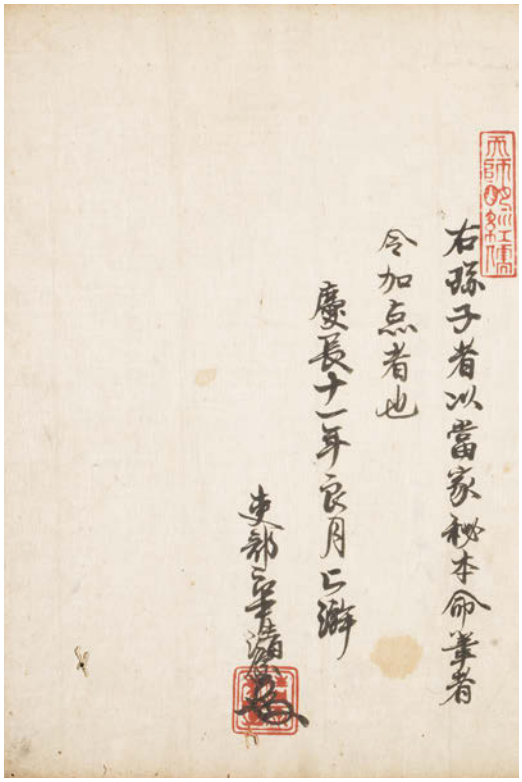


孫子卷上

始計第一

孫子曰兵者國之大事死生之地存亡之道不可不察也故經之以五事校之以計而索其情一曰道二曰天三曰地四曰將五曰法道者令民與上同意可與之死可與之生而不畏危也天者陰陽寒暑時制也地者遠近險易廣狹死生也將者智信仁勇嚴也法者

（11．首）



右孫子者以當家秘本命筆者

令加点者也

慶長十一年良月上澣

（11．奥書）

家康の駿河版

12. 群書治要50巻　原闕巻4・13・20　唐魏徵等奉勅撰
　　元和2年（1616）刊　銅活字　駿河版

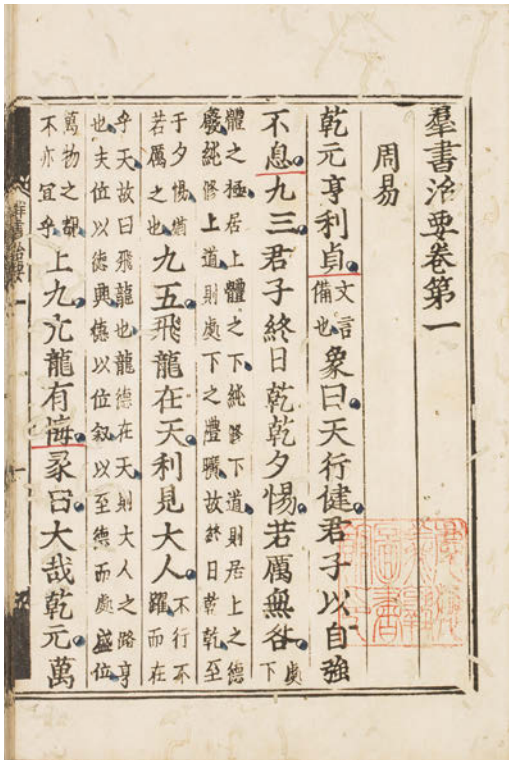
27.3×19.3cm 47冊
［57X@26@47］

（12. 箱全体）

本書は唐の太宗（在位626–649）に仕えた魏徵らが、治世に要する事例を諸書の中から選んで献納した書で、次の宋時代には亡んで伝わらなくなった。日本には古くから伝わり平安時代の写本も伝存している。こうした写本をもとに家康は初めての出版を企図、京都から職人を集め、駿府で成就した。しかし、生前には2ヶ月ほど間に合わなかった。家康の遺志は紀州徳川家に継がれ、後年、この銅活字で再び印刷、天明5年（1785）には尾張徳川家が木版（整版）で再版した。「島原秘蔵」「尚舎源忠房」「文庫」の印記は島原藩主松平忠房。

藍色表紙、四周双辺有界8行17字、匡郭内21×15.4cm、大黒口双花魚尾。木箱入り

（T）

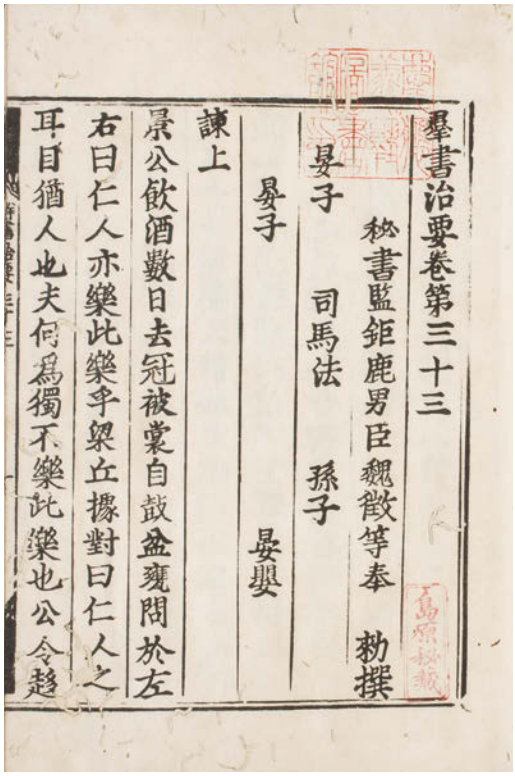


羣書治要卷第一

周易

乾元亨利貞文言備也象曰天行健君子以自強不息九三君子終日乾乾夕惕若厲無咎虞下體之極居上體之下純陽下道則居上之德處純陽上道則處下之禮曠故終日乾乾至于夕惕猶若厲之也九五飛龍在天利見大人不行不躍而在乎天故曰飛龍也龍德在天則大人之路亨也夫位以德興德以位敘以至德而處盛位萬物之都不亦宜乎上九亢龍有悔彖曰大哉乾元萬

（12. 卷1首）



羣書治要卷第三十三

秘書監鉅鹿男臣魏徵等奉 勅撰

晏子 司馬法 孫子

晏子 晏嬰

諫上

景公飲酒數日去冠被裳自鼓盆甕問於左右曰仁人亦樂此樂乎梁丘據對曰仁人之耳目猶人也夫何爲獨不樂此樂也公令趙

（12. 卷33首）

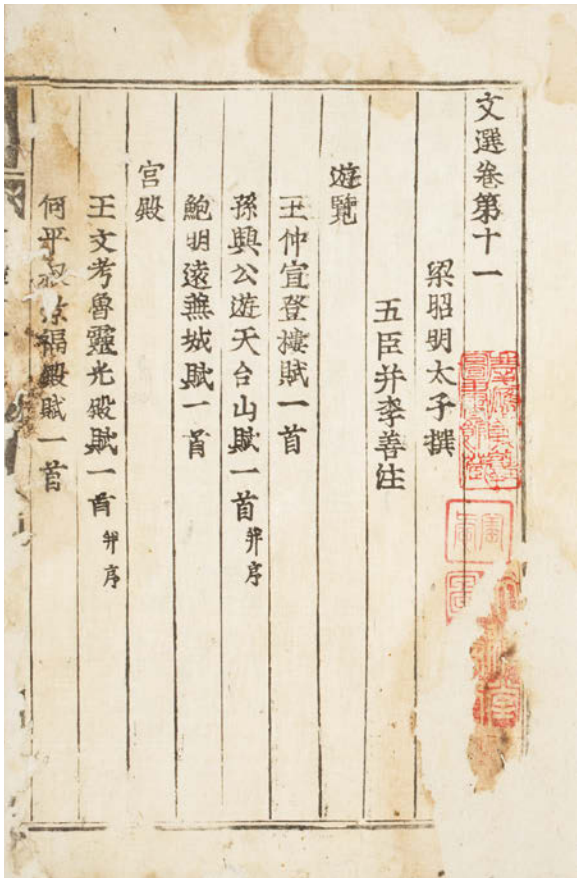
直江兼続

13. 増補六臣注文選60巻　存巻11
　梁蕭統編　唐呂延済・劉良・張銑・呂向・李周翰并李善注
　慶長12年（1607）要法寺刊　直江版

30.0×21.1cm 1冊
［110X@39@1］

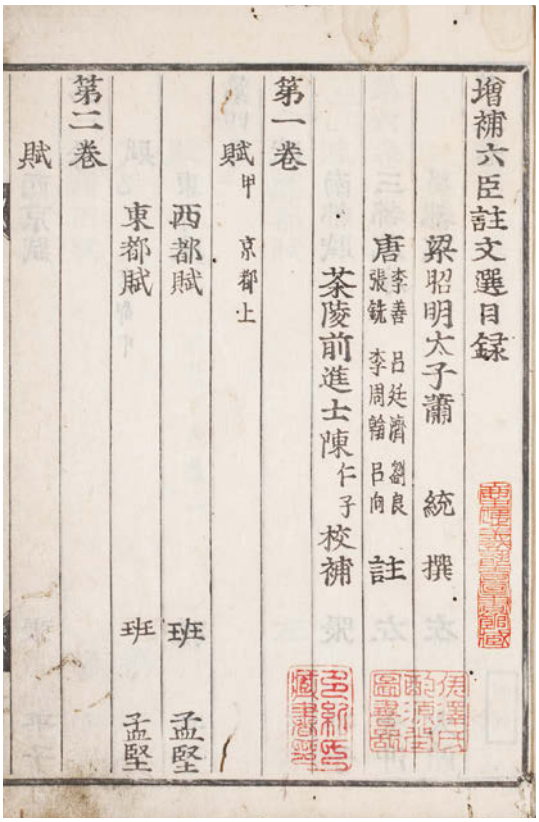
参考：増補六臣注文選60巻　存目録1巻　同　寛永2年（1625）刊

27.3×19.0cm 1冊
［110X@35@1］

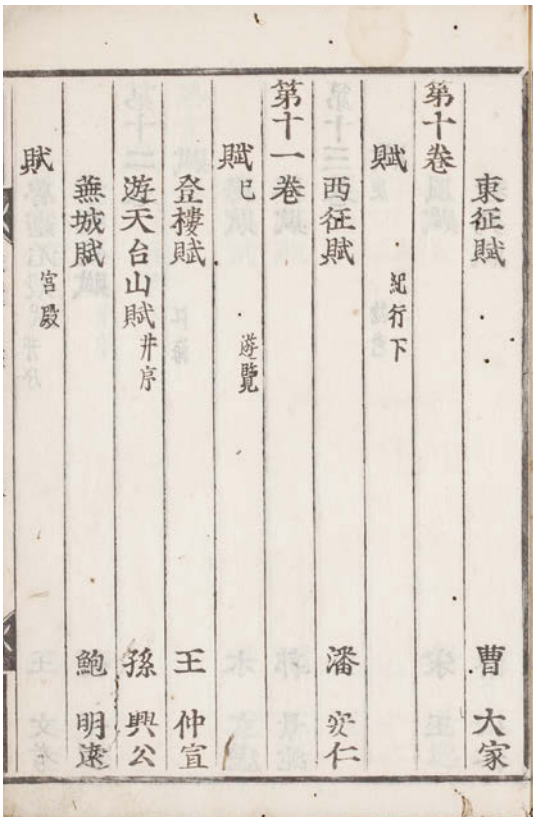

文選卷第十一
梁昭明太子撰
五臣并李善注
遊覽
王仲宣登樓賦一首
孫興公遊天台山賦一首并序
鮑明遠蕪城賦一首
宮殿
王文考魯靈光殿賦一首并序
何平叔景福殿賦一首

（13. 巻11目）

（参考）



（13. 参考　目首）



（13. 参考　巻11目）

斯界に有名な直江版『文選』である。六臣とは、『文選』即ち、梁の昭明太子蕭統（501–531）が編纂した古代周から梁代に至るまでの詩文に、注釈を加えた唐代六人の学者。658年に注釈した李善（？–689）と、718年に注釈した呂延濟・劉良・張銑・呂向・李周翰の5人を併せていう。好学の誉れ高かった直江は、慶長5年の関ヶ原合戦に敗れ、主君上杉家の減封に遭った後に出版事業を手がけたところから、文武両道の佳話として伝えられる。京都要法寺の活字を用いている。要法寺は京都寺院でこの頃最も出版活動が盛んであった。同寺の釈日性圓智によって印刷されたと言われる。なお、本版には、巻末1葉だけ活字を組み替えた修本が存在する。底本は直江所収の中国古刊本で、本書は名実ともに評価が高い。高野辰之（国文学者）旧蔵。

四周双辺有界10行22字、匡郭内24.7×17.5cm、粗黒口四魚尾（二は花魚尾）。

参考の一本は、直江版に基づいて、寛永2年に活字を組み直して印刷したもの。「伊沢氏酌源堂図書記」（伊沢蘭軒）、「多紀氏蔵書印」（医家多紀氏）旧蔵。

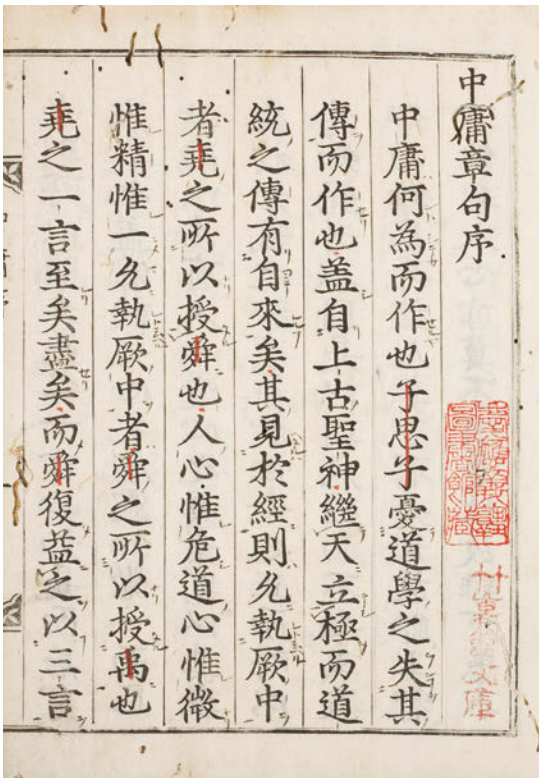
青色表紙、四周単辺有界10行22字、匡郭内23.5×17cm、粗黒口双花魚尾　（T）

下村生蔵

14. 中庸1巻　宋朱熹章句　慶長年間下村生蔵刊　竹中重門旧蔵

25.8×19.3cm 1冊
［110X@115@1］

（14. 末）



（14. 首）

「第3部　戦国時代と古活字版」に述べた『大学』と同時代に一世を風靡した古活字版『四書』の1つ。『四書集注』（宋朱熹撰）が世に流通する土台となって武士の歓迎を受けたこの古活字版はまさに時代を画した書物。下村生蔵が用いた活字は柔らかく朝鮮前期の活字の風格によく似ている。下村本は、校訂の優秀もさることながら、美的価値も追求したものだった。下村本の『四書』は少ないながら『大学』は下記のものと台湾所在の二本のみ、『中庸』は本版と東洋文庫の二本、『論語』は岩瀬文庫・宮内庁・東京大学の三本、『孟子』は東洋文庫など九本が現存している。竹中重門（竹裏館文庫）は幾つも『四書』を所持していた。外題は自筆か。

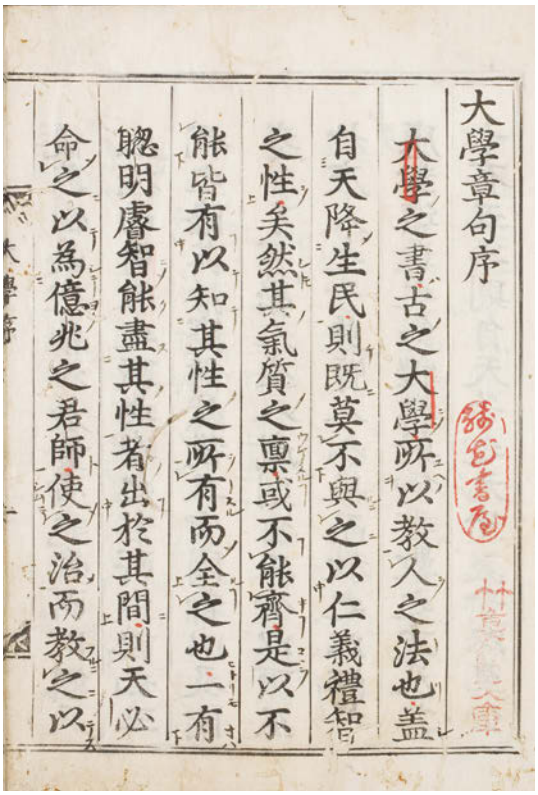
茶色表紙、四周双辺有界7行17字、匡郭内21.8×16cm、版心白口双花魚尾、末尾に「下村生蔵刊」とあり、朱墨の訓点書き入れあり。

（T）

下村生蔵

15. 大学1巻　宋朱熹章句　慶長年間下村生蔵刊　竹中重門旧蔵

26.0×19.4cm 1冊
［110X@432@1］


大學章句序
大學之書古之大學所以教人之法也蓋
自天降生民則既莫不與之以仁義禮智
之性矣然其氣質之稟或不能齊是以不
能皆有以知其性之所有而全之也一有
聰明睿智能盡其性者出於其間則天必
命之以為億兆之君師使之治而教之以

（15. 序首）

（15. 表紙）

『中庸』とワンセットの下村生蔵刊本。版式その他全て『中庸』と同様。また、同じく竹中重門所持本であり、表紙の外題や書き入れも『中庸』と一具のものである。これらの書き入れは竹中重門自らの手になるものかも知れない。

下村本『大学』はもう一本が台湾故宮博物院に所蔵されるが、国内では本書が現存するのみ。「慶長刊大学中庸章句の研究」（『斯道文庫論集』32）を参照。

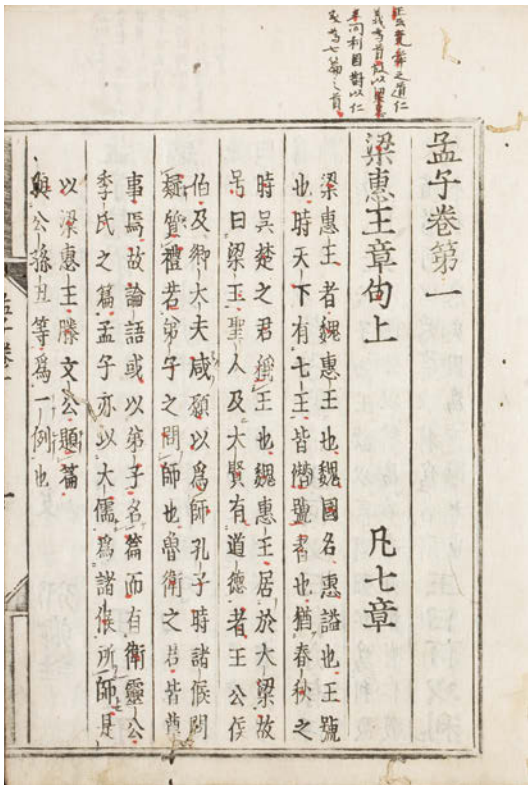
（T）

今関正運

16. 孟子14巻　漢趙岐注　慶長年間今関正運刊

26.8×19.4cm 5冊
［110X@306@5］

（16. 巻14末）



（16. 巻1首）

『孟子』は『論語』と並んで儒学書の代表だが、日本では『論語』ほどには流行しなかった。やや革新的な思想があるとして、大陸からの『孟子』を載せた船は沈むという伝説も遺る。それでも古写本の現存は南北朝時代まで遡る。理路整然とした『孟子』の文章は博士家の重んじるところで、清原宣賢（1475–1550）の手写本は現存の『孟子』の中で最も優れている。その博士家本をもとに、中国宋時代（960–1127）の刊本を輸入して比較した最良のテキストと言えるのが古活字版『孟子』。5種類の活字で印刷された版種があり、うち、本版の活字印刷が最も多く、異植字版が多い。今関正運は古活字の出版家として名を馳せるがその伝は未詳。「古活字版趙注孟子校記」（『斯道文庫論集』28）参照。

　縹色表紙、四周双辺有界7行17字、匡郭内21.1×15cm、版心粗黒口双黒魚尾、清原家の訓点を移写する。

（T）

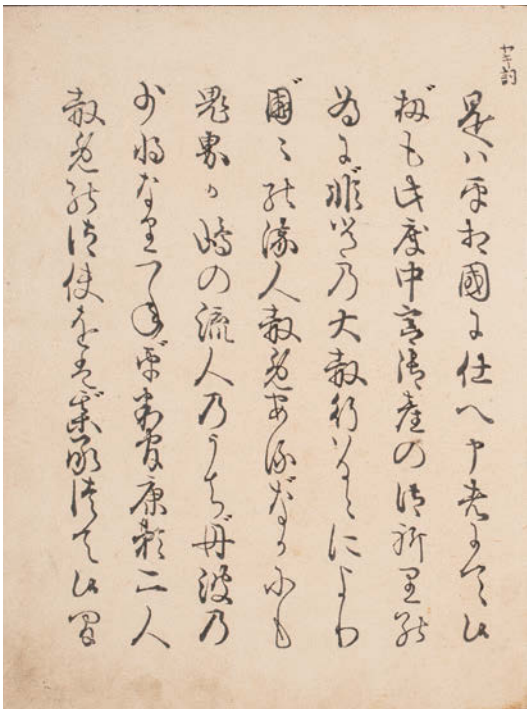
嵯峨本

17.［嵯峨本観世流謡本］俊寛　慶長年間刊

23.8×18.0cm　綴葉装　1帖
［110X@10@2］

18. 同　大会　慶長年間刊

24.0×18.0cm　綴葉装　1帖
［110X@10@1］



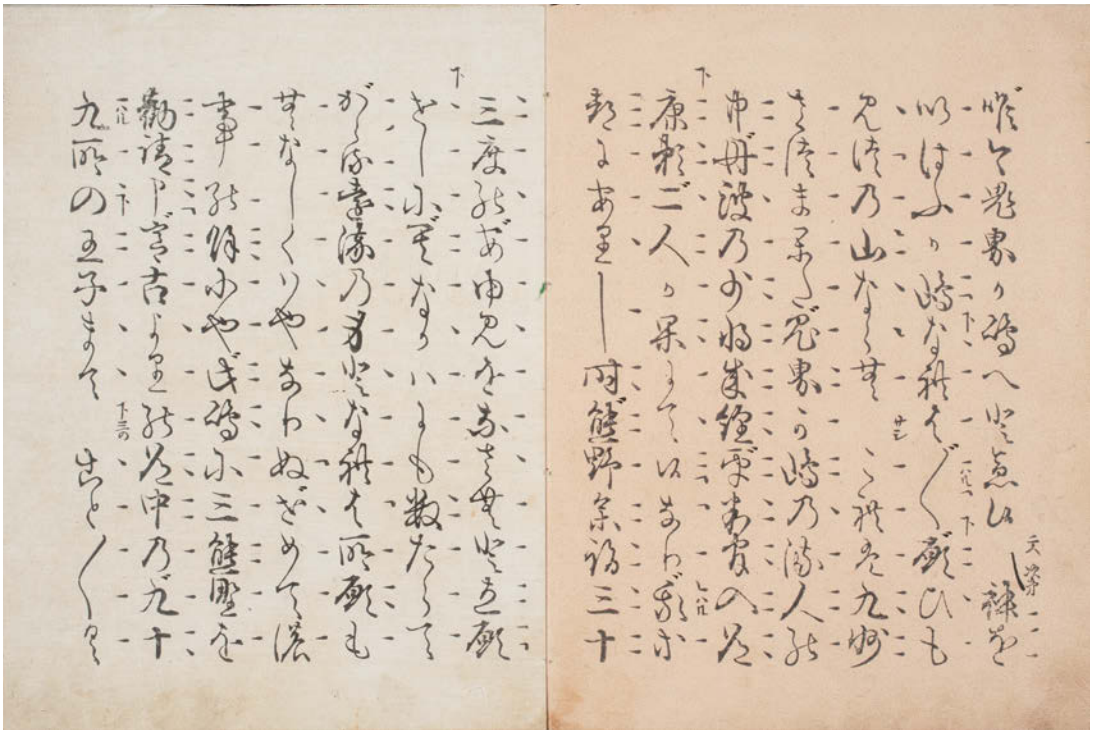
（17. 首）

（17. 表紙）

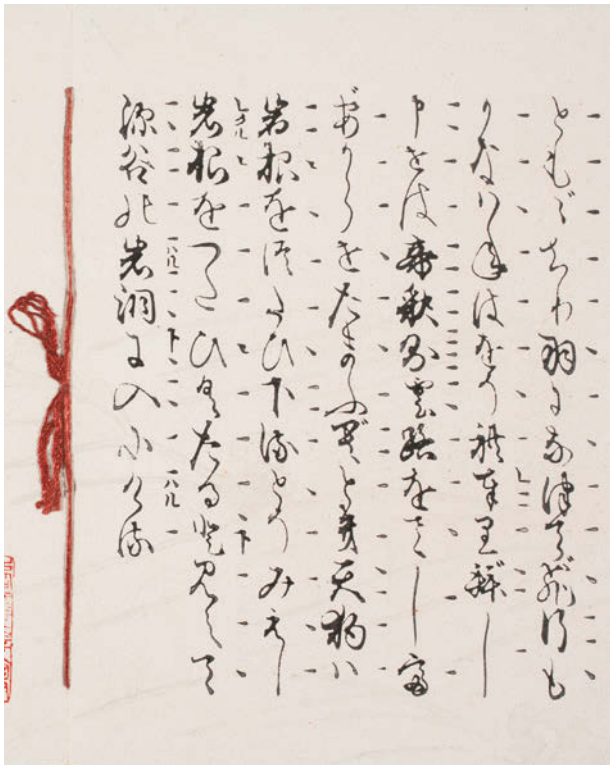
嵯峨本は近世初頭の豪商、角倉素庵の嵯峨の印刷工房で制作されたと考えられる刊行物の総称である。『伊勢物語』をはじめ国書が多数を占め、雲母刷の美麗な装訂をもつ本が多い。嵯峨本観世流謡本には装訂を異にする多数の版種が存在する。それらはもとは100曲で1セットのものであった。最初の刊行は慶長10年頃と考えられている（江島伊兵衛・表章『図説光悦謡本解説』）。展示の『俊寛』は「色替本」と称されるもので、料紙に紅・薄紅・青・黄の染紙を用い、緑の絹糸で綴じている。表紙は紫色地に雲母刷の乱れ藤と藤房文様である。『大会』は最も豪華な装訂の「特製本」で、水色地に雲母刷メヒシバ文様表紙に、薄紅地にメヒシバ、波、梅の立枝の雲母刷文様の料紙をもち、赤の絹糸で綴じている。嵯峨本の書体は本阿弥光悦の手によるとされ、「光悦本」とも総称されてきたが、近年の研究では素庵の書風に近いことが明らかにされつつある（林進「角倉素庵の書跡と嵯峨本」『日本文化の諸相』所収）。

無辺無界7行13字、印面高さ約19.0cm。

（K）



（17．本文）



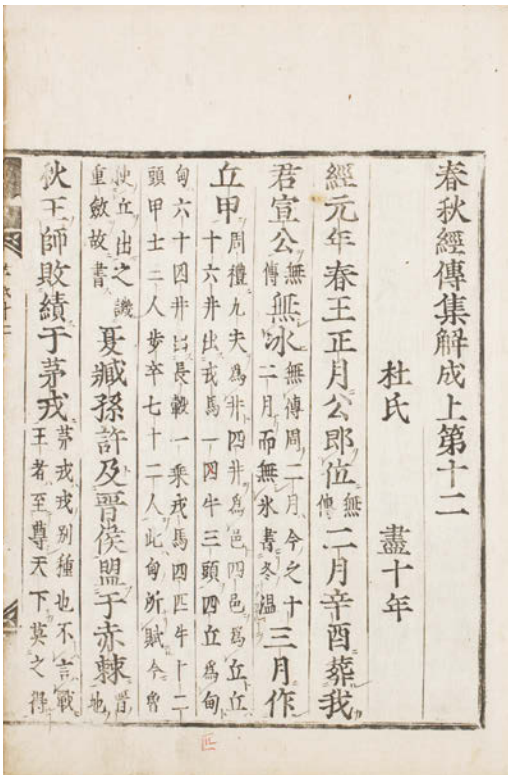
（18．末）

（18．表紙）

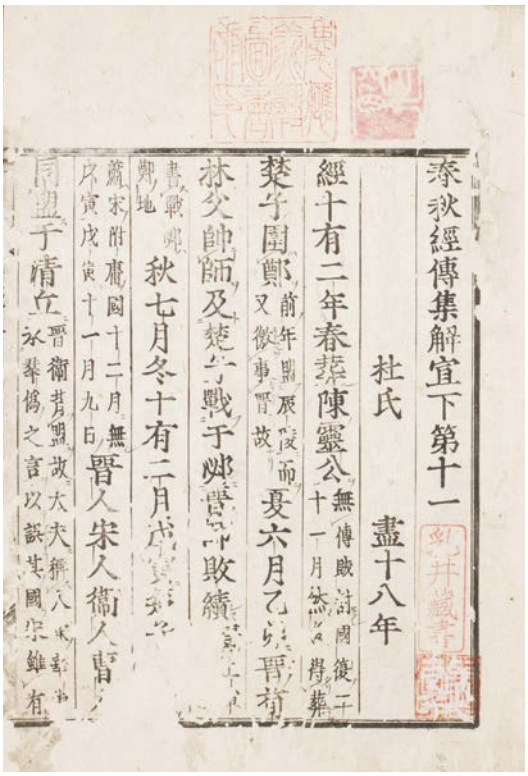
比叡山

19. 春秋経伝集解30巻　存巻11・12・25・26　晋杜預撰　慶長年間刊　叡山版

28.1×20.6cm 2冊
［175@109@2］


春秋經傳集解成上第十二
杜氏　盡十年
經元年春王正月公即位無傳二月辛酉葬我
君宣公無傳周二月今之十二月而無冰書冬温三月作
丘甲周禮九夫為井四井為邑四邑為丘丘
十六井出戎馬一四牛三頭四丘為甸
甸六十四井出長轂一乘戎馬四匹牛十二
頭甲士三人步卒七十二人此甸所賦今魯
丘出之譏重斂故書夏臧孫許及晉侯盟于赤棘晉地
秋王師敗績于茅戎茅戎別種也不言戰
王者至尊天下莫之得

（19. 巻12首）


春秋經傳集解宣下第十一
杜氏　盡十八年
經十有二年春葬陳靈公無傳歐詩國復二
十一月然後得葬
楚子圍鄭前年盟辰陵而又徵事晉故夏六月乙亥晉荀
林父帥師及楚子戰于邲晉師敗績
書戰邲地秋七月冬十有二月戊寅朔
蔡宋附庸國十二月無
戊寅十一月九日晉人宋人衛人曹
同盟于清丘晉衛背盟故大夫稱人
永舉僞之言以誣其國宋雖有

（19. 巻11首）

中国古代の歴史を記した『春秋』は、晋の杜預の注釈本がテキストの基本で、日本でも古くから読まれ『左伝』の名で親しまれる。古写本や南北朝時代の五山版を除けば、中世以来、日本で作られたテキストは少ない。古活字版から、一気に伝本が増え始める。慶長・元和・寛永時代を通じて、天台宗教書の活字出版が盛んであった叡山では、外典について前述の清原秀賢（博士家）の指導を仰ぎ、東塔月蔵坊に於いて、『毛詩』（詩経）と『左伝』を出版したことが知られる。これを叡山版と呼ぶ。この『左伝』には活字を組み替えて再版印刷した異植字版が存在する。整然とした字体が特徴である。

栗皮表紙、四周双辺有界8行17字、匡郭内20.2×17.5cm、大黒口双花魚尾。墨訓点書き入れ。

（T）

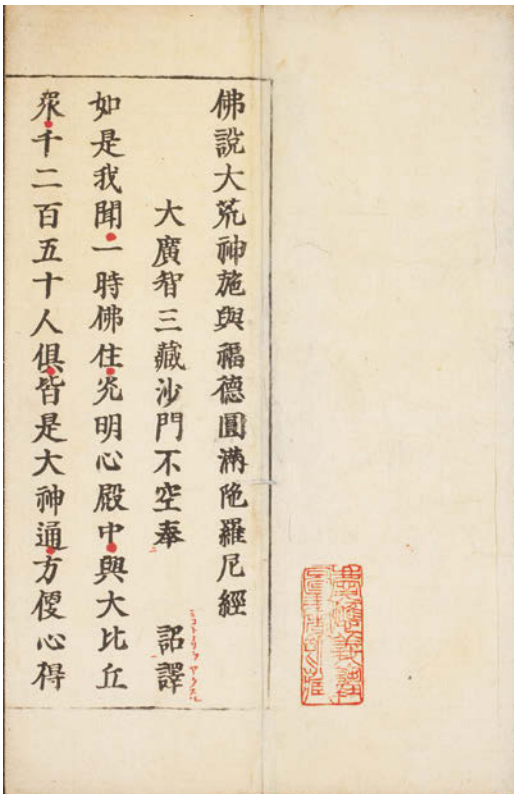
宗存版

20. 仏説大荒神施與福徳円満陀羅尼経1巻　旧題唐釈不空訳　元和6年（1620）宗存刊

26.5×8.6cm 1帖
［110X@30@1］

伊勢大神宮高日山
常明寺宗存
慈眼寺堯辯

（20. 末）


佛説大荒神施與福德圓滿陀羅尼經
大廣智三藏沙門不空奉　詔譯
如是我聞一時佛住光明心殿中與大比丘
衆千二百五十人俱皆是大神通方便心得

（20. 首）

京都の寺院で出版された元和年間頃の仏典で著名な宗存版と呼ばれるもの。伊勢の常明寺の僧宗存は伊勢神宮への『大蔵経』奉献を企図し、京都北野経王堂で活字印刷による出版を行った。宗存は天台宗の僧であったから、叡山による活字出版に刺激されたとも言われ、慶長18年（1613）に『大蔵目録』を出して以来、寛永の初年まで『大蔵経』の一部やその他仏書を数十種類出版したことが知られる。

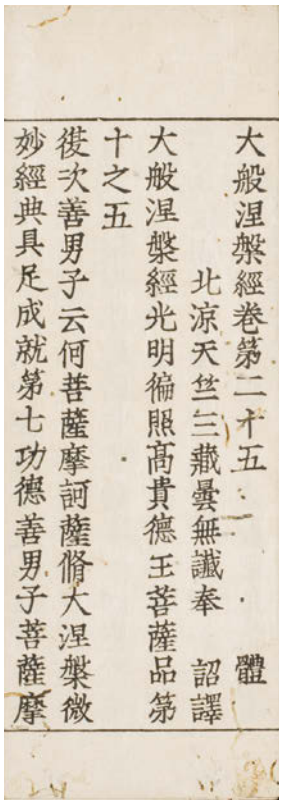
帖仕立、黄染楮紙、単辺無界、毎半折4行、匡郭内高さ約20.9cm、朱の書き入れ

（T）

天海版

21．大般涅槃経40巻　存巻25　北涼釈曇無讖訳　江戸初期刊　天海版

29.0×10.2cm 1帖
［110X@20@1］


大般涅槃經卷第二十五　　體
北涼天竺三藏曇無讖奉　　詔譯
大般涅槃經光明徧照高貴德王菩薩品第
十之五
復次善男子云何菩薩摩訶薩脩大涅槃微
妙經典具足成就第七功德善男子菩薩摩

（21．巻首）

（21．表紙）

天海（1536–1643）が徳川家光の後援を得て寛永年間に、『大蔵経』の出版を発願、寛永14年（1637）から慶安1年（1648）にかけて、木活字や木版で出版した。『天海版一切経』と言われる。その用いた活字は今も寛永寺に遺る。完本は寛永寺や仁和寺などに現存する。

江戸時代初期の江戸に於ける古活字版の大きな成果であった。ここから徐々に江戸の出版事業も京・大坂に並ぶものに発展していく。表紙に「天海蔵」と墨書。

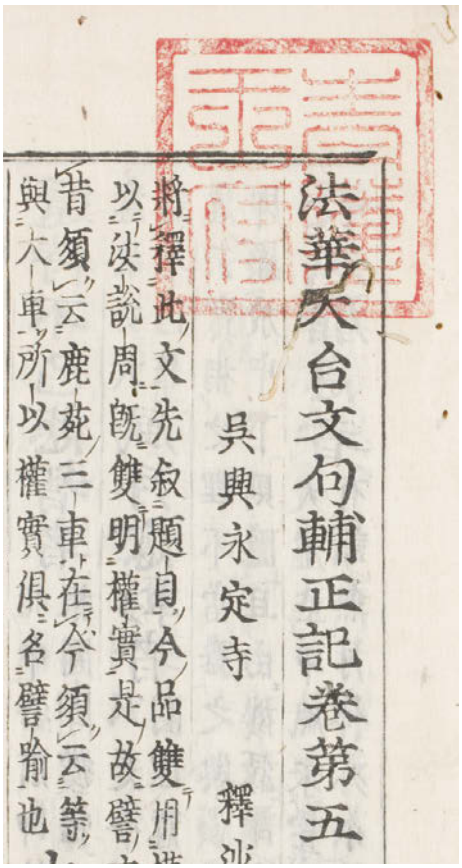
褐色表紙　毎半折6行17字、単辺無界、高さ約22cm、24行2折で1張。

（T）

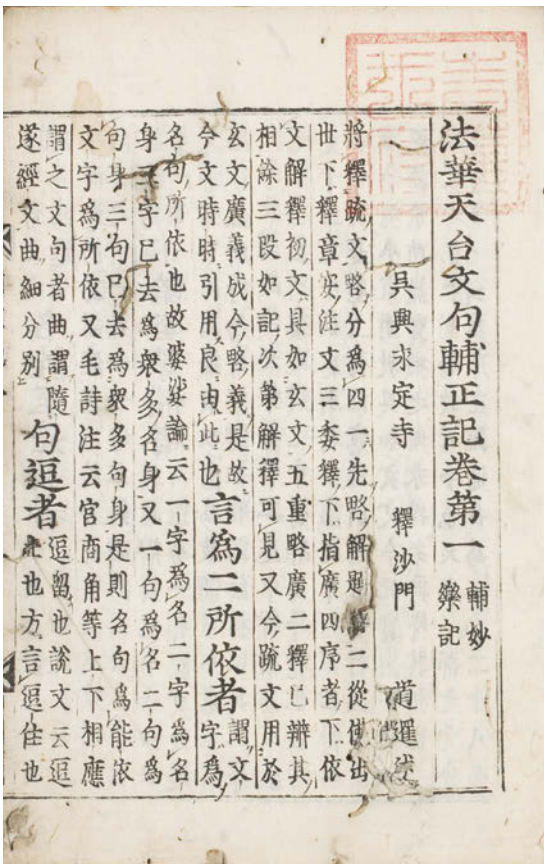
坊刻本

22. 法華天台文句輔正記10巻　唐釈道暹撰　元和寛永年間刊

28.5×19.7cm 10冊
[41@3@10]



（22. 巻5の印（青蓮王府）拡大）



（22. 巻1首）

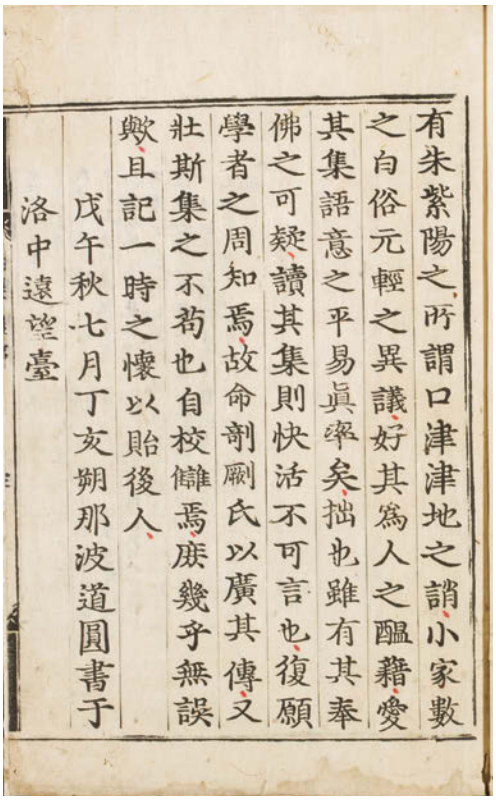
本書は京都青蓮院の旧蔵書（「青蓮王府」印記）で、仏書の出版について、慶長時代頃盛んに行われた各寺院自らの出版から、次第に書肆の活字出版も行われるようになり、有力寺院もそうした町版を購入収蔵する時勢となっていった。町版（坊刻本）は本書のように無刊記本が多い。従って寺院出版との区別も難しい。こうした町版は需要とともに、木版（整版）印刷の併用へと移行していくのである。

栗皮表紙、四周双辺有界8行18字、匡郭内22.3×15.8cm、粗黒口双花魚尾、墨訓点書き入れ　（T）

那波活所

23. 白氏文集71巻　唐白居易撰　元和4年（1618）那波活所刊

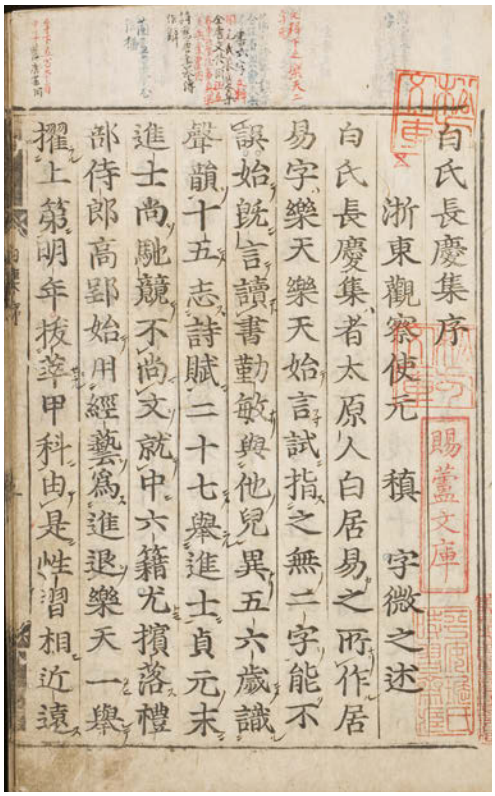
28.7×19.6cm 30冊
［110X@430@30］


有朱紫陽之所謂口津津地之誚小家數之白俗元輕之異議好其爲人之醞藉愛其集語意之平易眞率矣拙也雖有其奉佛之可疑讀其集則快活不可言也復願學者之周知焉故命剞劂氏以廣其傳又壯斯集之不苟也自校讎焉庶幾乎無誤歟且記一時之懷以貽後人

戊午秋七月丁亥朔那波道圓書于

洛中遠望臺

（23. 跋）


白氏長慶集序

浙東觀察使元　稹　字微之述

白氏長慶集者太原人白居易之所作居易字樂天樂天始言試指之無二字能不誤始既言讀書勤敏與他兒異五六歲識聲韻十五志詩賦二十七舉進士貞元末進士尚馳競不尚文就中六籍尤擯落禮部侍郎高郢始用經藝爲進退樂天一舉擢上第明年拔萃甲科由是性習相近遠

（23. 序首）

中唐の詩人白居易（白楽天・772–846）の詩文集。洗練された平易な表現とそのなだらかな詩風は誰しもが魅了される世界である。『枕草子』にも「ふみは文集、文選」とある如く、日本でも古くから愛読された。元和4年に那波活所（1595–1648）が木活字で白氏文集を出版して白詩の流布に貢献したが、本書の本邦に於ける初の出版が古活字版であることの意義は大きい。また、原本の真意を求めて、宋版やそれ以前の古写本を用いて原姿を求める研究がこれほど熱い詩集も稀有である。本書に満紙書き入れられた新見茅山（正路・1791–1848、大坂町奉行、「賜蘆文庫」の印記）の諸本による校勘はその一端を物語る。活所は藤原惺窩の門で、字は道圓。本版は、朝鮮版に基づくとされ、テキストの価値は非常に高い。島田翰（1879–1915）の旧蔵。

四周双辺有界9行16字、匡郭内22.8×16.3cm。大黒口双花魚尾

（T）

第5部　古活字版の版種

—古活字版の終焉—

活字版は1頁を組み、刷り終わったらその1頁は解体してしまうので、同じものは2度と刷れない。そして各頁50枚と決めたら50部の本ができあがる。そこで幾つかの複雑な状況が生じてくる。最初、試し刷りをしたら誤植が見つかったので、まだ組版は解体していないから活字を植え直して刷り直そう。あるいは10枚刷っているうちに誤植を見つけることもあろう。印刷途中で部分的に字の植え替えを行う。すると製本時には、直す前の刷り頁も節約して使うので、同じ版なのに部分的に字が違う伝本が存在することになる。これを「修」「修本」と言う。時には直す前の刷り頁の誤植の字を切り取って、正しい字を刷った小紙を貼りつけているものもある。

1度刷り終えて全て完了して注文に応じたところ、更に需要があったので、同じ工房で同じ職人が、同じ枠組・活字を使ってもう1度、全頁を組み直し同じ本を印刷することがある。版木であればすぐ増刷できるが活字はそういかない。すると同種類の活字を使った異版ができあがる。今となって較べてみると、どちらが先に組んだものかを見極めるのは困難である。こうした異版を「異植字版」と呼んで「修本」と区別する。

この「修」と「異植字版」は、原本を丁寧に較べないと見誤る。最初の1頁は、試し刷りの余乗分を使用したりすることが多いので、全く同版の二本が最初の1頁だけ異版となっていることもある。初頁だけ較べて「異植字版」と判断してしまうことは危険である。「異植字版」があるとないとでは、それだけ需要の多寡が推し量られる証左となるので、軽んじることはできない。

そして、更に需要があるものについては、幾つかの工房が異なった活字を用いて出版を繰り返す。版種が生じてくる。例えば、『五経』の一として古くから読まれた『春秋左氏伝』は2種類の版が知られ、その組み版の版式から粗黒口双花魚尾本と大黒口双花魚尾本に分かれる。更に大黒口本は、前記のような異植字版が存在し、3種類に分かれる。川瀬一馬『古活字版之研究』はこれを第一種本・第二種本と名付け、第二種本のなかに3種の異植字版ありとしている。『史記』には、半頁の行数が8行のものと9行のものがあり、同じ8行本にも行間の罫線があるもの（有界）と無いもの（無界）が伝わる。

こうした判別をしていくとおおよその古活字版の実態が鮮明になってくるが、漢籍を例にとって書名の数を見ても100種を越え、そこに版種・異植字版の数を加えると数百にも及ぶ出版が行われていたと知れる。仮名文字（国書）も含めれば、それは厖大。近世初期の僅かな期間にこれだけの校訂・組み版・印刷・製本・書き入れが行われたことを考えると、慶長時代の古活字版文化が如何に中世と近世を繋ぐ役割を果たしたかがうかがわれる。漢籍の古活字版文化は、日本の漢字文化の真髄であったと言えるのではないだろうか。

そして、こうした真髄を含みながら、古活字版は華々しく登場し、さまざまな問題を抱えて、いよいよと高まる読者層の拡大の波に押されて終焉を迎え、江戸時代の大量生産に便利な木版印刷（整版）へと進化していくのである。

（T）

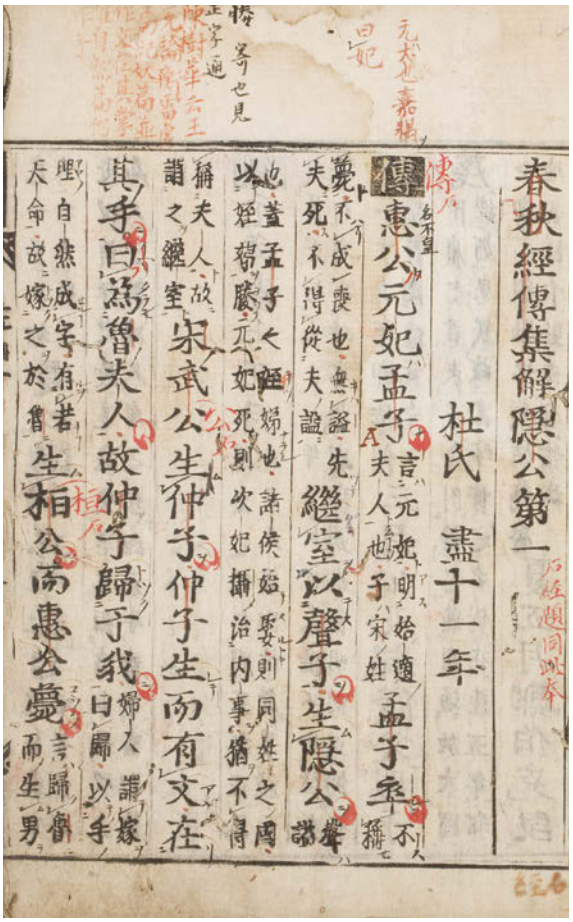
春秋の異版

24. 春秋経伝集解30巻　晋杜預撰　慶長年間刊

28.5×19.4cm 15冊
[110X@259@15]

25. 同　慶長年間刊　存巻11・12・25・26　叡山版

28.1×20.6cm 2冊
[175@109@2]

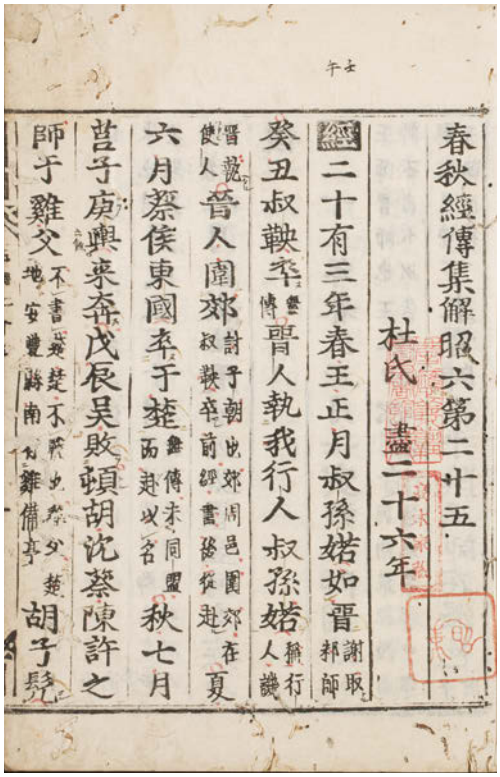


（24. 巻1首）

『春秋経伝集解』のように需要の多い本は別種の活字で出版されている。自ずと出版者も異なるが、同じ活字群を用いて組み替えるものが異植字版、全く違う活字で出版するのは別版と呼ぶ。15冊揃いの本版はやや勢いのいい活字を用いている。活字の刷りもかすれているところから、時代も早く、多く使われたものと考えられる。伝本の1つに慶長17年（1612）の墨書識語があることから、慶長17年以前刊本と呼ばれている。叡山版のもう一本と較べると、活字の違いが明瞭である。松花堂昭乗（1582–1639）旧蔵。また、江戸後期の校勘学者、吉田篁墩（1745–1798）・塩田屯（福山藩医）の自筆の書き入れが多数ある。古活字版の蒐集で有名な高木利太の高木文庫旧蔵

四周双辺有界8行17字、匡郭内21.3×16.5cm、粗黒口双花魚尾、朱墨書き入れ。

（T）



春秋經傳集解昭六第二十五

杜氏　盡二十六年

經二十有三年春王正月叔孫婼如晉（諸取邾師）

癸丑叔鞅卒（無傳）晉人執我行人叔孫婼（聲行人識）

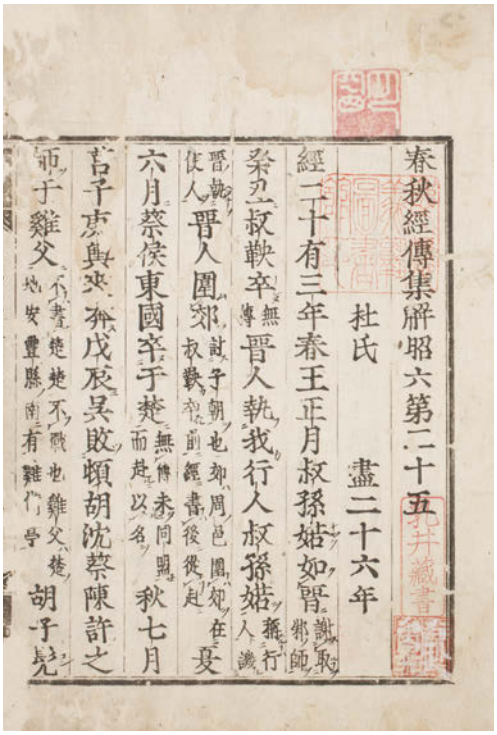
晉執使人晉人圍郊（討子朝也郊周邑圍郊在叔鞅卒前經書後從起）夏

六月蔡侯東國卒于楚（無傳未同盟而赴以名）秋七月

莒子庚輿來奔戊辰吳敗頓胡沈蔡陳許之

師于雞父（不書楚楚不與也雞父楚地安豐縣南有雞備亭）胡子髡

（24．卷25首）



春秋經傳集解昭六第二十五

杜氏　盡二十六年

經二十有三年春王正月叔孫婼如晉（諸取邾師）

癸丑叔鞅卒（無傳）晉人執我行人叔孫婼（聲行人識）

晉執使人晉人圍郊（討子朝也郊周邑圍郊在叔鞅卒前經書後從起）夏

六月蔡侯東國卒于楚（無傳未同盟而赴以名）秋七月

莒子庚輿來奔戊辰吳敗頓胡沈蔡陳許之

師于雞父（不書楚楚不與也雞父楚地安豐縣南有雞備亭）胡子髡

（25．卷25首）

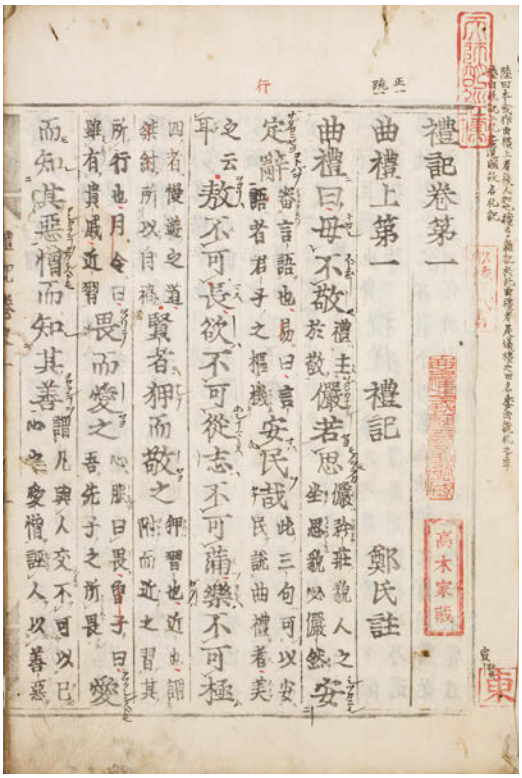
礼記の異版

26. 礼記20巻　漢鄭玄注　慶長年間刊

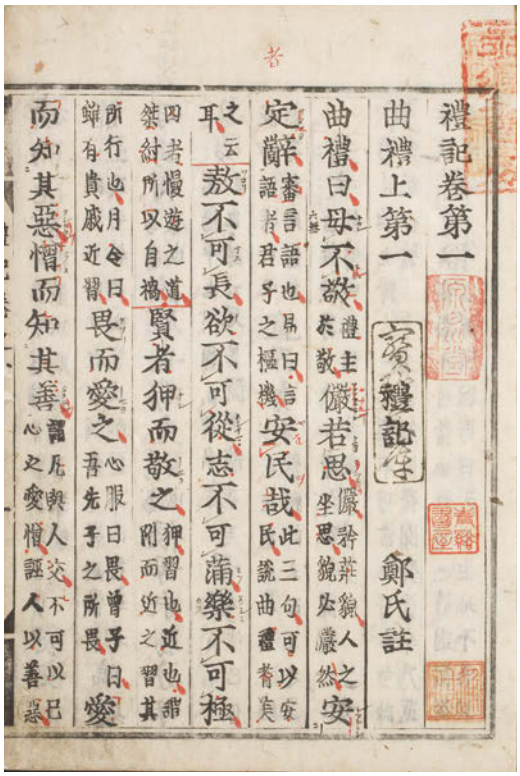
27.5×19.7cm 5冊
[110X@162@5]

27. 同　存巻1・2

29.4×20.8cm 1冊
[110X@114@1]



（27. 巻1首）



（26. 巻1首）

『礼記』は『五経』の一つであるが、他経に較べて古写本や古刊本は特に少ない。古活字版も或いは同種類の活字かと思える版が2種類存する。従って版種の調査は容易であるが、冊数の量が多いだけに残本で伝わると、何れの版かを定めがたい。また、部分的な修が存在する伝本も多く予想される。版式も両版ともに四周双辺、有界8行18字、匡郭内22.5×16.8（展示番号27は22.8×16.8）cm、大黒口双黒魚尾と同じである。

後者（左）は、「東」「舟橋蔵書」「天師明経儒」などの印記があり、博士家清原家伝来のものである。「家君依御命以家本一校了　文政十年六月十五日　従三位大博士清原在賢」と墨の識語があり、清家に伝わる伝本の訓点を写し取ったものである。これも高木利太（塾員）旧蔵。

前者の書き入れも後者とほぼ同じで、博士家系統であろう。大島雅太郎（塾員）旧蔵。（T）

第6部　平仮名・片仮名の古活字版

―美しさを求めて―

古活字版の流行は仏書や漢籍だけでなく、これまでほとんど出版の対象とされることのなかった国書の刊行をも促した。当初は『日本書紀神代巻』『職源抄』『元亨釈書』（いずれも慶長4年（1599）刊）など、漢文体のものが出版されたが、やがて平仮名・片仮名の活字を使用した古活字版も現れる。なかでも平仮名活字版の普及にあたっては、京都西郊の嵯峨の地に印刷工房を構えた角倉素庵（1571–1632）の存在が大きかった。

素庵は豪商角倉了以（1554–1614）の子で、南蛮交易、河川の開鑿に取り組む一方、儒者・能書家としても知られていた。素庵は慶長8年（1603）以前に嵯峨で『史記』を刊行している。現在、素庵の刊行した『史記』は30点以上が国内外に伝存しているが、そのうちのいくつかの本に、原装の「表紙裏張」に平仮名古活字版の反古が用いられている（「表紙裏張」とは、表紙に厚みをもたせるため裏面に貼り重ねる紙のことで、試し刷りや残部、不要となった書状などが利用された。当時の出版文化を知るための、貴重な資料である）。それらは謡本や舞の本、そして『徒然草』（嵯峨本『徒然草』と呼ばれるもの）を印刷した反古紙である。こうした資料の存在から、慶長8年以前に素庵の工房で、平仮名古活字版が刊行されていたことが知られる。

これらの活字の書体は、御家流風の穏当なものや、素庵の書風を強調したものなど、複数のものが用いられている。これらは素庵の工房における、いわば助走段階に生まれた平仮名古活字版で、やがて慶長10年（1605）頃の「観世流謡本」や慶長13年（1608）の『伊勢物語』が刊行されるに及び、「嵯峨本」の完成を見る。「嵯峨本」とは、素庵の書風をより洗練させて規格化し、表紙や料紙に染紙を用いて美麗な雲母刷文様を施し、美術品としての側面を追求した本の総称である。

もちろん、平仮名を用いた古活字版はこうした美装本ばかりではなかった。慶長9年（1604）刊行の『徒然草寿命院抄』は漢字・片仮名・平仮名を交える古活字版である。当初は底本の表記を尊重し、和歌等の引用には平仮名を用いていたが、上冊第6丁で断念。以後は漢字・片仮名のみが用いられる。また、慶長10年（1605）跋刊の『吾妻鏡』では、書状や和歌の引用に際して、片仮名・平仮名を用いる。その印面は古拙な印象を与えるものだが、このあと平仮名・片仮名を用いた国書は急速に出版点数を伸ばしてゆき、その印面も流麗で読みやすいものとなってゆく（後掲の『徒然草』などがその一例）。

平仮名活字の最大の特徴は、仮名の連綿、「し」や踊り字などの縦長の文字を印出するために、2字分、3字分、あるいは4字分以上が一体となった連彫活字が存在するところにある。これにより肉筆が再現されたかのような印面を生みだすことが可能となった。ただ、それは美的なものの追求の結果というより、平仮名は連綿体で表記されていた方が読みやすかったという現実的な理由にもよっている。こうして朝鮮由来の活字印刷技術は、日本独自の工夫が加えられ、新たな展開を見せることになったのである。

（K）

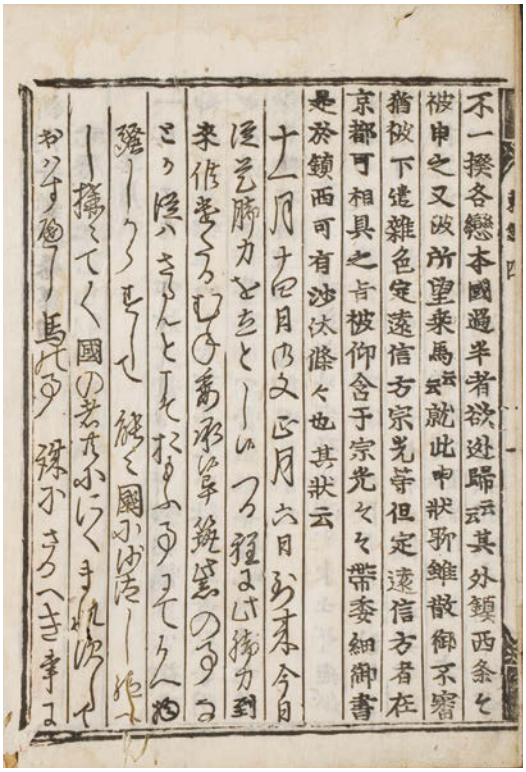
漢字・片仮名・平仮名混用の古活字版

28. 新刊吾妻鏡　52巻（巻45原欠）　慶長10年（1605）跋　冨春堂刊　伏見版
（巻1・2・21・34・35補写、附［寛文8年］整版『東鏡脱漏』1巻）

26.0×19.6cm 52冊
［179@74@52］

29. 同　存巻4・5・10–12

27.6×20.4cm 5冊
［110X@34@5］



（29. 巻4第1丁裏）

（29. 巻4表紙）

京都の医師、五十川了庵（1573–1661、冨春堂と号す）が徳川家康（1543–1616）の命を受けて刊行した、広義の伏見版である。『吾妻鏡』は鎌倉幕府の歴史書で、家康はこれに強い関心を抱いていた。『吾妻鏡』は変体漢文を基調としており、書状や和歌の引用箇所には片仮名・平仮名も交える。本版は漢字のほか、片仮名・平仮名活字も使用するが、初期の活字版として字体や組版にたどたどしさを感じさせる。このあと刊行される〔慶長元和間〕刊本に至り、整然とした版面を有するようになる。展示した5冊本は原装表紙に、原題簽を備える。原題簽をとどめる伏見版『吾妻鏡』は極めて貴重である。

展示番号28：後補刷毛目文様表紙、四周双辺有界12行20字、匡郭内22.6×17.2cm、版心粗黒口双花口魚尾。

展示番号29：原装香色空押雷文繋牡丹唐草文様表紙。

（K）

漢字・片仮名・平仮名混用の古活字版

30.［徒然草寿命院抄］慶長9年（1604）如庵宗乾刊

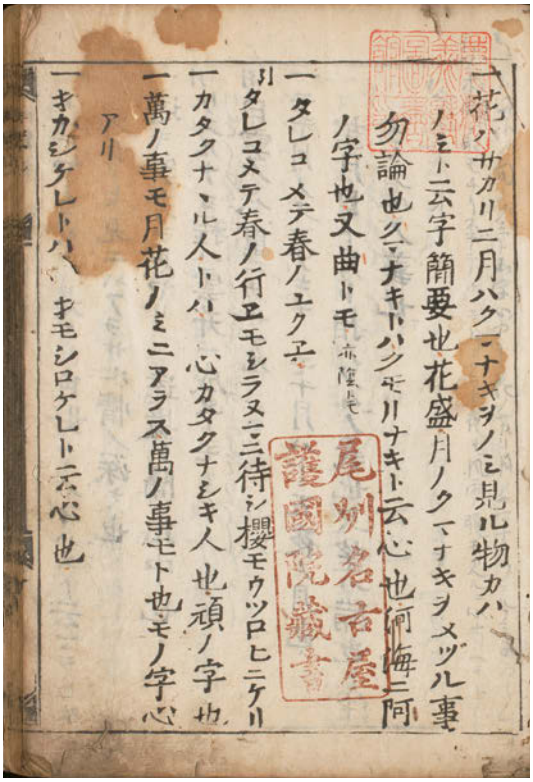
29.0×21.1cm 2冊
［102@37@2］

（30．第1冊首）

『徒然草』は中世末期から近世初頭になって、その存在が注目されるようになった。『徒然草寿命院抄』は京都の医師、寿命院秦宗巴（1550–1607）によって著された『徒然草』初の注釈書である。語彙の注釈、典拠の引用を丹念に行い、その学問的価値は高い。本書では大型の漢字・片仮名の活字で版が組まれており、上冊第6丁までは平仮名活字も使用されている。やや稚拙な趣きを残す印面が印象的だ。『徒然草寿命院抄』の古活字版は本版のほか、無刊記のものが7種存在する。慶長9年版の開版者「如庵宗乾」は近年の研究で、北村季吟などに『源氏物語』の講釈を行った箕形如庵であることが明らかとなった（宮川真弥「伝北村季吟筆『源語秘訣』と箕形如庵宗乾」『語文』104）。なお、本書は近世初頭の儒者菅得庵（1581–1628）の子、由益（？–1695）の旧蔵書で、書き入れが多数施されている。

焦茶色空押雷文繋蓮華唐草文様表紙、四周単辺無界10行20〜25字不等、匡郭内24.6×17.8cm、版心四魚尾、巻末、也足叟素然（中院通勝）の奥書につづき、「慶長九暦閼逢執徐姑洗良辰/日東　洛陽　如庵宗乾刊行」。

（K）

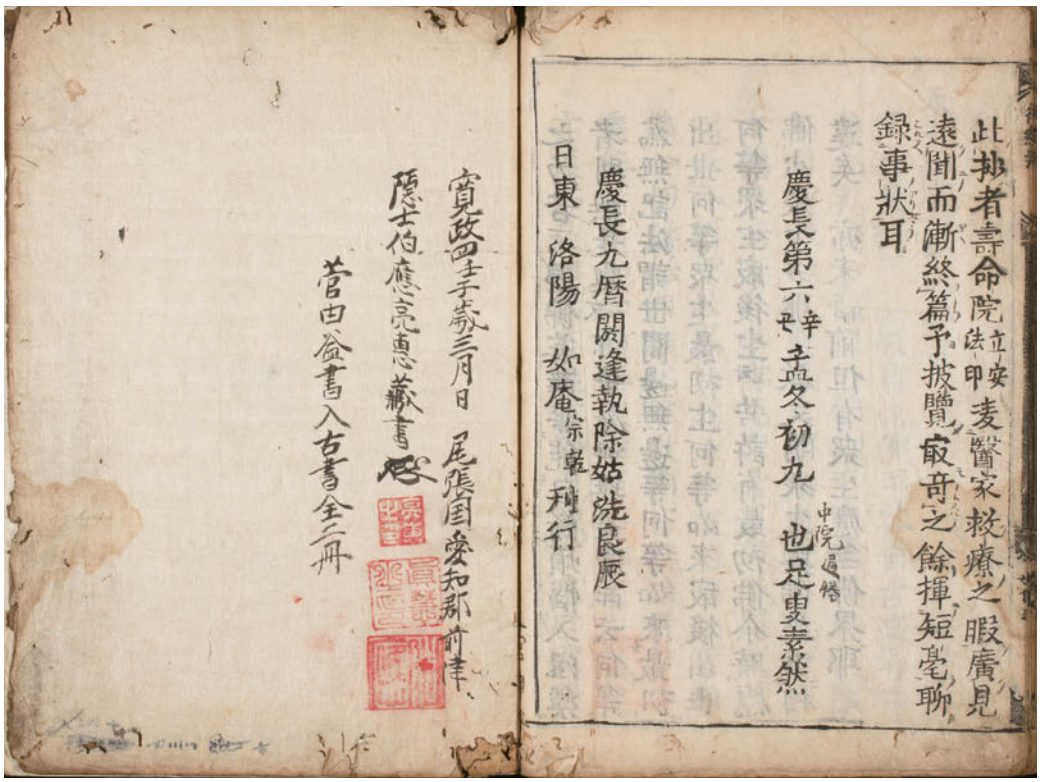


一花ノサカリニ月ハクマナキヲノミ見ル物カハ
ノミト云字簡要也花盛月ノクマナキヲメヅル事
勿論也クマナキトハ少モ曇リナキト云心也河海ニ阿
ノ字也又曲トモ
一タレコメテ春ノユクヱ
タレコメテ春ノ行エモシラヌ三ニ待シ櫻モウツロヒニケリ
一カタクナヽル人トハ心カタクナシキ人也頑ノ字也
一萬ノ事モ月花ノミニアラス萬ノ事モト也モノ字心
アリ
一キカシケレトハ キモシロケレト云心也

尾州名古屋
護國院藏書

（30．第2冊首）

（30．第1冊　系図）

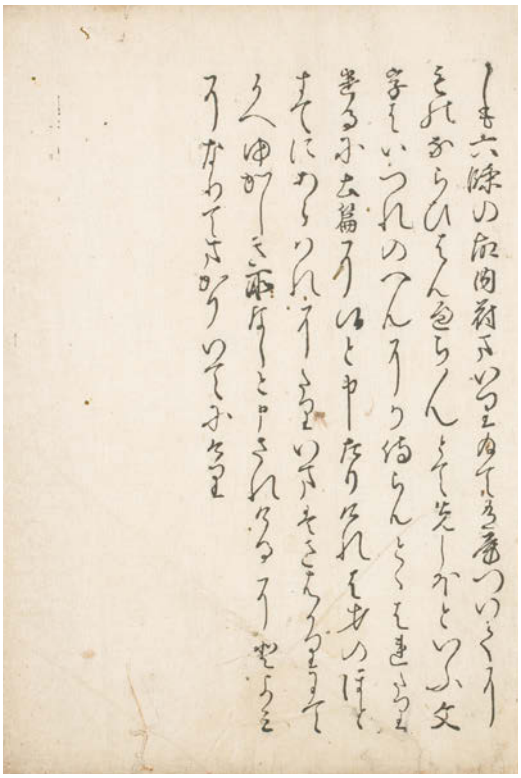


（30．第2冊巻末）

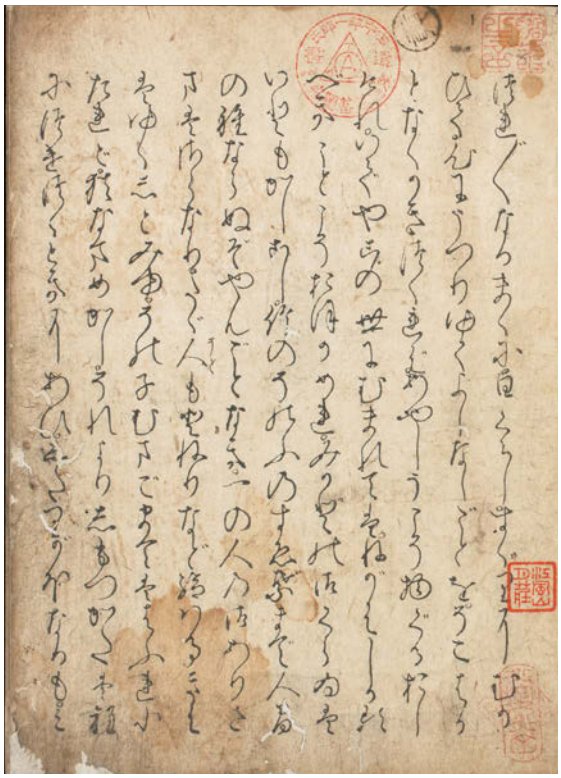
平仮名の古活字版

31．徒然草　存巻上　［慶長年間］刊

26.9×20.4cm 1冊
［1002@9@1］



（31．巻末）



（31．巻首）

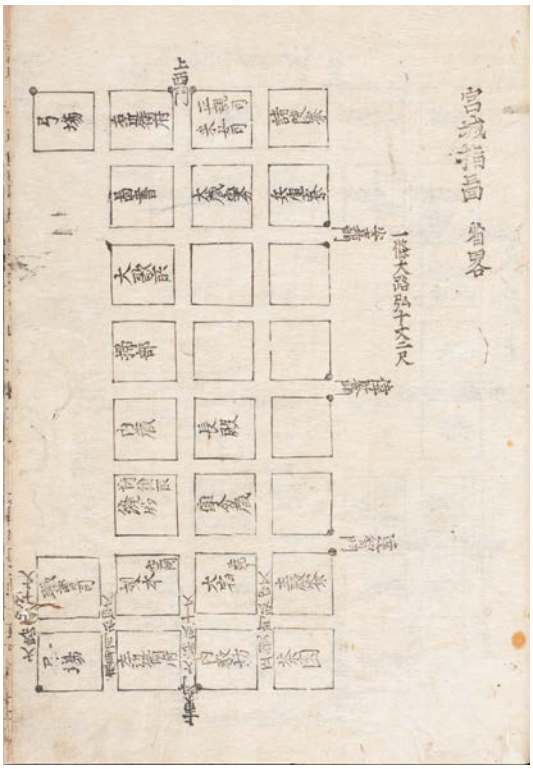
古活字によって『徒然草』が刊行されると、その人気はすぐに広まった。川瀬一馬『増補古活字版之研究』によると、『徒然草』の古活字版は全部で19もの版種があるという。本書と同じ11行に組んだ古活字版だけでも、①慶長中刊本イ種、②同ロ種、③慶長元和中刊本イ種、④同ロ種、⑤元和寛永中刊本、⑥同異植字版、の6種の存在が指摘されている。本書は東洋文庫蔵本、大阪府立中之島図書館蔵本等と同じ①慶長中刊本イ種にあたる。東洋文庫蔵本は上冊・下冊が同種ながら別伝来した本の取合本で、その下冊がもともと本書と一体のものであった。なお、『増補古活字版之研究』では久原文庫本を慶長中刊本イ種に認定し、図版も掲げるが、上記6種のいずれにも該当しない、新たに種別する必要のある本である。

新補水色表紙、無辺無界、11行19〜20字不等、印面高さ約23.0cm。（K）

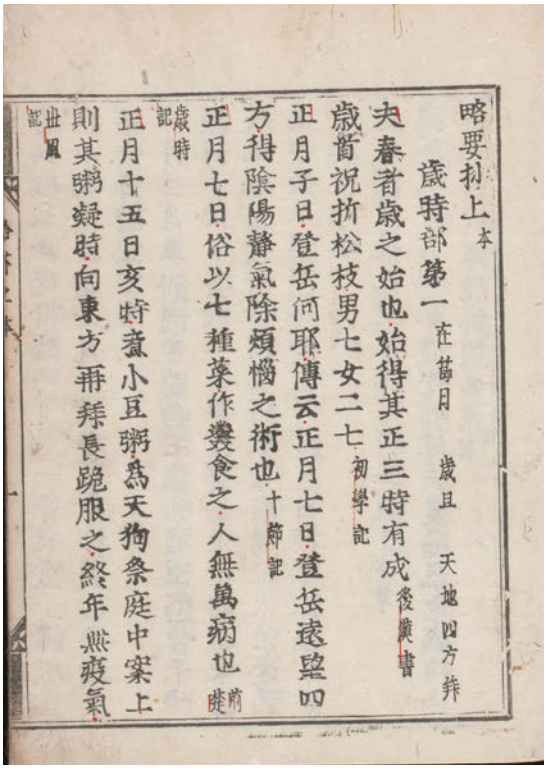
絵図入りの古活字版

32.　拾芥抄　3巻　［慶長年間］刊

26.7×20.5cm 3冊
［110X@36@3］



（32.　巻2・末　地図）



（32.　巻1・本　首）

『拾芥抄』は南北朝時代頃に成立した百科全書である。洞院公賢編、同実熙増補とする説、公賢が原撰本を増補したとする説などがある。歳事、歴史、文学、音楽、官位、年中行事、宮城、地理、仏教、陰陽道、医学等の部門に分け、さまざまな知識を網羅している。古活字版には双辺本と、これの異植字版（同じ活字を用いた別版）とされる単辺本がある。上・中・下の3巻のうちをそれぞれ本・末に分かち、内題は「略要抄上本」「拾芥上末」「拾芥抄中末」等とあって、一定していない。巻中・末の末尾に大内裏、内裏、平安京、日本国等の図を載せるが、こちらは整版で印刷したものである。

栗皮表紙、四周双辺無界11行19字、匡郭内21.6×16.6cm、版心粗黒口双花口魚尾。

（K）

和漢書参考文献

川瀬一馬「駿河御譲本の研究」（『書誌学』3巻4号、1934年）
川瀬一馬『古活字版之研究』（安田文庫、1937年）
阿部隆一『慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題』（慶應義塾図書館、1958年）
髙橋智「古活字版趙注孟子校記」（『斯道文庫論集』28輯、1993年）
森上修「初期古活字版の印行者について―嵯峨の角倉（吉田）素庵をめぐって―」（『ビブリア』100号、1993年）
髙橋智「慶長刊論語集解の研究」（『斯道文庫論集』30・31輯、1996・1997年）
髙橋智「慶長刊大学中庸章句の研究」（『斯道文庫論集』32輯、1998年）
安野博之「慶長勅版の刊行について―慶長四年刊本を中心に―」（『三田国文』32号、2000年）
小秋元段『太平記と古活字版の時代』（新典社、2006年）
『慶應義塾図書館和漢貴重書目録』（慶應義塾図書館、2009年）
高木浩明『中院通勝真筆本『つれゝ私抄』：本文と校異』（新典社、2012年）
小秋元段「『徒然草寿命院抄』写本考」（『これからの国文学研究のために』笠間書院、2014年）
小秋元段「『吾妻鏡』刊本小考」（『いくさと物語の中世』汲古書院、2015年）

第6部に寄せて

古活字版黎明期の知識人のネットワークと出版

法政大学文学部教授
小秋元　段

古活字版の黎明期である中世の最末期から近世初頭にかけては、学問に携わる階層が多様化する時代であった。貴族や僧侶、武士だけでなく、医者、儒者、連歌師、商人など、民間出身の知識人も多く現れ、彼らは講義の場を同じくしたり、書物を貸し借りしたりと、渾然一体となって学問上の交流を深めていたのである。

そのなかで、第6部「平仮名・片仮名の古活字版―美しさを求めて―」でも触れた角倉素庵（本姓吉田、1571–1632）は、京都の町衆の代表者に相応しく、知識人のネットワークの中心にいた。素庵は藤原惺窩（1561–1619）に学んだ当代一流の学者であっただけでなく、彼の周囲には多くの知識人が集まっていた。その一つの要因は角倉氏が元来、土倉とともに医学を家業とし、多くの儒者・医者がその姻戚・門下に連なっていたためである。『新刊吾妻鏡』の刊行を担った五十川了庵（1573–1661）、『徒然草寿命院抄』の著者、寿命院宗巴（1550–1607）はその典型的な人物である。

五十川了庵は素庵の叔父、吉田宗恂（1558–1610）の門下の医者で、宗恂の姪を妻としていた。素庵文化圏にとって最も緊密な一員で、了庵が慶長7年・8年（1602・03）の二度にわたり『太平記』を刊行したことも、嵯峨の工房の活動に触発されるところがあったに違いない。その一方で、了庵は養父が医師の盛方院浄慶（1554–1614）で、浄慶の母の兄弟には当時の大収書家として知られる梵舜（1553–1632）がいた。了庵が刊行した『太平記』の本文は、この梵舜の所持本（尊経閣文庫現蔵）を校訂したものであることが明らかで、慶長7年版・8年版の『太平記』は底本の入手から、開版にあたっての本文校訂、刊行を可能とした背景までのあらかたを窺い見ることのできる、稀有な事例となっている。

了庵はその後、徳川家康（1543–1616）の命を受け、『吾妻鏡』を刊行する。その印面は慶長前半の民間における古活字版らしく、古拙な趣を残している。特に、書状や和歌の引用の際に用いられた平仮名活字の字体・組版には不自然さすら感じさせる。『吾妻鏡』にはこのあと〔慶長元和間〕刊本、〔元和間〕刊本の2種類の古活字版が存在する。このうち、〔慶長元和間〕刊本は漢字部・仮名部ともに堂々とした印面を有しており、なかでも平仮名活字の書体は、嵯峨本『史記』裏張に見られる舞の本や「観世流謡本」特製本（展示番号18）などに見られる素庵風のものとなっている。このことは『吾妻鏡』が了庵の手で刊行されたあと、嵯峨の工房の主導によって改めて開版されたことを物語るのではないか。

一方、寿命院宗巴は丹波国の武将、秦善秀の子であるが、京に出て素庵の祖父、吉田宗桂（1512–1572）に医を学び、素庵の姉妹にあたる女性を妻としている。宗巴本人が古活字版を刊行したという明証は存在しない。だが、慶長3年（1598）に吉田宗恂が『大学』『中庸』『孟子』の古活字版を開版した際、これを仲介して山科言経（1543–1611）に売却した記録が残っていることからすると（『言経卿記』4月22日・5月13日条）、宗巴も古活字版刊行の世界とは無縁でなかったと推測される。

宗巴の『徒然草寿命院抄』はこの時期の古典研究の精華といってよい。初学者に向けて平易な語句に注も施すが、和漢仏の書籍を博捜して典拠や解釈を示してもいる。そうした宗巴の研究を支えたのは当時の知識人たちであった。先述の山科言経はしばしば宗巴の求めに応じて『徒然草』の不審に答えているし（『言経卿記』慶長3年2月11日条ほか）、京都の日蓮宗要法寺の日性（1554–1614）も宗巴に教示を与えた

といわれている（『なぐさみ草』）。そして、宗巴の最もよき伴走者であったのが、当代随一の古典学者、中院通勝（1556–1610）である。『徒然草寿命院抄』は古活字版として開版される以前、通勝の手に渡り、通勝によって逐次、推敲が行われていった。現在、国内にはその過程をとどめる写本が通勝の真筆本（京都府立総合資料館蔵）を含め、9本現存している（さらに通勝に献呈される以前の、宗巴のもとでの草稿本の系譜を引く一本が鶴見大学図書館に所蔵される）。これら写本のほとんどとすべての古活字版は、慶長6年（1601）の也足叟素然（通勝の号と法名）の奥書を有している。『徒然草寿命院抄』はまさに通勝のお墨付きを得て流布した書といってよいのだ。

古活字版刊行の文化圏に、こうした通勝のような高位の貴族がいたことは興味深い。このほか通勝は、慶長13年（1608）より複数刊行される嵯峨本『伊勢物語』、同14年（1609）に刊行された『伊勢物語聞書（肖聞抄）』に刊語を与えている。また、慶長年間の刊と考えられる『平家物語』の一本（中院本）の巻末には、通勝が諸家の正本を集め校合を行ったという一文が刻されている。このように通勝は古典の出版に際し、その本文を校訂し、提供する役割を積極的に担っていた。こうした行動は朝廷を代表する儒者、舟橋秀賢（本姓清原。1575–1614）にも共通して認められる。秀賢は比叡山が『毛詩』を刊行するにあたり、家蔵本を校訂用に提供している（『慶長日件録』慶長9年3月28日条）。また、慶長7年（1602）刊『古文孝経』、同13年（1608）刊『職源抄』（中原職忠刊）も、刊語に記された秀賢の言葉より、その底本が自家の本であったことが知られるのである。

本来、貴族たちは家に伝来した本を濫りに広めることはしなかった。そうした伝統を考えれば、これは画期的な方向転換だったといえる。だが、もともと活字による印刷・出版を日本で初めて行ったのは後陽成天皇で、当時の廷臣たちもこの事業に従った。つまり、彼らこそが古活字版の先覚者で、出版による書物の複製に精通し、なじみを有していたのである。加えて、活字出版の世界に新たに参入した京都の町衆は、こうした貴族たちと日常的なつきあいをもっていた。貴族たちが秘蔵する貴重な本が出版に供され、良質な本文をもつ古活字版が世に送りだされたのは、こうした時代相が生みだした必然であったのかもしれない。

洋　書

凡　例

・展示番号に続いて、日本語による著者名、書名、出版地、印刷者名、出版年を記した。
・続けて原語による上記の書誌情報を記した。15世紀刊本の場合はISTCに準拠し、16世紀のSTC（French）、STC（German）、STC（Italian）を参考にした（いずれの略語も詳細は巻末の略語一覧を参照のこと）。
・紙面の都合上、略語一覧にあげたBMCやGWに校合式（collation）の詳細を求めることのできる15世紀刊本については、本図録では完本の葉数と義塾図書館所蔵本の欠葉情報のみの記述に留めた。16世紀本については、書物の校合式と義塾図書館所蔵本の欠葉情報を記した。
・寸法（縦×横）の単位はmmで、紙あるいは羊皮紙の1ページあたりのおおよその大きさを測った。冊子体の場合、第2帖（第1帖は欠落の場合が少なくないため）第1葉を測定した。
・基本的な書誌目録および義塾図書館所蔵本に言及した展示会目録などを、略語（略語一覧参照）とレファレンス番号あるいはカンマ区切りでページ番号を示した。
・上記に続けて、義塾図書館の請求記号を［　］に記した。ヘーブラー編纂の零葉集（略語一覧のGI、II、WI参照）所収の零葉の場合は、Plate番号もカンマの後に示した。
・解説中、人名と書名は原則としてカタカナあるいは日本語訳で表記し、原語とわかる範囲で生没年を（　）内に表記した。ただし字数制限の都合により、展示本の書誌情報にある場合や一般的に知られている場合は重複を避けるためその限りではない。
・解説中に言及した文献は該当箇所の文末あるいは段落末に、著者名（同一著者の文献を複数使用した場合は出版年も）および必要に応じてページ数などの該当箇所を括弧書きで示した。それらを含めて本図録執筆のために参考にした文献を章末に一覧としてまとめた。
・末尾に解説者のイニシャル（TM：松田隆美、ST：徳永聡子）を（　）に記した。
・洋書セクションは「活字」そのものに焦点を当てた展示内容とした。このため解題の画像は、活字の詳細を示す部分拡大のみの掲載もある（その場合は「部分拡大」と明記した）。

（参考出品：「グーテンベルクの印刷機」（レプリカ）ミズノプリンティングミュージアム蔵）

第1部　活版活字の誕生

紀元2000年を迎えるにあたり、英国のBBCが「過去一千年の大発明家」というオンライン投票を実施した際、2位のトマス・エジソンや3位のレオナルド・ダ・ヴィンチを押さえ、見事第1位を獲得したのは活版印刷術の始祖ヨハン・グーテンベルクであった。現代社会におけるコンピュータとインターネットの登場が、「第2次グーテンベルク革命」となぞらえて称されるように、グーテンベルクが発明した活版印刷術が人類史に与えた影響は計り知れない。書物の大量生産とスピード化を実現し、情報伝達を飛躍的に加速化させ、さらにはヨーロッパ各地に宗教改革や識字率の向上をもたらした。15世紀後半以降、現代の情報革命に達するまで、西洋における知の伝達は活版印刷を主たる媒体としてきたことに鑑みるならば、印刷術なくしては近現代社会の発展はあり得なかったといっても過言ではないだろう。

本展示の洋書部門では、この「活版活字」をテーマとし、その多様性と歴史的な歩みを慶應義塾図書館所蔵本にたどる。15世紀中葉から約100年を時間軸とし、活版印刷術の誕生から16世紀中葉まで、活字文化の広がりと活字の変遷について3部構成で概観する。この第1部では、比較資料として手書きの中世写本から出発し、活版印刷術誕生期の諸相に焦点を当てる。グーテンベルクと彼の共同出資者であり工房を引き継いだ（というよりも没収したと言うべきか）ヨハン・フストとその娘婿ペーター・シェーファーの印刷物、グーテンベルクの活字を用いたバンベルクでの印刷物を取り上げる。

全体解説にもあるように、書物を印刷する方法は複数存在した。では、グーテンベルクがもたらした活版印刷術は何が革新的であったのか。第一に、印刷後にバラして新たな版を組むことのできる可動活字（movable type）を鉛合金を用いて鋳造する技術を生み出した点が挙げられよう。活版活字の制作過程では（図1参照）、まず父型（punch）と呼ばれる鉄や真鍮（最も初期の頃には鉛が用いられたとも言われる）に文字を浮き彫りしたものを作り、それを銅などの柔らかい金属に打ちつけて母型（matrix）を作る。その母型をL字型の2つの部品から成る鋳造鋳型（mould）の底にセットし、そこに融点の低い鉛合金を液状にしたものを流し込み、個々の活字が鋳造された。またアルファベット1文字単位だけでなく、縮約語（contraction）や複数の文字をひとつの活字に合わせた合字（ligature）、加えて記号なども、写本の慣習にならって作られた。それゆえ、大文字（upper case letters）、小文字（lower case letters）の総数は数百箇に達した。

しかし、15世紀の金属活字は現存しないため、初期の活字鋳造方法は印字面から推定するほかなく、いまなお議論が続いている。例えば2000年には、砂の鋳型のように一度しか用いることのできない母型によって鋳造されたという仮説が、デジタル技術を援用して発表された（Agüera y Arcas）。本格的な検証は少しずつ始まりつつあるものの、今後の議論の展開が待たれるところである。

活字に加えて、金属活字になじむ油性インクと手引き印刷機（press）の考案も重要な要素で

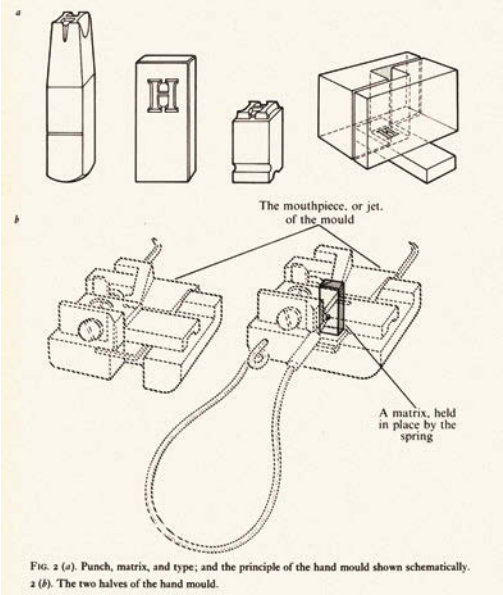


図1. P. Gaskell, *A New Introduction to Bibliography* (p. 11)

ある。グーテンベルクは、葡萄絞り機や製本プレスなどからスクリューとレバーによる平圧プレスの着想を得て、印刷機を作ったとされるが、これも残念ながら15世紀のものは現存しない。だが幸いにも、ミズノプリンティングミュージアム館長・水野雅生氏のご厚意で、当時の印刷機のレプリカを展示し、印刷工房内の様子の一端を再現することができた。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

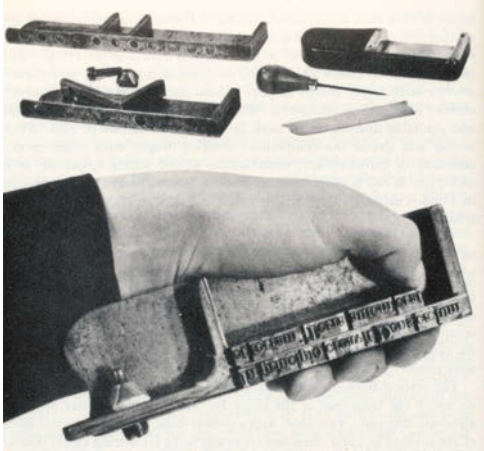


図2. P. Gaskell, *A New Introduction to Bibliography* (p. 44)

活版印刷の工程についても要点を確認しておこう。担当の職人は植字工（compositor）と呼ばれ、原稿をもとに活字箱から活字を拾い、もう片方の手が持つ植字ステッキ（compositor's stick）に左から右へと活字を並べていく。その際、単語や行の間には込め物で空白を作り、行末の揃いを調節した。数行文ごとにゲラ（galley）に移され、ページいっぱいになるまで作業が続けられた。ただし、グーテンベルクがこれ以外の手法を取ったという仮説もある（展示番号3参照）。1ページ分の植字が終わると、版面は糸で縛って固定され、最初に試し刷りが行われた。可動活字を用いているため、この時点で誤植が見つかった時に、活字の入れ替えによる修正が可能という利点がある。校正が終わると実際の印刷へ入る。組版を鉄の枠チェース（chase）に入れ、くさびや込め物を詰めて固定し、印刷機へセットする。そこに油性のインクをむらなく塗り、インクの乗りをよくするために湿らせた紙をセットし、印刷機のレバーを引っ張って圧力をかけ、印刷は完了する。グーテンベルク以降およそ500年間続いた手引き印刷機時代では、これが一般的な作業工程であった。（可動活字の鋳造方法や印刷工程については、フィリップ・ギャスケルの*A New Introduction to Bibliography*に詳しい。また安形麻理『デジタル書物学事始め』第1章にも要点が分かりやすくまとめられている。）

活版印刷術の誕生は文化的革新であったが、連綿と続いてきた写本文化を一夜にして払拭したわけではない。形態や素材、書体やレイアウトといった諸要素の多くは、同時代や少し前の手書き写本にならっている。たとえばグーテンベルクが採用したゴシック体活字は、12世紀頃から15世紀後半かけて北ヨーロッパ写本の詩篇やミサ典書などによく使用された、やや重々しく角張った書体（textura quadrata）に基づく。またグーテンベルクをはじめ、初期印刷者たちは写本を模して、ページ冒頭や本文上の大きな区切りに、装飾大文字や区切りを示す記号を印刷後に手書きで加えていた。洋書第1部では、初期印刷者たちがこうした写本の伝統を再現すべく、いかにして新技術を用いて取り組んだのか、書物の印字面に問うてみたい。

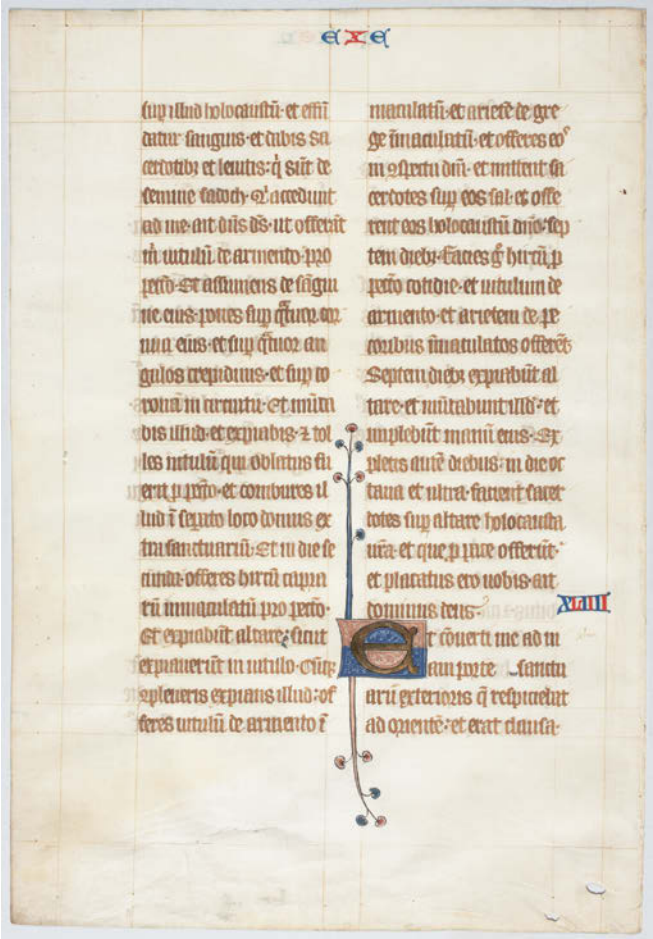
（ST）

I. 手書き写本から活版印刷本へ

1.「聖書」（東アングリア地方，ケンブリッジ，14世紀中期）（写本零葉）

Biblia latina (East Anglia, possibly Cambridge, mid–14th century). 412×291mm. MB 5.

［170X@9@27］



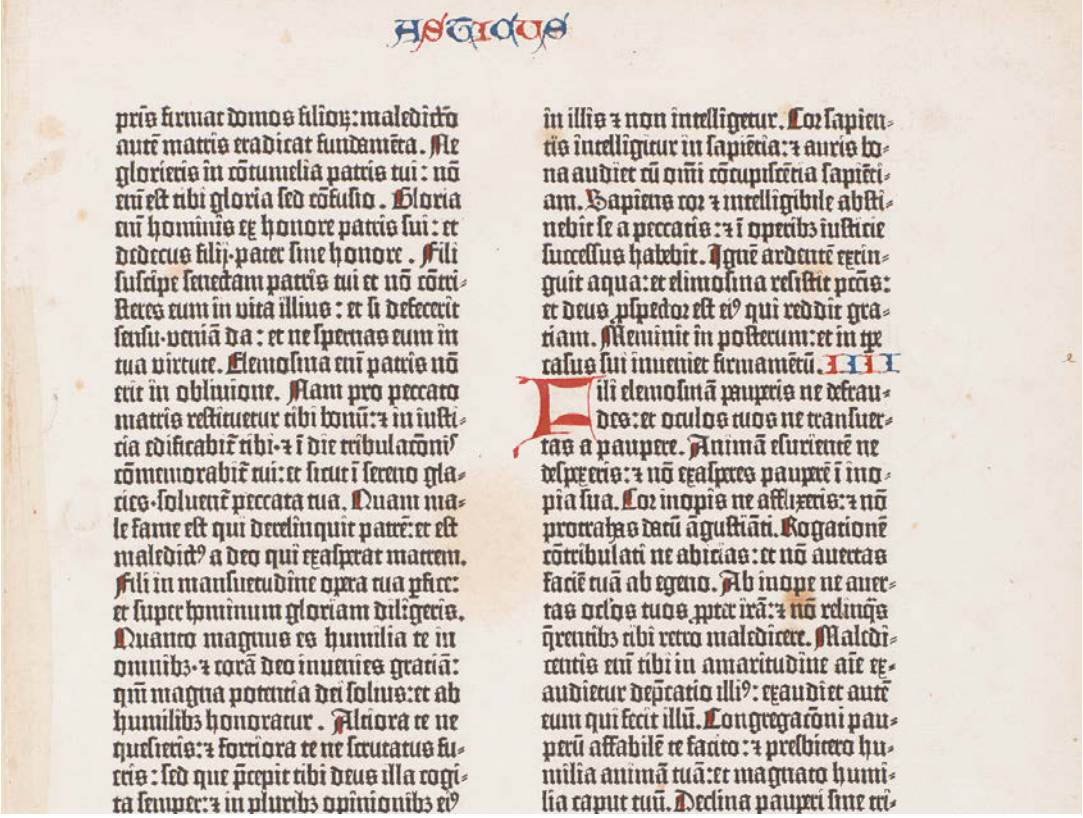
（1.「エゼキエル書」43: 11–44: 1）

イングランドに少ないラテン語のウルガタ聖書の豪華な大型写本で、透き通るような上質の羊皮紙に、広々と余白をとって、丁寧な丸いゴシック体で書かれている。章の始まりに用いられている彩色イニシャル‘E’の美しさからも、豪華な写本であることは明らかである。左右二欄からなるレイアウト、ページ上部余白に一文字ずつ赤と青で交互に書かれた書名（見開き2ページにわたって、‘EXE/CHIEL’と書かれている）、やはり赤と青で交互に書かれたローマ数字の章番号といった特徴は、すべて「グーテンベルク聖書」（展示番号2）に受け継がれており、「グーテンベルク聖書」のページデザインがそれまでの聖書写本を手本としたことがわかる。活版印刷は、15世紀までの円熟した写本の書物文化を基盤として、まずはそれを受け継ぐかたちで出発したのである。本文は旧約の「エゼキエル書」43：11–44：1。この零葉を含む写本の制作、来歴については近年多くの研究がなされている（de Hamel no. 47）。　（TM）

2.「42行聖書」（[マインツ：ヨハン・グーテンベルクとヨハン・フスト，1455年頃]）（零葉）

Biblia latina, 42 lines ([Mainz: Printer of the 42-line Bible (Johann Gutenberg) and Johannes Fust, *c.* 1455]). Fol. 26 of vol. 2. 391×277mm. ISTC ib00526000; 西洋活字 A2.

[170X@29@1]



（2. Fol. 26 of vol. 2：部分拡大）

マインツの金細工師ヨハン・グーテンベルク（*d.* 1468）は可動活字を用いた印刷機の試行錯誤を繰り返し、1455年頃ついにかの有名な聖書を完成させた。「グーテンベルク聖書」、あるいは1ページ42行で本文が組まれているため、「42行聖書」と称される（ただし40行のページを持つ現存本もある）。本文はウルガタ聖書に基づき、随所に写本時代の伝統が見出される。特に、典礼書やミサ典書の写本を範とした大きなテクストゥラ体（ゴシック体系統）の活字は、当時のゴシック体を書くときの規則に準じ、文字の縦線をできるだけ等間隔にするための工夫がなされている（安形 p. 63）。また写本にならった欄外標題や頭文字等は印刷後に手書きで施された。印刷の完成にはヨハン・フスト（展示番号4, 5）の経済的支援を受けたといわれる。

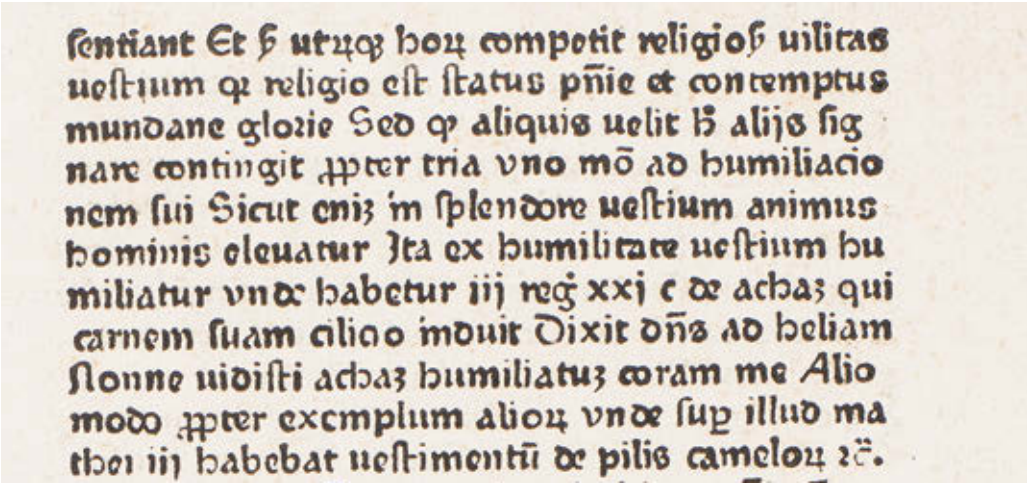
展示の零葉は、ニューヨークのガブリエル・ウェルズ書店が上下巻をばらし、エドワード・ニュートンの解説を付けて1921年に販売した零葉本所収の一葉である（*A Noble Fragment*）。

（ST）

3. ヨハン・バルブス『カトリコン』（[マインツ：「カトリコン」の印刷者，1460年と1472年頃の間，あるいは1460年頃]）（零葉）

Johannes Balbus. *Catholicon* ([Mainz: Printer of the 'Catholicon' (Johann Gutenberg?)], [between 1460 and *c.* 1472]; also recorded as 1460 [not before 1469]). Bifolio. Fols 361 and 368. 368×285mm. Als 17; BMC I 39; ISTC ib00020000.

［170X@32@1］



（3. Fol. 361r：部分拡大）

ジェノヴァ出身のドミニコ会修道士ヨハネス・バルブス（*d.* 1298）が13世紀後半に著した『カトリコン』は、自由7科のうち3科（文法、修辞学、論理学）を学ぶ基本書としてヨーロッパ広域で読まれた。奥付にある書き込みから、印刷者はグーテンベルクと考えられていたが、3種類の紙の透かし模様［watermark；紙漉き時に入れる識別マーク］とピンホール［pinhole；印刷中にずれないように紙がピンで印刷機にとめられた時にできる穴］の位置のパターンから、同じ活字の組版を用いた異なる3つの時期（1460年、1469年、1472年頃）の刷り（issue）の存在が確認された。ここから、グーテンベルクが印刷したのは1460年のみで、彼の死後、1468年に活字セットを入手したコンラート・フメリー（Konrad Humery）が、おそらくペーター・シェーファー（展示番号4, 5）の助けを得て他を印刷したとされている。

展示の零葉は、1936年にニューヨークで出版された零葉本所収の、一度折り畳まれた全紙一枚である。これには1805年に大英図書館（The British Library）が売却した第2刷りの不完全本が用いられた（Stillwell）。

本零葉は、その印刷方法について世紀の議論を呼んだことでも知られる。アメリカの書誌学者ポール・ニーダムは、行末の不揃いに着目し、可動性の活字ではなく2行分まとまって鋳造された活字（two-line slugs）による印刷という斬新な解釈を示した（Needham 1982）。この論は広く受け入れられた一方で、オランダ出身の書誌学者ロッテ・ヘリンガをはじめ反論を唱える学者もいる（Hellinga 1989, 1992）。この1980年代に始まった「カトリコン論争」は21世紀のいまなお最終的な決着には至っていない。活字をめぐり時には大論争も引き起こるのである。

（ST）

II. グーテンベルクの後継者

4.「マインツ詩篇」（［マインツ］：ヨハン・フストとペーター・シェーファー，1457年）（断簡）
Psalterium ([Mainz]: Johann Fust and Peter Schoeffer, 14 Aug. 1457). Fol. 4 (vellum). 278×206mm. BMC I 18; ISTC ip01036000; 西洋活字 A3.

［170X@30@1］

5.「マインツ詩篇」（［マインツ］：ヨハン・フストとペーター・シェーファー，1459年）（断簡）
Psalterium ([Mainz]: Johann Fust and Peter Schoeffer, 29 Aug. 1459). Fol. 135 (vellum). 267×85mm. Als 18; BMC I 19; ISTC ip01062000.

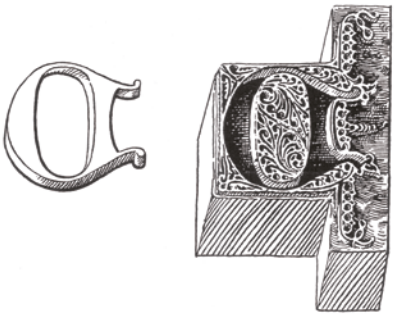
［170X@31@1］

中世では日々の祈りに欠かせない旧約聖書の「詩篇」の写本が多く制作された。同様に印刷本でも、ヨハン・フストとペーター・シェーファーの刊行以降、多くの版を重ねている。通称「マインツ詩篇」といわれる展示番号4は印刷史上における「詩篇」初版［*editio princeps*］である。フストとシェーファーはこの印刷において、黒インクに加えて、頭文字［initial；文や段落の最初の文字］に赤と青インクを用いる三色印刷をおこなった。これは写本のレイアウトを印刷で再現するきわめて画期的な試みである。だが彼らは青インクの扱いに苦労したようで、最近ではこの青インクの分析にデジタル技術を援用した研究も試みられている（Ikeda）。

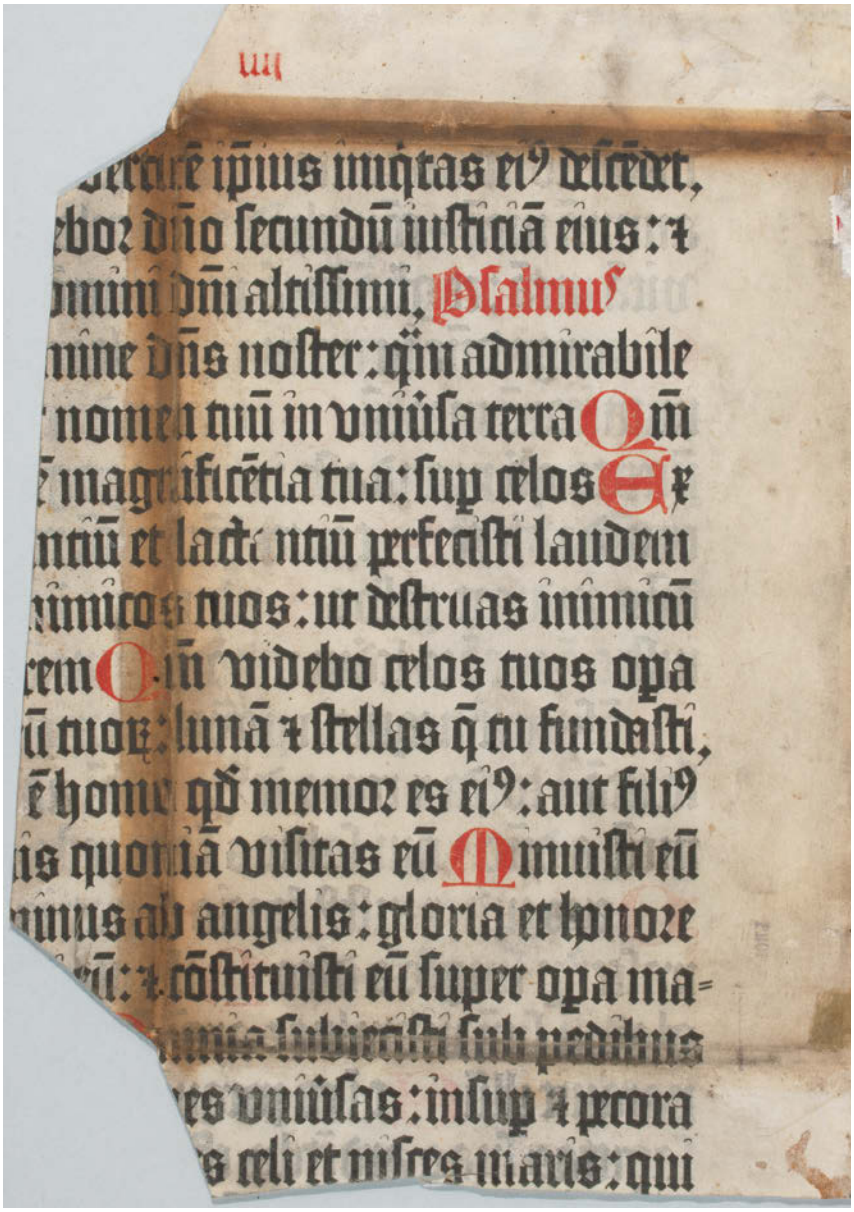
展示番号5は、ブルスフェルデの会衆向けに改訂され、マインツのベネディクト会聖ヤコブ修道院の要請で刊行された第2版の小さな断片であるが、その野心的な企てをここに垣間見ることができる。装飾付き頭文字には、装飾と頭文字に異なる色が施されている。この複雑な印刷は頭文字と装飾を別個のパーツにすることで実現している。鉄製のボディに浮彫で装飾が施され、凹みの部分に別ピースの頭文字をはめこむ仕組みである（参考図）。ただし、複数のインクを用いた複雑な技術を用いているにもかかわらず、印刷方法はシンプルであった。すなわち2種のインクをのせた装飾頭文字の合体活字を、本文の組版に戻し、一回の引き（one-pull）での印刷を実践したのである。ただし、この技術はすぐに断念されることとなった。

印刷後に手書きで加えられた装飾頭文字の例は、展示番号21などに見られる。両者を比較しても、印刷揺籃期において多色刷りを試みたシェーファーたちの印刷技術の高さは、一目瞭然である。

（ST）



（参考図：Wallau, p. 262より）



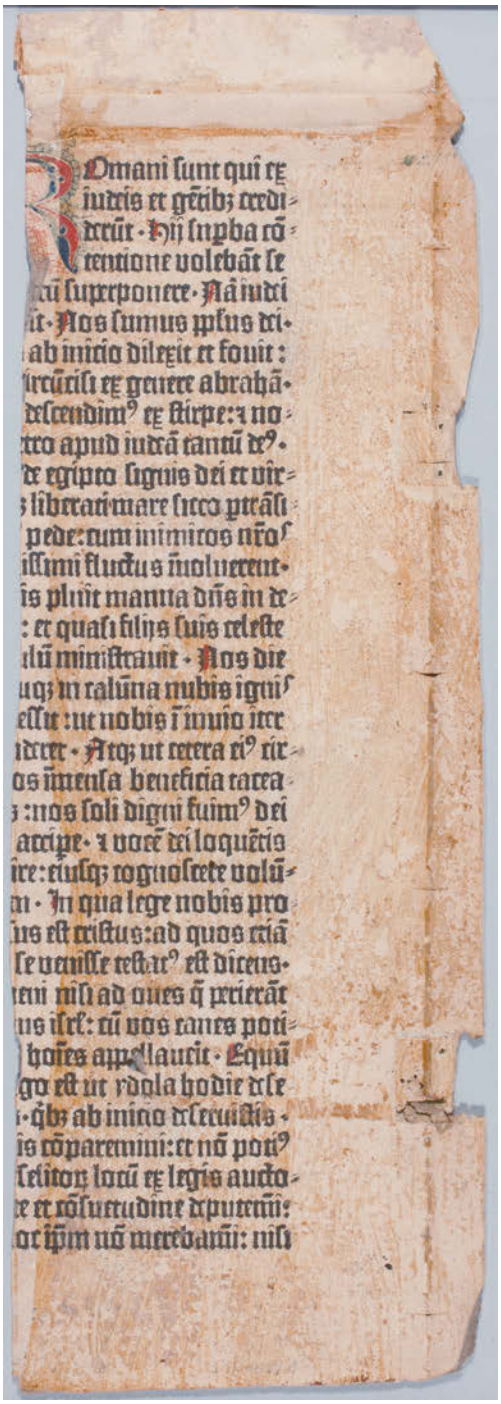
(4. Fol. 4v)

(5. Fol. 135v)

6.「36行聖書」（[バンベルク：36行聖書の印刷者（アルブレヒト・プフィスター？），1460年頃]）（断簡）

Biblia latina (36 lines) ([Bamberg: Printer of the 36-line Bible (Albrecht Pfister?), not after 1461]). Fol. 342 in a 2-volume set/202 in a 3-volume set (vellum). 372×128mm. Als 16; BMC I 16; ISTC ib00527000.

[170X@33@1]



この「36行聖書」の印刷は、グーテンベルク聖書を底本とし、グーテンベルクがドナトゥス文法書や暦の印刷に使用した活字（通称「DK活字」）の変形を用いているため、印刷地は長らくマインツであるとされてきた。しかし、紙の透かし模様、同時代の製本、初期所有者といった情報から、いまではバンベルクの印刷とされている。同地のアルベルヒト・プフィスターが、この活字を用いて1461年2月の奥付を付した書物を印刷していることから、この時期までには彼の手に活字一式が渡っていたと考えられる。プフィスターはバンベルク司教のための印刷も手がけ、同司教区の複数の修道院が「36行聖書」を旧蔵していたことから、バンベルク司教の要請で「36行聖書」が印刷されたと考える向きもある（Als, p. 58）。

現存する「36行聖書」には2巻本と3巻本があるが、この断簡がどちらに属していたかは不明である。本文は新約聖書「ローマの使徒への手紙」2章の部分で、製本の補強材に再利用されていた。

（ST）

第2部　活字文化の普及

マインツから最初に印刷術が伝来したのはシュトラースブルク（現・ストラスブール）で、1460年頃とされている。ほぼ同時期にバンベルク（1461年）に、そしてケルン（1465年）、バーゼル（1468年までに）、アウグスブルク（1468年）、ニュルンベルク（1469年）と続いた。またドイツからイタリアへ移った印刷業者たちも現れ、1465年には、スビアコにあるベネディクト会修道院に印刷所が設立され、その2年後にはローマ、続けてヴェネツィア（1469年）などの各都市で印刷所が始動した。さらにはフランス、オランダ、低地地方、イングランドなど、ヨーロッパ各国へ普及した。15世紀末までには、東はポルトガルから西はコンスタンティンノープルまで、ロシアとアイスランドを除くヨーロッパ全域の約300都市で、1100〜1200の印刷所が稼働したと推定されている（IJL2, p. 11）。

1462年の秋、マインツでは教会と世俗の権力者たちとの間に政争が生じ、街は混乱状態に陥った。ちょうどこの頃から、ライン地方出身と称して印刷業を始める者が、ヨーロッパ商業の幹線水路ライン河沿いの街に多数現れ始め、その中にはグーテンベルクの工房で働いていた者、あるいはその関係者から印刷術を伝授された者もいた。そこで洋書第2部では、活版印刷術が、人とモノの移動によって各地に広がりゆく様子と初期印刷本の代表的な活字体を、展示書によって描き出してみたい。ヨーロッパ全域を扱うことはかなわず、たとえばスペイン、ポルトガルなどの印刷本を含められなかったことは遺憾である。だが、ケースごとに15世紀の主要な印刷都市（国）を取り上げ、その地の印刷所第1号はほぼすべて網羅している。このセクションで扱う印刷都市の多くは、北西ヨーロッパ交易の重要な拠点であった点も付記しておきたい。

第2部を（そして第3部も）概観すると、印刷術伝播の立役者となった印刷者同士がしばしば姻戚や師弟関係にあり、活字の譲渡をしていたことや、比較的高度な教育を受けていることなど、複数の共通項が浮かび上がってくる。たとえば、シュトラースブルク（展示ケース III）初の印刷者ヨハン・メンテリン（展示番号7）は、1450年代末には同地で印刷を始めており、おそらくマインツにて、あるいはその土地の関係者を通じて印刷術を習得したと思われる。彼の死後は、娘婿アドルフ・ルッシュとヨハン・プリュスが引き継ぎ（展示番号8, 9）、シュトラースブルクの印刷文化興隆に寄与した。またメンテリンのもとで修行したギュンター・ツァイナー（展示番号11）は、アウグスブルクで最初の印刷所を立ち上げた。ケルン初の印刷所を開設したウルリヒ・ツェル、イタリアに印刷術をもたらしたコンラート・シュヴァインハイム（マインツの大司教管区出身の聖職者）は、フストとシェーファーの工房で働いた経験を持つと言われる（展示番号10, 13）。またパリ（展示ケースVI）における活版印刷文化は、ふたりの学者ギョーム・フィシェとヨハン・ハイリーンがソルボンヌ大学の一角に設立した工房から始まり、バーゼル（展示ケースVII）の印刷は、短期間ながら同地に滞在していたハイリーンから手ほどきを受けた、ヨハン・アマーバッハが始動させた。一方、現在のベルギー・オランダを含む低地地方およびイングランドで初めて印刷本を出版したのは、イングランド出身の毛織物商ウィリアム・キャクストンで（展示番号23, 24）、彼が印刷術を習得したのはツェルが活躍する時代のケルンにおいてであった。

このように、ドイツのマインツで始まった活版印刷術は、職人および技術の移動とともにヨーロッパ各地に広まった。初期の頃に制作された活字の大半は、グーテンベルクも用いたゴシック体活字である。特にドイツではテクストゥラ体（textura; 図1）が主流で、この活字書体をもとに15世紀後半のイタリアでは丸みを帯びたロトゥンダ体（rotunda; 図2）が誕生した。またフランス、低地地方、イングランドでは、15世紀後半の北フランス写本に見られるゴシック草書体を基にしたバタルド体（bastard; 図3）活字が好んで用いられた。同系統にドイツで流行したシュヴァバッハー体

（Schwabacher）があるが、これは16世紀になるとフラクトゥール体（Fraktur）へと発展する（第3部，展示ケースXIV）。

一方、イタリアでは、シュヴァインハイムとパンナルツのセミゴシック体活字を皮切りに、ローマン体活字が発展していく。ドイツでもローマン体を用いる印刷者は現れたが（展示番号8, 11）、より美しい形状は15世紀イタリアで生まれる。最初にイタリアでローマン体活字を作ったのは、ヴェネツィア初の印刷所を始めたヨハン・フォン・シュパイアー（展示番号14）で、これを「ヴェネツィアン・ローマン体」と呼ばれる流麗な活字へと洗練させたのが、かの有名なニコラ・ジャンソン（展示番号15）である。このローマン体は、第3部で見るように、アルド・マヌーツィオを始めとする、いわゆる学匠印刷家に引き継がれ、16世紀においてさらなる発展を遂げてゆくこととなる。

（ST）

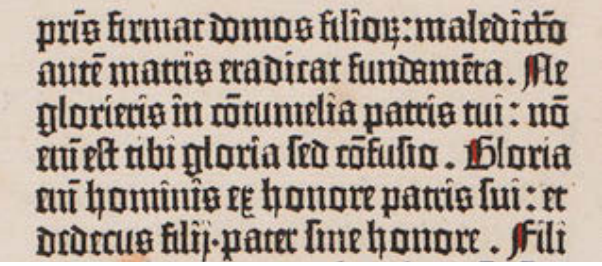


図1. テクストゥラ体

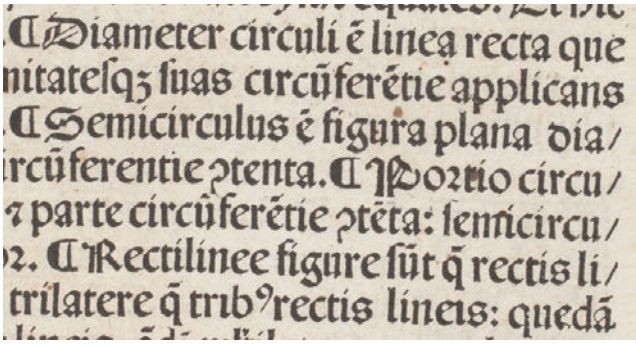


図2. ロトゥンダ体

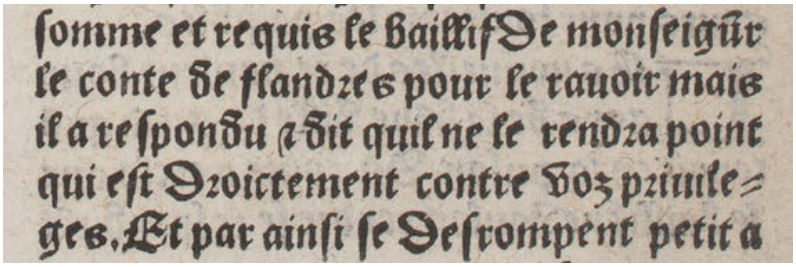


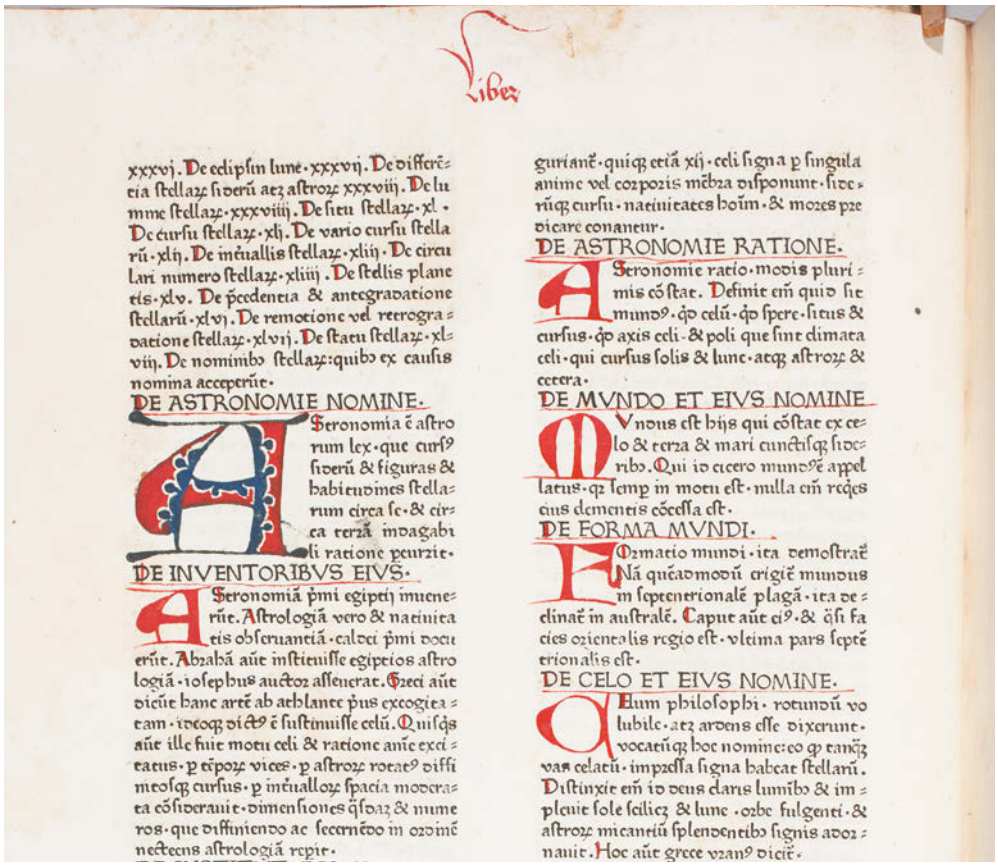
図3. バタルド体

III. シュトラースブルク

7. セビリャのイシドルス『語源論』（[シュトラースブルク：ヨハン・メンテリン，1473年頃]）

Isidorus Hispalensis. *Etymologiae* ([Strassburg: Johann Mentelin, *c.* 1473]). 141 leaves (of 142), wanting a1 (blank). 392×269mm. BMC I 57; IJL2 213; IKUL 016; ISTC ii00182000; PP 64.

[142X@36@1]



DE ASTRONOMIE NOMINE.

DE INVENTORIBVS EIVS.

DE ASTRONOMIE RATIONE.

DE MVNDO ET EIVS NOMINE

DE FORMA MVNDI.

DE CELO ET EIVS NOMINE.

（7. Fol. 24v：部分拡大）

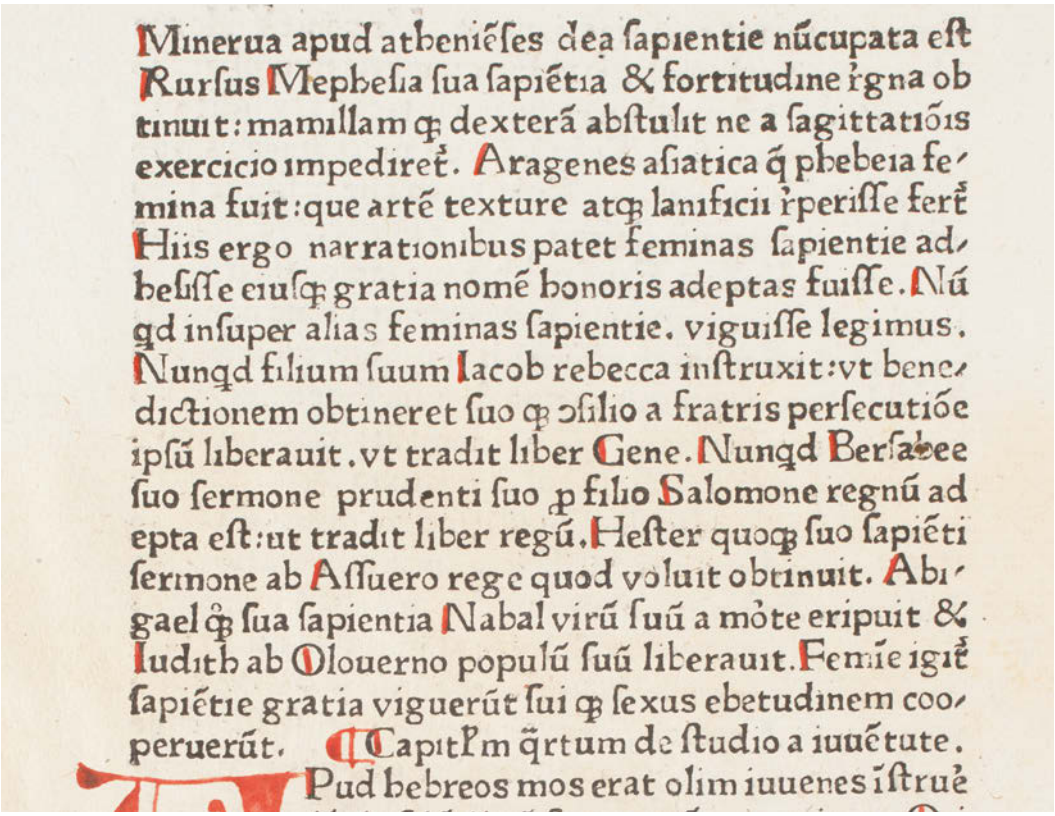
セビリャ大司教のセビリャのイシドルス（560–636）がラテン語で著した『語源論』は、古典および中世初期の著述家の作品を渉猟して編纂された百科事典の一種で、中世を通じて広く利用され、1000点以上の写本で現存している。E.R.クルチウスは中世研究の古典『ヨーロッパ文学とラテン中世』（1948）のなかで、『語源論』を「全中世の基本書」と呼んでいる。本書の人気が近代初期になっても衰えることがなかったことは、1500年までに10以上の版が印行されていることからもうかがえる。展示書は、ヨハン・メンテリン（*c.* 1410–78）が1473年頃に印行したフォリオ判で、アウグスブルクでギュンター・ツァイナー（展示番号11）が1472年11月に印刷した版に続いて古い。ゴシック体活字で印刷された本文に、3〜8行大のさまざまなサイズの頭文字が赤（ときには青）で手書きで加えられ、さらに文頭の大文字を際立たせるための赤字の縦棒、ページ上部余白の章タイトルなども手書きで加えられている。初期のインキュナブラが活版印刷と手書きの共同作業であったことを示す好例である。

（TM）

8. ジャック・ルグラン『叡智への愛』（[シュトラースブルク：アドルフ・ルッシュ，1474年頃]）（零葉）

Jacobus Magni (Jacques Legrand). *Sophologium* ([Strassburg: The 'R-printer' (Adolf Rusch), 1474]). Fol. 6. 294×210mm. BMC I 62; ISTC im00040500.

[140X@16@2; GI, Plate 79]



Minerua apud atheniẽses dea sapientie nũcupata est
Rursus Mephesia sua sapiẽtia & fortitudine ṙgna ob
tinuit: mamillam q̃ dexterã abstulit ne a sagittatiõis
exercicio impediret. Aragenes asiatica q̃ phebeia fe-
mina fuit: que artẽ texture atq̃ lanificii ṙperisse fert
Hiis ergo narrationibus patet feminas sapientie ad-
hesisse eiusq̃ gratia nomẽ honoris adeptas fuisse. Nũ
qd insuper alias feminas sapientie. viguisse legimus.
Nunqd filium suum Iacob rebecca instruxit: vt bene-
dictionem obtineret suo q̃ ꝯsilio a fratris persecutiõe
ipsũ liberauit. vt tradit liber Gene. Nunqd Bersabee
suo sermone prudenti suo ꝑ filio Salomone regnũ ad
epta est: ut tradit liber regũ. Hester quoq̃ suo sapiẽti
sermone ab Assuero rege quod voluit obtinuit. Abi-
gael q̃ sua sapientia Nabal virũ suũ a mõte eripuit &
Iudith ab Olouerno populũ suũ liberauit. Femĩe igit̃
sapiẽtie gratia viguerũt sui q̃ sexus ebetudinem coo-
peruerũt. ¶ Capitl'm q̃rtum de studio a iuuẽtute.
Pud hebreos mos erat olim iuuenes ĩstruẽ

（8. Fol. 6v：部分拡大）

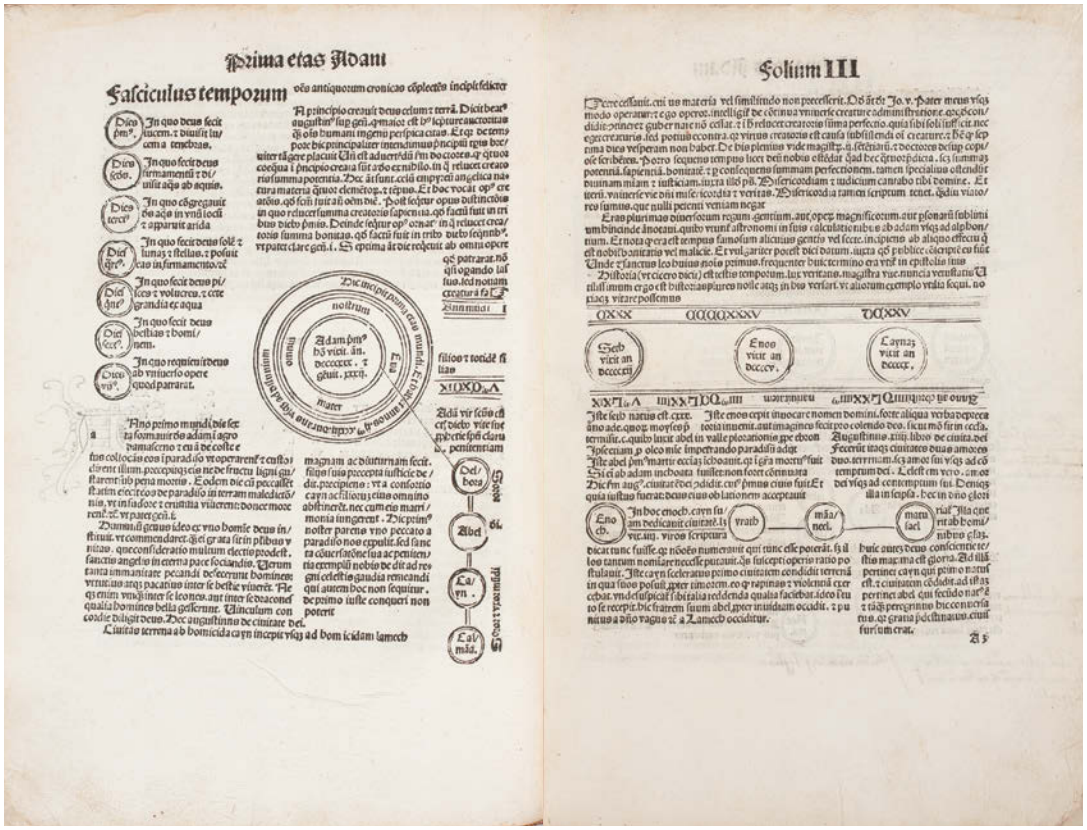
トゥールーズ出身でアウグスティヌス隠修士会のジャック・ルグラン（1365–1422）の著作を、アドルフ・ルッシュ（1435–89）が印行した版からの一葉である。ルグランはオセールの司教で、シャルル6世（Charles VI; 1368–1422）の聴罪司祭も務めた。本書の目的は叡智への愛の獲得にあり、古代中世の著述家（カトー、セネカ、マクシムス等）の著作からの引用が多く、善悪や社会的道徳を扱う人生の教訓集となっている。

ルッシュは、ヨハン・メンテリン（展示番号7）の娘と結婚し、義父の死後その印刷業を引き継いだ。ゴシック体の活字が一般的であったドイツにおいて、初めてローマン体を導入したことでも知られる。彼の印刷本の奥付には名前がなく、素性が不明だったため、その特徴的なローマン体の大文字 'R' から、長らく「R-印刷者」と呼ばれていた。このローマン体活字は、スビアコで印刷所を開いたシュヴァインハイムとパンナルツ（展示番号13）にも影響を与えたといわれる。

（ST）

9. ヴェルナー・ローレヴィンク『時の束』（［シュトラースブルク：ヨハン・プリュス，1490年頃］）
Werner Rolewinck. *Fasciculus temporum* ([Strassburg: Johann Prüss, after 6 Apr. 1490]). 96 leaves, perhaps wanting last 2 bank leaves; the first page is probably in facsimile. 289×193mm. IJL2 328; IKUL 004; ISTC ir00276000.

［120X@512@1］



（9. Sig. A2v–A3r）

展示番号9は、ケルンのカルトジオ会士ヴェルナー・ローレヴィンク（*c.* 1425–1502）が編纂し、ヨハン・メンテリン（展示番号7）の娘婿としてシュトラースブルクで活躍したヨハン・プリュス（1477–*c.* 1510）が刊行した世界年代記である。プリュスだけでもこの歴史書を15世紀末までに5回（ラテン語版4点、ドイツ語版1点）出版しており、その需要の高さを窺い知ることができる。旧約聖書の世界とローマ教皇史を中心に据え、複数の異なる地域の歴史を概説し、印刷された最古の編年体の世界史とも評される。

ページの中央には「創世紀元（anno mundi）」に「キリスト紀元（anno Christi）」と各国史が加わり、見開きページの左から右へと直線的に進む。世界史記述において伝統的な「キリストの系譜」を取り入れつつ、異なる地域の歴史の文字情報を統一的な時間軸に沿わせた配置は革新的であった。その叙述および視覚表現は、ともにほぼ同時代の歴史書にも大きな影響を与えた（原島，pp. 111–12）。

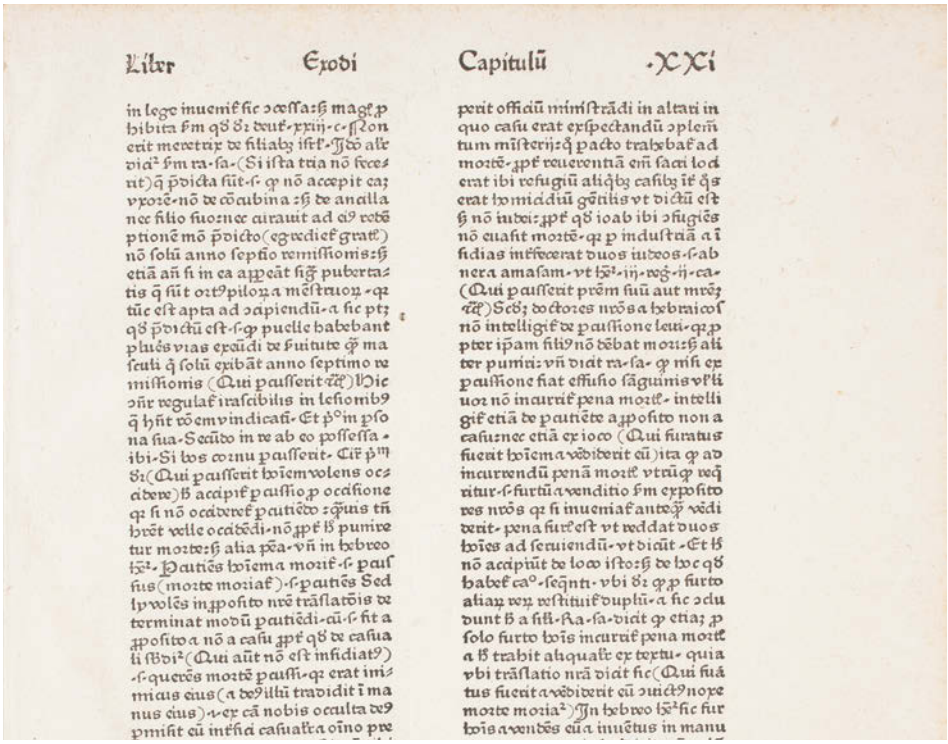
（ST）

IV. ケルン、アウグスブルク、ニュルンベルク

10. リールのニコラウス『全聖書註解』([ケルン：ウルリヒ・ツェル，1483年以前])（零葉）

Nicolaus de Lyra. *Postilla super totam Bibliam* ([Cologne: Ulrich Zel, not after 1483]). Fol. 207. 309×219mm. ISTC in00136000.

[140X@16@1; GI, Plate 39]



Liber Exodi Capitulũ ·XXi

in lege inuenit sic occasa: ꝗ magis p
hibita fm qd dr deut· xxiij· c· ſſ non
erit meretrix de filiabꝫ isrl· Jdo alr
vid² fm ra·sa· (Si ista tria nõ fece
rint) q̃ p̃dicta fuit·s· q nõ accepit ca
vporẽ nõ de cõcubina: ꝗ de ancilla
nec filio suo: nec airauit ad ea rotõ
ptionẽ mõ p̃dicto (eg·vedicl grat·)
nõ solũ anno septio remissionis: ꝗ
etiã añ si in ea appeãt sigꝫ puberta
tis q̃ fuit ortꝫ pilozꝫ a mẽstruozꝫ· qr
tũc est apta ad capiendũ· a sic pt;
qd p̃dictũ est·s· q pueile habebant
plures vias exaũdi de fuitute q̃ ma
scuti q̃ solũ exibãt anno septimo re
missionis (Qui pauperit ꝛc) Hic
cõtr regulat irascibilis in lesiomb9
q̃ hñt rõem vindicatã· Et pº in pso
na sua· Secũdo in re ab eo possessa ·
ibi· Si bos cornu pauperit· Cir pm
dr (Qui pauperit boem volens oc
cidere) ꝗ accipit paupio p occasione
qr si nõ occidere pauperẽto: q̃ nus tñ
hrẽt velle occidẽdi· nõ ppt ꝗ punire
tur morte: ꝗ alia pẽa· vñ in hebreo
hz²· Pauperẽs boiema mort·s· paup
pus (morte moriat)·s· pauperẽs Sed
ly wolẽs in posito nrõ trãslatõis de
terminat modũ pauperẽdi· cũ·s· fit a
ppositoa nõ a casu ppt qd de casua
li ꝗdi² (Qui aut nõ est insidiat9)
·s· querẽs mortẽ pauperẽ· qr erat imi
micus eius (a deo illũ tradidit ĩ ma
nus eius)·v· ex cã nobis occulta de9
permisit cũ intrnsica casualta oĩno pre
perit officiũ ministrãdi in altari in
quo casu erat exspectandũ oplem
tum mĩsterij: q̃ pacto trahebat ad
mortẽ· ppt reuerentiã eius sacri loc
erat ibi refugiũ aliqꝫ casibꝫ ite q̃s
erat homicidiũ gẽtilis vt dictũ est
ꝗ nõ indei: ppt qd ioab ibi refugiẽs
nõ euasit mortẽ· qr p inductiã a ĩ
fidias interfecerat duos iudeos·s· ab
nera amasam· vt hz²· iij· reg· ij· ca·
(Qui pauperit prẽm suũ aut mrẽ
tur) Sed; doctores nrõs a hebraicos
nõ intelligit de pauperẽ leui· qr p
ter ipam filiꝫ nõ dẽbat morꝫ ꝗ ali
ter punir: vñ dicit ra·sa· q̃ nisi ex
pauperẽ fiat effusio sãguinis vtli
uor nõ incurrit pena mortis· intelli
git etiã de pauperẽte a posito non a
casu: nec etiã ex ioco (Qui furatus
fuerit boiem a vẽdiderit cũ) ita q ad
incurrendũ penã mortis vtrũq̃ req̃
ritur·s· furtũ a vendicio fm exposito
res nrõs qr si inueniat antrq̃ vẽdi
derit· pena furti est vt reddat duos
boies ad seruiendũ· vt dicit· Et ꝗ
nõ accipitur de loco isto: ꝗ de loco qd
habet ca°· segnti· vbi dr q p furto
alia rẽ restituit duplũ· a sic ocu
dunt ꝗ a filiꝫ sa·sa· dicit q etia; p
solo furto bois incurrit pena mortis
a ꝗ trahit aliquatr ex textu· quia
vbi trãslatio nrã dicit sic (Qui furã
tus fuerit a vẽdiderit cũ occidit9 nocte
morte moriat²) Jn hebreo hz² sic fur
bois a vendẽs cũ a inuẽtus in manu

（10. Fol. 207r：部分拡大）

フランシスコ会士リールのニコラウス（*c.* 1270–1349）による『全聖書註解』は、中世後期ヨーロッパで最も影響力を持った。本書は印刷史上初の聖書釈義書である。著者は聖書の本文がヘブライ語原文から離れている現状を嘆き、執筆に際してはヘブライ語を習得し、複数の写本にあたった。

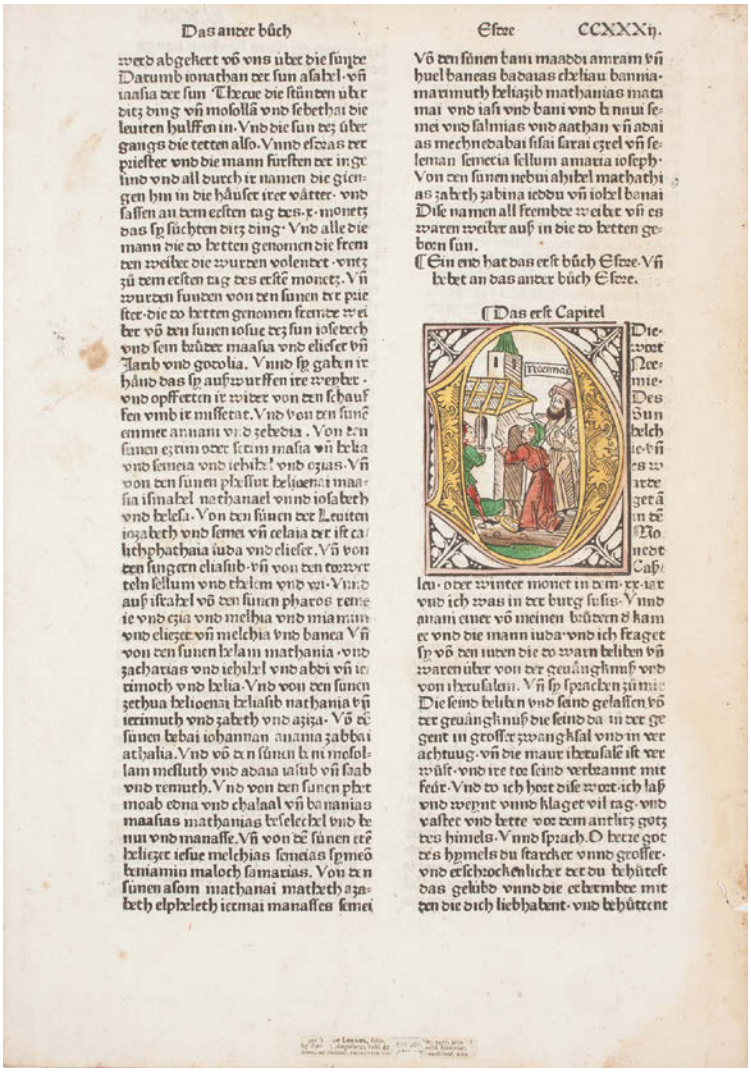
本書を印刷したウルリヒ・ツェル（*d.*1503）は、マインツのフストとシェーファーの印刷所（展示番号4, 5）で働いていた。だが同地の政治的混乱からの逃避であろうか、1464年にケルンへと移り、大学に所属することで市民権を得た。ツェルはケルン初の印刷所を開設すると、キケロ（Marcus Tulius Cicero; B.C. 106–B.C. 43）の『義務について』（1465年頃）を皮切りに、小型4つ折判の古典作品や神学書などを次々と刊行した。ケルン移住後もフストとシェーファーの印刷所との関係を続け、彼らの支店のような機能も果たしたといわれる。特に最初期のツェルの印字面にはシェーファーの、とりわけ「48行聖書」の活字の影響が色濃くみられる（Geldner, vol. 1, pp. 87–89）。

（ST）

11.「聖書（ドイツ語）」（アウグスブルク：［ギュンター・ツァイナー］，1477年）（零葉）

Biblia [German](Augsburg: [Günther Zainer], 1477). Fol. 233 of vol. 1. 375×262mm. BMC II 324; ISTC ib00629000; PP 40.

［140X@19/22］



Das ander bůch　　Esre　　CCXXXij.

werd abgekert vō vns über die sůnde
Darumb ionathan der sun asahel · vñ
iaasia der sun · Theue die stůnden über
ditz ding · vñ mosollā vnd sebethai die
leuiten hulffen im · Vnd die sun des über
gangs die tetten also · Vnnd esras der
priester vnd die mann fürsten der inge
lind vnd all durch ir namen die gien
gen hin in die häuser ires vätter · vnd
sassen an dem ersten tag des · x · monetz
das sy süchten ditz ding · Vnd alle die
mann die do hetten genomen die frem
den weiber die wurden volendet · vntz
zů dem ersten tag des erstē monetz · Vñ
wurden funden von den sunen der prie
ster · die do hetten genomen fremde wei
ber vō den sunen iosue des sun iosedech
vnd sein brůder maasia vnd eliezer vñ
Iarib vnd gedalia · Vnnd sy gaben ir
händ das sy auf wurffen ire weyber ·
vnd opfferten ir wider von den schauf
fen vmb ir missetat · Vnd von den sunē
emmer annam vñ zebedia · Von den
sunen ezrim oder sedim masia vñ helia
vnd semeia vnd iehiel vnd ozias · Vñ
von den sunen phessur helioenai maa
sia isinahel nathanael vnnd iosabeth
vnd helesa · Von den sunen der Leuiten
iozabeth vnd semei vñ celaia der ist ca
liehphathaia iuda vnd eliezer · Vñ von
den sungern eliasib · vñ von den tœwer
teln sellum vnd thelem vnd vri · Vnnd
auß israhel vō den sunen pharos reme
ie vnd ezia vnd melhia vnd miamin
vnd eliezer vñ melchia vnd banea · Vñ
von den sunen helam mathania · vnd
zacharias vnd iehiel vnd abdi vñ ie
rimoth vnd helia · Vnd von den sunen
zethua helioenai heliasib nathania vñ
ierimuth vnd zabeth vnd aziza · Vō de
sunen hebai iohannan anania zabbai
athalia · Vnd vō den sunen bani mosol
lam mesluth vnd adaia iasub vñ saab
vnd remuth · Vnd von den sunen phet
moab edna vnd chalaal vñ banaias
maasias mathanias beselechel vnd be
nui vnd manasse · Vñ von dē sunen erē
heliezer iesue melchias semeias symeō
benjamin maloch samarias · Von den
sunen asom mathanai matheth aza
beth elpheleth ierimai manasses semei

Vō den sunen bani maaddi amram vñ
huel baneas badaias cheliau bannia
marimuth heliazib mathanias mata
mai vnd iasi vnd bani vnd benui se
mei vnd salmias vnd aathan vñ adai
as mechnedabai sisai sarai ezrel vñ se
leman semeria sellum amaria ioseph ·
Von den sunen nebui ahiel mathathi
as zabeth zabina ieddu vñ iohel banai
Dise namen all frembder weiber vñ es
waren weiber auß in die do hetten ge
boren sun.

¶ Sin end hat das erst bůch Esre · Vñ
hebet an das ander bůch Esre.

¶ Das erst Capitel

Die
wort
Ner
mie
Des
Sun
helch
ie · vñ
es w
rder
zet ā
in dē
Mo
nedt
Cas
leu · oder winter monet in dem · xx · iar
vnd ich was in der burg susis · Vnnd
ananj einer vō meinen brůdern d̄ kam
er vnd die mann iuda · vnd ich fraget
sy vō den iuden die do warn beliben vñ
waren über von der gefängknuß vnd
von iherusalem. Vñ sy sprachen zů mir
Die seind beliben vnd seind gelassen vō
der gefängknuß die seind da in der ge
gent in grosser zwangksal vnd in ver
achtung · vñ die maur iherusalē ist ver
wüst · vnd ire tœr seind verbrannt mit
feur · Vnd do ich hort dise wort · ich laß
vnd weynt vnnd klaget vil tag · vnd
vastet vnd bette vor dem antlitz gotz
des himels · Vnnd sprach · O herre got
des hymels du starcher vnnd grosser ·
vnd erschrockenlicher der du behütest
das gelübd vnnd die erbermbde mit
den die dich liebhabent · vnd behüttest

（11. Fol. 233v of vol. 1）

ギュンター・ツァイナー（*d.* 1478）はヨハン・メンテリン（展示番号7）のもとで修行した後、1467年にアウグスブルクに移り、翌年には同地で最初の印刷工房を開設したとされる。フストとシェーファーの「マインツ詩篇」（展示番号4, 5）以外では、頭文字を印刷した最初の印刷業者ともいわれる。ドイツでゴシック体が主流の時にローマン体を導入したことで知られるが、晩年にはゴシック体も多く採用している。また挿絵入り本を数多く刊行したことでも名高い。中世後期のヨーロッパで絶大なる人気を博したヤコブス・デ・ヴォラギネ（Jacobus de Voragine; 1230?–98）の『黄金伝説』を挿絵入りで初めて印刷したのもツァイナーである（Geldner, vol. 1, pp. 132–37）。本零葉もツェルの挿絵入り本の代表作で、ドイツ語訳聖書（第2版；初版は1474年頃）からの一葉。

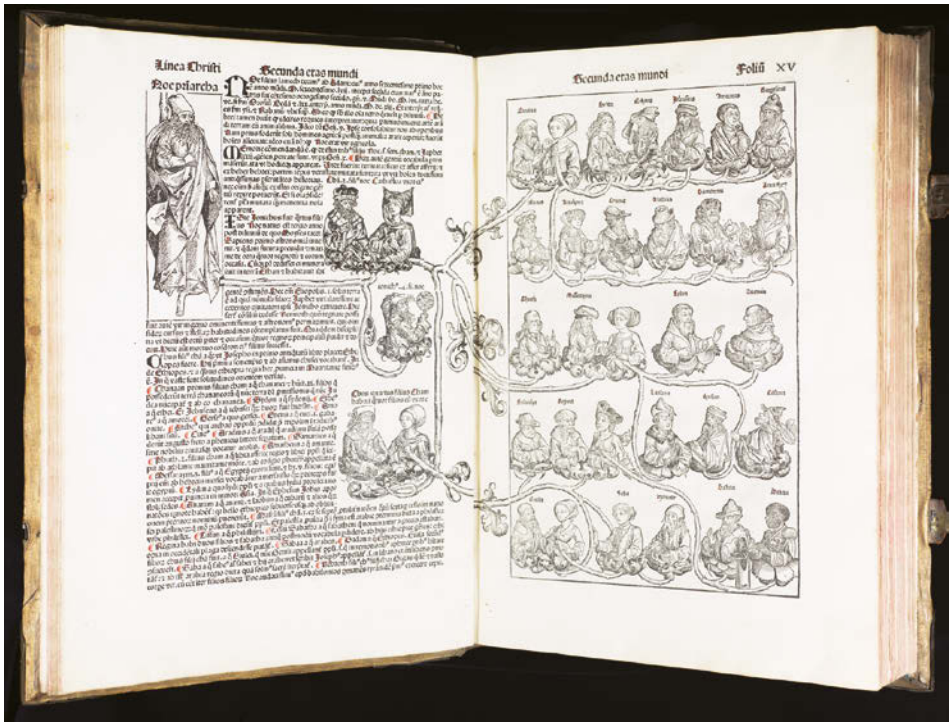
（ST）

12. ハルトマン・シェーデル『ニュルンベルク年代記』（ニュルンベルク：アントン・コーベルガー，1493年）

Hartmann Schedel. *Liber chronicarum* (Nuremberg: Anton Koberger, 12 July 1493). 326 leaves, wanting fols 267 and 274. 451×300mm. Als 11; BMC II 437; ISTC is00307000; PP 43.

［永青文庫所蔵コルディエ文庫 A-6-1］

（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫寄託）



（12. Fols. 34v–35r）

『ニュルンベルク年代記』と呼ばれるこの世界年代記は、天地創造から1490年代初頭までの歴史を扱う。展示番号9と同じく、印刷術を駆使した初期印刷本の傑作である。著者のハルトマン・シェーデル（1440–1514）はニュルンベルク在住の医師・人文主義者で、同地の商人の依頼を受け、中世から同時代までのさまざまな歴史書をもとに本書を編纂した。最初にラテン語版が刊行され、その後すぐにドイツ語訳も出版された。両版ともに木版挿絵が聖書の世界や各地の様子を生き生きと描き、その数およそ645点にものぼる。同時代にニュルンベルクで活躍した絵師たちが手がけ、若き日のアルブレヒト・デューラー（Albrecht Dürer; 1471–1528）も手伝ったとされる。

印刷を担当したアントン・コーベルガー（*c.* 1440/1445–1513）は、ニュルンベルクで2番目の印刷所を設立し、当時ドイツで最大規模の出版事業を展開させた。15世紀後半にドイツ語圏で人気を博したテクストゥラ体の一種、シュヴァバッハー体活字をよく用いた。本書もシュヴァバッハー体活字で印刷されている。この活字は16世紀に入るとフラクトゥール体へと発展していく（展示番号40–42）。また本書は印刷工程について詳細な文書が現存する稀有な例で、ウィルソンによる秀逸な研究書がある。

本書は財団法人永青文庫所蔵コルディエ文庫の一書で、現在は慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に寄託されている。

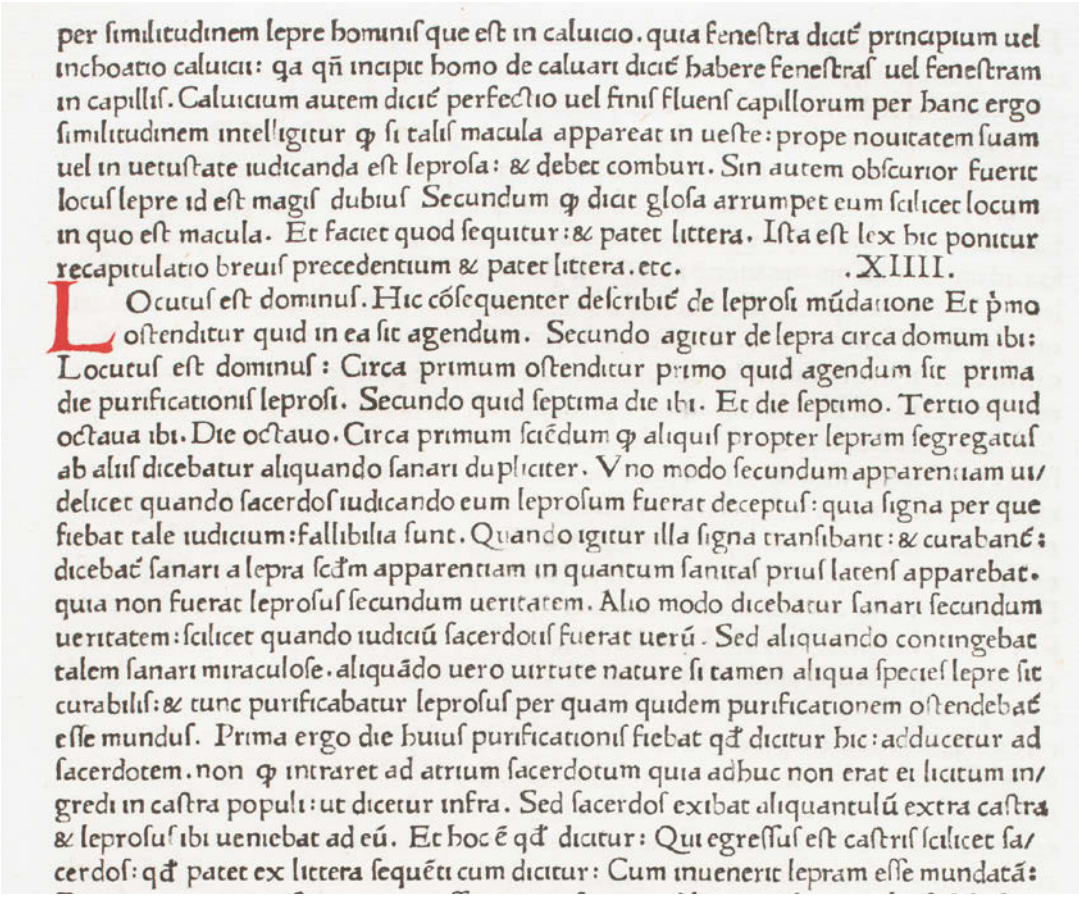
（ST）

V. ローマ、ヴェネツィア

13. リールのニコラウス『全聖書註解』（ローマ：コンラート・シュヴァインハイムとアルノルト・パンナルツ，1471–72年）（零葉）

Nicolaus de Lyra. *Postilla super totam Bibliam* (Rome: Conradus Sweynheym and Arnoldus Pannartz, 1471–72). Fol. 152 of vol. 1. 374×264mm. BMC IV 14; ISTC in00131000.

[1LB@1255]



per ſimilitudinem lepre hominiſ que eſt in caluicio. quia feneſtra dicit principium uel inchoatio caluicii: qa qñ incipit homo de caluari dicit habere feneſtraſ uel feneſtram in capilliſ. Caluicium autem dicit perfectio uel finiſ fluenſ capillorum per hanc ergo ſimilitudinem intelligitur ꝙ ſi taliſ macula appareat in ueſte: prope nouitatem ſuam uel in uetuſtate iudicanda eſt leproſa: & debet comburi. Sin autem obſcurior fuerit locuſ lepre id eſt magiſ dubiuſ Secundum ꝙ dicit gloſa arrumpet eum ſcilicet locum in quo eſt macula. Et faciet quod ſequitur: & patet littera. Iſta eſt lex hic ponitur recapitulatio breuiſ precedentium & patet littera. etc. .XIIII.

LOcutuſ eſt dominuſ. Hic cõſequenter deſcribit de leproſi mũdatione Et ꝑmo oſtenditur quid in ea ſit agendum. Secundo agitur de lepra circa domum ibi: Locutuſ eſt dominuſ: Circa primum oſtenditur primo quid agendum ſit prima die purificationiſ leproſi. Secundo quid ſeptima die ibi. Et die ſeptimo. Tertio quid octaua ibi. Die octauo. Circa primum ſciẽdum ꝙ aliquiſ propter lepram ſegregatuſ ab aliiſ dicebatur aliquando ſanari dupliciter. Vno modo ſecundum apparentiam uidelicet quando ſacerdoſ iudicando eum leproſum fuerat deceptuſ: quia ſigna per que fiebat tale iudicium: fallibilia ſunt. Quando igitur illa ſigna tranſibant: & curabant: dicebat ſanari a lepra ſcd̃m apparentiam in quantum ſanitaſ priuſ latenſ apparebat. quia non fuerat leproſuſ ſecundum ueritatem. Alio modo dicebatur ſanari ſecundum ueritatem: ſcilicet quando iudiciũ ſacerdotiſ fuerat uerũ. Sed aliquando contingebat talem ſanari miraculoſe. aliquãdo uero uirtute nature ſi tamen aliqua ſpecieſ lepre ſit curabiliſ: & tunc purificabatur leproſuſ per quam quidem purificationem oſtendebat eſſe munduſ. Prima ergo die huiuſ purificationiſ fiebat qd̃ dicitur hic: adducetur ad ſacerdotem. non ꝙ intraret ad atrium ſacerdotum quia adhuc non erat ei licitum ingredi in caſtra populi: ut dicetur infra. Sed ſacerdoſ exibat aliquantulũ extra caſtra & leproſuſ ibi ueniebat ad eũ. Et hoc ẽ qd̃ dicitur: Qui egreſſuſ eſt caſtriſ ſcilicet ſacerdoſ: qd̃ patet ex littera ſequẽti cum dicitur: Cum inuenerit lepram eſſe mundatã:

（13. Fol. 152r of vol. 1：部分拡大）

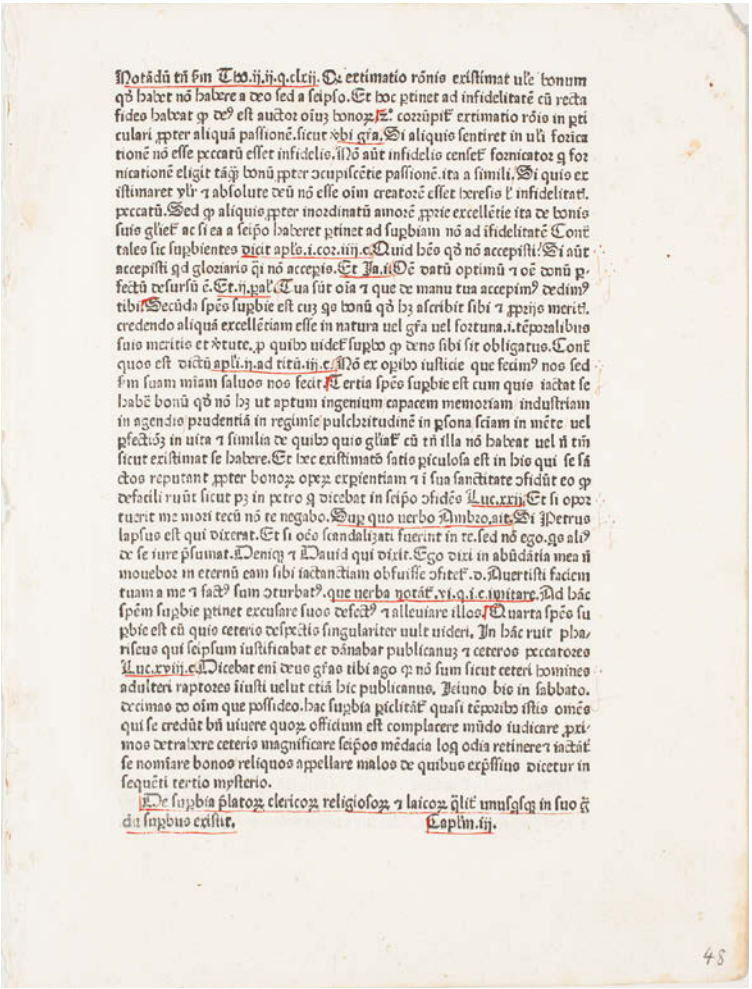
イタリアの活字文化は、マインツ出身のコンラート・シュヴァインハイム（*d.* 1477）とケルン出身のアルノルト・パンナルツ（*d.* 1466）によってもたらされた。前者はフストとシェーファー（展示番号4, 5）から印刷術の手ほどきを受けたともいわれる。1465年にスビアコ修道院でイタリア初となる印刷所を立ち上げると、キケロなどの古典作品4点を印刷した。そこで彼らが制作した「スビアコ活字」は、カロリング朝小文字書体に範をとった、文字幅のやや広いセミゴシック体活字として名高い。

ふたりは1467年にローマへと移ると、教父の著作や多様な古典作家の著作などを新しいローマン体で印刷した。展示番号13はその一例で、リールのニコラウス『全聖書註解』（展示番号10）初版第1巻の不完全本をバラしたものを、イギリスの書店から入手したアメリカの書店ピラージュ（Phillip J. Pirages）が制作および出版した零葉本に収まる1枚である（McMinnville）。（ST）

14. ロベルト・カラッチョロ・ダ・レッチェ『悔い改めに関する四旬節の説教集』（[ヴェネツィア]：ヴェンデリン・フォン・シュパイアー，1473年）（零葉）

Robertus Caracciolus. *Sermones quadragesimales de poenitentia* ([Venice]: Vindelinus de Spira, [before 28 July] 1473). 260×192mm. BMC V 163; ISTC ic00172000.

[140X@15@2@1; II, Plate 48]



Notãdũ tñ ꝑm Tho.ij.ij.q.clxij. De ertimatio rõnis existimat ulẽ bonum qd habet nõ habere a deo sed a seipso. Et hoc ptinet ad infidelitatẽ cũ recta fides habeat ꝙ de⁹ est auctor oiuz bonoꝝ. Et corrũpit ertimatio rõis in pticulari ꝓpter aliquã passionẽ. sicut ꝛbi gra. Si aliquis sentiret in uũ fornicationẽ nõ esse peccatũ esset infidelis. ĩ nõ aũt infidelis censet fornicator q fornicationẽ eligit tãq̃ bonũ ꝓpter ocupiscẽtie passionẽ. ita a simili. Si quis existimaret ylr ⁊ absolute deũ nõ esse oim creatorẽ esset heresis ꝯ infidelitat. peccatũ. Sed ꝙ aliquis ꝓter inordinatũ amorẽ ꝓprie excellẽtie ita de bonis suis gliet ac si ea a seipso haberet ptinet ad supbiam nõ ad ifidelitatẽ Conte tales sic supbientes dicit aplꝰ. i. cor. iij. c. Quid hẽs qd nõ accepisti? Si aũt accepisti qd gloriaris q̃ nõ accepis. Et Ja. i. De datũ optimũ ⁊ de bonũ perfectũ desursũ ẽ. Et. ij. pal'. Tua sũt oia ⁊ que de manu tua accepim⁹ dedim⁹ tibi. Secũda spẽs supbie est cuz qs bonũ qd hz ascribit sibi ⁊ ꝓprijs meritis. credendo aliquã excellẽtiam esse in natura uel gra uel fortuna. i. tẽporalibus suis meritis et ꝛtute. p quibus uidet supbus ꝙ deus sibi sit obligatus. Conte quos est dictũ aplũ. ij. ad titũ. iij. c. Nõ ex opibus iustitie que fecim⁹ nos sed ꝑm suam miam saluos nos fecit. Tertia spẽs supbie est cum quis iactat se habẽ bonũ qd nõ hz ut aptum ingenium capacem memoriam industriam in agendis prudentiã in regimine pulchritudinẽ in ꝓsona sciam in mẽte uel ꝓfectiõz in uita ⁊ similia de quibus quis gliat cũ tñ illa nõ habeat uel ñ tñ sicut existimat se habere. Et hec existimatio satis piculosa est in hio qui se sãctos reputant ꝓpter bonoꝝ opeꝝ experientiam ⁊ i sua sanctitate ofidũt eo ꝙ defacili ruũt sicut pz in petro q dicebat in seipso ofidẽs Luc. xxii. Et si oportuerit me mori tecũ nõ te negabo. Sup quo uerbo Ambro. ait. Si Petrus lapsus est qui dixerat. Et si oes scandalizati fuerint in te. sed nõ ego. qs alio de se iure ꝓsumat. Denicq ⁊ David qui dixit. Ego dixi in abũdãtia mea ñ moueb⁹ in eternũ eam sibi iactãtiam obfuisse ofitet. v. Auertisti faciem tuam a me ⁊ fact⁹ sum ꝛturbat⁹. que uerba notãt. xi. q. i. c. timitare. Ad hãc spẽm supbie ptinet excusare suos defect⁹ ⁊ alleuiare illos. Quarta spẽs supbie est cũ quis ceteris despctis singulariter uult uideri. In hãc ruit pharisseus qui seipsum iustificabat et dãnabat publicanuz ⁊ ceteros peccatores Luc. xviii. c. Dicebat enim deus gras tibi ago q̃ nõ sum sicut ceteri homines adulteri raptores iusti uelut ctiã hic publicanus. Ieiuno bis in sabbato. decimas do oim que possideo. hac supbia plicitat quasi tẽporibus istis omes qui se credũt bñ uiuere quoꝝ officium est complacere mũdo iudicare ꝓximos detrahere ceteris magnificare seipos mẽdacia loq odia retinere ⁊ iactãt se nomiare bonos reliquos appellare malos de quibus ecpsmo dicetur in sequẽti tertio mysterio.

De supbia platoꝝ clericoꝝ religiosoꝝ ⁊ laicoꝝ gliet unusqsq̃ in suo gẽ da supbus existit. Capl'm. iij.

45

（14. II, Plate 48）

ビザンツ帝国が崩壊する15世紀、ヴェネツィアには多くの学者たちが亡命してきた。それにともない印刷の需要が高まるこの地で、ドイツ人ヨハン・フォン・シュパイアー（Johann von Speyer; *d.* 1470）が、1469年に初の印刷所を開設し、新たに制作したローマン体活字を用いて印刷を始めた。この活字制作にはヴェネツィアで2番目の印刷所を開設し、ローマン体活字を洗練させたことで名高いニコラ・ジャンソン（展示番号15）が関与したともいわれる（雪嶋 2002, p. 132）。その翌年、兄ヨハンがこの世を去ったため、弟のヴェンデリンが印刷所を引き継いだ。本零葉は弟ヴェンデリンが印行したもので、当時説教師として名高かったフランシスコ会士ロベルト・カラッチョロ・ダ・レッチェ（*c.* 1425–95）の説教集からの一葉である。ヘーブラー編の零葉集（イタリア）所収。

（ST）

15. プルタルコス『英雄伝』（ヴェネツィア：ニコラ・ジャンソン，1478年）

Plutarchus. *Vitae illustrium virorum* (Venice: Nicolaus Jenson, 2 Jan. 1478). 2 volumes; vol. 1: 233 of 234 leaves, lacking a1; vol. 2: 226 leaves. 423×260mm. BMC V 178; IJL2 307; IKUL 029; ISTC ip00832000; RA 1; PP 95; T 24; 義塾図書館9.

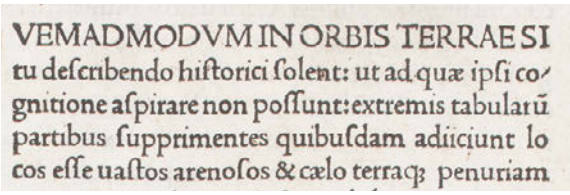
［142X@51@2@1～2］

紀元1世紀の著述家プルタルコスがギリシア語で著した『英雄伝』は、ギリシアとローマの重要な哲学者や政治家46人の評伝で、生涯に類似点が認められるギリシア人とローマ人を1人ずつ組み合わせて著す「対比列伝」という形式が用いられている。1470年にジョバンニ・カンパーノ（Giovanni Antonio Campano）によるラテン語完訳が刊行され、本書はそれに続いて1478年に出版されたクリストフォロ・ランディーノによるラテン語訳である。その後、16世紀にはヨーロッパ各国語に訳され、ルネサンス期に最も読まれた古典文学のひとつとなった。

本書を印行したニコラ・ジャンソン（*c*.1435–80）はフランス人で、マインツで印刷術を学ぶと1470年からヴェネツィアで印刷業を始め、大いに成功を収めた。ジャンソンは、ヒューマニスト書体を手本として美しいローマン体活字を作り出し、それはアルド・マヌーツィオにも受け継がれ（展示番号27–29）、さらに16世紀フランスの活字黄金期（展示番号35–39）に洗練されてゆくことになる。また19世紀のイギリスではウィリアム・モリスのケルムスコット・プレスの手本ともなった。本書にローマン体活字のひとつの完成形を見ることができるだろう。

インキュナブラでは、章の冒頭を飾る大型のイニシャルや各章のタイトル等は、本文が印刷された後に専門の写字生や挿絵画家によって手書きされることが多い。本書の巻頭のページには、手書きの装飾が可能なように、広い欄外余白に加えて頭文字のスペースが14行分も確保されている。金で彩色されたイニシャル‘Q’を中心として、複雑な蔓模様の装飾が三方から印字面を取り囲んでいる。下部には、本書を所有していたコンコルディア司教レオネッロ・キエレガティ（Leonello Chieregati）の紋章が描かれている。この白い蔓模様はインキュナブラの装飾の代表的なパターンで、1470年代にヴェネツィアとローマで印行された書物を中心に使われている。

（TM）


VEMADMODVM IN ORBIS TERRAE SI
tu deſcribendo hiſtorici ſolent: ut ad quæ ipſi co⁄
gnitione aſpirare non poſſunt: extremis tabularũ
partibus ſupprimentes quibuſdam adiiciunt lo
cos eſſe uaſtos arenoſos & cælo terraq; penuriam

（15–1. Sig. a2r：部分拡大）

I

THESEI VITA PER LAPVM FLORENTINVM EX PLVTARCO GRAECO IN LATINVM VERSA.

QVEMADMODVM IN ORBIS TERRAE SI tu describendo historici solent: ut ad quæ ipsi cognitione aspirare non possunt: extremis tabularũ partibus supprimentes quibusdam adiiciunt locos esse uastos arenosos & cælo terraq; penuriam aquarum: aut limum insuperabilem: aut mõtem stiticum: aut astrictum frigore pontum: ita & nobis in hac uirorum collatione perpetua rerũ historia quantũ probabili oratione assequi potuimus: de his quos supra memorauimus uiris tempora percurrẽtibus uere licuit affirmare. Quæ uero antiquiora ac uetustiora sunt: tragica & monstruosa poetæ & fabulosi rerum scriptores occupant: nec ultra fidem ullam nec certitudinem præse ferunt. Cum igitur Lycurgi legũ latoris & Nume regis res gestas litteris mandauerimus: haud ab re fuerit ad Romulum orationem conuertere: quando historia ipsa ad eius tempora q̃ prope accessimus. Sed mihi diu cogitãti huic uiro (ut inquit Aeschilus) quis conueniret: quem illi opponerem: quis dignus secum in comparatione cõiungi: uisum est tandem faciendum esse: ut a quo celebrata Atheniensium ciuitas amplificata est: eum cum gloriosissimæ atq; inuictissimæ urbis Romæ parente conferrem & compararem. Licet autem nobis reiectis fabulis ad ipsam claram historiæ lucem & ueritatem accedere. Quod sicubi necessitas coget nos ab hac parumper digressos: ad id quod uerisimile sit conferre: a quo fortasse historia abhorreat: nec admittat ullum cũ probabilitate cõmertium: æquis auditoribus opus erit: quiq; benigne & humane initium orationis exaudiant atq; approbent. Videtur igitur Theseus multis de causis Romulo q̃simillimus extitisse. Ambo.n.cum spurii & obscuri forent: existimati sunt a Diis imortalibus procreati esse. Ambo ẽt belicosi ac manu strenui: hoc quidem omnes scimus: & quanta maxime fieri potuit prudẽtia præstiterunt. ex duabus quoq; clarissimis ciuitatibus Roma & Athenis: alteram hic condidit: alteram ille nouis colonis compleuit. Fœminarum præterea raptus de utroq; feruntur: nec eorum quisq̃ domesticam cladem & crimina suorum effugit: sed ad postremum ambo dicuntur in inuidiam & offensionem ciuium incidisse. Siquid igitur ex his quæ minus tragice dici uidentur ad ueritatem conducit: Thesei quidem paternum genus in erechtheum ac primos indigenas referebatur: maternum uero in Pelopem. Pelops enim non opibus magis & copiis q̃ natorum sobole cæterorum Peloponẽsi regum potentissimus fuit: cũ filias permultas optimatibus in matrimonio locasset: multosq; in rebusp. passim principes dispersisset: e quibus unus Pittheus extitit Thesei maternus auus: qui urbem nõ magnam trœzeniorum incoluit: is qui per id temporis omnibus sapientia & eloquentia plurimum præstare putabatur. Fuit eius sapientiæ ut uidetur talis quædam uis ac forma: qualem complexus Hesiodus cum sua scripta sententiis plurimis refersisset: sapiens imprimis est habitus: atq; eam unam ex Pitthei sententiis fuisse memorant: Esto satis comiti merces promissa laboris. Cuius rei Aristoteles philosophus ẽ auctor. Euripides etiam cum Hippolytum casti Pitthei disciplinam appellet: hanc eandẽ de Pittheo opinionem perspicue attestari uidetur. Aegeo uero cum filiis indigeret: uulgatum illud oraculum Pythiam uatem cecinisse ferũt: quo iussit ne cum muliere coiret: priusq̃ Athenas accederet. quod cum non satis aperte dixisse uideretur: in Trœzenem profectus: de Dei responso cum Pittheo communicauit: quod huiusmodi fuit: Neue

(15–2. Sig. a2r of vol. 1)

16. ユークリッド『幾何学原論』（ヴェネツィア：エアハルト・ラートドルト，1482年）
Euclides. *Elementa geometriae* (Venice: Erhard Ratdolt, 25 May 1482). 138 leaves. 289×206mm.
BMC V 285; IJL2 164; IKUL 025; ISTC ie00113000; PMM 23; PP 96; 西洋活字 A5.
［120X@766@1］

Preclarissimus liber elementorum Euclidis perspi/
cacissimi: in artem Geometrie incipit quasi decisissime:

Punctus est cuius ps nõ est. ¶ Linea est lõgitudo sine latitudine cui⁹ quidẽ ex/
tremitates sũt duo pũcta. ¶ Linea recta
ẽ ab vno pũcto ad aliũ breuissima extẽ/
sio ĩ extremitates suas vtrũq; eorũ reci
piens. ¶ Supficies ẽ q̃ lõgitudinẽ ⁊ lati
tudinẽ nõ hꝫ: cui⁹ termini quidẽ sũt linee.
¶ Supficies plana ẽ ab vna linea ad a/
liã extẽsio ĩ extremitates suas recipiẽs
¶ Angulus planus ẽ duarũ linearũ al/
ternus ꝓtactus: quarũ expãsio ẽ sup sup/
ficiẽ applicatio q̃ nõ directa. ¶ Quãdo aut angulum ꝓtinẽt due
linee recte rectilineũ⁹ angulus noiaf. ¶ Qn̄ recta linea sup rectã
steterit duoq; anguli vtrobiq; fuerit eq̃les: eorũ vterq; rectus erit
¶ Lineaq; linee supstãs ei cui supstat ꝑpendicularis vocaf. ¶ An
gulus vero qui recto maior ẽ obtusus dicif. ¶ Angul⁹ vero minor re
cto acut⁹ appellaf. ¶ Termin⁹ ẽ qd vninscuiusq; finis ẽ. ¶ Figura
ẽ q̃ termino vel termis ꝓtinef. ¶ Circul⁹ ẽ figura plana vna q̃dem li/
nea ꝓtẽta: q̃ circũferentia noiaf: in cui⁹ medio ptict⁹ ẽ: a quo oẽs
linee recte ad circũferẽtiã exeũtes sibiũicez iut equales. Et hic
quidẽ pũct⁹ cẽtrũ circuli dr. ¶ Diameter circuli ẽ linea recta que
sup ei⁹ cẽtr̃ trãsiens extremitatesq; suas circũferẽtie applicans
circulũ ĩ duo media diuidit. ¶ Semicirculus ẽ figura plana dia/
metro circuli ⁊ medietate circũferentie ꝓtenta. ¶ Porro circu/
li ẽ figura plana recta linea ⁊ parte circũferẽtie ꝓtẽta: lentiircu/
lo quidẽ aut maior aut minor. ¶ Rectilinee figure sũt q̃ rectis li/
neis cõtinent quarũ quedã trilatere q̃ trib⁹ rectis lineis: quedã
quadrilatere q̃ q̃tuor rectis lineis, q̃dã mltilatere que pluribus
q̃q; quatuor rectis lineis continent. ¶ Figurarũ trilaterarũ: alia
est triangulus hãs tria latera equalia. Alia triangulus duo hãs
eq̃lia latera. Alia triangulus trũ inequalium laterũ. Hax iterũ
alia est orthogoniũ: vnũ. ſ. rectum angulum habens. Alia ẽ am/
bligonium aliquem obtusum angulum habens. Alia est oxigoni
um: in qua tres anguli sunt acuti. ¶ Figurarũ autẽ quadrilaterax
Alia est q̃dratum quod est equilaterũ atq; rectangulũ. Alia est
rettragon⁹ long⁹: q̃ est figura rectangula: sed equilatera non est.
Alia est helmayym: que est equilatera: sed rectangula non est.

De principijs q̃ se notis: et primo de diffini
tionibus earundem.

Linea
Punctus
superficies plana.
Angulus planus
Angulus rectus
Circulus
minus
Diameter
Semicirculus
Porrio maior
minor
Equilaterus
Triangulus
Triangulus
Orthogonius
ambligonius
oxigonius
Tetragon⁹ lõg⁹
Quadratus
helmayym

（16: Sig. a2r）

アウグスブルク出身の印刷者エアハルト・ラートドルト（1442–1528）は、1474年から1476年の間ニュルンベルクに滞在し、数学者レギオモンタヌス（Regiomontanus; 1436–76）と協働した。この経験が本書を含む一連の科学書出版として結実する。ヴェネツィアに移住すると高度の印刷技術を身につけ、この時期にニコラ・ジャンソン（展示番号15）に出会ったとする学者もいる。1486年にアウグスブルクに戻ると16世紀に入っても精力的に印刷を続けた。

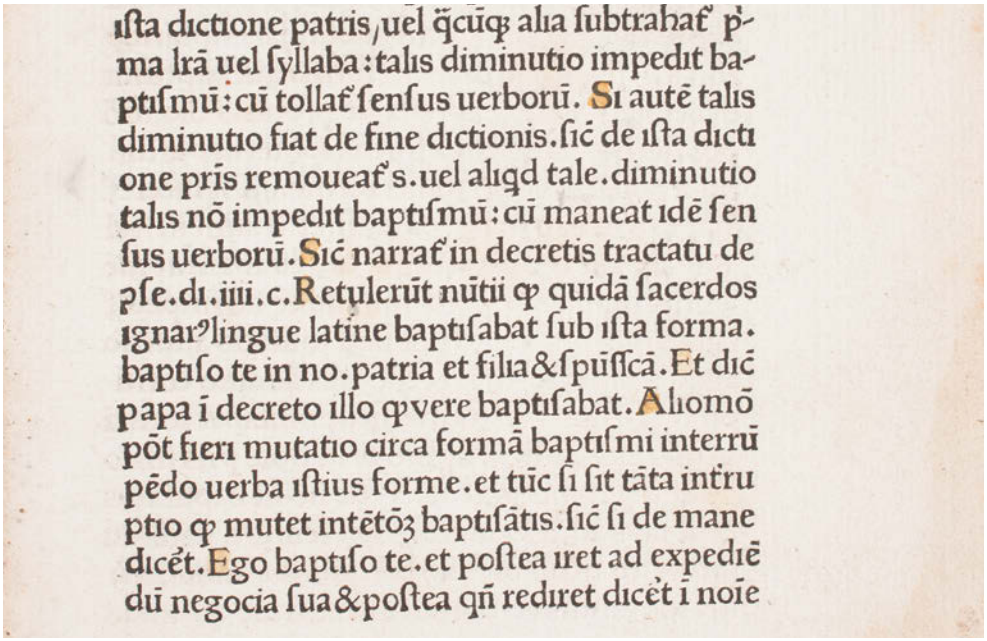
展示した『幾何学原論』は印刷史上の初版である。15世紀イタリアで広まっていたゴシック・ロトゥンダ体［ドイツで発展したテクストゥラ体がイタリアへ渡り、簡素化して丸くなった］活字が用いられている。また本書にはアラビア数字が付され、定理を説明するために420もの幾何学図形が印刷された。冒頭の献辞でラートドルトは、幾何学図形を印刷で再現する方法がなかったため一念発起し、苦慮しながらも図形と文字を同一ページに印刷する方法を編み出したと述べている。幾何学図形の印刷は木版説が主流だったが、近年では金属片説や金属鋳型説などもある。（ST）

VI. パリ

17. ギド・デ・モンテ・ロケリオ『主任司祭の手引き』（パリ：ウルリヒ・ゲーリンク，1478年）（零葉）

Guido de Monte Rochen. *Manipulus curatorum* (Paris: Ulrich Gering, 4 June 1478). 196×133mm. ISTC ig00577000.

［140X@17; WI, Plate 30］


ıſta dıctıone patrıs, uel q̃cūq; alıa ſubtrahat p̄-
ma lrā uel ſyllaba: talıs dımınutıo ımpedıt ba-
ptıſmū: cū tollat ſenſus uerborū. Sı autē talıs
dımınutıo fıat de fıne dıctıonıs. ſıc de ıſta dıctı
one prīs remouea t s. uel alıqd tale. dımınutıo
talıs nō impedıt baptıſmū: cū maneat ıdē ſen
ſus uerborū. Sıc narrat in decretıs tractatu de
ꝓſe. dı. iiii. c. Retulerūt nūtıı q̃ quıdā ſacerdos
ıgnar lıngue latıne baptıſabat ſub ıſta forma.
baptıſo te ın no. patrıa et fılıa & ſpūſſcā. Et dıc
papa ī decreto ıllo q̃ vere baptıſabat. Alıomō
pōt fıerı mutatıo cırca formā baptıſmı interrū
pēdo uerba ıſtıus forme. et tūc ſı ſıt tāta ınterru
ptıo q̃ mutet ıntētōz baptıſātıs. ſıc ſı de mane
dıcet. Ego baptıſo te. et poſtea ıret ad expedıē
dū negocıa ſua & poſtea q̃ redıret dıcet ī noīe

（17. WI, Pate 30：部分拡大）

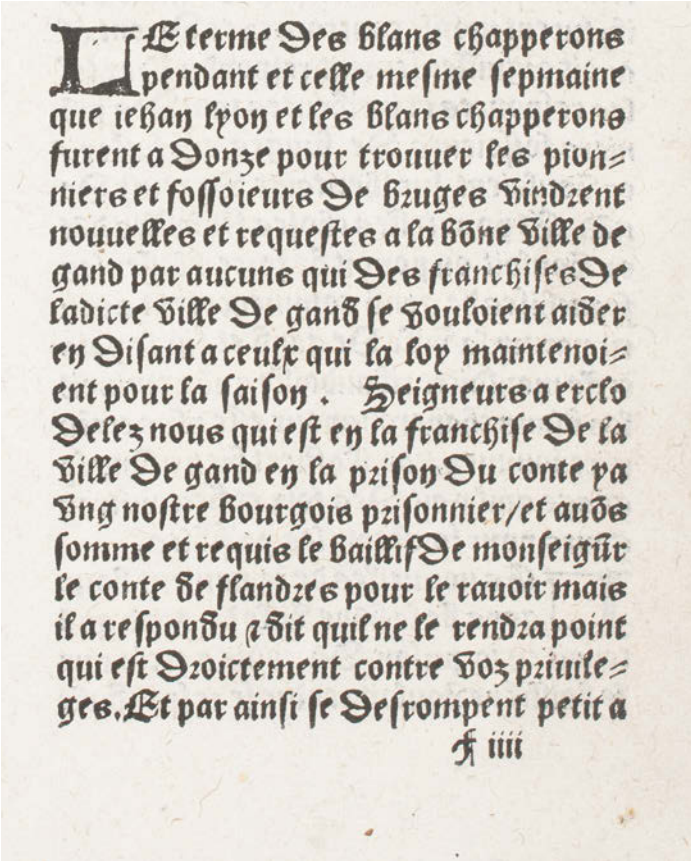
ギョーム・フィシェ（Guillaume Fichet; 1433–*c.* 1480）とヨハン・ハイリーン（Johann Haylin; *c.* 1425–12 March 1496）は、1470年にソルボンヌ大学の一角に印刷工房を設立した時、南ドイツからウルリヒ・ゲーリンク（*d.* 1510）をはじめとする3人の印刷業者を呼び寄せた。フィシェとハイリーンが独立してサン・ジャック通りに工房を構え、後にゲーリンクが独立した後も、彼らの関係は続き、ゲーリンクの手元にはフィシェとハイリーンの活字があったともいわれる。

ヘーブラーによると、本書の印刷にゲーリンクが用いたローマン体活字には、バーゼルと特にパリのローマン体活字の影響が見られる。後にパリの印刷者ギョーム・マニヤル（Guillaume Maynial）と共同印刷を始めた後も、ゲーリンクはこの活字を用い続けた。ヘーブラー零葉集からの一葉。

（ST）

18. ジャン・フロワサール『年代記』（パリ：アントワーヌ・ヴェラール，［1499–1503］）（零葉）
Jean Froissart. *De chroniques de France* (Paris: Antione Vérard, [1499–1503]). Sig. F4r. 330×231mm. BMC VIII 89 (I); ISTC if00323000.

［140X@19@37］


LE terme des blans chapperons
pendant et celle mesme sepmaine
que iehan lyon et les blans chapperons
furent a donze pour trouuer les pion=
niers et fossoieurs de bruges vindrent
nouuelles et requestes a la bõne ville de
gand par aucuns qui des franchises de
ladicte ville de gand se vouloient aider
en disant a ceulx qui la loy maintenoi=
ent pour la saison. Seigneurs a erclo
delez nous qui est en la franchise de la
ville de gand en la prison du conte pa
vng nostre bourgois prisonnier/et auõs
somme et requis le bailliff de monseigñr
le conte de flandres pour le rauoir mais
il a respondu a dit quil ne le rendra point
qui est droictement contre vos priuile=
ges. Et par ainsi se desrompent petit a
f iiii

（18. Sig. F4r：部分拡大）

アントワーヌ・ヴェラールは、1485年から1512年の間に、フランス語の挿絵入りの本を中心に280点以上の書籍を出版した、15世紀のパリを代表する出版者である。本書は、ジャン・フロワサール（Jean Froissart, *c.*1337–*c.*1405）が、1322年から1400年までの出来事を、英仏百年戦争を中心に記した年代記で、15世紀には本文中に細密画が挿入された豪華な挿絵入り写本が作られている。本書においてヴェラールは、バタルド体活字を用いて大型のフォリオ判で印刷することで、手本となった写本の書体とレイアウトを意図的に踏襲している。木版画の版画が各書に挿入されているが、羊皮紙に印刷して、16世紀初期までの刊本でしばしば見られたように、木版画に手彩色を施せば、彩色写本と見まごうばかりの出来映えとなる（Winn 31）。書誌学者フィリップ・ギャスケル（Phillip Gaskell）の旧蔵コレクションより。

（TM）

19.『ローマ式典礼の時禱書』（パリ：フィリップ・ピグーシェとシモン・ヴォートル，1498年）

Les Presentes Heures a lusaige de Rome (Paris: Philippe Pigouchet for Simon Vostre, 16 September 1498). 87 leaves (of 96; lacking e1–8, k8). 199×138mm. ISTC ih00395000; STC (French), p. 271.

［120X@1351@1］

パリで活躍していた印刷業者で版画家のフィリップ・ピグーシェ（Philippe Pigouchet; 1488–1518）と同じく印刷業者のシモン・ヴォートル（Simon Vostre）は、18年にわたって共同し、100点近くの時禱書を刊行している。時禱書は、聖職者が典礼のために用いた「聖務日課書」を簡略化して平信徒用に編纂した祈禱文集で、14，15世紀にもっとも数多く制作された写本である。その安定した人気ゆえに、1471年にアウグスブルクで印行された版を嚆矢として印刷本も刊行されるようになり、特にフランスでは、手書きの細密画のかわりに版画でページを飾った時禱書が、パリやノルマンディ地方の司教座都市ルーアンで矢継ぎ早に版を重ねている。特にルーアンには、手本を写すことで比較的安価に時禱書を制作していた写本制作工房が複数あり、16世紀中期まで、写本の時禱書と印刷のそれはまさに人気を競い合ったのである。

活版印刷された時禱書は、写本の時禱書の安価な代替物であると同時に、写本にはない特徴をもった新ジャンルの書物でもあるという、相反する二面を有している。写本との類似点は、活字の選択をはじめとして本文のパラテクストに顕著である。活字は、同時期にルーアンの工房で制作されていた時禱書写本に使われている、丸みを帯びたゴシック体によく似ている。また、写本の時禱書の慣習に倣って、各節の冒頭には、赤と青の地を交互に用いて、金文字のイニシャルを手書きで入れている。また、本書は紙ではなく高価な羊皮紙に印刷されているが、これも写本に近づける意図がある。

しかし、その一方で、印刷本の時禱書は、手書きの挿絵のかわりに版画を用い、本文と挿絵を一緒に印刷することで、写本と比較して飛躍的に数多くの挿絵を入れることができた。活版印刷術と時を同じくして広く普及した板目木版やエングレーヴィングは、挿絵や装飾頭文字を量産できる新技術であり、全ページ大の挿絵はもとより、さまざまな図像や意匠を描いた小型の版木を組みあわせることで、全てのページを欄外装飾で飾ることを容易に、そして手書きで挿絵を入れる写本の場合よりも極めて安価に実現させた。周縁部の余白は、ラテン語の本文とは無関係な物語絵シリーズでしばしば埋めつくされた（松田, pp. 104–20）。印刷本の時禱書の出版業者は、手書きの挿絵のかわりに数多くの版画を用いることで、挿絵の質に量で対抗して写本との差別化を図ったのである。

（TM）

ad adiuuandum me festina. ℣ Gloria patri ⁊ filio et spiritui sancto. ℟ Sicut erat. ⁊c. ā. Salue crux preciosa que in sanguine christi dedicata es et ex membris eius tanq̃ margaritis ornata. Hymnus

Patris sapientia veritas diuina. Deus homo captus est hora matutina. A suis discipulis cito derelictus. A iudeis venditus traditus afflictus. ℣. Adoramus te xpe ⁊ benedicimus tibi. ℟. Quia per sanctā crucē tuā redemisti mūdum Per signū sancte crucis liberet nos de inimicis nostris. Dominus deus noster Dñe exaudi orationē meā. Et clamor meus ad te veniat. Oremus.

replett sūt omnes spiritu sancto. Actuū. 2.

Domine iesu christe fili dei viui pone passionem crucem ⁊ mortē tuam inter iudicium tuum et animam meā nunc et in hora mortis mee: et largiri digneris viuis misericordiam et gratiam: defunctis requiem et veniam: ecclesie tue pacem et veram concordiam: ⁊ nobis peccatoribus vitam et leticiam sempiternam. Qui viuis et regnas deus. Per omnia secula seculorum. Amen.

Adorabimus in loco vbi stetert pedes eius.

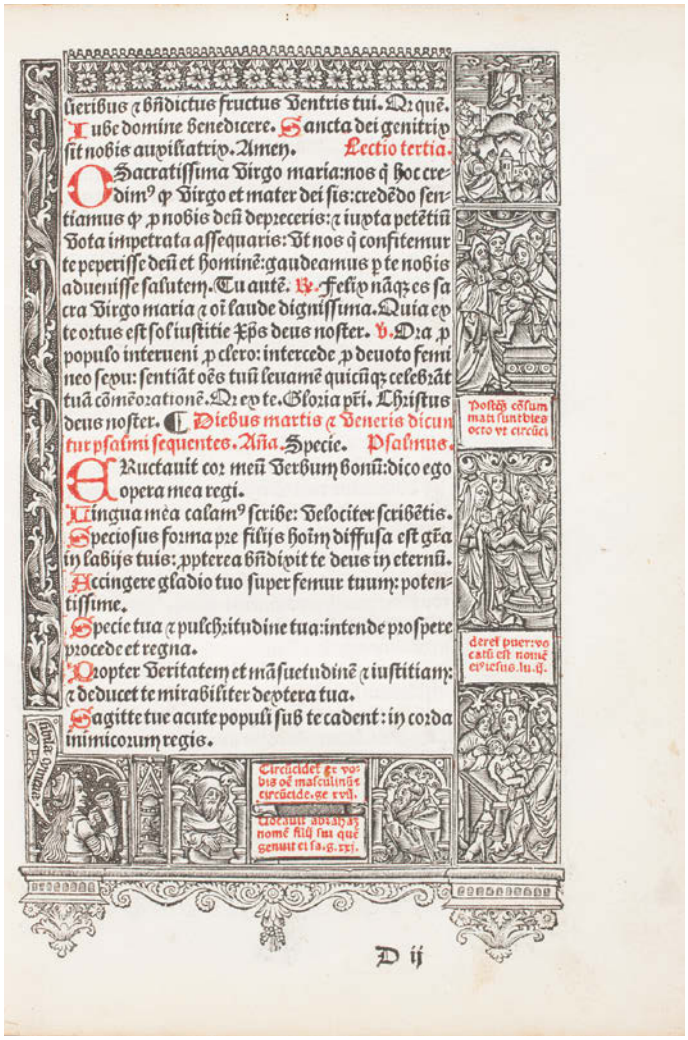
Ad matutinas de sancto spiritu.

(19. Sig. d3v)

20.『ローマ式典礼の時禱書』（パリ：［ヨランド・ボノム］，1525年）

Ces presentes heures a lusaige de Paris (Paris: par la veufue de Thielman Kerver [i.e. Yolande Bonhomme], 1525). 144 leaves. 216×151mm. STC (French), p. 277.

［120X@1121@1］



（20. Sig. D2r）

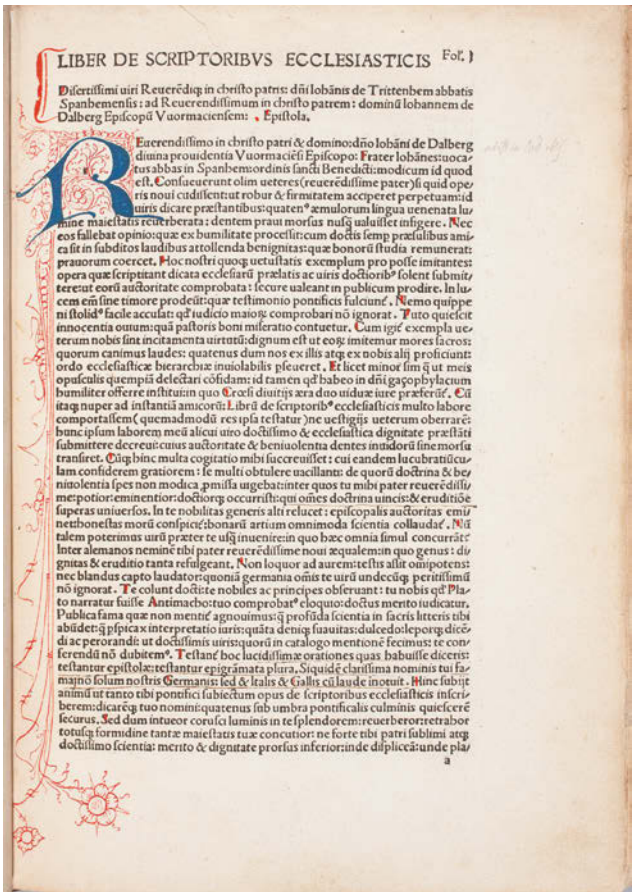
印刷者のヨランド・ボノムは、1497年にパリで印刷業を始めたティルマン・ケルヴェールの妻で、夫の死後、1522年にその印刷所を引き継いでいる。インキュナブラの時禱書（展示番号19）が黒一色で印刷され、頭文字は手書きであったのに対して、本書では頭文字もすべて印刷され、手書きの要素はひとつもない。頭文字は、本文よりも装飾的な活字を用いて、全て赤で印刷されている。黒と赤の二色刷印刷によって、本文中の見出しや欄外挿絵に付随する説明文も一貫して赤で印刷されている。挿絵の数が多いことも本書の特徴で、標準的な構成の印刷本の時禱書では全ページ大の版画挿絵は20点前後であるのに対し、本書には44点（暦を加えると56点）も含まれている。ヨランド・ボノムは1534年に、ほぼ同じ内容の英語版も刊行しており、この絵本のような時禱書が人気をもって受け入れられたことを推察させる。

（TM）

VII. バーゼル

21. ヨハン・トリテミウス『聖職者の著作について』（バーゼル：ヨハン・アマーバッハ，1494年）
Johann Tritheim. *De scriptoribus ecclesiasticise* (Basel: Johann Amerbach, [after 28 Aug.] 1494). 297×207mm. 147 leaves (of 148), wanting u8, u1 inserted from another copy. BMC III 755; IJL2 368; IKUL 010; ISTC it00452000; PP 51.

[120X@573@1]



LIBER DE SCRIPTORIBVS ECCLESIASTICIS Fol. 1

Disertissimi uiri Reuerẽdiq; in christo patris: dñi lobãnis de Tritthenhem abbatis Spanhemensis: ad Reuerendissimum in christo patrem: dominũ lobannem de Dalberg Episcopũ Vuormaciensem: . Epistola.

Reuerendissimo in christo patri & domino: dño lobãni de Dalberg diuina prouidentia Vuormaciẽsi Episcopo: Frater lobãnes: uocatus abbas in Spanhem: ordinis sancti Benedicti: modicum id quod est. Consueuerunt olim ueteres (reuerẽdissime pater) si quid operis noui cudissent: ut robur & firmitatem acciperet perpetuam: id uiris dicare præstantibus: quatenus æmulorum lingua uenenata lumine maiestatis reuerberata: dentem praui morsus nusq; ualuisset infigere. Nec eos fallebat opinio: quæ ex humilitate processit: cum doctis semp præsulibus amica sit in subditos laudibus attollenda benignitas: quæ bonorũ studia remunerat: prauorum coercet. Hoc nostri quoq; uetustatis exemplum pro posse imitantes: opera quæ scriptitant dicata ecclesiarũ prælatis ac uiris doctioribus solent submittere: ut eorũ auctoritate comprobata: secure ualeant in publicum prodire. In lucem eris sine timore prodeũt: quæ testimonio pontificis fulciunt. Nemo quippe nistolidus facile accusat: qd iudicio maioq; comprobari nõ ignorat. Puto quiescit innocentia outum: quã pastoris boni miseratio contuetur. Cum igit exempla ueterum nobis sint incitamenta uirtutũ: dignum est ut eoq; imitemur mores sacros: quorum canimus laudes: quatenus dum nos ex illis atq; ex nobis alij proficiunt: ordo ecclesiasticæ hierarchiæ inuiolabilis pseueret. Et licet minor sim q̃ ut meis opusculis quempiã delectari cõfidam: id tamen qd habeo in dñi gaçopbylacium humiliter offerre instituim quo Crœsi diuitijs æra duo uiduæ iure præferũt. Cũ itaq; nuper ad instantiã amicorũ: Librũ de scriptoribus ecclesiasticis multo labore comportassem (quemadmodũ res ipsa testatur) ne uestigijs ueterum oberrarẽ: hunc ipsum laborem meũ alicui uiro doctissimo & ecclesiastica dignitate præstãti submittere decreuit: cuius auctoritate & beniuolentia dentes inuidorũ sine morsu transiret. Cũq; hinc multa cogitatio mihi succreuisset: cui eandem lucubratiũculam confiderem gratiorem: se multi obtulere uacillanti: de quorũ doctrina & beniuolentia spes non modica promissa uigebat: inter quos tu mihi pater reuerẽdissime potior eminentior: doctiorq; occurristi: qui omes doctrina uincis: & eruditiõe superas uniuersos. In te nobilitas generis alti relucet: episcopalis auctoritas eminet honestas moriũ conspicit: bonarũ artium omnimoda scientia collaudat. Nũ talem poterimus uirũ præter te uq̃ inuenire in quo hæc omnia simul concurrãt? Inter alemanos neminẽ tibi pater reuerẽdissime noui æqualem: in quo genus: dignitas & eruditio tanta refulgeant. Non loquor ad aurem: testis adsit omipotens: nec blandus capto laudator: quoniã germania omis te uirũ undecũq; peritissimũ nõ ignorat. Te colunt doctis: te nobiles ac principes obseruant: tu nobis qd Plato narratur fuisse Antimacho: tuo comprobat eloquio: doctus merito iudicatur. Publica fama quæ non mentit agnouimus: q̃ profũda scientia in sacris litteris tibi abũdet: q̃ pspica x interpretatio iuris: quãta deniq; fuauitas: dulcedo: leporq; dicẽdi ac perorandi: ut doctissimis uiris: quorũ in catalogo mentionẽ fecimus: te conferendũ nõ dubitem. Testant hoc lucidissimæ orationes quas habuisse diceris: testantur epistolæ: testantur epigrãmata plura. Siquidẽ clarissima nominis tui fama jnõ solum nostris Germanis: sed & Italis & Gallis cũ laude inouit. Hinc subijt animũ ut tanto tibi pontifici subiectum opus de scriptoribus ecclesiasticis inscriberem: dicarẽq; tuo nomini: quatenus sub umbra pontificalis culminis quiescerẽ securus. Sed dum intueor coruscũ luminis in te splendorem: reuerberor: retrahor totusq; formidine tantæ maiestatis tuæ concutior: ne forte tibi patri sublimi atq; doctissimo scientia: merito & dignitate prorsus inferior: inde displicẽã: unde pla-

a

（21. Sig. a1r）

パリのソルボンヌ大学で印刷所の立ち上げを先導したヨハン・ハイリーン（展示番号17解説参照）は、1464年にバーゼルに移り、翌年から1467年までバーゼル大学で教鞭を執った。本書はハイリーンによる編集で、彼のもとで修行を積んだ後、1477年にバーゼルで印刷所を始めたヨハン・アマーバッハ（1443–1513）が印刷した。アマーバッハの印刷所は、後にエラスムスら人文主義者との出版を展開したヨハン・フローベン（展示番号32, 33）に引き継がれる。

本書は活版印刷によるヨーロッパ初の著者名別の書誌で、著者トリテミウス（1462–1516）はクロイツナッハ近郊シュポンハイムのベネディク会修道院長を務めた。彼は熱心な書物収集家で、充実させた蔵書で修道院を学問の中心地へと発展させた。彼の代表作ともいえる本書は、初期教父から15世紀末までの聖人や聖職者を編年順に配列して人物紹介と著作を記述している。この編纂法は、近代書誌学の父コンラート・ゲスナー（Conrad Gessner, 1516–65）によって発展されることとなる（雪嶋2013）。

（ST）

22.『グラティアヌス教令集』（バーゼル：ミヒャエル・ヴェンスラー，1481年）

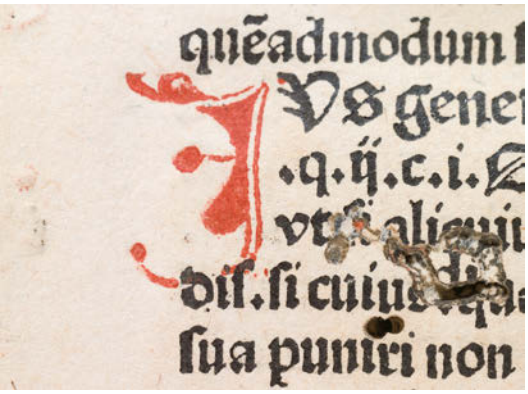
Flavius Gratianus. *Decretum* (Basel: Michael Wenssler, 19 Aug. 1481). 381 leaves. 420×294mm. IJL2 186; IKUL 011; ISTC ig00370000.

［1102@289］

12世紀イタリアの修道士グラティアヌスが1140年頃に編纂した初の体系的な教会法教令集。正式名称は『矛盾教会法令調和集』（*Concordia canonum discordantium*）で、中世ヨーロッパにおいて教会法の基本文献として広く普及した。本書は、1472年頃からバーゼルで活躍したミヒャエル・ヴェンスラーが印刷した。ヴェンスラーは1491年にバーゼルを去らざるをえなくなり、その後はクリュニー、マコン、リヨンで印刷業を営んだ（Scholderer 1912）。中世写本の伝統を引き継ぎ、ページの真ん中に本文が、それを取り囲むように13世紀の法学者ブレシアのバルトロマエウスによる註解が配置されている。また本文とそれに対応する註釈には、装飾頭文字が赤と青インクで施され、本文と註釈の対応関係がわかりやすいよう視覚的な工夫がなされている。

本書では、手書きと印刷の頭文字が同一ページに混在していることに注目したい。よく観察すると、赤色の頭文字は印刷で、青色は手書きというパターンに気づく（ただし手書きの赤頭文字も散見される）。さらに赤い頭文字の上に黒字の本文がのり（22–1）、本文の上に青頭文字が重なっている（22–2）ことから、赤インクをつけた版面で頭文字とパラグラフマーク（¶）、セクション見出しを最初に印刷し、次に黒インクで本文をその上に印刷し、仕上げに青インクを用いて手書きで頭文字を、また赤インクで縦ストロークを施したことが推察される。本書のように、印刷揺籃期においては赤インクの部分が先に印刷されたという見解が他でも示されている（Dane）。

（ST）



（22–1. Sig. a1：部分拡大）

（22–2. Sig. o5v：部分拡大）

a ¶ Manente. vt non minuatur ab eo. electio enim eporꝫ ad solũ metropolitanũ est referẽda. sed consecratio non debet fieri sine notitia metropolitani vbi ordinandus est eps. vt. li. di. qui in aliquo.

Si quis non fuerit. vbi enim vult metropolitanus. ¶ Impletis. sic ergo episcopus consecratus preter cõsciencia metropolitani eius aspectui debet pnitari infra tres menses. vt e. di. lxiij. cum longe. sed ordinati a domino papa debent se pnentare aspectui eius singulis annis. xxij. dist. iuxta sanctorum.

d ¶ Duobus. lxiij. di. cum longe. contra. sed potius consonat qꝫ ibi et hic. infra tertiũ mẽsem hoc facit.

e ¶ Et si infirmitate sic. e. di. xviij. episcopus ad synodum. j. v. q. iij. c. i. vbi de doctrina tui.

Si forte. hoc capitulum sp̃ ad hoc consuetudinem induci qꝫ vniuersitas stet in vno. vt. ff. qꝫ cuiusqꝫ vniuersi. sicut. sino potius in cõtrariũ potest induci cum iste solus non possit id qõ vniuersitas potuit. vñ dico qꝫ vniuersitas perit cuꝫ redigit ad vnũ caput. ar. ff. de leg. i. si grege. vnde satis pōt dici qꝫ si omnes delinquant in eligendo pter vnum qꝫ ille solus non potest eligere cũ nõ cõstitat in eo ius vniuersitatis. Jo. quod credo falsum. vt. ff. qꝫ cuiusqꝫ vniuer. sicut municipij fi. eẽdẽ elec. bonemẽoric. ij. vñ dico qꝫ si oẽs peccent preter vnuꝫ qꝫ ille solus potest eligere per iura superius posita. b.

g ¶ Superstes. ratione vniuersitatis denolutur ad vnum. instit. de le. §. si grec. ff. qꝫ cuiusqꝫ vniuer. sicut. §. in decurionibus. sed qꝫ dabit epis istis expensas. ecclesia que vacat. ar. iiij. q. iij. venturus. et. x. q. iij. cauendum. et. xij. q. ij. caritatẽ. si ẽ tenuis comedant ꝗ suo ẽ de vi. et bone. clericum ab omni.

bono ꝛ deferatur habeat consequẽter bonꝛem manente tamẽ metropolitane cinitatis prꝛopria dignitate. ¶ Qui vero a comprouincialibus suis cum metropolitani licẽtia fuerit ꝛdinatus infra cõstituta rẽpora eius se repsentet conspectibꝫ ¶ Unde in tertia conuenti concilio. legitur. ¶ De eodem.

Si qs in metropolitana cinitate eps non fuerit ꝛdinatus postea qꝫ suscepta benedictione per metropolitani litteras bonꝛem fuerit adeptus episcopi id optimum esse decernimus vt postmodum statuto tempore id est ipletis duobus mensibus se metropolitani sui pesentet aspectibus vt ab illo monitis ecclesiasticis instructꝫ plenius quid obseruare debeat recognoscat. qꝫ si forte ꝗ implere neglexerit in sinodo increpatus a fratribus cꝛrigatur. ⁊ si forte infirmitate aliqua ne ꝗ impleat fuerit impeditus hoc suis litteris metropolitano indicare pcuret. ¶ Hijs autꝛitatibus datur intelligi qꝫ epi a comprouincialibꝫ suis debeant ꝛdinari. Sed queritur si in prꝛouincia plurimi episcopi non fuerint et cõtigerit forte vnum remanere episcopum quid fieri debeat. ille quia solus est ordinare non potest epm cũ comprouinciales non habeat cum quibus epm consecrare valeat. cum ergo talis necessitas fuerit qd faciendum sit in sardicensi concilio diffinitur in quo sic statutũ legitur.

Si vnus tantũ remanserit epus ad consecrationem episcopi de vicina prꝛouincia epi conuocantur.

Si forte in pnincia vnũ tantum cõtigerit remanere episcopum supstes eps conuocet epos vicine pnincie et cũ eis ꝛdiner comprꝛouinciales sibi episcopos quod si facere neglexerit populi conueniant episcopos pnincie vicine. et illi prius cõmoneant episcopum qui in eadem pnincia cõmoꝛatur et ostendant quomodo populi perant sibi epm rectorem ⁊ doceat iustum esse vt ipse veniat et cum eis ꝛdiner epm. et si litteris conuetus tacuerit ⁊ dissimulauerit nihilqꝫ rescripserit tunc satisfaciendum ẽ populis vt conueniant et vicina pnincia ⁊ episcopum ordinent.

h ¶ Conuocet. sed nunquid tenentur illi cõuenire scilicet ad vocationem illius. tenẽtur quidẽ. et nisi venirent peccarent. ar. xi. q. i. sic eos. ar. di. xc. hcipimus. et debẽt tunc cogi ab eoꝛ prelato vel papa. b. dicit qꝫ ab isto compelli possunt autoꝛitate huius canonis. nam quãdoqꝫ par in parem habet imperiũ. vt. ij. q. vi. placuit. ij. et. vi. q. iij. c. ij.

i ¶ Conuocet. ar. qꝫ vacante ecclesia clerici possunt vicinos epos vocare. vt. vij. q. i. pontifices.

k ¶ Neglexerit. ar. qꝫ si subditi neglãt facere ea q̃ dñt. ea dñt supplari a maiori vel per le vel per alium et ecõuerso. ar. ix. q. iij. cũ scimus. ar. di. lxxvii. volumus. viij. q. iij. art. aldus.

l ¶ Populi. large sumitur hic populi quia causa cõmunis est et ita nõ est contra. ix. q. iij. cum scimus.

m ¶ Tacuerit. hic tacens. p contumace habetur. alibi pro fugiente. xliij. di. sit rector. et alibi pro contradicente. vt. ff. de procurat. filiusfami. §. inuitus. lxxvi. di. tanta. alibi pro cõsensu. liij. di. si seruus. ff. de interro. ac. de erate. §. et qui tacuit. alibi pro neutro. ff. ꝗ reg. iuꝝ. qui tacet.

Distinctio. lxvi.

Rchiepiscopus. hic depingitur lxvi. di. in qua ostendit magister duo scilicet q̃ debeant interesse in cõsecratiõe metropol. qꝫ omnes suffraganei. et qꝫ nullus debeat cõsecrari in episcopũ a paucioribus q̃ a tribus. dicit ergo. b. hoc referre inter cõsecrationem epi et archiepi. qꝫ in cõsecratione archiepiscopi omnes epi intererũt nisi esset vrgentissima necessitas. in consecratione episcopi etã si ñ sit grauis necessitas dũ tamẽ aliqua sit necessitas sufficit per litteras consentire. li. di. c. fi.

Rchiepiscopus. ar. qꝫ si eligitur abbas alicuius monasterij qui p̃ est alijs mõasteriis omnes abbates illoꝛ monasterioꝛ debent psentire et electioni inesse.

p ¶ Ab omnibus. ar qꝫ omnes tangit ab omnibus debet approbari. vt. viij. q. i. et. C. de auto. pcesi. l. vl. et. liij di. c. i.

q ¶ Irrita. quo ad officij. executionem. Jo.

r ¶ De episcopis. q̃ a tribus. sed quare tres epi debent esse. qꝫ in tribus est fidei fundamẽtũ quã puris ⁊ simplicibus verbis cõfiteri tenẽtur. xxiij. di. qui eps. ⁊. xxiiij. di. quãdo

Petro. archiepiscopus. s. di. xxi cleros. cõtra. sed matthias fuit prius ordinatus in clericum. sed iste prius in archiepm

s ¶ Nuncupatus ẽ. quia filius fuit sororis matris dñi. vel qꝫ fuit et similis prius in p sona. vel quia mater fuit filia fratris ioseph qui putabatur pater dñi. xxvij. q. ij. coniunx.

v ¶ Ordinatus. i. ad certi loci administrationẽ electus. sed nõne omnes apostoli erant episcopi et videtur qꝫ sic. quia petro primo fuit datus pontificatus. et omnes alij fuerũt pari potestate pditi. vt. xxi. di. in nouo. Item episcopi successerunt in locum apostoloꝛ. vt. lxvij. di. quoꝛ ergo et apostoli fuerũt epi. Item legitur de iuda qꝫ epatũ eius accipiat alter. et hoc dicũt quidam qꝫ tunc omnes apostoli erant simplices sacerdotes et tñ consecrare poterant. nam moises simplex sacerdos erat et tñ pscrabat aaron. vt. xxi. di. §. i. nec tunc differẽtia erat i ter epm et sacerdotem. vt. xcv. di. olim. vel dic qꝫ rantũ visibili vncõne hij tres pscrauerunt eum sed prius erat inuisibiliter vnctus a dño vel dic qꝫ non ordinauerunt eum sed tantum formam ordinandi alijs ostenderunt. vel dic qꝫ non in epm sed in archiepm eum ordinauerunt

Distinctio. lxvij.

Ab omnibus suffraganeis suis archiepiscopus ordinetur.

Rchiep̃s ab omnibus sue pnincie epis ordinetur. Hoc autem qõ de archiepi pscratione preceptum est vt offices suffraganei eum ordinent nullatenus licẽ immutari. quia ille qui pest offiibꝫ ab omnibus quibus pest epis debẽt constitui. sinautem aliter pstumptus fuerit viribus carere non dubiũ est quia irrita erit secus acta ꝛdinatõ archiepiscopi. ¶ De episcopis vero non ordinandis a paucioribꝫ q̃ a tribus episcopis. ¶ Anacletꝰ papa scribit dicens. ¶ De eodem.

Petro et iberosolimitanoꝛ primus archiep̃s beatus iacobus qui iustus dicebat ⁊ fm carnem dñi frater nuncupatus est a Petro et Jacobo et Jobãne apostolis est ꝛdinatus. successoꝛibus autem suis formam dantibus scilicet eoꝛum vt minus q̃ a tribus reliquiqꝫ omnibus assensum prebentibus nullatenus episcopus ꝛdinetur et cõmuni toto ꝛdinatio celebꝛetur.

VIII. 低地地方、イングランド

23. ラウル・ルフェーヴル『トロイ歴史集成』（[ブルージュ/ヘント：ウィリアム・キャクストン，1473–74年]）

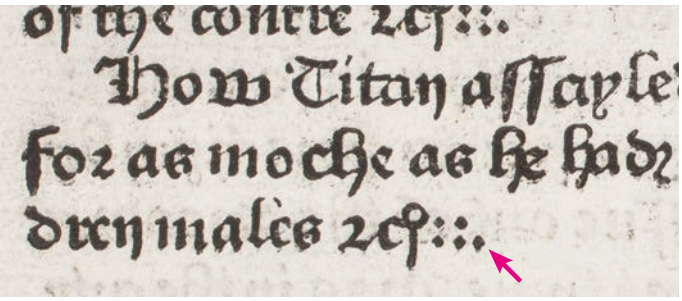
Raoul Lefèvre. *Le Recueil des histoires de Troyes* [English]([Bruges/Ghent: David Aubert for William Caxton, 1473–74]). 336 of 352 leaves, wanting a^{10}, $b^{1–3}$, $b^{9–10}$, and KK^{10}. 263×190mm. BMC IX 129; IJL2 247; IKUL 038; ISTC il00117000; MB 16; 義塾図書館11.

[120X@1161@1]

ブルゴーニュの宮廷で人気を博したトロイの歴史を綴る本書は、ケルンで印刷術を学んだウィリアム・キャクストン（*d.* 1492）が、フランドル地方で初となる印刷所の設立時に最初に手がけた出版物である。イングランド王エドワード4世（Edward IV; 1442–83）の妹で、ブルゴーニュ公シャルル豪胆公（Charles de Valois-Bourgogne; 1433–77）の妃となったマーガレット・オヴ・ヨーク（Margaret of York; 1446–1503）に依頼され、キャクストンが仏語から英訳した。英語印刷の嚆矢としても名高い。

本書には奥付がないため、出版地・出版年について決定的なことはわからない。しかし、黒と赤のインクを用いた二色刷りの技法が用いられていること、またキャクストンが印刷術を習得したケルンでの人間関係などから、ブルージュでの印刷とするのが100年以上にわたる定説であった。だが最近になりロッテ・ヘリンガは、本書をはじめフランドル地方でキャクストンが印刷した本の活字書体が、ブルゴーニュ宮廷に出入りしていた写字生ダヴィッド・オベールの書体と類似することに注目し、本書の印刷地を当時オベールが拠点としていたヘントとする新説を提唱している（Hellinga 2011）。また本書におけるコロンやドットのような埋め草用の活字（23–1）の使用パターンから、4人の植字工が組版を担当した可能性が高いと考えられている（Hellinga 1976, pp. 22–30）。義塾図書館所蔵本は1646年から1977年まで、ロンドンのサイオン・コレッジに収蔵されていた。

（ST）



（23–1. 埋め草用の活字）

hym Cibell & ye resan sawe ye chyldren whe
theyr teeres began to growe double. and they
had not taken grete regard & hede to the chyld
what tym Cibell all angrye and corrupt wyth
wanhope wyth a syghe & feble speryt sayd to her mo
der. ha my moder what pietous cas shal this be now
gyue me a sharp cuttyng knyf and ye shall murder
my sone by innaturel errour agayn my wyll And
after this vyllayns dede for my absolucion of ye grete
synne ye shall murder my self also. & this is myn oppy
nion ffor after so cruell a dede & werk notwithstan
dyng ony excusacion ye wyll neuer lenger lyue The
moder of Cibell was tho all be wepte and gretly dis
mayed when she herd the ayer of the tendre mouth of
her doughter redounde in her eres of so hard a cruelte.
she beyng all affrayed sayd to her. my doughter what
thynkest thou to do. art thou enraged out of thi witte
or folysh My moder answerd Cibelle ye verylye. ye
am verily as ye saye. enraged out of my wytte and
folysh. and yet more ye am furio? and wood. make
me no lenger to languysh. gyue me ye cursed mortal
knyf forgyd in an euyll houre ffor of force me muste
obeye the kyng. saturne your right welbeloyd sone
my ryght redubted husbond ye hath comaundement
ouer me. and wil schamely put me to deth yf ye acom
plysh not and fulfille his comaundement in the deth
of his sone which he hath chargid me to slee.
None as resan considerd that her doughter
said. and in the errour ye she was in. she toke
the chyld that was in her armes & pluckyd
hyt from her by force And alwey the chyld laughed

SION COLLEGE
LIBRARY.

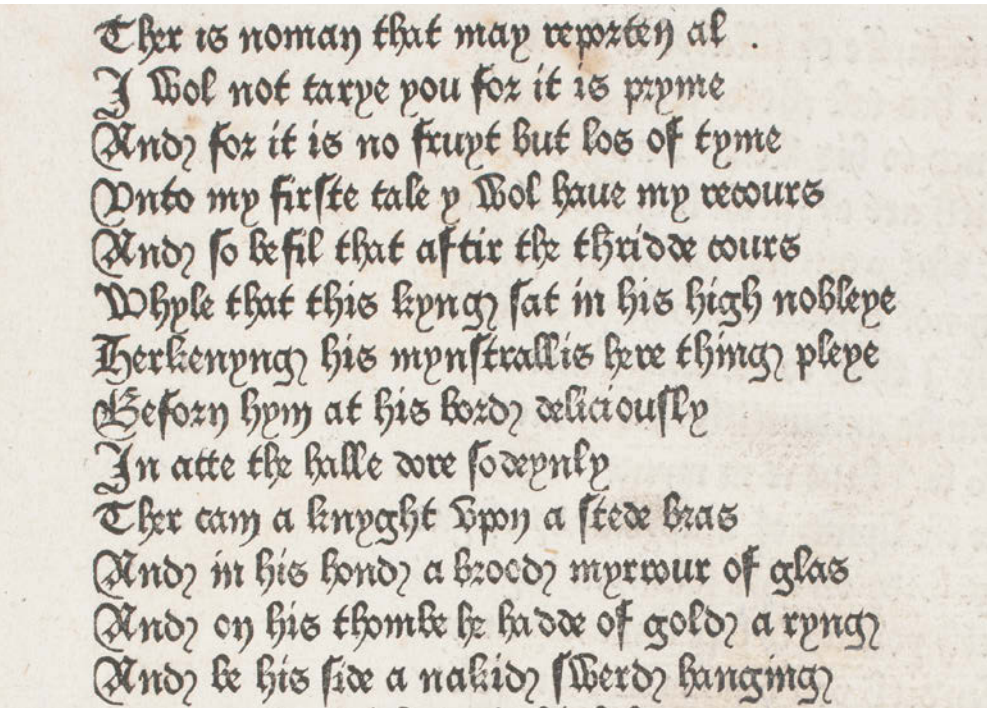
Math. filius Ducis Math. Forster. ornavit

(23–2. Fol. 14r)

24. ジェフリー・チョーサー『カンタベリー物語』（［ウェストミンスター：ウィリアム・キャクストン，1476–77年］）（零葉）

Geoffrey Chaucer. *The Canterbury Tales* ([Westminster: William Caxton, *c.* 1476–77]). Fol. 99. 237×189mm. BMC XI 103; ISTC ic00431000; STC (2nd ed.) 5082; 西洋活字 A4.

［1BB@182］[1]


Ther is noman that may reporten al
I wol not tarye you for it is pryme
And for it is no fruyt but los of tyme
Unto my firste tale y wol haue my recours
And so befil that aftir the thridde cours
Whyle that this kyng sat in his high nobleye
Herkenyng his mynstrallis here thing pleye
Beforn hym at his bord deliciously
In atte the halle wore sodeynly
Ther cam a knyght vpon a stede bras
And in his hond a brod myrrour of glas
And on his thomb he hadde of gold a ryng
And be his side a nakid swerd hanging

（24. Fol. 99v：部分拡大）

中世英文学の傑作とされる『カンタベリー物語』の初版は、英国印刷の始祖キャクストン（展示番号23）によって世に送り出された愛書家垂涎の書である。ブルゴーニュ公国からイングランドに戻ると、キャクストンはウェストミンスターの一角に印刷工房を構えた。本書を含む最初期の印刷本に用いたのは、大陸から持ち帰った大きめのバタルド体活字であった。これはキャクストン活字2と分類され、ケルン及びフランドル地方で父型彫刻師、印刷者として活躍したヨハン・フェルデナー（Johann Veldener）が制作したといわれる。

手引き印刷の時代には同一文字に複数の形状の活字が存在した。ロッテ・ヘリンガは、植字工のそれらの使い分けパターンから、キャクストンの最初期の出版年代を提唱した。さらに本書こそ、彼が英国での本格的な出版活動を始めるのに選んだ作品であると論じた（Hellinga 1982）。

義塾図書館所蔵の零葉は、20世紀はじめに書誌学者ゴードン・ダフ（E. Gordon Duff）が、アメリカの愛書家たちが集うキャクストン・クラブ（The Caxton Club）から出版した、零葉本所収のもので、「騎士見習いの話」を含む。ロバート・トッド・リンカーン（Robert Todd Lincoln）旧蔵書（Mosser, p. 49 n. 58）。

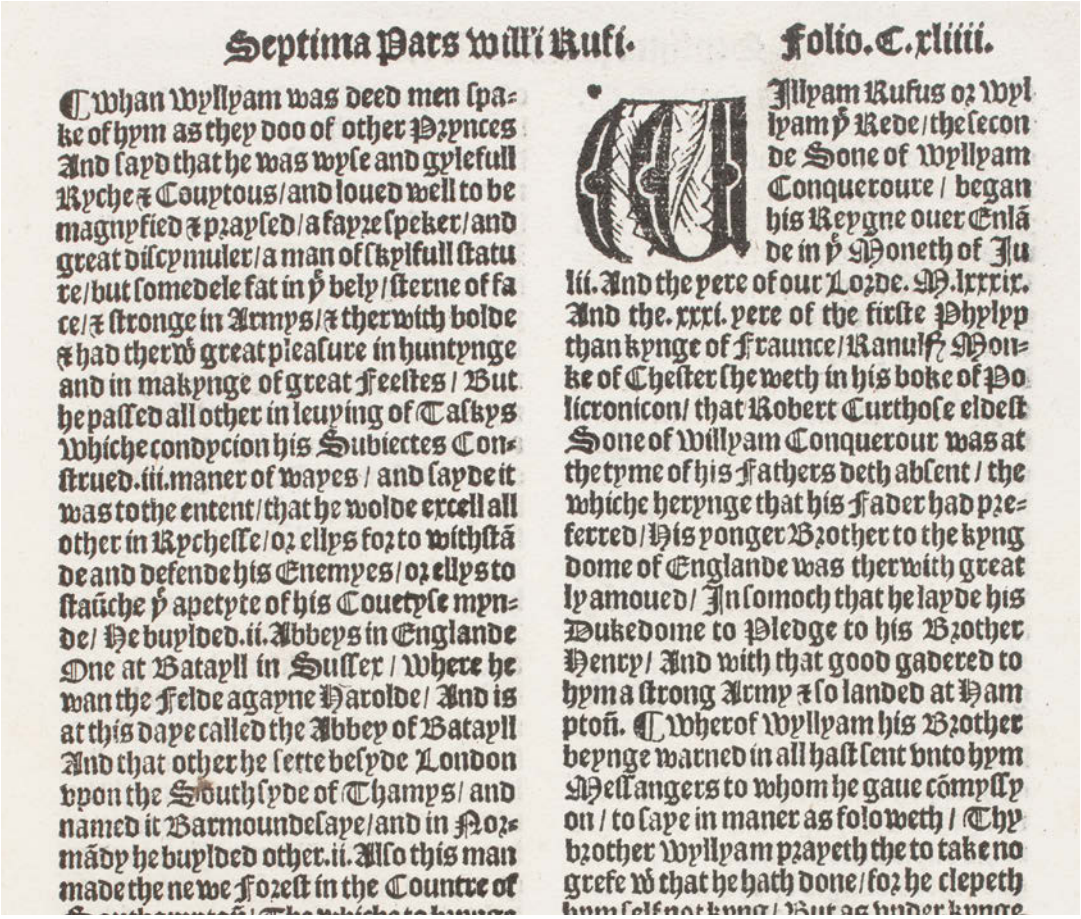
（ST）

[1] Mosserの一覧（p. 39）では義塾図書館所蔵本の請求記号が「別1LB＠615」と記されているが、2003年1月に現在のものに変更された。

25. ロバート・フェビアン『イングランド年代記』（ロンドン：リチャード・ピンソン，1516年）

Robert Fabyan. *New Chronicles of Englande* (London: Richard Pynson, 1516). 2 vols in 1, lacking 28 ½ leaves. 295×190mm. STC (2nd ed.) 10659; ESTC S109993; PP 19; RA 63.

［120X@549a@1］



Septima Pars willi Ruki. Folio. C. xliiii.

Whan Wyllyam was deed men spake of hym as they doo of other Pryncés And sayd that he was wyse and gylefull Ryche & Couytous/and loued well to be magnyfied & prayseD/a kayre speker/and great discymuler/a man of skylfull stature/but somedele fat in ye bely/sterne of face/& stronge in Armys/& therwith bolde & had therw̃ great pleasure in huntynge and in makynge of great Feestes / But he passed all other in leuyng of Taskys whiche condycion his Subiectes Construed.iii.maner of wayes / and sayde it was to the entent/that he wolde excell all other in Rychesse/or ellys for to withstãde and defende his Enemyes/or ellys to stauche ye apetyte of his Couetyse mynde/ He buylded.ii.Abbeys in Englande One at Batayll in Sussex / Where he wan the Felde agayne Harolde/ And is at this daye called the Abbey of Batayll And that other he sette besyde London vpon the Southsyde of Thamys/ and named it Barmoundesaye/and in Normãdy he buylded other.ii.Also this man made the newe Forest in the Countre of

Wyllyam Rufus or Wyllyam ye Rede/the second Sone of Wyllyam Conqueroure / began his Reygne ouer Enlãde in ye Moneth of Julii. And the yere of our Lorde. M.lxxxix. And the.xxxi. yere of the firste Phylyp than kynge of Fraunce/Ranulph Monke of Chester sheweth in his boke of Policronicon/ that Robert Curthose eldest Sone of Willyam Conquerour was at the tyme of his Fathers deth absent / the whiche herynge that his Fader had preferred/His yonger Brother to the kyngdome of Englande was therwith greatly amoued/ In somoch that he layde his Dukedome to Pledge to his Brother Henry/ And with that good gadered to hym a strong Army & so landed at Hamptoñ. Wherof Wyllyam his Brother beynge warned in all hast sent vnto hym Messangers to whom he gaue cõmyssyon / to saye in maner as foloweth / Thy brother Wyllyam prayeth the to take no grefe w̃ that he hath done/for he clepeth hym self not kyng / But as vnder kynge

（25. Sig. s8r：部分拡大）

15世紀末、キャクストンがこの世を去ると、ふたりの外国人が良きライバル関係のもと、イングランド印刷市場を牽引した。キャクストン工房を引き継いだウィンキン・ド・ウォード（Wynkyn de Worde; *d.* 1535）とノルマンディー出身のリチャード・ピンソン（Richard Pynson; *c.* 1449–1529/30）である。本書はピンソンが1516年に印刷したロバート・フェビアン（*d.* 1513）編纂の年代記である。16世紀に入るとイングランドでは、とりわけヘンリー8世（Henry VIII; 1491–1547）の諸政策のもとナショナリズムの風潮が高まったこともあり、多くの年代記が刊行された。

キャクストンの次世代は、英語作品の印刷にはフランスから伝来した黒字体（ブラックレター）を用いた。本書はその典型である。しかし、木版頭文字のなかには、キャクストンと同じものが見出される点も興味深い（上の図版とBMC XI, p. 362の図版を比較されたい）。

（ST）

第3部　継承と発展

2015年は、15世紀末から16世紀初頭のヴェネツィアで活躍した、アルド・マヌーツィオの没後500年にあたり、ヨーロッパを中心に各地でアルド版の貴重書展示会が開催されている。「学匠印刷家」の先駆けとして知られ、各種の活字を開発したアルドは、印刷史上、グーテンベルクに次いで最も有名とも言えるのではないだろうか。この記念すべき年を踏まえ、洋書最終章となる第3部では、アルドの偉業（展示ケースVIII，XI）と、その継承と発展（X〜XIV）を、同時代および次世代にたどる。ここでは同時に、中世スコラ主義の頑迷固陋に反旗をひるがえしたルネサンス人文主義の精神が、活版印刷によって広がりゆく様相を垣間見ることができよう。

15世紀末、政治的および経済的に勢いを増すヴェネツィアには、ギリシアからの避難者たちが集まり、コロニーを形成していた。このためギリシア語を理解する職人探しも、印刷所の出資者の確保も比較的容易で、他の都市よりもギリシア語文献を印刷する環境が整っていたと言われる。こうした背景のもと、古典学に造詣が深く、ギリシア語教師でもあったアルドは、同地で1495年に印刷所を始めると、古典作品を中心に数多くの出版を手がけた。また、アリストテレス『全集』の初版（展示番号26）に見られるように、複数の写本を比較して本文を確立する、いわゆる近代的な本文校訂の礎を築いた。1515年2月に没するまで、古典ギリシア語作品43版、古典ラテン語作品31版、キリスト教関係の書11版、人文主義者の著作46版、総計131版を上梓している（雪嶋2005, 2014）。

アルドのもとには、同時代の古典学者や人文主義者が集ったが、その中には北方ルネサンスの巨星と称されるデジデリウス・エラスムスもいた。エラスムスはアルド邸に滞在し、『格言集』第2版の編集に没頭したほか、印刷工房で校正係を務めた。本展示では、アルドの出版物の次に、エラスムスとその関係者の出版物を並べている。エラスムス自身の著作『平和の訴え』（展示番号32）は、いまこそ手に取るべき作品かもしれないが、無二の親友トマス・モアの『ユートピア』（展示番号33）と同じく、バーゼルで活躍したヨハン・フローベンが出版を手がけた。フローベンはアルドと同じく「学匠印刷家」と称され、アルドの活字書体に想を得たイタリック体とギリシア語活字を制作した。同じケースの3点目（展示番号34）を印刷したセバスティアン・グリフィスは、若い頃にはヴェネツィアで修行したとも言われ、アルド版を手本として8折判の出版物を16折判で再版した。この書の編纂に携わったフランソワ・ラブレーのエラスムスへの敬愛は深く、自身の作品でもエラスムスの著作から多くの引用を取り入れ、その思想を敷衍させている。

ここでまたアルドに話を戻そう。アルドは書物にふさわしい活字や形態での印刷にこだわったことでも知られる。アクセント記号や気息音記号の付いたギリシア語活字（展示番号26）や繊細なローマン体活字（展示番号31）の制作、イタリック体活字の開発（展示番号29）、いわゆるポケット判と称されるようになる16折判など、いずれも印刷史上に転換期をもたらした考案である。活字制作を担当したのは、元金細工師のフランチェスコ・グリッフォであるが、彼は、ニコラ・ジャンソン（洋書第2部、展示番号15）の工房にゴシック体活字を提供していた人物であった。

アルドの活字書体は、特に16世紀パリにて発展的に継承され、フランス・ルネサンス活字文化を大きく花開かせることとなった。最初にあげるべきは、同じく学匠印刷家として名高いジョス・バードであろう。バードはリヨンの大学で講義をもつかたわら、ジャン・トレクセル（Johannes Trechsel）の印刷所で校正係りを務め、古典文献の校訂や『阿呆舟』のフランス語訳に携わった。トレクセル死後に彼の義理の娘テリーと結婚してパリへ移り、印刷工房を開業する。イタリア人文主義者やギヨーム・ビュデの著作（展示番号35）、ラテン語古典などを多くを手がけ、フランス・ルネサンス時代の印刷文化の中心的存在となった。またバードは、16世紀フランスにおいて最も

著名な学匠印刷家と評される、ロベール・エティエンヌ1世に娘を嫁がせて、エティエンヌ家と姻戚関係を結んでいる。

16世紀のパリの印刷所もまた、婚姻関係によって大きく発展していった。なかでもエティエンヌ家の発展はアルドとの関係でも注目しておきたい。16世紀初頭、パリに印刷所を開き、同時代の人文主義者たちの著作を上梓したアンリ・エティエンヌ1世（展示番号36）は、ソルボンヌの書籍業者として地位を確立していた。そのアンリが他界すると、印刷者シモン・ド・コリーヌ（展示番号37）がその妻と結婚し、アンリの3人の息子（シャルル、フランソワ、ロベール）の義父となった。コリーヌはエティエンヌ家の印刷所を後継し、次男ロベールに印刷技術の指導を授けた。最近の研究では、初期のエティエンヌ印刷所の活字はコリーヌが彫ったという見解も示されている（Verliet）。

やがてロベール・エティエンヌ1世は、コリーヌからエティエンヌ印刷所を譲り受けると、自ら編集を手がけた学術的な著作の出版において、才覚をあらわしていく（展示番号38, 39）。彼はギョーム・ビュデの娘と結婚すると、ビュデの協力のもと聖書の校訂出版を行い、学匠印刷家としての才能を大いに発揮した。さらには『ラテン語宝典』、『羅仏辞典』、『仏羅辞典』という一連の辞書編纂と刊行により、名声を確固たるものとしていく。1539年にはフランソワ1世のラテン語・ヘブライ語王室印刷者（imperimeur du roi）に任命された。しかし、聖書出版をめぐるカトリック聖職者からの圧迫を受け、1550年にジュネーヴへ逃亡する。本展示では、ロベール・エティエンヌ1世のパリ時代までを範囲としたが、ジュネーヴでも印刷所は引き継がれ、新たな局面を迎えていく。

このロベール・エティエンヌ1世に影響を与えたのが、アルドのローマン体活字である。さらに時を超えて、20世紀前半にはグリッフォの活字書体を復活させたフォント「ベンボ」（Bembo）が生まれたように、現代においてもアルドの伝統は息づいている。なお本図録の欧文フォントには、このベンボを採用している。

一方、洋書の最後に取り上げるドイツでは、アルドの晩年頃から、独自の動きが起こり始めていた。第1〜2部で見たように、15世紀のドイツではテクストゥラ体やシュヴァバッハー体がゴシック体活字の主流であったが、神聖ローマ皇帝となったマクシミリアン1世（在位1493–1519）は、印刷本の蔵書構築を計画し、それに伴い新しいゴシック体の開発を命じた。これがフラクトゥール体（Fraktur）として知られる活字書体の原型となる。1520年頃になると、ニュルンベルクの活字彫刻職人ヨハン・ノイデルファー（Johann Neudörffer）とヒエロニュムス・アンドレアエ（Hieronymus Andreae）が洗練させ完成させた。以後400年にもわたり、フラクトゥール体はドイツ語圏の印刷で用いられ続けた。書物史家S・H・スタインバークは、とりわけドイツ語圏において黒字体が浸透したのは、同地での神学書の出版が人文書よりも優勢であったからだとしている。

（ST）

IX. アルドの時代 I

26. アリストテレス『全集』（ヴェネツィア：アルド・マヌーツィオ，1495–98年）

Aristotle. *Opera* (Venice: Aldus Manutius, Romanus, 1495–98). 5 parts in 6. Fol.: vol. 1: 234 leaves; vol. 2: 300 leaves; vol. 3: 468 leaves; vol. 4: 227 leaves; vol. 5: 292 leaves; vol. 6: 330 leaves. Vol. 1: 310×210mm. Ahmanson-Murphy, I, no. 4, 11–13, 21; BMC V 553, 556, 555, 556, 558; IJL2 31; IKUL 034; ISTC ia00959000; PMM 165; 義塾図書館 13.

［141X@90@6@1 ～ 6］

アルド・マヌーツィオは1490年にヴェネツィアに移り住み、ギリシア語の古典の散逸を防ぐ目的で、ギリシア語に長けた植字工や校正係を集めて印刷業を始めた。1495年からの5年間は、アルドがギリシア語文献の印刷を精力的におこなった時期である。ギリシア語の印刷の試みはアルド以前にもあったが、アクセント記号と気息音記号の再現において苦労が見られた。アルドの印刷所はコンスタンティノス・ラスカリス『ギリシア語文法』を1495年に刊行した時、印刷所初のギリシア語活字を制作した。ヴェネツィア在住のカリグラファーのインマヌエル・ルソタスの書体を手本として、ボローニャ出身の元金細工師で、有能な活字職人として活躍していたフランチェスコ・グリッフォの制作とされる。アクセント記号や気息音記号がついた文字、様々な連字のデザインが必要で、αだけでも5つのヴァリアントが制作された。その活字は、「アクセント記号および気息音、無気息音記号を文字に組み合わせる工夫と多様な連字と縮約文字を含んだ斜体文字で、それは15世紀のギリシア人が親しんだ文字に近いものであり、ギリシア語の文章を十分に表記することができる完成した書体」（雪嶋2014, p. 59）なのである。しかし作品にかかった費用も相当なもので、アルドはギリシア語本の印刷についてヴェネツィア政庁に印刷特認を申請して、ギリシア語本の印刷を独占することで投資が無駄にならないように図った。アルドはフォントの出来ばえに満足して、手書きのものよりずっと良いと評したとされる。

アルドはそのギリシア語活字を用いて、1495年から1498年にかけてアリストテレスの全集を全5巻で刊行した。それまでに印刷されたギリシア語の全量をはるかにしのぐこの全集は、15世紀最大の出版上の偉業であった。ギリシア語の組版の難しさゆえに、全5部で当時の著名な大学教授の給与の一月分はゆうに越す価格となり、また、誤植もしばしば見受けられはする。しかし、時には遠いイギリスにまで手紙を書いてヨーロッパ中から必要な写本を集めて刊行されたこの全集は、ヒューマニストの原典回帰の指向に見事に応えたのである。

義塾図書館所蔵本は、ユグノー派の古典学者でライデン大学で教授を務めたヨゼフ・スカリゲル（Joseph Justus Scaliger; 1540–1609）の旧蔵本で、第2巻の遊び紙には「比類無きヨゼフ・スカリゲルの蔵書より」（'Ex bibliotheca viri incomparabilis Josephi Scaligeri'）と教え子のやはりライデン大学教授で、1607年には図書館長にも着任した古典学者ダニエル・ハインシウス（Daniel Heinsius; 1580/81–1655）の筆跡で記されている。スカリゲルは、フランス国内の多くのユグノーが犠牲となった「サン・バルテルミの虐殺」（1572）を境にジュネーブに移り住み、1574年までその地でアリストテレスの「オルガノン」を講じていた。本書はスカリゲルの死後ライデンで競売にかけられ、その後19世紀には、同じ本を常に3冊買うことで知られた—それぞれ保存用、読書用、貸し出し用—イギリス人の大蒐集家リチャード・ヒーバー（Richard Heber; 1773–1833）が所有するところとなり、さらに稀覯書と絵画のコレクター、ベライア・ボトフィールド（Beriah Botfield; 1807–1863）の所蔵となった。

（TM）

ΑΡΙΣΤΟΤΕΛΟΥΣ ΑΝΑΛΥΤΙΚΩΝ ΠΡΟΤΕΡΩΝ ΠΡΩΤΟΝ·

ΠΕΡΙ ΤΩΝ ΤΡΙΩΝ ΣΧΗΜΑΤΩΝ·

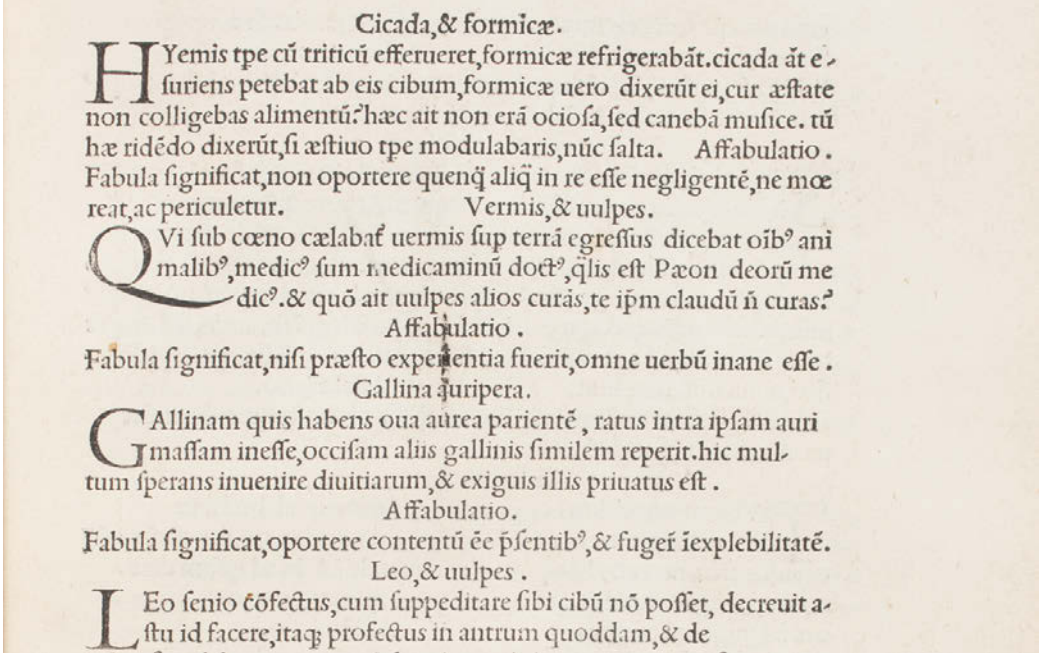
ΠΡΩΤΟΝ Ἐιπεῖν περί τινος ἡ σκέψις ἐστίν· ὅτι περὶ ἀποδείξιν, καὶ ἐπιστήμης ἀποδεικτικῆς· εἶτα διορίσαι, τί ἐστι πρότασις· καὶ τί ὅρος· καὶ τί συλλογισμός· καὶ ποῖος τέλειος καὶ ποῖος ἀτελής· μετὰ δὲ ταῦτα, τί τὸ ἐν ὅλῳ εἶναι, ἢ μὴ εἶναι, τόδε τῷδε· καὶ τί λέγομεν τὸ κατὰ παντὸς ἢ μηδενὸς κατηγορεῖσθαι· Πρότασις μὲν οὖν ἐστι λόγος καταφατικὸς ἢ ἀποφατικὸς, τινὸς κατά τινος· οὗτος ἢ καθόλου, ἢ ἐν μέρει· ἢ ἀδιόριστος· λέγω δὲ καθόλου μὲν, τὸ, παντὶ ἢ μηδενὶ ὑπάρχειν· ἐν μέρει δὲ, τινὶ ἢ μὴ τινὶ ἢ μὴ παντὶ ὑπάρχειν· ἀδιόριστον δὲ, τὸ ὑπάρχειν ἢ μὴ ὑπάρχειν, ἀνάλογον καθόλου ἢ κατὰ μέρος· οἷον τὸ τῶν ἐναντίων, εἶναι τὴν αὐτὴν ἐπιστήμην· ἢ τὸ τῶν ἡδονῶν, μὴ εἶναι ἀγαθόν· διαφέρει δὲ ἡ ἀποδεικτικὴ πρότασις, τῆς διαλεκτικῆς· ὅτι ἡ μὲν ἀποδεικτικὴ, λῆψις θατέρου μορίου τῆς ἀντιφάσεώς ἐστιν· οὐ γὰρ ἐρωτᾷ, ἀλλὰ λαμβάνει ὁ ἀποδεικνύων· ἡ δὲ διαλεκτικὴ, ἐρώτησις τῆς ἀντιφάσεώς ἐστιν· οὐδὲν δὲ διοίσει πρὸς τὸ γενέσθαι τὸν ἑκατέρου συλλογισμόν· καὶ γὰρ ὁ ἀποδεικνύων καὶ ὁ ἐρωτῶν, συλλογίζεται, λαβών τι κατά τινος ὑπάρχειν ἢ μὴ ὑπάρχειν· ὥστε ἐστὶ συλλογιστικὴ μὲν πρότασις, ἁπλῶς κατάφασις· ἢ ἀπόφασις τινὸς κατά τινος, κατὰ τὸν εἰρημένον τρόπον· ἀποδεικτικὴ δὲ, ἐὰν ἀληθὴς ᾖ, διὰ τῶν ἐξ ἀρχῆς ὑποθέσεων εἰλημμένη· δια-

(26. Sig. E8v of vol. 1)

27.『イソップ寓話集』他（ヴェネツィア：アルド・マヌーツィオ，1505年）

Fabellæ Aesopi. Gabriæ fabellæ. Gr. & Lat. [With other works. Gr.] Ed. A. P. Manutius (Venice: Aldus Manutius, Romanus, 1505). 3pt. Fol.: π^{1}, a–h^{8} i^{6} A^{8} B^{10} C^{8} D^{10}, κ–ξ^{8} o^{4}. 265×167mm. Ahmanson-Murphy, I, no. 77; STC (Italian), p. 8.

［120X@969@1］



Cicada,& formicæ.

HYemis tpe cũ triticũ efferueret,formicæ refrigerabãt.cicada ãt e-
ſuriens petebat ab eis cibum,formicæ uero dixerũt ei,cur æſtate
non colligebas alimentũ? hæc ait non erã ocioſa,ſed canebã muſice. tũ
hæ ridẽdo dixerũt,ſi æſtiuo tpe modulabaris,nũc ſalta. Affabulatio.
Fabula ſignificat,non oportere quenq̃ aliq̃ in re eſſe negligentẽ,ne mœ
reat,ac periculetur. Vermis,& uulpes.

QVi ſub cœno cælabat uermis ſup terrã egreſſus dicebat oĩb⁹ ani
malib⁹,medic⁹ ſum medicaminũ doct⁹,q̃lis eſt Pæon deorũ me
dic⁹.& quõ ait uulpes alios curãs,te ip̃m claudũ ñ curas?
Affabulatio.
Fabula ſignificat,niſi præſto experientia fuerit,omne uerbũ inane eſſe.
Gallina auripera.

GAllinam quis habens oua aurea parientẽ, ratus intra ipſam auri
maſſam ineſſe,occiſam aliis gallinis ſimilem reperit.hic mul-
tum ſperans inuenire diuitiarum,& exiguis illis priuatus eſt.
Affabulatio.
Fabula ſignificat,oportere contentũ ẽe p̃ſentib⁹,& fugeŕ ĩexplebilitatẽ.
Leo,& uulpes.

LEo ſenio cõfectus,cum ſuppeditare ſibi cibũ nõ poſſet, decreuit a-
ſtu id facere,itaq; profectus in antrum quoddam,& de

（27–1. Sig. D2r：部分拡大）

本書はイソップの『寓話』を筆頭に、バブリウス（Babrius; *fl.* 2C A.D.）、パライパトス（Palaephatus; 4C B.C.）ヘラクレイデス（Heraclides Ponticus; 4C B.C.）等の古典作品を収録する。『イソップ寓話』には、14世紀初頭にプラヌデス（Maximus Planudes; 1260–*c.* 1305）が編集したものをアルドがラテン語に翻訳した寓話を収録するが、現代では必ずしもすべてがイソップ作とはみなされていない。ページごとにギリシア語活字あるいはローマン体活字を用いて印刷されている。

義塾図書館所蔵本は20世紀イギリスの愛書家ラッティ（Clifford C. Rattey）の旧蔵書で、ラッティ宛ての大英博物館の司書シェパード（L.A. Sheppard）からの活字をめぐる書簡がはさまれている。1通め（1950年1月26日付）は、アルドが用いた大文字のQ（27–1）はボディとテイルが別個のピースに鋳造されたのかという質問への返信で、シェパードは、その可能性は十分に考えられ（特にsig. D2の例に観察できる）、興味深い仮説であると答えている。確かに仔細に観察すると、ボディとテイルの間にかすかながら隙間がみとめられる。2通目（同年2月9日付）では、いつアルドがこれを導入したのか、また他の印刷者にも同様のことが見られるのかという問いで、シェパードは調査に値するだろうと回答している。

（ST）

Τέττιξ, καὶ μύρμηκες.

Εἰμῶνος ὥρα τῶν σίτων βραχέων τῶν, οἱ μύρμηκες ἐψυχον. τέττιξ δὲ λι-
χ μώττων, ἤτει αὐτοὺς τροφήν. οἱ δὲ μύρμηκες εἶπον αὐτῷ, διατὶ τὸ θέρος
οὐ συνῆγες τροφήν. ὁ δὲ εἶπεν, οὐκ ἐσχόλαζον, ἀλλ' ᾖδον μετὰ κῶν. οἱ δὲ,
γελάσαντες εἶπον. ἀλλ' εἰ θέρους ὥραις ᾖδες, χειμῶνος ὀρχοῦ. Επιμύθιον.
Ο μῦθος δηλοῖ, ὅτι οὐ δεῖ τινα ἀμελεῖν ἐν παντὶ πράγματι. ἵνα μὴ λυπηθῇ κὴ
κινδυνεύσῃ. Σκώληξ, καὶ ἀλώπηξ.

Τῷ πηλῷ κρυπτόμενος σκώληξ εἰς γῆν ὀβελθὼν, ἔλεγε παῖσι τοῖσ ζώ-
ό οις. ἰατρός εἰμι φαρμάκων ἐπιστήμων, οἷός ἐστιν ὁ τῶν θεῶν ἰατρὸς παιέων.
καὶ πῶσ εἶπεν ἀλώπηξ ἄλλους ἰώμενος, σαυτὸν χωλὸν ὄντα οὐκ ἰάσω.

Επιμύθιον.

Ο μῦθος δηλοῖ, ὅτι ἐὰν μὴ πρόχειρος ᾖ πεῖρα, πᾶσ λόγος αργὸς ὑπάρχει.

Ορνις χρυσοτόκος.

Ρυθά τισ εἶχεν ὠὰ χρυσᾶ τίκτουσαν. καὶ νομίσασ ὅδον αὐτῆσ ὅλον
ὄ χρυσοῦν εἶναι, κτείνασ δύρυκεν ὁμοίαν τῶν λοιπῶν ὀρνίθων. ὁ δὲ ἀθρό
ον πλοῦτον ἐλπίσας δύρυσεν, καὶ τοῦ μικροῦ ἐστέρηται ἐκείνου.

Επιμύθιον.

Ο μῦθος δηλοῖ, ὅτι δεῖ τοῖς παροῦσιν αρκεῖσθαι, καὶ πλὴν ἀπληστίαν φύγειν.

Λέων, καὶ ἀλώπηξ.

Λέων γηράσας, καὶ μὴ δυνάμενος διαρκέσαι αὐτῷ εἰς τροφὴν, ἔγνω δὴ
λ ἐπιτοίασ τί πρᾶξαι. καὶ δὴ παραγενόμενος εἰ σπηλαίῳ τινὶ καὶ κα-
τακλιθεὶς, προσεποιεῖτο νοσεῖν. παραγενόμενα οὖν τὰ ζῶα ἐπισκέ-
ψεως χάριν, συλλαμβάνων κατέθιον αὐτά. πολλῶν οὖν ζώων ἀπολωλότων,
ἀλώπηξ δὲ τὸ χάσμα τοῦ γνοῦσα, παρεγένετο πρὸς αὐτόν. καὶ στᾶσα ἔξω-
θεν τοῦ σπηλαίου, ἐπυνθάνετο πῶς ἔχει. τοῦ δὲ ἀπόντος κακῶσ, καὶ πλὴν αἰτίαν
πυνθανομένου δι' ἣν οὐκ εἰσέρχεται, ἡ ἀλώπηξ ἔφη, ὅτι ὁρῶ ἴχνη πολλῶν εἰσόν-
των, ὀλίγων δὲ ἐξιόντων. Επιμύθιον.

Ο μῦθος δηλοῖ, ὅτι οἱ φρόνιμοι τῶν ἀνθρώπων, ἐκ τεκμηρίων προορώμενοι τὸν
κινδυνῶσι ἐκφεύγουσιν.

Λύκος, καὶ γραῦς.

Υκος λιμώττων, πορεύεται ζητῶν τροφήν. γενόμενος δὲ κατά τινα τόπον,
λ ἤκουσε παιδίου κλαίοντοσ καὶ γραὸσ λεγούσης αὐτῷ, παῦσαι τὸ κλαί
ειν. εἰ δὲ μὴ, τῇ ὥρᾳ ταύτῃ ἐπιδώσωσι σοι λύκῳ. οἰόμενος δὴ ὁ λύκος ὅτι ἀληθεύει
ἡ γραῦς, ἵσταται πολλὴν ἐκδεχόμενος ὥραν. ὡς δ' ἑσπέρα κατέλαβεν, ἀκούει πόλι
τῆς γραὸς κελευούσησ τὸ παιδίον καὶ λεγούσησ αὐτῷ, ἐὰν ἔλθῃ ὁ λύ-
κος δεῦρο, φονεύσομεν σε τέκνον αὐτόν. ταῦτα ἀκούσας ὁ λύκος, ἐπορεύετο λέ
γων, εἰ ταύτῃ τῇ ἐπαύλει, ἄλλα μὲν λέγουσιν, ἄλλα δὲ πράττουσιν. Επιμύθιον.
Ο μῦθοσ πρὸς ἀνθρώπουσ, οἳ τινεσ τὰ ἔργα τοῖς λόγοις οὐκ ἔχουσιν ὅμοια.

Ερεφοσ, καὶ λύκος.

Ρεφος ἐπί τινος σώματος ἐστώσ. ἐπεὶ δὴ λύκον παρεόντα εἶδεν, ἐλοιδό-
ε ρει καὶ ἔσκωπτεν αὐτόν. ὁ δὲ λύκοσ ἔφη, ὦ οὗτοσ σύ με λοιδορεῖσ, ἀλλ'
ὁ τόπος. Επιμύθιον.

Ο μῦθος δηλοῖ, ὅτι πολλάκις καὶ ὁ τόποσ καὶ ὁ καιρὸς λίσθωσι τὸ θράσοσ κατὰ
τῶν ἀμεινόνων. Ημίονοσ.

ἡ Μίονος ἐκ κριθῶν παχυνθεὶς, ἀνεσκίρτησε βοῶν καὶ λέων, πατήρ μο
ῦ ἦν ἵππος ὁ παχυσόρομοσ. κἀκῶ αὐτῷ ὅλοσ ἀφωμοιώθην. καί ποτε
καὶ ἀκήκοε

(27–2. d2v)

X. アルドの時代 II

28. ホメロス『イリアス；オデュッセイア』（ヴェネツィア：アルド・マヌーツィオ，1504年）

Homer. *Homeri Ilias* (Venice: Aldus, 1504)/*Ulyssea. Batrachomyomachia. Hymni xxxii.* (Venice: Aldus Manutius, Romanus, 1504). 2 vols in one. 8°: A–Z^{8}, AA–LL^{8} MM^{6}; χ 1 a–z^{8}, ^{2}A–G^{8} H^{10} [$4 (−B1, MM4, b1; ＋^{2}H5). 160×94mm. Ahmanson-Murphy, I, no. 68/1–68/2; STC (Italian), p. 330; RA 2; 義塾図書館 15.

［120X@923@1］

（28. Sig. A3r）

本書はアルドの名を世界的に高めたギリシア・ラテン文学の小型本のひとつである。15世紀のインキュナブラには中世の写本の形態とレイアウトを受け継いだ大型本が多いが、16世紀に入る頃には、小型で薄い（よって相対的に安価な）書物が急速に出回るようになってきた。その代表が、ヴェネツィアのアルドが刊行し、今日アルドゥス版として知られるポケットサイズの古典文庫である。中世写本もインキュナブラも概してサイズが大きく、時禱書などを除くと小型本は希であった。アルドは、大型本が一般的であった古典文学を、‘Libelli portatiles in formam enchiridii’（手の中に入る形状の携帯できる小冊）と形容したサイズで、8折判の小型本として刊行し始める。その大きさは約160×100mmのやや縦長のサイズで、韻文の印刷に適したものである（雪嶋2014, p. 70）。使用されているギリシア語活字は、『アリストテレス全集』の活字にグリッフォがさらに改良を加えた、小型本を意識した小型活字である。アルドが最初に刊行した8折判は、1501年にイタリック体活字で印刷されたラテン語のウェルギリウス詩集だが、1504年に刊行された本書はアルド印行のギリシア語書の4冊目にあたり、1517年、1524年にも版を重ねている。

（TM）

29.『ルクレティウス著作集』（ヴェネツィア：アルド・マヌーツィオ，1515年）

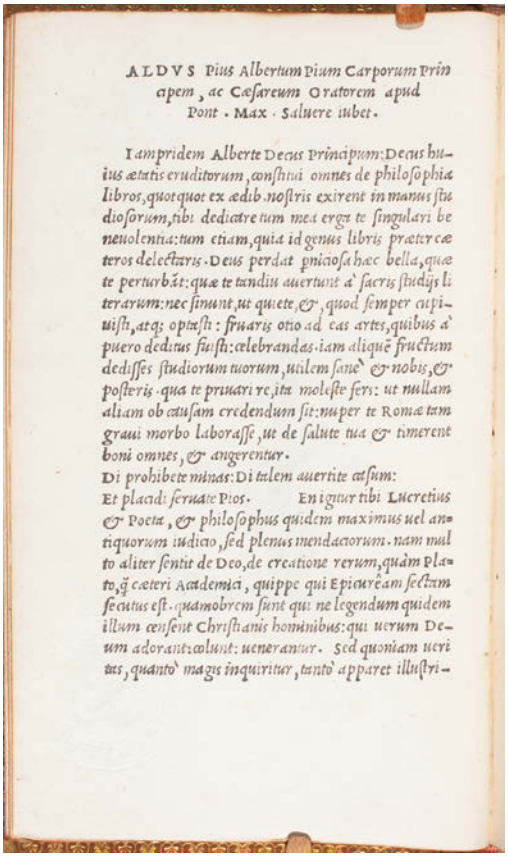
Lucretius. *Lucretius* (Venice: Aldus Manutius, Romanus, 1515). 8°: ∗^{8} (−∗8), a–q^{8}. 156×94mm. Ahmanson-Murphy, I, no. 112; STC (Italian), p. 397; 義塾図書館 16.

［120X@828@1］

本書は、ローマの詩人で哲学者ルクレティウス（*c.* 94–*c.*49 B.C.）の唯一の作品、『物の本質について』（*De rerum natura*）のアルド版で、アルドのために複数のラテン語古典を校訂したヒューマニストで、ヴェネツィアのサン・マルコ図書館（現在のマルチアーナ国立図書館）の館長も務めたアンドレア・ナヴァジェロ（Andrea Navagero; 1483–1529）によって新たに編纂された。アルドは、小型の8折判の狭いスペースになるべく多くのテクストを美しく収めようと、新たな活字をフランチェスコ・グリッフォに作らせた。それが、当時の人文主義書体であるカーシブ体をモデルとしたイタリック体活字である。イタリック体活字は、1500年に刊行したシエナの聖カタリナの『書簡集』の木版画に初めて登場したが、これは版画中の数語のみの試験的なもので、テクスト本文として本格的に用いられたのは1501年刊行の8折判ウェルギリウス詩集からである。イタリック体活字は、当時の人文主義書体を斜めに傾けた形状で、パドヴァ出身の当代随一の能書家バルトロメオ・サンヴィート（展示番号30）あるいはローマで活躍していた人文主義者ポンポニオ・レートの文字を手本として考案されたという意見をはじめ、アルド自身の文字ではないかという見解もある。グリッフォが制作したのは小文字のみで、大文字にはローマン体活字が使用されている。このイタリック体活字は、アルドの死後は印刷所を継いだトッレザーニ家に受け継がれ、1559年まで使用され続けた（雪嶋2014, pp. 68–69）。

1501年から刊行されたアルドゥス版古典文学シリーズは大成功を収め、イタリアやフランスでは類似品が販売されるようになった。リヨンの出版者は、アルドと同じイタリック体を用いて、アルドの前文までコピーした海賊版を刊行したため、アルドは1503年に警告文を印刷している。本書にも無断転載を禁じる旨が記してある。1515年1月に刊行された本書は、アルド・マヌーツィオの生存中に刊行された最後のアルド版である。アルドを当時の代表的出版人に押し上げた「アリストテレス全集」と同じく、カルピの領主アルベルト・ピオに献呈されている。アルドは、カルピに埋葬して欲しいという遺言を残して1515年2月6日に世を去り、その出版所は義父のアンドレア・トッレザーニ（Andrea Torresani）、そしてアルドの末子のパオロ（展示番号31）へと受け継がれてゆくことになる。

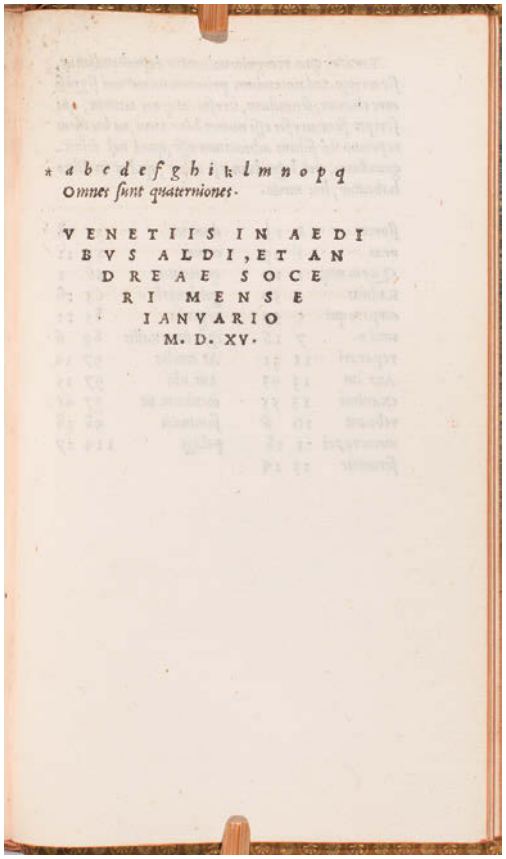
（TM）



ALDVS Pius Albertum Pium Carporum Prin
cipem, ac Cæsareum Oratorem apud
Pont. Max. Saluere iubet.

Iampridem Alberte Decus Principum: Decus hu-
ius ætatis eruditorum, constitui omnes de philosophia
libros, quotquot ex ædib. nostris exirent in manus stu
diosorum, tibi dedicare tum mea erga te singulari be
neuolentia: tum etiam, quia id genus libris præter cæ
teros delectaris. Deus perdat pnicioſa hæc bella, quæ
te perturbãt: quæ te tandiu auertunt a' sacris studijs li
terarum: nec sinunt, ut quiete, & quod semper cupi-
uisti, atq; optasti: fruaris otio ad eas artes, quibus a'
puero deditus fuisti: celebrandas. iam aliquẽ fructum
dedisses studiorum tuorum, utilem sane' & nobis, &
posteris. qua te priuari re, ita moleste fers: ut nullam
aliam ob causam credendum sit: nuper te Romæ tam
graui morbo laborasse, ut de salute tua & timerent
boni omnes, & angerentur.
Di prohibete minas: Di talem auertite casum:
Et placidi seruate Pios. En igitur tibi Lucretius
& Poeta, & philosophus quidem maximus uel an-
tiquorum iudicio, sed plenus mendaciorum. nam mul
to aliter sentit de Deo, de creatione rerum, quàm Pla-
to, q̃ cæteri Academici, quippe qui Epicurẽam sectam
secutus est. quamobrem sunt qui ne legendum quidem
illum censent Christianis hominibus: qui uerum De-
um adorant: colunt: ueneranur. Sed quoniam ueri
tas, quanto' magis inquiritur, tanto' apparet illustri-

(29–1. Sig. ∗ 1v)



∗ a b c d e f g h i k l m n o p q
Omnes sunt quaterniones.

VENETIIS IN AEDI
BVS ALDI, ET AN
DREAE SOCE
RI MENSE
IANVARIO
M. D. XV.

(29–2. Sig. q6r)

30.「時禱書」（ローマ，1480年頃）（写本零葉）
Book of Hours ([Italy, Rome, *c.*1480s]). *c.*120×80mm.
[170X@61@10@3]

（30. Beginning of Hours of the Cross）

バルトロメオ・サンヴィート（Bartolomeo Sanvito; 1435–1518）は、パドヴァ出身の写字生，挿絵画家で、パドヴァとローマで活躍した。そのヒューマニスト書体は15世紀イタリアでもっとも美しいとされ、アルドのイタリック体の手本ともなったと推測されている。サンヴィートは1470年代の終わりから1480年代にかけて小型の時禱書を作成している。この挿絵入りイニシャル‘D’が描かれた零葉は時禱書の「十字架の時禱」の冒頭部で、金文字と色文字を交互に用いるサンヴィートの特徴が見られる。「書物破壊者」として悪名高いアメリカの蒐集家オットー・エギー（Otto F. Ege 1888–1951）の旧蔵（De la Mare）。

（TM）

31. フランチェスコ・コロンナ（伝）『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ（ポリーフィロの狂恋夢）』（ヴェネツィア：パオロ・マヌーツィオ，1545年）

Francesco Colonna. *La Hypnerotomachia di Poliphilo* (Venice: Paolo Manuzio, 1545). Sm. fol.: $[1]^4$, a–y^8 z^{10}, A–E^8 F^4. 312×204mm. Ahmanson-Murphy, IIIa, no. 300; RA 58; STC (Italian), p. 530; 義塾図書館14.

[141X@111@1]

「ポリーフィロの狂恋夢、あるいは夢のなかの愛の闘い――そこでは、人間の全てのことは夢以外の何ものでもないこと、そして思考に値する他の多くのことが語られます」という標題の本書は、アルドが刊行した長い幻想的な夢物語である。「ヒュプネロトマキア」はギリシア語の造語で、標題で説明されているように、「夢の中の愛の闘い」という意味にとれる。主人公のポリーフィロが眠りに落ち、夢のなかで恋人トレヴィーゾのポリーアを探し求めて、エジプトやローマを彷彿とさせる古代的な風景のなかを彷徨い、ヒエログリフが刻まれたオベリスクを背に乗せた巨象の建造物の中に入ったり、ニンフたちの凱旋行列に行き当たったりする。物語は最終的に恋人たちの愛の確認で終わるが、プロットらしいプロットはない。作者名の記述はないが、各章の最初の装飾頭文字をつなげると、POLIAM FRATER FRANCISCVS COLVMNA PERAMAVIT（修道士フランチェスコ・コロンナはポリーアをとても愛した）と読めることから、フランチェスコ・コロンナ（*c.* 1433–1527）が作者名と考えられてきたが、この人物が誰なのかは諸説あり、作者については未だ決定的な判断は下されていない。物語は散文で、ラテン語とイタリア語を織り交ぜた独特の文体で書かれ、ギリシア語やラテン語の語幹を組み合わせ、場合によってはヒエログリフ、ヘブライ語、アラビア語も利用して作られた造語が頻出する。そうした読みにくさゆえに、20世紀を代表する比較文芸史家マリオ・プラーツは、本書を「ルネサンスにおける最も美しい挿絵入りの書物、…最も嘆賞されながら、最も読まれていない書物」と呼んだ（伊藤，p. 136）。

それにもかかわらず本書は常に愛書家の垂涎の的であった。その理由は、フランチェスコ・グリッフォによるタイポグラフィと174点の繊細な木版画、斬新なページレイアウトが見事に調和した書物としての美しさにある。挿絵を提供した画家が誰かについても諸説あり、ジョヴァンニ・ベッリーニやサンドロ・ボッティチェリといったルネサンスを代表する画家の名前が挙がったこともある。本書はアルド印刷所の出版物としては希な挿絵入りの書物で、初版は1499年11月にアルド・マヌーツィオによって刊行されたが、展示の1冊は、アルドの末子、パオロ（Paulus Manutius; 1533–57頃活躍）が1545年に刊行した第2版である。「読者のより良い便宜のために、最大な注意を払って改訂され、新たに再版された」と記されているタイトルページ以外は、初版と同じ版木が使用されている。

（TM）

LA HYPNEROTOMACHIA DI POLIPHILO,
CIOE' PVGNA D'AMORE IN SOGNO.
DOV'EGLI MOSTRA, CHE TVTTE LE COSE
HVMANE NON SONO ALTRO CHE
Sogno: & doue narra molt'altre cose degne
di cognitione.

RISTAMPATO DI NOVO, ET RICORRETTO
con somma diligentia, à maggior commodo
de i lettori.

IN VENETIA, M. D. XXXXV.

（31–1. タイトルページ）

LA MVLTITVDINE DEGLI AMANTI GIOVENI, ET DILLE DIVE AMOROSE PVELLE LA NYMPHA A POLIPHILO FACVNDAMENTE DECHIARA, CHI FVRONO ET COME DAGLI DII AMATE. ET GLI CHORI DE GLI DIVI VATICANTANTI VIDE.

ALCVNO MAI DI TANTO INDEFESSO Eloquio aptamente se accommodarebbe, che gli diuini archani disertando copioso & pienaméte potesse euadere & uscire. Et expressamente narrare, & cum quanto diua pompa, indesinenti Triumphi, perenne gloria, festiua lætitia, & fœlice tripudio, circa a queste quattro inuisitate seiuge de memorando spectamine cum parole sufficientemēte exprimere ualesse. Oltra gli inclyti adolescentuli & stipante agmine di innumere & periucunde Nymphe, piu che la tenerecia degli anni sui elle prudente & graue & astutule cum gli acceptissimi amanti de pubescente & depile gene. Ad alcuni la primula lanugine splendescente le male inserpiua delitiose alacremente festigiauano. Molte hauendo le facole sue accense & ardente. Alcune uidi Pastophore. Altre cum drite haste adornate de prische spolie. Et tali di uarii Trophæi optimamēte ordiate

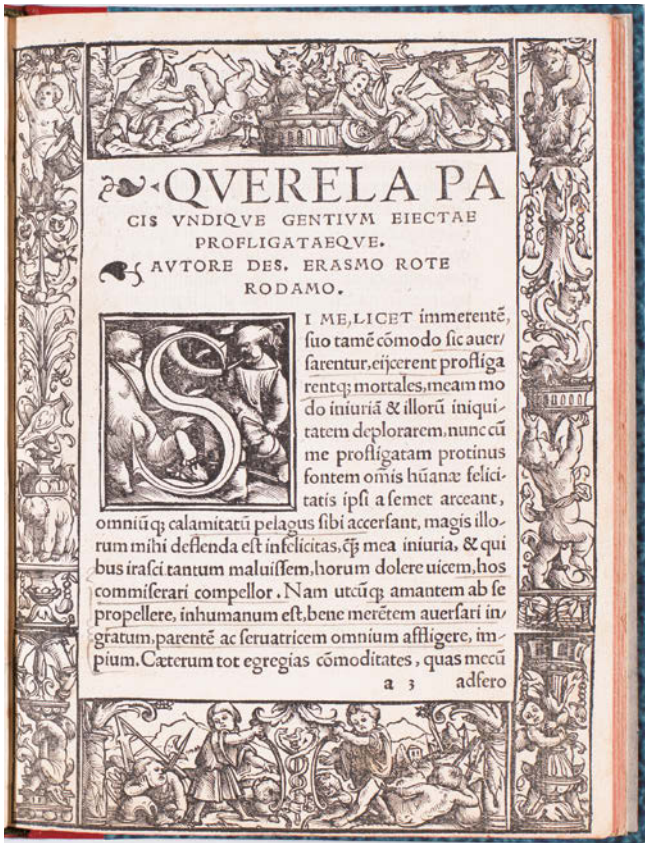
(31–2. Sig. I5r)

XI. エラスムスとその周辺

32. デジデリウス・エラスムス『平和の訴え』（バーゼル：ヨハン・フローベン，1517年）

Desiderius Erasmus. *Qverela pacis vndique gentium eiectæ* [and other works] (Basel: Johann Froben, 1517). 4°: a–g^4 (－g4) h^4 i^6 (－i6). 211×148mm. STC (German), p. 275.

［120X@1104@1］



QVERELA PA
CIS VNDIQVE GENTIVM EIECTAE
PROFLIGATAEQVE.
AVTORE DES. ERASMO ROTE
RODAMO.

SI ME, LICET immerentē, ſuo tamē cōmodo ſic auer/ ſarentur, eijcerent profliga rentq; mortales, meam mo do iniuriā & illorū iniqui tatem deplorarem, nunc cū me profligatam protinus fontem omis hūanæ felici tatis ipſi a ſemet arceant, omniū q; calamitatū pelagus ſibi accerſant, magis illo rum mihi deflenda eſt infelicitas, cū mea iniuria, & qui bus iraſci tantum maluiſſem, horum dolere uicem, hos commiſerari compellor. Nam utcū q; amantem ab ſe propellere, inhumanum eſt, bene merētem auerſari in gratum, parentē ac ſeruatricem omnium affligere, im pium. Cæterum tot egregias cōmoditates, quas mecū

a 3 adfero

（32. Sig. a3r）

本書は『痴愚神礼賛』など多数の著作がある、ルネサンスの大知識人デジデリウス・エラスムス（1466 or 1469–1536）が著した『平和の訴え』初版である。エラスムスのこの書が平和主義をはじめて文学的に理論づけたと評する声もある（樋野，p. 26）。擬人化された「平和の神」の口を通して、独自の平和論が展開される。

本書は、エラスムスをはじめとする人文主義者の著作をさまざまに上梓し、ヨーロッパ最大級の印刷業を展開した、バーゼルのヨハン・フローベン（*c.* 1460–1527）が出版した。フローベンはアマーバッハ（展示番号21）の印刷所を引き継ぐと、活字のローマン体の普及やイタリック体の紹介に努めた。本書でも壮麗なローマン体活字が印字面を演出する。だが実は、エラスムスはフローベンの出版準備が進まないことに業を煮やし、レーヴェンの印刷者ディルク・マルテンス（Dirk Martens; 1446/7–1534）にも草稿を渡していた。フローベン版の直後にマルテンス版の刊行が続いたのはそれ所以である。

（ST）

33. トマス・モア『ユートピア』（バーゼル：ヨハン・フローベン，1518年）

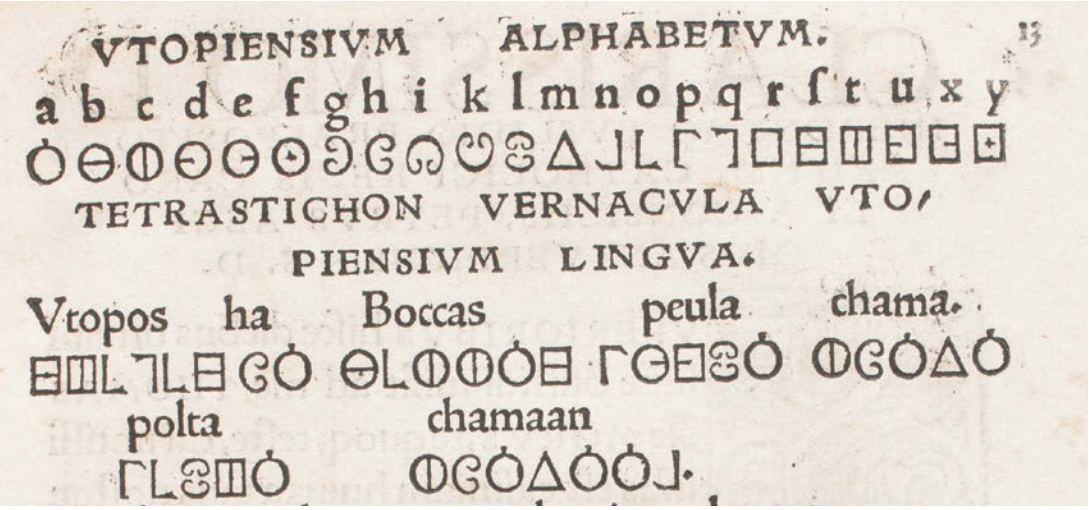
Thomas More. *De optimo reip. statv, deqve noua insula Vtopia;* Desiderius. *Epigramata T. Mori* (Basel: Johan Froben, 1518). 4°: a–s^{4} t–u^{6}; x–y^{4} A–$I^{4}K^{6}$ L–$T^{4}V^{6}$. 203×149mm. PP 53; STC (German), p. 860.

［1102@280］

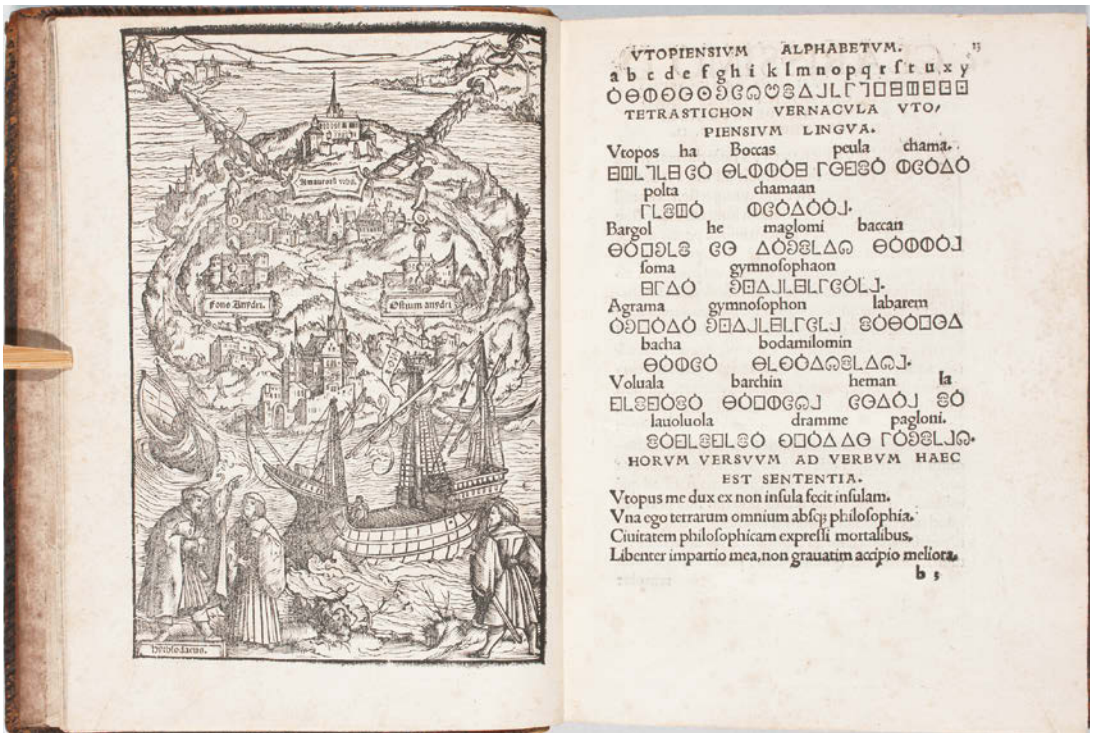
著者トマス・モア（1478–1535）は、オックスフォードで学び法律家として身を立てた後、ヘンリー8世の大法官として仕えた。また古典語にも造詣が深く、16世紀イギリスを代表する人文主義者であることは言うまでもない。北方ルネサンスの知の巨星エラスムス（展示番号32）と生涯にわたり友情を深め、互いに知的活動を支え合った。エラスムスは代表作『痴愚神礼賛』をモアの家で書き上げ、彼に捧げている。36年にも及んだ偉大なる思想家たちの往復書簡をひもといてみると、ふたりの深き友情が時空を超えて伝わってくる（沓掛・高田訳）。

本書のタイトル「ユートピア（utopia）」は、モアが古典ギリシア語のou（否定詞）とtopos（場所）にラテン語接尾辞（-ia）を組み合わせた造語で「どこにもない場所」を意味する。架空の世界を描きつつ、同時代のイギリス社会に対する痛烈な風刺が冴えわたる。一方で、実在した書物の数々への言及も忘れない。特にアルドのギリシア語古典の列挙は興味深く、本展示で紹介するアルド版のアリストテレス（展示番号26）やホメロス（展示番号28）も登場する。またモアはユートピアに独自のアルファベット（the Utopian alphabet）も作った（33–1）。

展示の1冊はバーゼルのフローベン（展示番号31, 32）が1518年に出版したラテン語第2版である。アンブロシウス・ホルバイン（Ambrosius Holbein; *c.* 1494–*c.* 1519）が制作したユートピア島の木版画（32–2）が本書を魅力的にしている。また初版（1516）にはないエラスムスの序文とエピグラム集も一緒に印刷されている（33–3）。イギリスの政治家、愛書家トマス・グレンヴィル（Thomas Grenville; 1755–1846）の旧蔵書で、本塾大学名誉教授であり愛書家としても名高い高橋誠一郎氏（1884–1982）より寄贈された。（ST）



（33–1. Sig. b3r：ユートピアのアルファベット（部分拡大））



VTOPIENSIVM ALPHABETVM.

a b c d e f g h i k l m n o p q r ſ t u x y

TETRASTICHON VERNACVLA VTO/ PIENSIVM LINGVA.

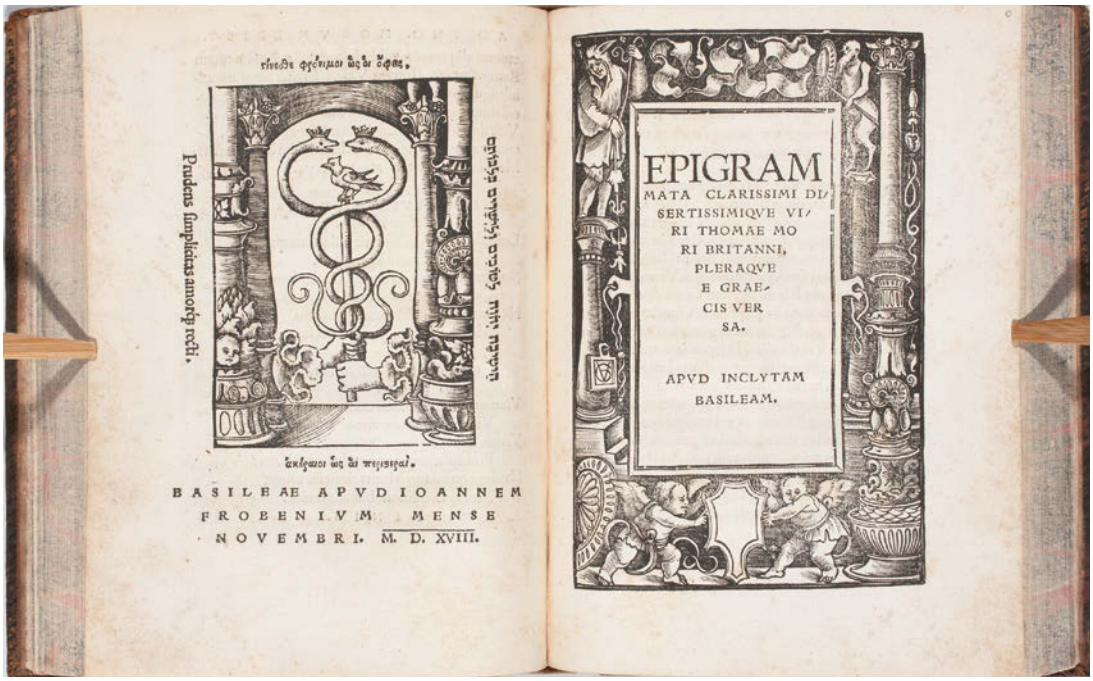
Vtopos ha Boccas peula chama.
polta chamaan
Bargol he maglomi baccan
ſoma gymnoſophaon
Agrama gymnoſophon labarem
bacha bodamilomin
Voluala barchin heman la
lauoluola dramme pagloni.

HORVM VERSVVM AD VERBVM HAEC EST SENTENTIA.

Vtopus me dux ex non inſula fecit inſulam.
Vna ego terrarum omnium abſq; philoſophia.
Ciuitatem philoſophicam expreſſi mortalibus.
Libenter impartio mea, non grauatim accipio meliora.

b 5

(33–2. Sig. b2v–3r)



Prudens ſimplicitas amoreq; recti.

BASILEAE APVD IOANNEM FROBENIVM MENSE NOVEMBRI. M. D. XVIII.

EPIGRAM MATA CLARISSIMI DI/ SERTISSIMIQVE VI/ RI THOMAE MO RI BRITANNI, PLERAQVE E GRAE/ CIS VER SA.

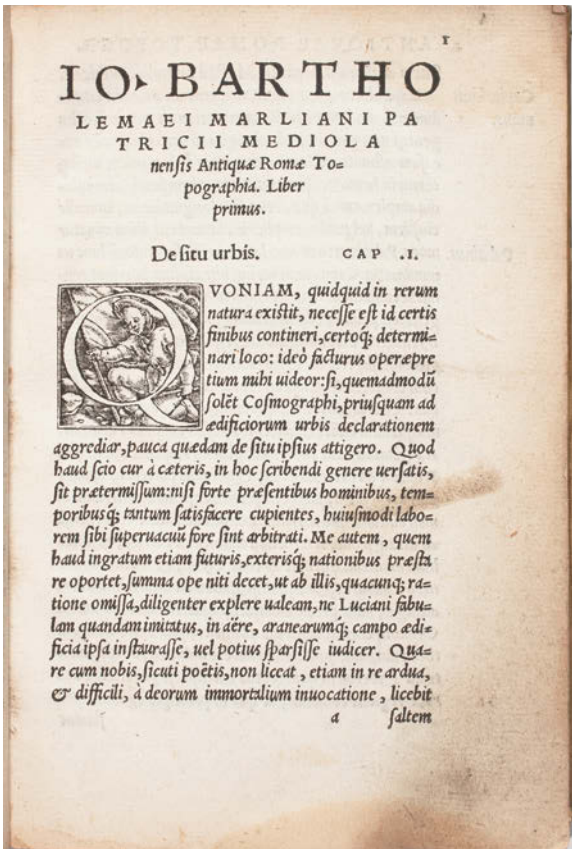
APVD INCLYTAM BASILEAM.

(33–3. Sig. u6v–x1r)

34. バルトロメオ・マルリアーノ『古代ローマ地誌』（リヨン：セバスティアン・グリフィウス，1534年）

Joannes Bartholomaeus Marlianus. *Topographia antiquae Romae.* Ed. F. Rabelais（Lyon: Sebastien Gryphius, 1534). 8°: ∗^{8}, a–u^{8} x^{4}. 157×105mm. STC (French), p. 302.

［120X@1102@1］



I

IO▸ BARTHO
LEMAEI MARLIANI PA
TRICII MEDIOLA
nensis Antiquæ Romæ To=
pographia. Liber
primus.

De situ urbis. CAP .I.

QVONIAM, quidquid in rerum natura existit, necesse est id certis finibus contineri, certoq; determinari loco: ideò facturus operæpretium mihi uideor: si, quemadmodũ solẽt Cosmographi, priusquam ad ædificiorum urbis declarationem aggrediar, pauca quædam de situ ipsius attigero. Quod haud scio cur à cæteris, in hoc scribendi genere uersatis, sit prætermissum: nisi forte præsentibus hominibus, temporibusq; tantum satisfacere cupientes, huiusmodi laborem sibi superuacuũ fore sint arbitrati. Me autem, quem haud ingratum etiam futuris, exterisq; nationibus præstare oportet, summa ope niti decet, ut ab illis, quacunq; ratione omissa, diligenter explere ualeam, ne Luciani fabulam quandam imitatus, in aëre, aranearumq; campo ædificia ipsa instauraſſe, uel potius sparsisse iudicer. Quare cum nobis, sicuti poëtis, non liceat, etiam in re ardua, & difficili, à deorum immortalium inuocatione, licebit

a saltem

（34. Sig. a1r）

フランス・ルネサンスを代表する人文主義者、医師、著作家フランソワ・ラブレー（François Rabelais; *c.* 1494–*c.* 1553）は、フランソワ1世（François I; 1494–1547）の重臣ジャン・デュ・ベレー（Jean Du Bellay; 1492–*c.* 1560）との知遇を得ると、1534年、侍医として彼のイタリア旅行に同行し初めてローマを訪れた。この時の目的のひとつがローマの地勢図作成であった。首尾よく進んだ準備にもかかわらず、イタリア人マルリアーノに出版の先を越され、計画を断念せざるを得なくなった。ラブレーは帰国後、リヨンの印刷者セバスティアン・グリフィウス（1493–1556）の校正係を務めた。グリフィスウがマルリアーノのローマ地誌を再版する際、ラブレーが手伝って刊行したのが本書である。

グリフィウスはドイツ南部の出身で、一族はパリやイタリア、ネーデルランド等の各地で印刷業を営んでいた。1515年頃にリヨンにやってくると、怪物グリフォンを印刷者標章に用い、エラスムス（展示番号32）をはじめとする人文主義者の著作やラテン語の古典、文法書、宗教書などおよそ1000点もの書物を市場に送り出し、フランスにおける人文主義の発展に寄与した（宮下17章）。

（ST）

XII. フランス・ルネサンスの活字（1）

35. ギョーム・ビュデ『ギリシア語註解』（［パリ］：ジョス・バード，1529年）

Guillaume Budé. *Commentarii linguae Graecae* ([Paris]: Joss Bade, 1529). Fol.: $\alpha^4\beta^6\gamma^8\delta$–$\varepsilon^6$, a–z^8, A–Z^8, Aa–Nn^8 Oo^6 Pp^8. 349×215mm. PMM 190; STC (French), p. 85.

［141X@64@1］

ギョーム・ビュデ（1468–1540）は、16世紀フランスにおける人文主義を先導した古典学者で、「フランスのエラスムス」と称される。プルタルコス、アリストテレス、プラトン、ガレノスなどの古典ギリシア・ラテン文献の翻訳・校訂に取り組むのみならず、法学や哲学も究めた。

『ギリシア語註解』はギリシア語の語義や語源、史的展開をまとめ、ギリシア語文献学の基礎を築いた。後にアンリ・エティエンヌ2世が『ギリシア語宝典』を編纂出版する際の基礎資料となった。

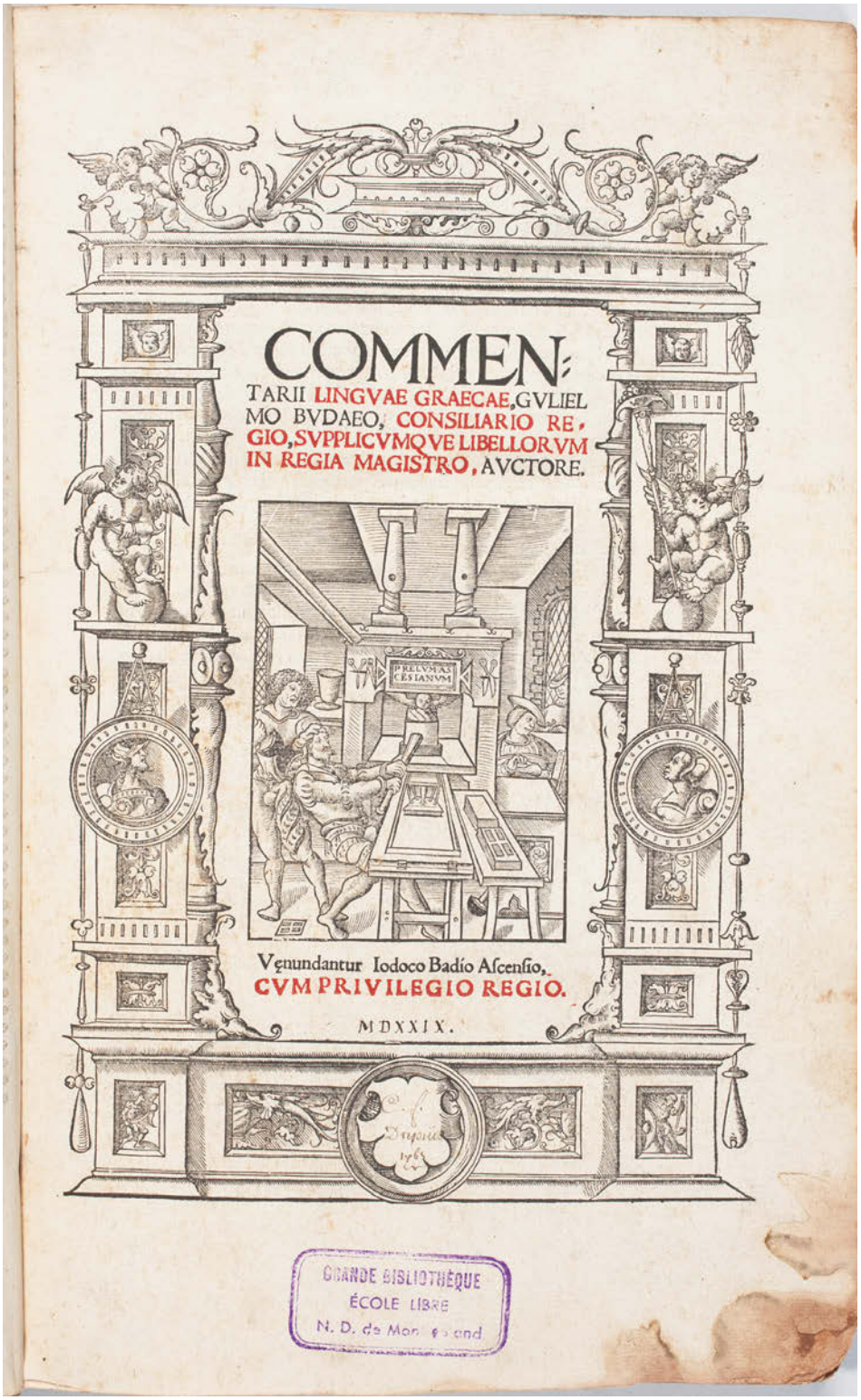
当時、隣国ドイツでルターの宗教改革が始まりカトリック側が過敏になるなか、ビュデは聖書の原典研究を進めた。このためパリ大学神学部から異端視、弾圧されていた。しかし、ハプスブルク家のカール5世（在位1519–56）と激しく対立していた国王フランソワ1世は、ビュデの訴えを容認し、彼を庇護した。ビュデは国王に宛てた本書の前書きで、以前より進言してきた文献学の重要性を説き、国王の「王立教授団」設立（1530年）を導き出した。これが後のコレージュ・ド・フランス（Collége de France）の礎となる（渡辺 第1章）。

印刷を担当したのは、イタリアで古典を学び、リヨンの後にパリに移り、人文主義者の著作や古典の出版を多く手がけたジョス・バード（1462–1535）である。本文の改訂や註釈にも精力的に取り組み、学匠印刷家としての名声を確立した。彼の娘はアンリ・エティエンヌ1世の息子ロベール・エティエンヌ（展示番号38, 39）と結婚した。

本書には膨大な量のギリシア語・ラテン語文献が引用されている。当時はパリでもまだゴシック体が主流であったが、バードは独自のローマン体やギリシア語活字を用いたことでも知られる。本書のタイトルページ（35–1）は二色刷りで、大きく陣取る印刷者商標は、初期印刷工房内の様子を描いた貴重な資料でもある。

義塾図書館所蔵本は、17世紀にコレージュ・ド・ナヴァールにて修辞学の優秀な成績を修めた褒美として、後にギリシア語学者となるニコラ・タヴェルニエ（Nicolas Tavernier; 1620–98）に贈られた。その後はアカデミー・フランセーズ会員のシャルル・フランソワ＝デュピ（Charles François Dupis; 1742–1809）、考古学者アントワーヌ＝ジャン・レトロンヌ（Antoine-Jean Letronne; 1787–1848）の所蔵するところとなった。

（ST）



COMMEN-
TARII LINGVAE GRAECAE, GVLIEL
MO BVDAEO, CONSILIARIO RE-
GIO, SVPPLICVMQVE LIBELLORVM
IN REGIA MAGISTRO, AVCTORE.

Venundantur Iodoco Badio Ascensio,
CVM PRIVILEGIO REGIO.

MDXXIX.

GRANDE BIBLIOTHÈQUE
ÉCOLE LIBRE
N. D. de Mon[illegible]

（35–1. タイトルページ）

GVLIELMI BVDÆI
CONSILIARII REGII, SVPPLICVMQVE LIBELLORVM IN REGIA MAGISTRI, COMMENTARII LINGVAE GRAECAE.

IN CRIMINIBVS PVblícis, quæ δημόσια ἀδικήματα, vocantur, accusatíones κρίσεις & γραφαὶ, & interdum δίκαι dícuntur, & ís quí accusator erat, his fere vocabulís apud Oratores significabatur, ὁ διώκων, ὁ κρίνων, ὁ κατήγορος, ὁ βιβάων, ὁ αἰτιώμενος, ὁ γραφόμενος. Vnde vocabula accusationis, κατηγορία, δίωξις, βιβῶν, αἰτία, κρίσις, γραφή. Reus autem dicitur ὁ κατηγορούμενος, ὁ γραμμένος, ὁ κρινόμενος, ὁ διωκόμενος, ὁ ἀπολογούμενος, ὁ αἰτιαθείς, ὁ αἰτίαν ἔχων, ὁ ᾧ αἰτία ἐστὶν, ὁ ἀπωνεζόμενος, ὁ ἐς ἀγῶνας καθιστάμενος, ὁ κινδυνεύων. Id est, qui in reatu est, & in sordíbus. vt periculum latine reatum significat. Cicero pro Sextío, Quid? sua sponte homines in amícorum periculís vestítum mutare non solent? id est, τῶν φίλων κινδυνευόντων ἐσθῆτα μεταλλάξαι; vel, σωκινεύειν τὴν δημοσίαν τοῖς κινδυνεύουσι, καὶ φαιὰν ἱμάτιον συμπεριβάλλειν; Διώκω σε φόνου, latíne est, accuso te vel postulo lege Cornelía de sicariis. Διώκω. Dícitur & διώκω σε γραφὴν ταύτην, Reum te criminis huíusfacío. Et quoniã vsus scribentiũ est multíplex, ego quæ in mentem mihí venient, in hos commentarios, q̃ potero explícatissime, referam, & ad iuuenũ captum q̃ appositissime: ita tamen, vt si iam forte prouectiores eos legerint, nonnulla inuenturi sint (nisi fallor) ob quæ nec omnem operam lusisse se dictitent, nec nos in rebus translatitiis, tãtum laboris exhausisse. Demosthen. καὶ κεφισοφῶντα γραφὴν κρῶν γραμματῶν ἐδίωκες. Dícitur etiam Διωκάθω. Plato in Euthyphy. Εἰ γὰρ μὴ ἤδεσθα σαφῶς τό τε ὅσιον καὶ τὸ ἀνόσιον, οὐκ ἂν ποτε ἐπιχείρησας ὑπὲρ ἀνδρὸς οἰκέτου πρεσβύτου πατέρα διωκάθειν φόνου. Vsus est & in Gorg. Et Aristoph. itidem. ἐπὶ αὐτὸς γραφὴν διωκάθω γραψάμενος. Διωκάθω.

φόβγω φόνου dicunt ἀντὶ τοῦ κατηγορῶμαι, ἀποφεύγω δὲ, ἀντὶ τοῦ ἀφίεμαι, ὁ ἀπολύομαι, absoluor. Athen. κρινομένου δὲ ὑπὸ εὐθύνας καὶ ἀναστὰς ἀπέφυγε, διόπερ ὀργισθεὶς ὁ δικαστὴς, οὐκ εἴα ἄπαν ἀδικεῖν δίκαιον. Interdum cum duobus accusatiuis. Demosth. πρὸς βοιωτὸν, ὡς δίκαιος τόπον ἀπέφυγον πρόσντα καὶ ἀνδροφόνοι. φόβγω.

(35–2. Srg. alr)

36. ユークリッド『幾何学原論』（パリ：アンリ・エティエンヌ1世，［1516年］）

Euclid. *Geometricorum elementorum libri XV* (Paris: Henri Estienne, 7 January [1516]). Fol.: a–z^{8}, &^{8}, A–H^{8} I^{10} (－I10). 291×203mm. Renouard, pp. 18–19; STC (French), p. 157.

［S27@73@1］

16世紀に輝かしい活躍をした出版一族の祖、アンリ・エティエンヌ1世が手がけたタイポグラフィの傑作、フランスにおけるユークリッドの『幾何学原論』の初版である。ラートドルト版（展示番号16）など、イタリアで出版されていた書物のレイアウトに倣い、左右の余白をたっぷりとることで図形印刷を成功させている。また学匠印刷家ジェフロア・トリー（Geoffroy Tory; *c.* 1480–1533）彫版の美しい装飾頭文字（例：次頁の図版のP）を種々に用い、印字面に華やぎを加えている（Schreiber, pp. 35–37）。

美しいローマン体で印刷された本文は、人文主義者バルトロメオ・ザンヴェルティ（Bartolomeo Zamberti; 1473–1543）が新たにギリシア語から翻訳し、人文主義者ジャック・ルフェーヴル・デターブル（Jacques Lefèvre d'Étaples; 1455?–1536）が編集した。アンリ・エティエンヌ1世はデタープルに大きな影響を受け、その関連著作を多数出版している（Armstrong, Ch. 1）。

義塾図書館所蔵本は大正期に法学部学生から寄贈された古典書群のひとつである。『慶應義塾図書館史』の年表には「矢野国太郎ラテン語古書三九冊寄贈」との記述がある他、同年の『三田評論』348号にも「矢野氏寄贈古典書」の写真が口絵に載り、「塾報」（p. 41）で次のように報告されている。

口繪第二頁は矢野國太郎氏の寄贈にかかる古書及びその扉の二三を撮影せるものにて、全部三十九冊、大部分はラテイン文にしてギリシア文其他も混へ殆ど第十六七世紀の出版にかかるものなり。プラトンのラテイン譯全集、テレンティウスの喜劇詩、アリストテレス、ヒエロニムス、ホラテイウス、ピンダロス、ユニウスの“De Pictura Vetem”かのギリシアの有名なる地理学者ストラボの書、アレキサンダーのインド遠征記、其の他の文學、美術、宗教、科學、醫學等に關するもの多し、而もかく年代を經たるものなるに拘わらず汚損の程度案外に少く、表紙は羊皮其の他の皮を用ひその装釘また荘重古典的にして當時の風を存しその内容の珍重すべきは勿論なるも寧ろ稀覯書として一層價値大なるものなりと信ず、過般矢野氏がその貴重なる蒐集の一部を本塾圖書館に寄贈せられたるは感謝に堪へざる次第にして本誌特別號にその寫眞を掲載し氏の好意を永く記念せんとするものなり。

義塾図書館の洋貴重書収集史は、15世紀刊本については整理されているが（IKUL参照）、16世紀以降はこれからの課題である。この記録は、義塾図書館の洋書コレクション形成史を記述する上で有益な情報となるだろう。

（ST）

¶EVCLIDIS MEGARENSIS CLARISSIMI philoſophi Mathematicorumq; facile principis:primum ex Campano,deinde ex Theone Græco commentatore, interprete Bartholomæo Zamberto Veneto, Geometricorum elementorum liber primus.

¶EX Campano:triplex principiorum genus. Primum. Diffinitiones.

1 Vnctus: eſt cuius pars non eſt.

2 ¶Linea:eſt longitudo ſine latitudine.

3 ¶Cuius quidem extremitates:ſunt duo puncta.

4 ¶Linea recta: eſt ab vno puncto ad alium breuiſſima extenſio/in extremitates ſuas eas recipiens.

5 ¶Superficies:eſt quæ longitudinē et latitudinem tantum/habet.

6 ¶Cuius quidem termini:ſunt lineæ.

7 ¶Superficies plana:eſt ab vna linea ad aliam breuiſſima extenſio/in extremitates ſuas eas recipiens.

8 ¶Angulus planus:eſt duarum linearum alternus cōtactus/ quarum expanſio eſt ſuper ſuperficiem / applicatioq; non directa.

9 ¶Quando autem angulum cōtinent duæ lineæ rectæ: rectilineus angulus nominatur.

10 ¶Quando recta linea ſuper rectam ſteterit/ duoque anguli vtrobiq; fuerint æqules:eorum vterq; rectus erit.lineaq; lineæ ſuperſtans:ei cui ſuperſtat/perpendicularis vocatur.

11 ¶Angulus vero qui recto maior eſt: obtuſus dicitur.

12 ¶Angulus vero minor recto:acutus appellatur.

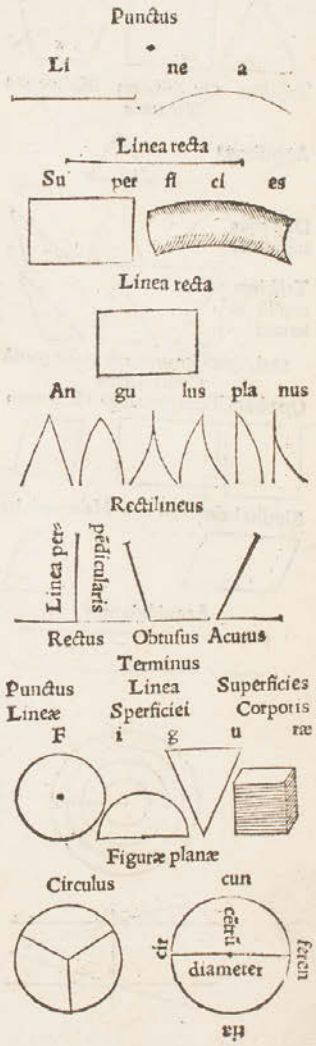
14 ¶Terminus: eſt quod vniuſcuiuſq; finis eſt.

15 ¶Figura:eſt quæ termino vel terminis continetur.

16 ¶Circulus:eſt figura plana vna quidem linea contenta quæ circunferētia nominatur / in cuius medio punctus eſt/a quo omnes lineæ rectæ & ad circunferentiā excuntes/ſibi inuicē ſunt æquales.

17 ¶Et hic quidem punctus:centrum circuli dicitur.

18 ¶Diameter circuli:eſt linea recta quæ ſuper eius centrū trāſiens/extremitateſq; ſuas circunferenti applicans/ circulum in duo media diuidit.



(36. Sig. a3r)

XIII. フランス・ルネサンスの活字（2）

37. シャルル・エティエンヌ『人体解剖図譜』（パリ：シモーヌ・ド・コリーヌ，1546年）

Charles Estienne. *La dissection des parties du corps humain diuisee en trois liures* (Paris: Simone de Colines, 1546). Fol.: a^8, A–Z^8, AA–BB^8 CC^4 (－CC4). 379×235mm. STC (French), p. 155.

［142X@78@1］

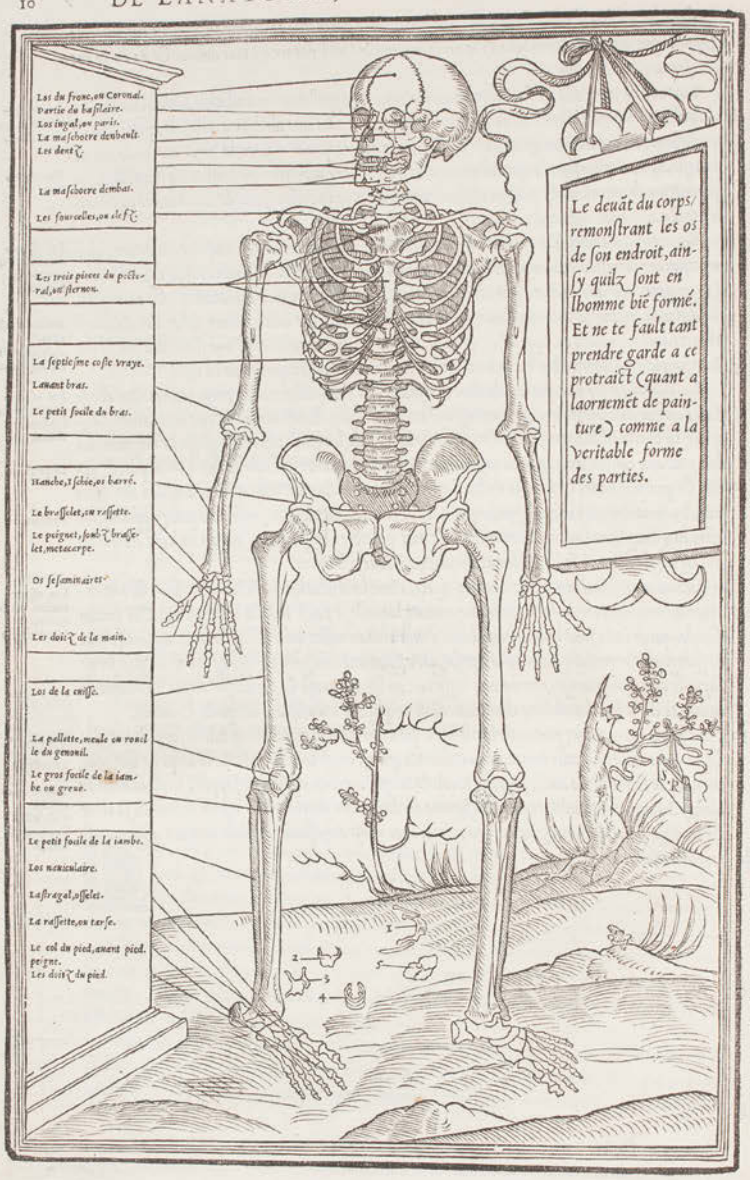
本書の著者シャルル・エティエンヌ（1504–64）は、パリで著名な印刷所を営むエティエンヌ家に生まれた。彼自身のパドヴァ大学における人体解剖の経験や骨格標本の知識を活用し、本解剖書を執筆した。外科医エティエンヌ・ド・ラ・リヴィエール（Etienne de la Rivière）と彫刷師ジャン・ジョラ（Jean Jollat）の協力を得て本書の制作にあたったが、途中リヴィエールと仲違いをして裁判沙汰にまでもつれこんだ。その結果、初版刊行が1545年と予定よりも7年も後にずれこみ、この間にヴェサリウス（Andreas Vesalius; 1514–64）の『人体の構造についての七つの書』刊行（1543年）に先を越されてしまう。

シャルル・エティエンヌの解剖図の正確さはヴェサリウス版に劣るとはされるが、重要な医学的見知も多く盛り込まれている。本書の評価はさまざまだが、ヴェサリウス版と同じく、解剖図譜の金字塔と称する声もある（リフキンほか；萬年）。本書の刊行から6年後、シャルルは医学の道をあきらめて家業を継いだ。たが、王室印刷者となったにもかかわらず、事業はうまくいかず不運に見舞われた最期であった。

初版（1545年）および展示の第2版の印刷を担当したのは、アンリ・エティエンヌ1世（展示番号36）の亡き後その妻と結婚した、シモーヌ・ド・コリーヌ（1475–1546）である。この結婚によりコリーヌは、ロベール・エティエンヌ1世（展示番号38）をはじめとする、アンリ・エティエンヌ1世の3人の息子の継父となった。その出版点数は700点にものぼる。彼が上梓した印刷の質の高さや活字の優美さはじつに高い称賛を受け、コリーヌはフランスの印刷黄金期を切り拓いたとも評される。

本書の本文はすべてイタリック体で組まれ、章見出しと欄外註釈はそれぞれ大小のローマン体で印刷されている。章の冒頭にはジェフロア・トリー作の華やかな装飾頭文字（展示番号36参照）が入っている。人体の構造や各所の解説を図版と対応させるための工夫も見られる。たとえば骨の部位を解説する図版（37–1）では、極小のイタリック体を用いて調整をしており、印刷者たちの努力の跡がうかがわれる。

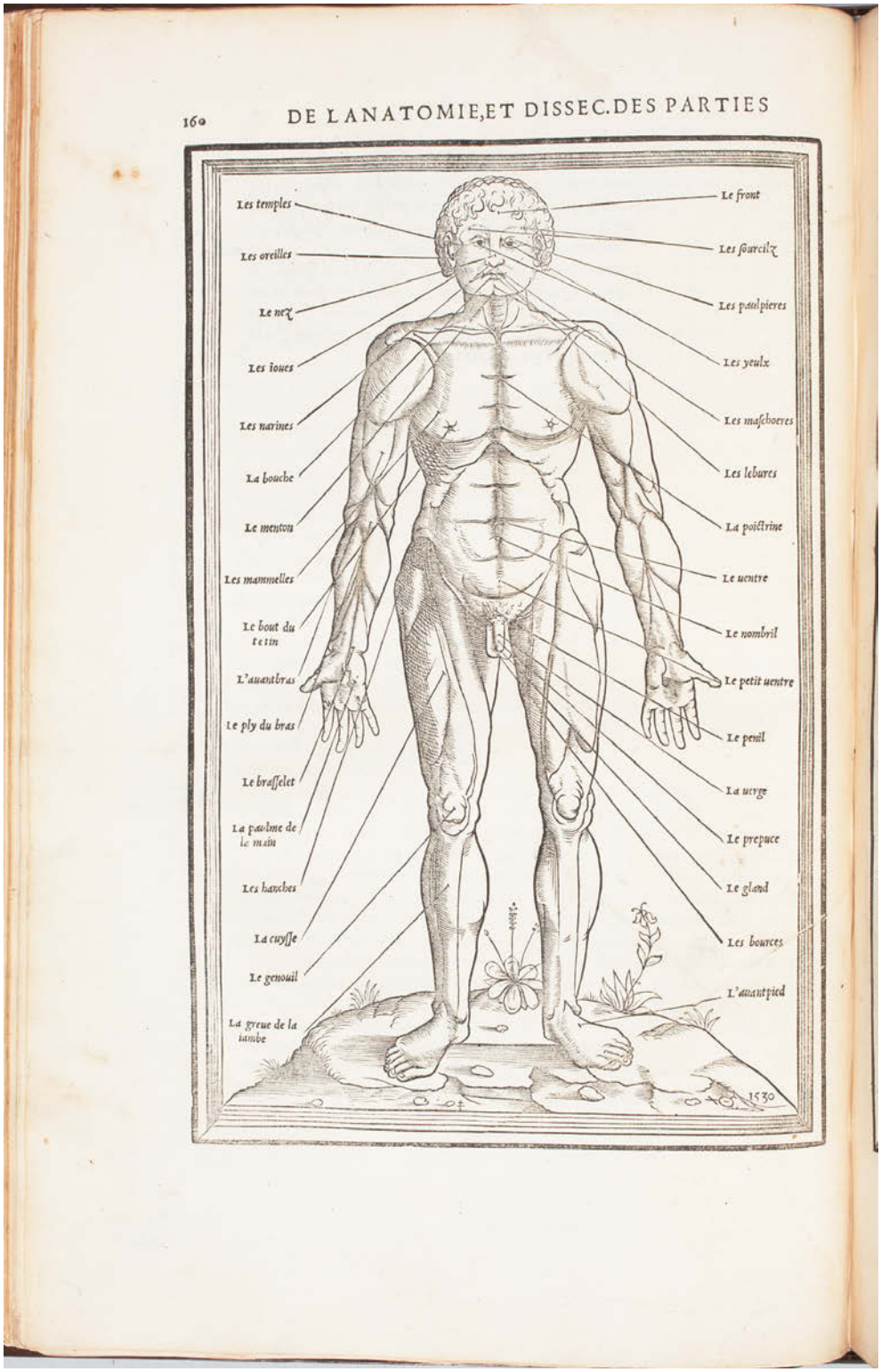
（ST）



Descriptiō des os ietez par terre / selon le deseing de leurs nombres.

1 Los de la racine de la langue, auquel y ba de costé & dantre, vne alōge, qui se fine vers la deuxiesme vertebre.
2 La cartilaige interieure du neu de la gorge.
3 La cartilaige exterieure du neu de la gorge.
4 Forme des cartilaiges a demy cercle, fermās par deuant la longueur de la trachee artere.
5 La cartilaige du genouil, retenant la forme des extremitez des os de la cuisse & de la iambe: laquelle est percee par le meillieu, & au dedens ne coit aulcune substance moelleuse, vng peu plus solide, que celle des canitez des os.

(37–1. Sig. A5v)


160 DE LANATOMIE,ET DISSEC.DES PARTIES
Les temples
Les oreilles
Le nez
Les ioues
Les narines
La bouche
Le menton
Les mammelles
Le bout du tetin
L'auantbras
Le ply du bras
Le brasselet
La paulme de la main
Les hanches
La cuysse
Le genouil
La greue de la iambe
Le front
Les sourcilz
Les paulpieres
Les yeulx
Les maschoeres
Les leures
La poictrine
Le uentre
Le nombril
Le petit uentre
Le penil
La uerge
Le prepuce
Le gland
Les bourses
L'auantpied
1530

(37–2. Sig. L1r)

38.「聖書」（パリ：ロベール・エティエンヌ1世，1534年）

Biblia: Breves in eadem annotationes, ex doctiss interpretationibus & Hebræorum commentariis (Paris: Robert Estienne, 1534). 8°: π^4, a–z^8, aa–zz^8, A–F^8 (－F6–8). 178×115mm. Renouard, pp. 39–40.

［120X@430@1］

（38–1. タイトルページ）

（38–2. Sig. a1r）

アンリ・エティエンヌ1世（展示番号36）の次男として生まれたロベール・エティエンヌ1世（1503–59；ラテン語名Henricus Stephanus）は、母の再婚相手シモーヌ・ド・コリーヌ（展示番号37）のもとで修行を積み、16世紀フランスを代表する学匠印刷家となった。彼の偉業として最初にあげるべきは、聖書校訂版の刊行であろう。パリで閲覧可能な写本や印刷本を複数比較し、ギョーム・ビュデ（展示番号35）の協力を得て、聖書印刷で初の本格的な本文校訂をおこなった。刊行されたばかりのアルカラ版「多言語聖書」（1524年）やエラスムス校訂版も参照している。成果は1528年刊行の聖書に結実し、その後もラテン語版のみならず、ヘブライ語版、ギリシア語版など優れた校訂版の刊行を続けた。本書はそうした一連の聖書出版に位置づけることができ、2つ折判の1532年版を8つ折判で再版した、携帯用聖書である。註釈は本の小口側の余白だけでなく、のど（内）側にも付されている（Armstrong, pp. 72–78）。

（ST）

39. エウセビオス『教会史』（パリ：ロベール・エティエンヌ1世，1544年）

Eusebius. *Ecclesiasticae historiae Eusebii Pamphili* (Paris: Robert Estienne, 30 June 1544). Fol.: ⁎⁎^{4}, A–X^{8} Y–Z^{6}, AA–ZZ^{6}, AAA–GGG^{6}, Aa–Zz^{6}, Aaa–Hhh^{6}. 326×205mm. Renouard, pp. 59–60; STC (French), p. 158.

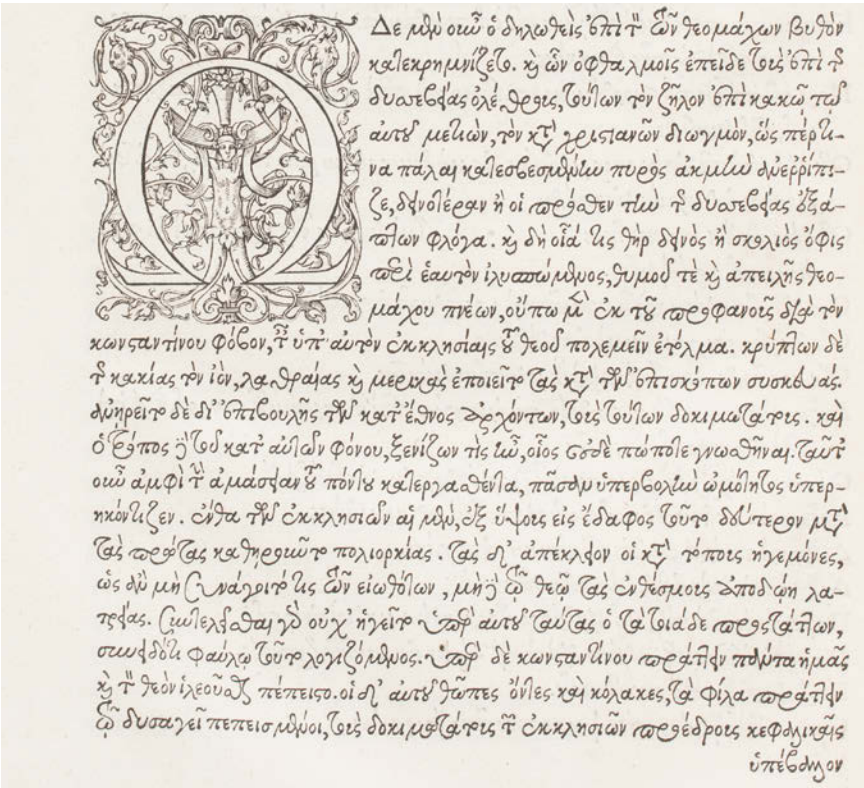
［141X@80@1］

印刷者ロベール・エティエンヌ1世は1520年代からの聖書刊行（展示番号38）で名声を高めると、国王フランソワ1世から1539年にラテン語・ヘブライ語印刷家に任命された。また1530年代には活字の改良を企画した。ここに16世紀で最も名だたる活字制作者、クロード・ギャラモン（Claude Garamont; 1480–1561）が登場する。現代にも伝わるギャラモンのローマン体はアルドのそれにとって代わり、やがてゴシック体の終焉へとつながった。

1540年、フランソワ1世はフォンテンブローの王室図書室にあるギリシア語写本の印刷用に、新しい活字の制作を命じた。これをロベールを介して受けたギャラモンは、王に仕えるカリグラファー、アンジェロ・ヴェルゲキオ（Angelo Vergecio）の書体をもとに、きわめて壮麗なギリシア語草書体の活字と装飾頭文字を1541年に仕上げた。かの有名な「王のギリシア語活字（grec du roi）」の誕生である。この翌年、ロベールは王室印刷家となった。

本書には、新たに生み出された「王のギリシア語活字」が用いられている。本文用の活字のみならず、古代ローマ風な人物や動植物があしらわれた装飾頭文字も美しく、印字面は見る者を魅了する。この装飾頭文字は16世紀最高峰であると評する声もある（Armstrong, pp. 52–53; Schreiber, pp. 76–78）。

（ST）



（39–1. Sig. Q8v：部分拡大）

ΕΥΣΕΒΙΟΥ ΤΟΥ ΠΑΜΦΙΛΟΥ, ΕΠΙΣΚΟπου καὶ Καισαρείας τῆς Παλαιστίνης, ἐκκλησιαστικῆς ἱστορίας βιβλία δέκα.

Βιβλίον α̃. Προοίμιον.

ΑΣ ἐῶν ἱερῶν ἀποστόλων διαδοχὰς, σιῶν καὶ τίς ἀπὸ τοῦ σωτῆρος ἡμῶν Χ̃ ἐς ἡμᾶς διήνεγκε μνήμης χρόνους, ὅσα τε καὶ πολλὰ πεπραγμάτευται κατὰ τὴν ἐκκλησιαστικὴν ἱστορίαν λέγε), καὶ ὅσοι τοῦτῃ διαφανεστάτῃ ἐν τῇ μάλιστα ἐπισημοτάτῃ πόλει τῆς οἰκουμένης τὴν ἡγεμονίαν ἐπιτρεψάντες τῷ θείῳ ἐκείνῳ ἀνεφάνησαν καὶ πρὸς συγγραμμάτων τὸν θεῖον ἐπαρέσθησαν λόγον, τίνες τε καὶ ὅσοι καὶ ὁπηνίκα νεωτεροποιίαις ἡμέρᾳ πλείσταις εἰς ἐσχάτην ἐλάσαντες, ψευδωνύμου γνώσεως ἐπιγνώσει ἑαυτοὺς ἀναπεκηρύξασιν, ἀφειδῶς, ὅσα λύκοι βαρεῖς, τὴν ἀληθοῦ ποίμνην ἐπιτεθοῦνται, πρεσβεύσαντες τοῖς καὶ τὰ πρὸς αὐτῶν, τῆς κατὰ τὸν σωτῆρος ἡμῶν ἕνεκεν ἐπιβουλῆς, ὁ πολὺς ἰουδαίων ἔθνος πρὸς ἐξηγούμενα, ὅσα τε αὖ καὶ ὁποῖα καθ' ὅλοις τε χρόνοις πρὸς τῷν ἐθνῶν ὁ θεῖος πεπολέμηται λόγος, καὶ πολίκις κατ' καιροὺς τὸν δι' αἵματος καὶ βασάνων ἀγῶνα, τά τ' ἐπὶ τούτοις καθ' ἡμᾶς αὐτοὺς μαρτύρια, καὶ τὴν ἐπὶ πᾶσι ἵλεω καὶ εὐμενῆ τοῦ σωτῆρος ἡμῶν ἀπόλυσιν χρεῶν πολλαχοῦ πρεσβεύσαντος, οὐκ ἀνόητον ἡ ἀπὸ πρώτης ἀρξόμενα ἐξ τὸν σωτῆρα καὶ κύριον ἡμῶν ἰησοῦν χριστὸν καὶ θεὸν οἰκονομίας. Ἀλλά μοι συγγνώμη ἤδη οὐδὲν ὁλόγης αὐτῆς μείζω, ἢ καθ' ἡμέτεραν δυνάμιν ὁμολογῶν εἶ) τὸν ἐπαγγείαν οὐ λῆξαι καὶ ἀπόδαλλόμενον ἐπόχεσιν. ἐπεὶ καὶ πρεσβεῖοι νῦν ἐξ τῆς ἀποδόσεως ὁπόσαι εἰσὶν, διάτινα ἐρήμῃ καὶ ἀτείβῃ ἴεναι ὁδὸν ἐξαδεῦμεν, θεὸν μὲ ὁδηγὸν καὶ τὴν τοῦ κυρίου συνεργὸν χρήσειν δυνάμενοι δυνάμιν, ἀνθρώπων γεμῶν ὑδαμῶς δυρφνοῖς τε ὄλης ἴχνη γυμνὰ τὴν αὐτὴν ἡμῖν πρεσωδοιπόρων ὁδὸν. ὅτι μὴ σμικρὰς αὐλῶν μόνον πρεσφάσεις, δι' ὧν ἀνόρες ἀνωφελῶν δεινύκασι χρόνων, μεσεκὰς ἡμῶν καταλελοίπασι δυνήσεις πόρρωθεν, ὡς καθ' πυρῶν, τὰς ἑαυτῶν πρεσφαλείναλεις φωνὰς, καὶ ἀνωθεν ποθεν ὡς ἐξ ἀπόκρυφα καὶ ἀπὸ σκοπιᾶς βοῶνλες, καὶ διακελευόμενοι ἢ χρὴ βαδίζειν, ὡς τὴν τοῦ λόγου πορείαν ἁπλαιῶς καὶ ἀκινδύνως διήκειν. ὅτα τοίνυν εἰς τὴν πρεσκειμένην ἀπόθεσιν λυσιτελήσειν ἡγούμεθα, ὧν αὐτῆς ἐκφύσεις ἀποφαδίω μνημονεύθεῖσιν ἀνάγεξαμενοι, καὶ ὡς ἂν ἐκ λογικῶν κλαδίων τὰς ὁπτηνδείσεις ἀπὸν ὧν πάλαι συγγεγραφέων ἀπεμνημονεύμενοι φωνὰς, διὰ ὑφηγήσεως ἱστορικῆς πειρασόμεθα σημαίνοντες, ἀναπῶλες εἰ καὶ μὴ ἀπόλιον, πῶν ἡ οἷον μάλιστα διαφανεστάτων τοῦ σωτῆρος ἡμῶν ἀποστόλων

(39–2. Sig. A1r)

XIV. 神聖ローマ帝国とフラクトゥール体

40. メルヒオール・プフィンツィンク『トイアーダンクの英雄伝』（ニュルンベルク：ハンス・シェーンスペルガー，［1517年］）（零葉）

Melchior Pfintzing. *Die geuerlicheiten vnd einsteils der Geschichten des* [. . .] *Herr Tewrdannckhs* (Nüremberg: Hans Schönsperger, [1517]). Sig. A3 (vellum). 373×254mm. STC (German), p. 690.

［170X@46@1］

（40. Sig. A3r）

神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世（Maximilian I; 1459–1519）は自身の半生を一連の物語に仕立てさせた。本書は彼がブルゴーニュ公女への求婚のために行った旅行（1478年）を寓意的に描かせた作品である。皇帝自らが構想し、延臣プフィンツィンク（1481–1535）に編纂させ、主人公トイアーダンクとして登場する皇帝が、花嫁と結ばれるまでに数々の困難に立ち向かう様子が物語られている。販売を目的とはせず贈呈用に作られた。

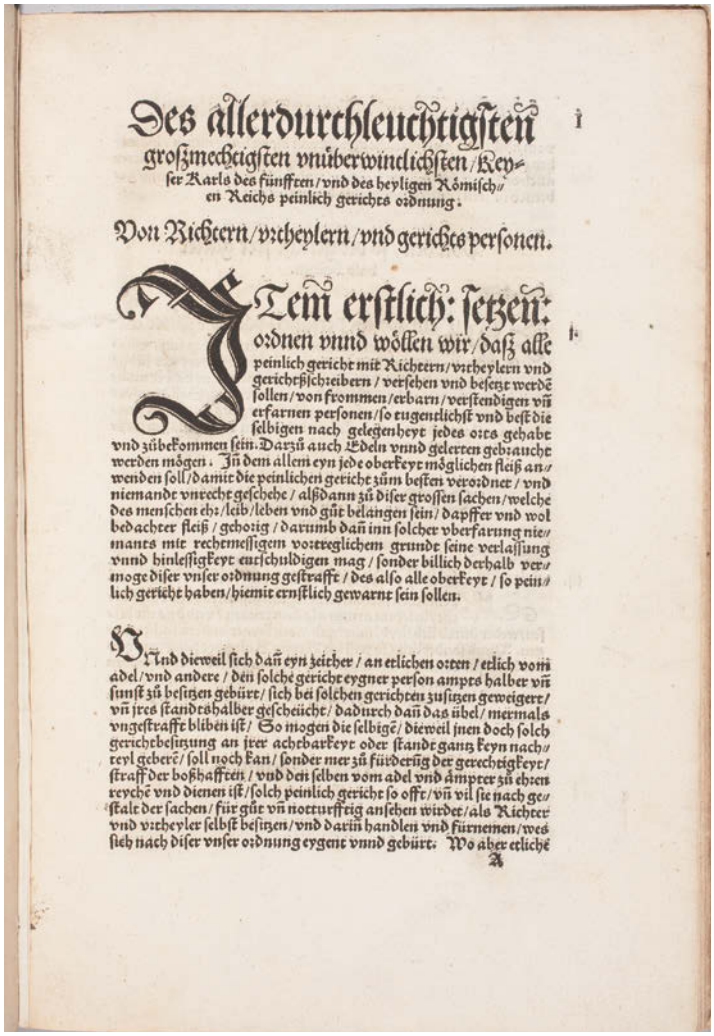
本書に使用されたのは、初期のフラクトゥール体活字である。ベネディクト会士レオンハルト・ヴァーグナー（Leonhard Wagner; 1453–1522）がデザインしたといわれる（Johnson, pp. 131–32）。ドイツ語圏で流布したシュヴァバッハー体（展示番号12）から発展したフラクトゥール体は、マクシミリアン1世の熱烈な支援を得た。以後も数百年にわたりドイツ活字文化の中枢を担ってゆく（展示番号41, 42）。印刷を担当したアウグスブルク出身の印刷者シェーンスペルガーは、挿絵入り本の出版で知られ、皇帝直属の印刷者となった。各章の冒頭を飾る美麗な木版挿絵は118点にものぼり、当代きっての版画家たちが手がけた。

（ST）

41.「カール5世刑事裁判令（カロリーナ刑事法典）」（マインツ：J・シェーファー，1533年）

Des allerdurchleuchtigsten grossmechtigsten unüberwindtlichsten keyser Karls des fünfften (Mainz: Juo Schöffer, 1533). Fol.: π^6, A^6 B^4 C^6 D^4 E^6 F^4 G^6 H–I^4 K^6. 298×198mm.

［120X@1226@1］



Des allerdurchleuchtigsten grosmecheigsten vnüberwinclichsten/Keyser Karls des fünfften/vnd des heyligen Römischen Reichs peinlich gerichts ordnung.

Von Richtern/vrtheylern/vnd gerichts personen.

Item erstlich: setzen: ordnen vnnd wöllen wir/daß alle peinlich gericht mit Richtern/vrtheylern vnd gerichtßschreibern/versehen vnd besetzt werdē sollen/von frommen/erbarn/verstendigen vñ erfarnen personen/so tugentlichst vnd best die selbigen nach gelegenheyt jedes orts gehabt vnd zübekommen sein. Darzů auch Edeln vnnd gelerten gebrauche werden mögen. Jn dem allem eyn jede oberkeyt möglichen fleiß anwenden soll/damit die peinlichen gericht zům besten verordnet/vnd niemandt vnrecht geschehe/alßdann zů diser grossen sachen/welche des menschen ehr/leib/leben vnd gůt belangen sein/dapffer vnd wol bedachter fleiß/gehorig/darumb dañ inn solcher vberfarung niemants mit rechtmessigem vortreglichem grundt seine verlassung vnnd hinlessigkeyt entschuldigen mag/sonder billich derhalb vermoge diser vnser ordnung gestrafft/des also alle oberkeyt/so peinlich gericht haben/hiemit ernstlich gewarnt sein sollen.

Vnd dieweil sich dañ eyn zeither/an etlichen orten/etlich vom adel/vnd andere/den solche gericht eygner person ampts halber vñ sunst zů besitzen gebürt/sich bei solchen gerichten zusitzen geweigert/vñ jres standtshalber gescheüchet/dadurch dañ das übel/mermals vngestrafft bliben ist/ So mogen die selbigē/dieweil jnen doch solch gerichtsbesitzung an jrer achtbarkeyt oder standt gantz keyn nachreyl geberē/soll noch kan/sonder mer zů fürderůg der gerechtigkeyt/straff der boßhafften/vnd den selben vom adel vnd ämpter zů ehren reychē vnd dienen ist/solch peinlich gericht so offt/vñ vil sie nach gestalt der sachen/für gůt vñ notturfftig ansehen wirdet/als Richter vnd vrtheyler selbst besitzen/vnd darin handlen vnd fürnemen/wes sich nach diser vnser ordnung eygent vnnd gebürt. Wo aber etliche

A

（41. A1r）

「カロリーナ刑事法典」とは、1532年にレーゲンスブルクで開催された神聖ローマ帝国の帝国議会で成立し、皇帝カール5世（展示番号35）によって公布された帝国刑事立法である。本書はその初版で、マインツのJ・シェーファーによりフラクトゥール体活字を用いて印刷された。刑事法の領域における神聖ローマ帝国領内の統一的法典であり、18世紀末から19世紀初頭におけるフォイエルバッハなどの刑事法思想が登場するまで、もっとも重要な刑事法の源となっていた。

（ST）

42. ゲオルグ・リュクスナー『トーナメントの書』（フランクフルト：［ジークムント・ファイアーベント］，1566年）

Georg Rüxner. *Thurnier Buch* (Franckfurt: [G. Raben in verlegung Sigmund Feyerabend und S. Hüters], 1566). 2pts. Fol.: $**^4$, A–X^8 Y–Z^6, 2A–$2Z^6$, 3A–$3G^6$, Aa–Zz^6, Aaa–Hhh^6. 326×205mm. STC (German), p. 760; RA 69.

［120X@970@1］

Thurnier Buch.

Von Anfang, Ursachen, vrsprung,

vnd herkommen / der Thurnier im heyligen Römischen Reich Teutscher Nation / Wie viel offentlicher Landthurnier / von Keyser Hainrich dem ersten dieses Namens an / biß auff den jetztregierenden Keyser Maximilian den andern / vnsern Allergnädigsten Herrn / vnd in welchen Stetten die alle gehalten / Auch durch welche Fürsten / Grafen / Herrn / Ritter / vnd vom Adel / dieselben yeder zeyt besucht worden.

Alles jetzunder von neuwem zusammen getragen / mit schönen neuwen Figuren / sonderlich auch der Adelischen Wappen / auffs schönest zugericht / vnd allen Adelspersonen der hochberühmtesten Teutscher Nation / hohes vnd nidern Standes / zu ehren vnd sondern wolgefallen an tag geben / dergleichen nie gesehen worden.

Mit Röm. Keyserlicher Maiestet Freyheit / in zehen jaren nicht nachzudrucken.

Gedruckt zu Franckfurt am Mayn.

M. D. LXVI.

（42. タイトルページ）

宮廷の祝宴や友好国との交流のために開催されたトーナメント（馬上試合）は、中世末期から近代初期にかけて、フィクションおよび制度としての騎士道を演出してきた。また王侯貴族にとっては、社会的地位を誇示する重要な祝祭であった。

紋章官ゲオルク・リュスナーが著した本書は、初版は1530年で、神聖ローマ帝国のドイツ語圏におけるトーナメントの起源と由来を記し、参加者の家系や式次第の記録でもある（楠戸）。

本書はジークムント・ファイアーベント（1528–90）が1566年に上梓した。彼はアウグスブルク、マインツ、ヴェネツィアで活字や装飾模様のデザイン制作を手がけていたが、1560年にフランクフルトに移ると、同地で出版業の拡大を図り成功した。その多くには本書と同様フラクトゥール体活字が用いられている。タイトルページや本文を飾る挿絵の数々は、同時代に活躍したヨースト・アンマン（Jost Amman; 1539–91）の手による。騎士の紋章、皇帝マクシミリアン2世が1560年にウィーンで催した馬上試合の様子などが描かれている。

（ST）

洋書略語一覧および参考文献

略語一覧

Ahmanson-Murphy: *A Catalogue of the Ahmanson-Murphy Aldine Collection at UCLA*, compiled, or with contributions by Nicolas Barker, 6 vols ([Los Angeles], 1989–94)

Als: *Als die Lettern laufen lernten Medienwandel im 15. Jahrhundert: Inkunabeln aus de Bayerischen Staatsbibliothek München* (Wiesbaden, 2009)

BMC: *Catalogue of Books Printed in the XVth Century Now in the British Museum (Library)*, vols i–x, xii (London, 1908–85); vols xi, xiii ('t Goy-Houten, 2004, 2007)

ESTC: *English Short Title Catalogue* ＜http://estc.bl.uk＞

GI: Konrad Haebler, ed., *German Incunabula: 110 Original Leaves Described by Konrad Haebler*, trans. from the German by André Barbey (Munich, 1927)

GW: *Gesamtkatalog der Wiegendrucke* ＜http://www.gesamtkatalogderwiegendrucke.de/＞

II: Konrad Haebler, ed., *Der Italienische Wiegendruck in Original-Typenbeispielen* (München, 1927)

IJL2: *Incunabula in Japanese Libraries (IJL2)*, compiled by Koichi Yukishima, 2nd edn of *Union Catalogue of Incunabula in Japanese Libraries* (Tokyo, 2004)

IKUL: Incunabula of the Keio University Library ＜http://project.lib.keio.ac.jp/dg_kul/incunabula_tbl.php?lang＝en＞

In Aedibvs: *In Aedibvs Aldi: The Legacy of Aldus Manutius and his Press*, ed. by Paul J. Angerhofer, Mary Ann Addy Maxwell, and Robert L. Maxwell, with binding descriptions by Pamela Barrios (Provo, Uta, 1995)

ISTC: *Incunabula Short Title Catalogue* ＜http://istc.bl.uk＞

MB：松田隆美編『Mostly British: Manuscripts and Early Printed Materials from Classical Rome to Renaissance England in the Collection of Keio University Library/ローマ帝国からイギリス・ルネサンスへ—慶應義塾図書館蔵稀覯書展』（慶應義塾大学, 2001）

PMM: *Printing and the Mind of Man: Catalogue of the Exhibitions at the British Museum and at Earls Court, London 16–27 July 1963* (London, 1963)

PP：高宮利行監修『「鵞ペンから印刷機へ」展—目で見る西洋写本文化と印刷文化：展示会目録』（丸善, 1991）

RA：松田隆美監修『寓意の鏡：16・17世紀のヨーロッパの書物と挿絵』（慶應義塾図書館, 1991）

Renouard: Antoine Renouard, *Annales de l'imprimerie des Estienne: ou histoire de la famille des Estienne et de ses éditions* (1843; Genève, 1971)

STC (French): *Short-title Catalogue of Books Printed in France and of French Books Printed in Other Countries from 1470 to 1600 Now in the British Library. Supplement* (London, 1986)

STC (German): *Short-title Catalogue of Books Printed in the German-speaking Countries and German Books Printed in Other Countries from 1455 to 1600 now in the British Museum* (London, 1962)

STC (Italian): *Short-title Catalogue of Books Printed in Italy and of Italian Books Printed in Other Countries from 1465 to 1600 Now in the British Museum* (London, 1958)

STC (2nd edn): A. W. Pollard and G. R. Redgrave, eds, *A Short-title Catalogue of Books Printed in England, Scotland and Ireland, and of English Books Printed abroad, 1475–1640*, 2nd edn, revised and enlarged, begun by W. A. Jackson and F. S. Ferguson, completed by K. F. Pantzer, 3 vols, (London, 1976–91)

WI: Konrad Haebler, ed., *West-European Incunabula: 60 original Leaves from the Presses of the Netherlands, France, Iberia and Great Britain*, trans. from the German by André Barbey (Munich, 1928)

義塾図書館：『第20回慶應義塾図書館貴重書展示会義塾図書館を読む～和・漢・洋の貴重書から～』（慶應義塾図書館, 2007）

西洋活字：スタン・ナイト『西洋活字の歴史―グーテンベルクからウィリアム・モリスへ』髙宮利行監修・安形麻理訳（慶應義塾大学出版会, 2014）

参考文献（「略語一覧」で挙げた文献は含まない）

＜全体＞

Carter, Harry, *A View of Early Typography up to about 1600* (Oxford, 1969)

Febvre, Lucien, and Henri-Jean Martin, *L'apparition du livre* (1958; 2nd edn, Paris, 1971)/リュシアン・フェーヴル, アンリ＝ジャン・マルタン『書物の出現』関根素子ほか訳, 全2巻（筑摩書房, 1985）

Gaskell, Philip, *A New Introduction to Bibliography* (1972; repr. New Castle, DE, 1995)

Johnson, A. F., 'The Sixteenth Century', *The Dolphin*, 3.135 (1938), 121–50

Steinberg, S. H. *Five Hundred Years of Printing*, rev. by John Trevitt (1955; new edn, London, 1996)/S. H. スタインバーグ『西洋印刷文化史―グーテンベルクから500年』高野彰訳（日本図書館協会, 1985；第3版に基づく）

Updike, Daniel Berkeley, *Printing Types: Their History, Forms, and Use: A Study in Survivals* (1922 ; 4th and expand. edn, New Castle, 2001)

『ヴァチカン教皇庁図書館展II―書物がひらくルネサンス』（印刷博物館，2015）

＜第1部　活版活字の誕生＞

Agüera y Arcas, Blaise, 'Temporary Matrices and Elemental Punches in Gutenberg's DK Type', in *Incunabula and their Readers: Printing, Selling and Using Books in the Fifteenth Century*, ed. by Kristian Jensen (London, 2003), pp. 1–12

de Hamel, Christopher, *Gilding the Lilly: A Hundred Medieval and Illuminated Mahuscripts in the Lilly Library* (Bloomington, ID, 2010)

Hellinga, Lotte, 'Analytical Bibliography and the Study of Early Printed Books with a Case-study of the Mainz Catholicon', *Gutenberg Jahrbuch*, 64 (1989), 47–96

———, 'Eltiville and Mainz: A Tale of Two Compositors', *The Book Collector* (1992), 28–54

Ikeda, Mayumi, 'The Fust and Schöffer Office and the Printing of the Two-colour Initials in the 1457 Mainz Psalter', in *Printing Colour 1400–1700: History, Techniques, Functions and Receptions* (Leiden, forthcoming in 2015)

Needham, Paul, 'Johann Gutenberg and the Catholicon Press', *Papers of the Bibliographical Society of America*, 76 (1982), 395–456

A Noble Fragment Being a Leaf of the Gutenberg Bible 1450–1455: With a Bibliographical Essay by A. Edward Newton (New York, 1921)

Stillwell, Margaret Bingham, *Gutenberg and the Catholicon of 1460* (New York, 1936)

Wallau, Heinrich, 'Die Zweifarbigen Initialen de Psalterdrucke von Johan Fust und Peter Schœffer', in *Festschrift zum Fünfhundertjährigen Geburtstage von Johann Gutenberg*, ed. by Otto Hartwig (Mainz, 1990), pp. 261–304

安形麻理『デジタル書物学事始め―グーテンベルク聖書とその周辺』（勉誠出版，2010）

＜第2部　活版文化の普及＞

Alexander, Jonathan J. G., ed., *The Painted Page: Italian Renaissance Book Illumination 1450–1550* (Munich, 1994)

Blades, William, *The Life and Typography of William Caxton, England's First Printer: With Evidence of his Typographical Connection with Colard Mansion, the Printer at Bruges*, 2 vols (London, 1861–63)

Curtius, Ernst Robert, *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter* (Bern, 1948)/E. R. クルチウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路振一, 岸本通夫, 中村善也訳（みすず書房, 1971）

Dane, Joseph, A., 'Two-color Printing in the Fifteenth-Century as Evidenced by Incunabules at the Huntington Library', *Gutenberg Jahrbuch*, 74 (1999), 132–45

Duff, E. Gordon, *William Caxton* (Chicago, 1905)

The Etymologies of Isidore of Seville, trans. with introd. by Stephen A. Barney and others (Cambridge, 2006)

Geldner, Ferdinand, *Die Deutschen Inkunabeldrucker: Ein Handbuch der Deutschen Buchdrucker des XV. Jahrhunderts nach Druckorten*, 2 vols (Stuttgart, 1968–70)

Hellinga, Lotte, *Caxton in Focus: The Beginning of Printing in England* (London, 1982)/ロッテ・ヘリンガ『キャクストン印刷の謎―イングランドの印刷事始め』髙宮利行訳（雄松堂出版, 1991）

———, 'Caxton in Low Countries', *Journal of the Printing Historical Society*, 11 (1976), 19–32

———, *William Caxton and Early Printing in England* (London, 2010)/ロッテ・ヘリンガ『初期イングランド印刷史―キャクストンと後継者たち』徳永聡子訳・高宮利行監修（雄松堂書店, 2013）

———, 'William Caxton, Colard Mansion, and the Printer in Type 1', *Bulletin du Bibliophile*, 1 (2011), 86–114

Lowry, Martin, *Nicholas Jenson and the Rise of Venetian Publishing in Renaissance Europe* (Oxford, 1991)

McMinnville, Edwin Hall, ed., *Sweynheym & Pannartz and the Origins of Printing in Italy: German Technology and Italian Humanism in Renaissance Rome* (McMinnville, OR, 1991)

Mosser, Daniel W., 'William Caxton's First Edition of the *Canterbury Tales* and the Origin of the Leaves for the Caxton Club's 1905 Leaf Book', in Christopher de Hamel and Joel Silver, *Disbound and Dispersed: The Leafbook Considered*, with contributions by John P. Chalmers, Daniel W. Mosser and Michael Tompson (Chicago, 2005), pp. 24–61

Scholderer, Victor, 'Adolf Rush and the Earliest Roman Type', *Library*, 4th ser., 20 (1939), 43–50

———, 'Michael Wenssler and his Press at Basel', *Library*, 3rd ser., 3 (1912), 283–321

———, 'Notes on Early Augsburg Printing', *Library*, 5th ser., 6 (1951), 1–6

Wijsman, Hanno, 'Good Morals for a Couple at the Burgundian Court: Contents and Context of Harley 1310, *Li livre des bonnes meurs* of Lacques Legrand', in *Electronic British Library Journal* (2011), article 6, 1–25

Wilson, Adrian, *The Making of the Nuremberg Chronicle*, introd. by Peter Zahn (Amsterdam, 1976)/エイドリアン・ウィルソン『ニュルンベルク年代記の誕生』河合忠信，雪嶋宏一，佐川美智子訳（雄松堂出版，1993)

Winn, Mary Beth, *Antoine Vérard Parisian Publisher 1458–1512: Prologues, Poems, and Presentations* (Genève, 1997)

佐川美智子，高木幸枝，雪嶋宏一編『書物の森へ―西洋の初期印刷本と版画』（町田市立国際版画美術館，1996）

原島貴子「『キリストの系譜』の視覚表象―中世の英国における伝統と継承」『世界を読み解く一冊の本』松田隆美・徳永聡子編（慶應義塾大学出版会, 2014），pp. 97–132

『プルタルコス英雄伝』村川堅太郎編　全3巻（ちくま学芸文庫, 1996）

『プルターク英雄伝』河野与一訳　全12巻（岩波文庫，1952–56）

松田隆美『ヴィジュアル・リーディング―西洋中世におけるテクストとパラテクスト』（ありな書房，2010）

雪嶋宏一『アルド・マヌーツィオとルネサンス文芸復興』（東京製本倶楽部会報編集室，2014）
――「活字書体の発展―ゴシック、ローマン、イタリック体活字」『ヴァチカン教皇庁図書館展 書物の誕生―写本から印刷へ』（印刷博物館，2002），pp.132–33
――「コンラート・ゲスナー『万有書誌』の書誌記述要素の起源について」『学術研究：人文科学・社会科学編』61（2013），91–116

＜第3部　発展と継承＞

Armstrong, Elizabeth, *Robert Estienne Royal Printer: An Historical Study of the Elder Stephanus* (Cambridge, 1954)
Barker, Nicolas, *Aldus Manutius and the Development of Greek Script & Type in the Fifteenth Century*, 2nd edn (New York, 1992)
Bigmore, E. C., and C. W. H. Wyman, eds, *A Bibliography of Printing* (New York, 1945)
Colonna, Francesco, *Hypnerotomachia Poliphili: The Strife of Love in a Dream*, trans. and introd. by Joscelyn Godwin (New York, 2005); e-facsimile: http://mitpress.mit.edu/e-books/HP/index.htm
Davies, Martin, *Aldus Manutius: Printer and Publisher of Renaissance Venice* (London, 1995)
De la Mare, A. C., and Laura Nuvoloni, *Bartolomeo Sanvito: The Life and Work of a Renaissance Scribe* (Paris, 2009)
Fletcher III, Harry George, *New Aldine Studies: Documentary Essays on their Life and Work of Aldus Manutius* (San Francisco, 1988)
Highly Important Incunabula, Bibles, Early Greek Printing and Colour-Plate Books from Beriah Botfield's Library (London: Christie's, 1994), lot 39
Lefaivre, Liane, *Leon Battista Alberti's Hypnerotomachia Poliphili* (Cambridge, MA, 1997)
Renouard, Philippe, *Bibliographie des impressions et des œuvres de Josse Badius Ascensius: imprimeur et humaniste, 1462–1535* (Paris, 1908)
Rifkin, Benjamin A., Michael J. Ackerman, and Juduth Folkenber, *Human Anatomy: From the Renaissance to the Digital Age* (New York, 2007)/ベンジャミン・リフキンほか『人体解剖図―人体の謎を探る500年史』松井貴子訳（二見書房，2007）
Schreiber, Fred, *The Estiennes: An Annotated Catalogue of 300 Highlights of their Various Presses,* introd. by Nicolas Barker (New York, 1982)
――, and Harold B. Lee Library, *Simon de Colines: An Annotated Catalogue of 230 Examples of his Press, 1520–1546*, with an introd. by Jeanne Veyrin-Forrer (Provo, Utah, 1995)
Vervliet, Hendrik D. L., *The Palaeotypography of the French Renaissance: Selected Papers on Sixteenth-Century Typefaces*, 2 vols (Brill, 2008)
White, Paul, *Jodocus Badius Ascensius: Commentary, Commerce and Print in the Renaissance* (Oxford, 2013)
伊藤博明「フランチェスコ・コロンナ『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ』の世界」『世界を読み解く一冊の本』松田隆美・徳永聡子編（慶應義塾大学出版会，2014），pp.134–89
エラスムス『平和の訴え』箕輪三郎訳（岩波文庫，1961）
楠戸一彦「研究ノートゲオルグ・リュクスナー『馬上試合の書（1530）に関する一考察』」『スポーツ史研究』19（2006），31–40
沓掛良彦・高田康成訳『エラスムス＝トマス・モア往復書簡』（岩波文庫，2015）
ツヴァイク，シュテファン『エラスムスの勝利と悲劇』内垣啓一訳（みすず書房，1998）
樋野芳雄「人文主義平和論の主柱と構成－エラスムスにおける和合の福音」『文明』21.9（2002），25–38
萬年甫「シャルル・エティエンヌの人体解剖書の紹介」『科学医学資料研究』303（1999），1–16

宮下志朗『本の都市リヨン』（晶文社，1989）
モア，トマス『ユートピア』平井正穂訳（岩波文庫，1957）
雪嶋宏一『アルド・マヌーツィオとルネサンス文芸復興』（東京製本倶楽部会報編集室，2014）
――「学術出版の祖アルド・マヌーツィオ」『早稲田大学図書館紀要』52（2005），1–33
――「西洋古版本の視点―アルド・マヌーツィオ500年忌によせて」『書物学』5（2015），9–14
――「わが国におけるアルド版の調査研究」『早稲田大学図書館紀要』54（2007），1–54
渡辺一夫『フランス・ルネサンスの人々』白水叢書39（白水社，1979）

出品リスト

和漢書

展示番号　　資料名

1. 董文敏公画禅随筆4巻 明董其昌撰 清汪汝録編 小田海僊校 天保11年（1840）刊（須原屋茂兵衛等）版木：35枚 印本：3冊
2. 木活字
3. 史記130巻 漢司馬遷撰 劉宋裴駰集解 唐司馬貞索隠 唐張守節正義 朝鮮前期刊 銅活字 明永楽20年（1422）鋳字跋
4. 詩伝大全20巻首1巻 明胡広等奉勅撰 朝鮮正祖1年（1777）刊 銅活字
5. 呉子2巻 慶長11年（1606）刊 清原秀賢手跋 伏見版
6. 大学1巻 宋朱熹章句 慶長年間刊
7. 後漢書90巻志30巻 劉宋范曄撰 唐李賢注（志）晋司馬彪撰 梁劉昭注 元和寛永年間刊 尾張藩旧蔵
8. 書経 不分巻 慶長年間刊 藤原惺窩旧蔵
9. 新雕皇朝類苑78巻序目1巻 宋江少虞撰 元和7年（1621）刊 銅活字
10. 司馬法3巻 慶長11年（1606）刊 伏見版
11. 孫子3巻 慶長11年（1606）刊 伏見版
12. 群書治要50巻 原闕巻 4・13・20 唐魏徴等奉勅撰 元和2年（1616）刊 銅活字 駿河版
13. 増補六臣注文選60巻 存巻11 梁蕭統編 唐呂延済・劉良・張銑・呂向・李周翰并李善注 慶長12年（1607）要法寺刊 直江版
14. 中庸1巻 宋朱熹章句 慶長年間下村生蔵刊 竹中重門旧蔵
15. 大学1巻 宋朱熹章句 慶長年間下村生蔵刊 竹中重門旧蔵
16. 孟子14巻 漢趙岐注 慶長年間今関正運刊
17. ［嵯峨本観世流謡本］俊寛 慶長年間刊 綴葉装
18. 同 大会 慶長年間刊 綴葉装
19. 春秋経伝集解30巻 存巻11・12・25・26 晋杜預撰 慶長年間刊 叡山版
20. 仏説大荒神施與福徳円満陀羅尼経1巻 旧題唐釈不空訳 元和6年（1620）宗存刊
21. 大般涅槃経40巻 存巻25 北涼釈曇無讖訳 江戸初期刊 天海版
22. 法華天台文句輔正記10巻 唐釈道暹撰 元和寛永年間刊
23. 白氏文集71巻 唐白居易撰 元和4年（1618）那波活所刊
24. 春秋経伝集解30巻 晋杜預撰 慶長年間刊
25. 同 慶長年間刊 存巻11・12・25・26 叡山版
26. 礼記20巻 漢鄭玄注 慶長年間刊
27. 同 存巻1・2
28. 新刊吾妻鏡52巻（巻45原欠）慶長10年（1605）跋 冨春堂刊 伏見版
29. 同 存巻4・5・10−12
30. ［徒然草寿命院抄］慶長9年（1604）如庵宗乾刊
31. 徒然草存巻上［慶長年間］刊
32. 拾芥抄3巻［慶長年間］刊

洋書

展示番号	資料名

1. Biblia latina (East Argglia, possibly Cambridge, mid-14th century).
2. Biblia latina, 42 lines ([Mainz: Printer of the 42-line Bible (Johann Gutenberg) and Johannes Fust, *c.* 1455]).
3. Johannes Balbus. *Catholicon* ([Mainz: Printer of the 'Catholicon' (Johann Gutenberg?)], [between 1460 and *c.* 1472]; also recorded as 1460 [not before 1469]).
4. Psalterium ([Mainz]: Johann Fust and Peter Schoeffer, 14 Aug. 1457).
5. Psalterium ([Mainz]: Johann Fust and Peter Schoeffer, 29 Aug. 1459).
6. Biblia latina (36 lines) ([Bamberg : Printer of the 36-line Bible (Albrecht Pfister?), not after 1461]).
7. Isidorus Hispalensis. *Etymologiae* ([Strassburg: Johann Mentelin, *c.* 1473]).
8. Jacobus Magni (Jacques Legrand). *Sophologium* ([Strassburg: The 'R-printer' (Adolf Rusch), 1474]).
9. Werner Rolewinck. *Fasciculus temporum* ([Strassburg: Johann Prüss, not before 6 Apr. 1490]).
10. Nicolaus de Lyra. *Postilla super totam Bibliam* [Cologne: Ulrich Zel, not after 1483].
11. Biblia [German](Augsburg: [Günther Zainer], 1477).
12. Hartmann Schedel. *Liber chronicarum* (Nuremberg: Anton Koberger, 12 July 1493).
13. Nicolaus de Lyra. *Postilla super totam Bibliam* (Rome: Conradus Sweynheym and Arnoldus Pannartz, 1471–72).
14. Robertus Caracciolus. *Sermones quadragesimales de poenitentia* ([Venice]: Vindelinus de Spira, [before 28 July]1473).
15. Plutarchus. *Vitae illustrium virorum* (Venice: Nicolaus Jenson, 2 Jan. 1478).
16. Euclides. *Elementa geometriae* (Venice: Erhard Ratdolt, 25 May 1482).
17. Guido de Monte Rochen. *Manipulus curatorum* (Paris: Ulrich Gering, 4 June 1478).
18. Jean Froissart. *De chroniques de France* (Paris: Antione Vérard, 1499–1503).
19. *Les Presentes Heures a lusaige de Rome* (Paris: Philippe Pigouchet for Simon Vostre, 16 September 1498).
20. *Ces presentes heures a lusaige de Paris* (Paris: par la veufue de Thielman Kerver [i.e. Yolande Bonhomme], 1525).
21. Johann Tritheim. *De scriptoribus ecclesiasticise* (Basel: Johann Amerbach, [after 28 Aug.]1494).
22. Flavius Gratianus. *Decretu*m (Basel: Michael Wenssler, 19 Aug. 1481).
23. Raoul Lefèvre *Le Recueil des histoires de Troyes* [English](Bruges/Ghent: [David Aubert for] William Caxton, 1473–74).
24. Geoffrey Chaucer. *The Canterbury Tales* ([Westminster: William Caxton, *c.* 1476–77]).
25. Robert Fabyan. *New Chronicles of Englande* (London: Richard Pynson, 1516).
26. Aristotle. *Opera* (Venice: Aldus Manutius, Romanus, 1495–98).
27. *Fabellæ Aesopi. Gabriæ fabellæ. Gr. & Lat.* [With other works. Gr.] Ed. A. P. Manutius (Venice: Aldus Manutius, Romanus, 1505).
28. Homer. *Homeri Ilias* (Venice: Aldus, 1504)/*Ulyssea. Batrachomyomachia. Hymni xxxii.* (Venice: Aldus Manutius, 1504).

29. Lucretius. *Lucretius* (Venice: Aldus Manutius Romanus, 1515).
30. Book of Hours ([Italy, Rome, *c.* 1480s]).
31. Francesco Colonna. *La Hypnerotomachia di Poliphilo* (Venice: Paolo Manuzio, 1545).
32. Desiderius Erasmus. *Qverela pacis vndique gentium eiectæ* [and other works](Basel: Johann Froben, 1517).
33. Thomas More. *De optimo reip. statv, deqve noua insula Vtopia*; Desiderius. *Epigramata T. Mori* (Basel: Johan Froben, 1518).
34. Joannes Bartholomaeus Marlianus. *Topographia antiquae Romae.* Ed. F. Rabelais (Lyon: Sebastien Gryphius, 1534).
35. Guillaume Budé. *Commentarii linguae Graecae* ([Paris]: Joss Bade, 1529).
36. Euclid. *Geometricorum elementorum libri XV* (Paris: Henri Estienne, 7 January [1516]).
37. Charles Estienne. *La dissection des parties du corps humain diuisee en trois liures* (Paris: Simone de Colines, 1546).
38. *Biblia: Breves in eadem annotationes, ex doctiss interpretationibus & Hebræorum commentariis* (Paris*:* Robert Estienne, 1534).
39. Eusebius. *Ecclesiasticae historiae Eusebii Pamphili* (Paris*:* Robert Estienne, 30 June 1544).
40. Melchior Pfintzing. *Die geuerlicheiten vnd einsteils der Geschichten des* [. . .] *Herr Tewrdannckhs* (Nüremberg*:* Hans Schönsperger, [1517]).
41. Des allerdurchleuchtigsten grossmechtigstẽ unüberwindtlichsten keyser Karls des fünfften (Mainz: Juo Schöffer, 1533).
42. Georg Rüxner. *Thurnier Buch* (Franckfurt: [G. Raben in verlegung Sigmund Feyerabend und S. Hüters], 1566).

謝辞

本展示会および図録の準備にあたり、下記の皆様よりご協力やご助言を賜りました。感謝してここに記します。

＜アルファベット・50音順、敬称略＞

Martin Davies
John Goldfinch
赤江雄一
安形麻理
池田真弓
伊藤哲史
公益財団法人永青文庫
慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
小秋元段
小平明寿香
加藤誉子
佐々木孝浩
髙宮利行
西川雄太
藤谷道夫
ミズノプリテック株式会社
ミズノプリンティングミュージアム
水野雅生
雪嶋宏一

第27回慶應義塾図書館貴重書展示会
活字文化の真髄―日本の古活字版と西洋初期印刷本―

2015年10月発行

監修/展示図録執筆　髙橋智　松田隆美　徳永聡子

編集・発行　慶應義塾図書館
〒108-8345　東京都港区三田2-15-45
Tel 03-5427-1625
印刷・製本　昭和情報プロセス株式会社